

遂に蘇我氏の様な者を出す様になつた。この弊害を除く爲には、政治を革新する必要があつた。本朝に於ける大化の改新の實務は、中大兄皇子と中臣鎌足とが中心になつて遂行したのである。

即ち中大兄皇子を皇太子とし、中臣鎌足(年三十三)を内臣に任じ、阿倍倉部麻呂を左大臣に任じ、蘇我石川麻呂を右大臣に任じ、更に唐から歸朝した高向玄理・僧旻を國博士に任じて政治の顧問とし、大化二年に改新の大詔を發せられた。いま新政の大要を述べ見るに、(一)公地公民——官職の世襲を廢し、皇族以下諸豪族の私有して居た土地・人民を悉く朝廷に收めて公地・公民とされた。(二)中央官制——官制を改め、中央には八省百官を設けて政務を分掌させ、官位・禮法を定め、人々の能力によつて官位を授けられたので、人材登用の途が開かれた。(三)地方制度——全國を多くの國・郡に分ち、従来の國造・縣主を

廢して、新に國司・郡司を置き、要地には關・防人を設け、また速に官命を傳達する爲に驛馬・傳馬の制を立てられた。(四)班田收授——人民を校べて戸籍を作り、班田收授の法を設け、人毎に口分田を給せられた。即ち天下の公民には、男女共に一定の田地を班ち授け、其の人が死すれば、これを朝廷に收める規定を班田收授の法といふ。其の田地は人毎に分けたので口分田といつた。大寶令によれば、男子は六歳になれば田二段を授かり、女子には其の三分の二を給せられ、六年毎に之を收め、更に改めて授けられた。(五)税制——租・庸・調の法を設けられた。田地の收穫中から一定の稻を納めさせるのを租といひ、公役に人民を役し、または其の代りに米・布を收めさせるのを庸といひ、戸毎に織物、又は其の地の産物を貢がせるのを調といふ。是等の租は中央及び地方の政費に充てられた。

孝德天皇は、在位十年、白雉五年十月十日に崩せられた。聖壽五十九。大阪磯長陵に葬る。二回改元されたが、一は大化(五年)で、一は白雉(五年)である。

### 光仁天皇

御名を白壁といふ。天智高祖天皇とも稱する。

天智天皇の御孫である。施基皇子の第六王子で、御母を権姫(紀諸人の女)といふ。第四十九代の天皇である。

和銅二年十月十三日に降誕された。天平寶字六年中納言に任じ、天平神護二年正月大納言に昇られた。神護景雲四年八月稱徳天皇が崩せられ、未だ皇嗣が定まらなかつたので、藤原百川・藤原永手は一策を案じ、稱徳天皇の遺詔と稱して、天皇を擁立し、十月に即位された。天皇は酒人内親王を皇太子に爲さうといふ意志

を抱いて居られたが、權臣藤原百川はこれを非とし、奏請して山部親王(桓武天皇)を皇太子にした。是等の事情は、舊史には詳かでないが、要するに藤原氏の一族が、其の權勢の維持發展を目的とする策略であつたといふ。天皇は在位十二年、改元二回、元應元年四月位を桓武天皇に譲られ、同十二月二十三日、聖壽七十三で崩せられた。大和國添上郡田原村大字日笠田原東陵に葬る。光仁天皇は、前代の國力疲弊し、綱紀頽敗した後を受けて帝位に即かれたので、勤儉を旨として政を勵み、改革された所が甚だ多かつた。

### 幸野 栞 嶺

幼名を角三郎といふ。名を直豐といひ、字を思順といひ、栞嶺の外に鷲夢・青龍館・長安堂・六柳・北園の諸號がある。系 統 安田治郎兵衛の三子

である。

弘化三年、京都の四條に生れ、九歳にして中島來章の門に入り、更に鹽川文麟に四條派を學び、兼ねて中西耕石・前田暢堂と交際して南宗文人畫の趣致をも體得した。慶應二年に四條派を標榜して門戸を開いたけれども、國家多端の秋で世に顧みられず、生活難は其の窮極に達したが、併し堅く守つて研究を怠らなかつた。偶々東本願寺法主嚴如上人の知遇を受け、漸く糊口の途を得るに至り、法主に從つて九州・東北を巡錫し、風景を寫して得る所が多かつたが、國粹發揚に伴ふ畫運の復興と共に、畫名は關西に揚つた。京都府立畫學校に教鞭を執る傍ら、私塾を開いて子弟教養に從つたが、明治十九年には京都私立繪畫研究會を設立し、青年畫家を指導するなど、周圍の關係を顧みず、私財を投じて後進開發に努めたが、偶々他派の怨を買ひ、一時は名古屋に移住した事もある。併

こ・かう・くわう

し彼の門下には俊才が頗る多く、後年名聲を博した三宅吳曉・谷口香齋・菊池芳文・竹内稻風・都路華香らは、何れも栞嶺の薫陶を受けた人々である。明治二十八年二月二日、五十二歳で歿したが、著書に栞嶺畫譜・百鳥畫譜・花鳥圖譜・栞嶺菊百種・千草の花・花中の月などがある

### 河野 通 有

彌九郎藏人と稱する。弘安記には五郎、河野家譜には六郎、日蓮注畫贊には通高に作つてある。

河野通久(父通信は伊豫の守護、母は北條時政の女)の孫である。父を上野介通繼といふ。

伊豫の人で、勇勇を以て聞え、對馬守に任ぜられた。弘安四年の五月に、元は東路・江南の兩軍を發して大舉來襲せしめ

た。東路軍は蒙古兵三萬・高麗兵一萬から成り、先づ壹岐を犯し、進んで筑前に迫つたが、通有は菊池武房・竹崎季長・小貳景資らと奮戦して、大いに武名をあげた。八幡島童訓によれば、はじめ通有は郷里を發する時、三島祠に詣で、「我れ賊を待つこと十年にして、賊、若し來らざんば、則ち海を絶ちて進み撃たん」と祈つた。八年の後に賊が來たが、擊退の命を受け、大いに喜んで筑前に赴き、子八郎通忠及び伯父伯耆守通時と、輕騎に乗つて進んだが、敵の弩が肩に中り、弓を引く事が出来ず、刀を右手に揮ひ、帆船を仆せて梯となし、通時と共に賊艦に躍り入つて、手づから數人を斬り、遂に玉冠した賊將を捕へ、敵艦に火を放つて還つたが、通時は船中で傷を病んで歿した。やがて范文虎の江南軍十餘萬が來り會したが、河野・菊池・竹崎・小貳らの手痛い攻撃を受け、且つ七月晦日の夜からの暴風の爲に、四千餘艘の賊艦

### 高 師 直

確髮して道常といふ。系 統 左中辨高階兼緒の後裔で、高師重の子である。

足利尊氏の執事となり、右衛門尉に任ぜられた。元弘中、尊氏に從つて北條氏を滅ぼし、功を以て武藏守となつた。延元元年、尊氏に從つて宮闕を犯し、また延曆寺僧徒・藤原師基を破り、ついで藤原隆資を破つた。三年、北高顯信を男山に包圍し、後に北高顯家を阿部野に破つた。正平三年、楠木正行兄弟を四條殿に破り、進んで吉野の行宮を犯した。斯様に師直は屢々戰功を立てたので、尊氏の寵愛が厚く、威權が

強大であつたから、尊氏の弟足利直義と隙を生じ、政務を争つたが、諸將の師直に属する者が多かつた。師直・直義の争ひは、やがて直義・尊氏の争ひに變り、遂に尊氏は直義の政務を停め、子足利義詮をこれに代へた。併し師直は元の様で執事であつたから、内外の事務は一に其の手に歸し、従つて調停となり、遂に尊氏に迫つて直義を殺さうとしたので、直義は怖れて難髪した。正平五年、足利直冬は九州に兵を擧げ、勢を振つたので、師直は尊氏に勸めて親征させ、其の機に乗じて直義を索めたので、直義は遂に南朝に降り、兵を擧げて尊氏を討つたが、六年、尊氏の軍は京都で破られ、師直は播磨に走つて書寫山を保つた。

既にして尊氏は直義と和したので、師直は直義を誅ひ、四國に走らうとした。尊氏は直義と謀り、師直兄弟を刺さうと考へたが、師直は之を知らずに降り、尊氏の後に踵づいたので、衆は之を嘲つた。師

直は面を掩つて走らうとしたが、三浦八郎左衛門の爲に斬られ、宗族も悉く其の場で殺された。時に正平六年二月である。

師直は數度の戦功を誇つて、驕奢淫佚を擅にした。鹽谷高貞の妻の姿色に心を奪はれ、百計を盡して挑んだけれども、遂に許されなかつたので、高貞を陥れて其の妻を奪はうとした。高貞が家を擧げて出雲に走つたので、師直は尊氏に請うて追撃し、其の妻を生捕りにしようとしたが、妻は遂に途中で斃れた。また師直は京都の諸王・公卿の子女を奪ひ、これを數箇所に置き、毎夜其の家に通つたので、京童は「執事の巡宮神事げざるなし」といつた。

こうぶんでんのう  
弘文天皇

名 號 御名を伊賀といひ、字を大友といひ、世に大友皇子・大友天皇と稱する。明治三年七月

に至り、蓋して弘文天皇といふ。

系 統 天智天皇の長子で、御母は伊賀采女宅子娘である。第三十九代の天皇である。

事 蹟 幼時から明悟で、天智天皇の愛撫が厚く、諸學士に教導を命ぜられたので、皇子は特に文事に秀でられた。十年正月には太政大臣に進まれたが、之が太政大臣設置の始めである。天智天皇は皇位を傳へようと思はれたが、當時は國家多難の秋であり、また諸皇子が年少であつたから、天智天皇は同母弟大海人の政務に通ずるを見て、之を皇太弟とされた。既にして天智天皇は病に罹られたので、太弟大海人を召して後事を託せられたが、太弟は辭して僧となり、吉野に入られたから、同年十月、大友皇子を皇太子に立てられた。同年十二月、天智天皇は滋賀宮で崩せられたので、直ちに大友皇子が即位されたが、之が弘文天皇である。時に或る人は奏上して「太弟、吉野にあるは、虎を野に

放つが如し」と言つた。よつて天皇は山陵を起すに託して、濃尾の兵を召集されたが、大海人はこれを開き、元年六月、兵を率ゐて不破に入られた。兩軍は瀬田に戦つたが、天皇は利あらず、七月、山前（關城寺附近）に逃れて自盡された。在位八箇月、聖壽二十五歳である。近江國滋賀郡大津市別所町長等山前陵に葬る。「てんむてんのう・天武天皇」の項を参照されたい。

こうばふだいし  
弘法大師

「くわうかい・空海」の項を参照されたい。

くわうみやうゐん  
光明院

名 號 御名を豐仁といひ、法名を眞常恵といふ。

系 統 後伏見天皇の第二皇

子で、光嚴院の同母弟である。所謂北朝の第二院である。

事 蹟 延元元年五月、後醍醐天皇が比叡山の延曆寺に行幸されたので、八月、足利尊氏は豐仁親王を擧立して天皇と稱したが、これが光明院である。後村上天皇の正平三年十月に難髪し、長慶天皇の天授六年六月二十四日、勝尾寺で崩せられた。御年六十歳である。山城國紀伊郡堀内村大光明寺陵に葬る。

くわうみやうくわう  
光明皇后

名 號 御名は安宿媛、仁正皇后と稱する。

系 統 藤原不比等の第二女で、聖武天皇の皇后である。

事 蹟 幼少から聰慧で、聖武天皇が未だ皇太子の時に其の妃となられた。天皇即位の際に從三位を授けて夫人とされた。孝謙天

皇及び皇太子を生み、ついで正三位に叙せられ、天平元年八月に立つて皇后となられた。我が國の慣例及び令制では、皇后となるものは皇族に限られて居たが、安宿媛の冊立によつて是等の古制が破れた。併し藤原氏は皇室の外戚となり權勢が次第に加はつた。皇后は容貌や身體が麗しく、光耀がある

(光明皇后の筆蹟)

天平十六年十月三日  
藤三娘

かうめいてんのう  
孝明天皇

名 號 御名を統仁といひ、親宮とも稱する。

系 統 仁孝天皇の第四皇子である。御母は贈左大臣藤原實光の女で、新待賢門院雅子といふ。第二百一十一代の天皇である。

系 統 天保十一年三月皇太子となり、弘化三年二月十三日に踐祚し、四年九月二十三日に即位された。時に御年十七歳である。朝廷では關白太政大臣藤原政通が政を攝し、幕府では徳川家慶が將軍職にあつた。

天皇は剛毅で、常に朝威の振はれないのを慨き、外交問題に就いても聖慮を備まされた。弘化三年八

られた。天平寶字四年六月七日に六十歳で崩せられた。大和國添上郡佐保村大字法蓮佐保山東陵に葬る。

かうめいてんのう  
孝明天皇

名 號 御名を統仁といひ、親宮とも稱する。

系 統 仁孝天皇の第四皇子である。御母は贈左大臣藤原實光の女で、新待賢門院雅子といふ。第二百一十一代の天皇である。

くわうみやうゐん  
光明院

月には、幕府に海防嚴飭の勅諭を下し、國威を損しない様に戒められたが、十月には、幕府に命じて外船渡來の様を奏上せられた。偶々嘉永六年六月、米國の水師提督ペリーは、船艦四隻を率ゐて浦賀に來り、通商を求めたので、幕府は此の事を天皇に奏上し、開港の可否を諸侯に諮問したが、安政元年正月、ペリーは船艦七隻を率ゐて神奈川沖に來り、前年の返答を迫つたので、幕府は止むなく下田・函館の二港を開き、薪水・食糧の給與を約した。三年七月、米國總領事ハリスが來朝し、更に通商條約の締結を迫つたので、五年正月、老中堀田正睦は勅許を得て條約に調印しようとするが、天皇は許されなかつた。六月、大老井伊直弼が勅許を俟たずに通商條約に調印し、長崎・神奈川・兵庫・新潟の四港を開き、ついで蘭・英・露・佛とも同様の假條約を結ぶに及び、公卿・諸侯・志士は幕府の違勅と直弼の專斷とを憤慨し、

遂に天皇に請うて、「内政を整へ外侮を防ぐべし」といふ勅書を蒙るに至つたので、直弼は断然反對派の公卿・諸侯・志士を捕へ、所謂安政の大獄を起した。

萬延元年三月、直弼が櫻田門外で斃れてから、幕威は日に衰へ、尊王攘夷論が益々盛んになつた。老中安藤信正は公武を合體して幕威を恢復しようとして謀り、文久元年、將軍家茂の爲に皇妹和宮親子内親王の降嫁を請うたが、天皇は攘夷を行ふ事を幕府に約せしめて許可された。然るに和宮の降嫁は、却つて尊王攘夷論者の憤慨を深め「幕府、朝廷を脅かし、皇女を奪ふ」となし、信正を坂下門外に要撃するに至つた。

文久二年五月、天皇は勅使大原重徳及び島津久光を江戸に下し、幕政の改革と將軍の上洛とを命ぜられたので、家茂は勅を奉じ、前越前藩主松平慶永を政事總裁職とし、大いに改革を圖つたが、併し幕府の衰勢を挽回する事が出来な

かつた。偶々長州藩主の毛利敬親(慶親)一派は、「速に幕府をして攘夷の議を決せしめられよ」と奏請したので、文久二年十月、天皇は三條實美・姉小路公知を勅使として江戸に下し、家茂の上洛を促し、且つ速に攘夷の方略を定め、期日を定めて之を施行せよと命ぜられた。家茂は厚く勅使を遇し、謹んで勅命を奉じ、「衆議を盡し、將軍上京の上にて奉答すべし」と答へた。これから朝威は益々高まり、政治の中心は京都に移つた。

やがて文久三年三月、家茂は入京したが、四月、長州藩の建議により、天皇は賀茂神社に行幸し、御前で節刀を家茂に賜はり、攘夷を實行させようといふが、家茂は病を稱して供奉を辭し、一橋慶喜を代理に遣らうとしたが、慶喜もまた病を稱して辭退したので、幕府を痛罵する聲が高まり、攘夷論者の憤激が止まず、家茂も遂に勅命を奉じ、五月十日を攘夷期日と定めて、天皇に上奏し、同時に

諸藩に布告した。

文久三年五月十日、愈々攘夷實行の期日に至り、攘夷の張本である長州藩は、先づ下關海峡を通過する米商船ベンブローグ號を砲撃して走らせ、朝廷の嘉賞を蒙り、二十三日には佛國郵便船キャンチン號を砲撃し、二十五日には和蘭軍艦メヂューズ號を砲撃し、攘夷の先驅をなしたが、佛國公使は英・米・蘭の公使と議し、船艦十七隻で聯合艦隊を編成し、英國水師提督ターパーを司令官とし、翌元和元年八月五日、海上から下關の諸砲臺を砲撃し、陸隊二千六百餘人を上陸させ、諸砲臺を陥れた。高杉晋作・山縣狂介(有朋)・山田顯義らが奮戦したけれども遂に破れ、八日に和を講じた。

京都では長州藩を主とする攘夷論者が、三條實美らと謀を通じて朝廷を動かす、大和の神武天皇の御陵に孝明天皇の行幸を仰いで攘夷親征を議し、其の機に乗じて幕府を討たうとした。然るに京都守

護職松平容保(會津藩主)は、薩藩と結び、温和論を主張し、入道尊融法親王(後の久遠宮朝彦親王)を介して攘夷親征の不可を奏したので、こゝに朝議は一變し、文久三年八月、先づ大和行幸を中止し、長州藩の皇居守衛を免じ、攘夷派公卿の朝參を禁じた。よつて長州藩主毛利敬親一派は京都を引き退いたので、三條實美・三條西季知・東久世通禧・壬生基術・四條隆賢・錦小路頼徳・澤宣嘉らの七卿も長門に奔つた。世に之を七卿落といふ。

攘夷派の長州藩士及び七卿が追はれてから、京都は公武合體派の占むる所となつたが、然るに元治元年六月、長州藩の家老福原元(越後)・國司親相(信濃)・益田親施(右衛門介)らは、兵を率ゐて入洛し、嵯峨・山崎・男山などに陣し、藩主毛利敬親及び七卿の冤罪を訴へた。時に松平容保・一橋慶喜は、薩摩・桑名の藩兵を率ゐてこれを防ぎ、戦が各所に起つた

が、親相の兵は會津・桑名・薩摩の兵と給御門に戦ひ、最も激烈を極め、彈丸が屢々宮中に飛び込んだので、長州兵は朝敵の汚名を蒙り、破れ退くに至つた。時に元治元年七月で、世にこれを元治の變といふ。

幕府は夙に長州藩を惡み、これを征しようとしたが、諸藩を憚つて斷行せずに居る處へ、偶々元治の變に於て長州兵が紊りに宮門に迫り、兵火を開いた罪を責め、元治元年八月、朝廷に請うて長州追討の許可を受け、前尾張藩主徳川慶勝を總督とし、越前藩主松平茂昭を副總督とし、島津・細川・鍋島・淺野・蜂須賀を始め、二十一藩の兵を派して長州に向はせたのである。

然るに前記の通り、當時長州藩は英・米・佛・蘭の四國艦隊十七隻から襲撃を受け、非常に困難して居たので、藩主敬親は先づ四國と和し、ついで家老元側・親相・親施らの首を斬り、恭順の意を表

したので、慶勝は之を許して軍を班した。

然るに長州藩士高杉晋作・山縣狂介らは、藩主毛利侯の處置を喜ばず、先づ恭順派(俗論黨)を倒し、藩論を統一して再び兵を擧げた。幕府は大いに驚いて再征の軍を起し、慶應元年五月、家茂は親征の爲に上洛し、自ら大軍を率ゐて大阪城に入つた

時に天下は麻の如く亂れ、大勢は既に幕府を去つたが、偶々土佐藩士阪本龍馬は長州・薩州の聯合を成立させたので、薩兵は從軍を辭し、他藩にも幕命を奉じないものがあり、幕軍の士氣は甚だ振はず、慶應二年六月、愈々長州藩を攻めたが、晋作・狂介らの新説に破られ、進んで戦ふ勇氣がなく、敗れて兵を收める力さへなかつた。偶々二年八月二十日に、家茂は大坂城で病歿したので、朝廷は勅して征長の師を停めさせられた。此の年の十二月、慶喜が一橋家から入つて第十五代將軍となつたが、

幕府の衰運は最早救ひ難い有様となつた。

慶應二年十二月二十五日、天皇は聖壽三十六で崩せられた。天皇は聰明剛毅で、在位二十一年に及んだが、其の間は我が國の最も多難な時で、内には尊王・佐幕・攘夷・開港の諸論が相次いで起り、外には外國艦隊が邊境を侵し、實に内憂外患の喧しい時であつたから、天皇は一日一夜も聖慮を安められる事がなかつた。

曾て外交問題の騒がしいときは、勅使を伊勢に派遣し、宸筆の願文を神宮に奉り、國難を救はん事を祈り、勅使の歸京するまで、毎夜御庭から神宮を遙拜されたといふ。また皇室の費用の乏しいに拘らず、御不自由を忍んで、萬民を憐れられた。

斯様に多端な時に當り、よく大勢を導いて、明治維新・皇室中興の基を開かれたのは、御聖徳の然らしめる所である。京都後月輪東山陵に葬る。

孝 靈 天 皇

名 號 御名を大日本根子彦大瓊尊といふ。

系 統 孝安天皇の第一皇子で、御母を押媛といふ。第七代で、天皇である。

事 蹟 孝昭天皇の三十九年に降臨され、六十八年に皇太子となられた。百二年正月に父天皇の喪にあひ、九月に之を玉手丘上(の)に葬り、十二月に都を黒田の鹽戸宮に遷し、元年正月に即位された。在位六十六年、聖壽百六歳で崩せられた。百二十八歳崩御説もある。大和國片丘馬坂陵に葬る。

後 圓 融 院

名 號 御名を緒仁といひ、法諱を光淨といふ。

**系統** 後光嚴院の第二子で御母は崇賢門院仲子である。所謂北朝の第五院である。

**事蹟** 正平十三年十二月十三日に誕生された。長慶天皇の建徳二年三月二十三日、後光嚴院は細川頼之と相議して、精仁王を擁立されたが、これが後圓融院である。

後圓融院は弘和二年四月十一日、精仁親王（後小松院といひ、元中九年閏十月から、後小松天皇といふ。蓋し南北朝合一の結果による）を擁立し、院中で政を聴かれたが、後小松天皇の明徳四年四月二十六日、御年三十六歳で崩せられた。山城國紀伊郡深草村深草法華堂に葬る。

### 古河公方

「あしかがしげうち・足利成氏」の項を参照されたい。

三歳で崩せられた。山城國紀伊郡深草村深草法華堂に葬る。

### 後柏原天皇

ごかしはばらてんの  
**名** 御名を勝仁といふ。

**系統** 御土御門天皇の第一皇子で、御母は贈皇太后朝子である。第百四代の天皇である。

**事蹟** 寛正五年十月二十日に降誕され、文明十二年に親王となり、將軍足利義政の邸で元服されたが、時に御年十七歳である。明應九年十月二十五日、三十七歳で踐祚されたが、當時、應仁の亂後の事として、朝廷の衰微は其の極に達し、幕府が資を献じなかつた爲に、踐祚の大禮を行はせられる事が出来ず、三條西實隆の盡力により、大阪本願寺主光兼が錢一萬貫を献じたので、大永元年三月二十二日に至り、漸く即位の大禮を行はせられた。實に踐祚後二十年四箇月を経て居る。在位二十六年で、大永六年四月七日、聖壽六十

### 後龜山天皇

ごかめやまてんのう  
**名** 御名を熙成といひ、法諱を金剛心といふ。

**系統** 後村上天皇の第二皇子で、長慶天皇の御弟である。御母を嘉嘉門院勝子といふ。第九十九代の天皇である。

**事蹟** 元中元年、長慶天皇に即位された。時に楠木・新田を首め、南朝の餘黨は微々として振はず、また足利義満も多年の兵亂に鑑みて、漸く平和を欲したので、元中九年閏十月、大内義弘・六角満高を南朝に遣はして和を議せしめ、兩統の迭立を約したので、茲に始めて南北朝が合一し、天皇は京都に遷幸され、神器を後小松天皇に傳へ、父子の義を結ばれ、太上天皇と號し、後に嵯峨の大覺寺に入られた。世に小倉

### 後光嚴院

ごくわうごんのん  
**名** 御名を彌仁といひ、法諱を光嚴といふ。

**系統** 光嚴院（量仁親王）の第二子で、御母は正親町公秀の女陽徳門院藤原秀子である。所謂北朝の第四院である。

**事蹟** 彌仁王は延元三年三月二日に誕生された。後村上天皇の正平七年八月、足利尊氏に擁立されて天皇となられたが、之が後光嚴院である。時に南朝の諸將が屢々兵を率ゐて来り攻めたので、乘輿して屢々遷幸された。長慶天皇の文中三年正月二十九日、御年三十七歳で崩せられた。山城國紀伊郡深草村深草法華堂に葬る。

### 後光明天皇

ごくわうみやうてんの  
**名** 御名を紹仁といふ。

**系統** 後水尾天皇の第三皇子である。御母は關基任の女で、壬生院藤原光子である。第百十代の天皇である。

**事蹟** 寛永二十年十月三日明正天皇の讓を受け、同月二十一日に即位された。時に御年十一歳である。天皇は近世の英主である。幼時から學問を好まれ、粗々大義に通達された。

天皇は常に「佛學は面白きものなれども、體はあるやうにて用のなきものなり。天子諸侯は、別して人民の主たるものなれば、宜しく有用の學を爲すべし。また唐漢の古註は適切ならざるが故に、朱子の新註によるべし」と言はれ、意休庵を召して易經を講せしめら



れた。而して親朱の學の開けたのは、藤原惺高の功であると言つて、慶安四年九月、惺高文集に御製の序を賜はつた。本邦庶士の著に御製を賜はつたのは、實にこれを始めとする。また釋典の儀を再興し（後光明天皇

ようと思はれたが、早く崩せられたので、其の事は遂にやんだ。天皇は源氏物語を妖書とし、人道に害があると言つて斥けられた。和歌も餘り多く好まれなかつた様であるが、併し宸議に富ませ

られた事は、曾て後水尾上皇が宮中に幸し、和歌十首を贈られた時、天皇は短時間に十首の返し歌を詠せられ、大いに上皇の御感を惹起された事でも分る。

天皇は常に酒を嗜まれ、屢々痛飲されたので、徳大寺公信はこれを憂ひ、或る夕、飲興の酣な時に諫め奉つたが、天皇は宸怒して剣を抜かうとされた。時に公信は從容として、「古より未だ天皇親ら人民を斬り給ひしを聞かず。實に古今の一人たり。況んや上諫を納れ給はず」と言つた。偶々左右は公信を引き退け、天皇は宴をやめて奥に入られた。併し遂に其の非を悟られ、翌日公信を召して謝し、昨夕抜かうとされた劍を公信に賜はつた。

曾て後水尾上皇が病に罹られた時、天皇は直ちに上皇の御所を訪問された。時の所司代板倉重宗は之を支へて、一應幕府に問合せよるとしたが、時に天皇は「斯かる

事何とて幕府に問ふべきぞ。若し朕の外出を氣遣はば、皇居より上皇の御所に通ずる長廊下を造るべし。朕は廊下傳ひに御訪ね申さん」と言はれ、何の憚る所もなく、上皇の御病を見舞はれた。天皇は劍道を嗜まれたが、重宗はこれをとどめて、「此の事、江戸に聞えなば必ず悪しかりなん。陛下若し止め給はずば、臣切腹せんのみ」と言上した。時に天皇は、「朕未だ武人の切腹を見たる事なし。汝宜しく席を設けて切腹すべし。朕親しく之を見ん」と言はれた。

### 後小松天皇

ごこまつてんのう  
**名** 御名を勝仁といひ、

法諱を素行習といふ。

**系統** 後醍醐院の長皇子である。御母を通陽院殿子といふ。初めは北朝の第五院で、後に第百代の天皇とならされた。

**事蹟** 元中九年閏十月、足利義満は大内義弘・六角満高を南朝に派遣し、南北兩朝の講和を議せしめたが、後龜山天皇はこれを聽許し、京都に遷幸されたので、後小松天皇は父子の禮を以て神器を受けられた。

**爾來**、天皇は位に在ること二十年、應永十九年八月に位を皇太子實仁親王(稱光天皇)に譲り、政を院中で聽かれたが、永享三年三月に薨逝し、五年十月二十日、洞院仙居で崩せられた。聖壽五十七歳である。

山城國紀伊郡深草村大字深草の深草法華堂に葬る。  
天皇は和歌を好まれ、屢々群臣を召して吟詠されたといふ。  
「こゝんゆうゐん・後圓融院」の項を参照されたい。

### ごさいてんのう 後西天皇

**名號** 御名を良仁といふ。

幼稱を秀宮といひ、親王宣下の後に桃園宮と改められた。世に花町殿と稱する。

**系統** 後水尾天皇の第六皇子である。御母は藤原隆致の女で、藤春門院藤原隆子である。第百十一代の天皇である。

**事蹟** 寛永十四年十一月十六日に降誕され、正保四年九月に親王となり、承應三年十一月二十八日に踐祚し、明暦二年正月二十三日に即位された。時に御年二十歳である。位に在ること八年で、寛文三年正月靈元天皇に譲位し、院政を聽かれることが二十三年に及んだ。天皇の朝には災異が屢々起り、地震が月餘に亘つても熄まなかつた。幕府はこれを以て天皇の缺徳の致す所と爲し、後水尾法皇に譲る所があつたので、天皇

は遂に位を避けて讀書・喫茶・優遊に歳を送られたが、貞享二年二月二十二日、聖壽四十九歳で崩せられた。京都市下京區今熊野町月輪陵に葬る。

### ごさがてんのう 後嵯峨天皇

**名號** 御諱を邦仁といひ、法諱を素覺といふ。

**系統** 土御門天皇の第七皇子である。御母は左大臣源通宗の女で、贈皇太后源通子である。第八十八代の天皇である。

**事蹟** 承久二年二月二十六日に降誕された。同三年に承久の亂があり、土御門上皇が土佐に遷幸された時には、邦仁親王は御年僅か二歳で、外家大納言源通方に養はれ、通方の後には承明門院御所に移られた。長ずるに及んで、佛門に入つて僧侶にならうとされたが、承明門院が諫止したので、密邦仁親王は心中迷ふ所があり、密

に石清水宮に參詣して通宵默禱された。偶々夢の中に、「椿葉の影再び改」といふ聲が聞えたので、覺めて大いに喜び、これから學問を勵まれた。

仁治三年正月に四條天皇が崩せられ、皇嗣なく、時論は區々として揺らぎ、人々は疑惑を抱いた。前攝政藤原道家は、順徳天皇の皇子忠成王を立てようとしたが、承久の亂後、北條氏の干渉が厳しく、意の如くならなかつた。北條泰時は、土御門天皇が承久の亂の謀議に關係されなかつたのを憾とし、鶴岡八幡宮に參詣して籌を探り、其の皇子邦仁親王を擁立する事に決し、安達義景を京都の土御門殿に派遣し、前内大臣源定通に謁見させて旨を告げ、且つ警告して、「京都、若し順徳天皇の皇子を立てなば、これを廢すべし」といつた。よつて同年三月十八日、邦仁親王が即位されたが、これが後嵯峨天皇である。  
後嵯峨天皇は九條道家・西園寺

(藤原)實氏に諮詢して政を執り、大事は鎌倉と相談して行はれたので、朝威は益々衰へた。寛元四年正月二十九日、中宮嫡子(西園寺實氏の女)の御願なる後深草天皇に譲位し、爾來、閑院に居して院政を聽かれたが、實氏は院の別當に任せられ、弟實雄と共に後醍醐上皇の信任を得た。また中宮嫡子(大宮院)は皇子を生んだので、上皇は此の皇子を後深草天皇の儲貳とし、正元元年十一月二十六日に踐祚させられたが、これが龜山天皇である。

**御嵯峨上皇は**、文永五年に落飾して法皇となられたが、其の後も院政を執られた。當代は鎌倉の盛時に當り、海内は昇平を極め、鳥羽殿を修繕し、嵯峨に龜山殿を造營し、吉野櫻を移植し、また藥草院・如來壽院・淨金剛院などを造り、或は高野に巡幸し、或は熊野に巡幸し、優遊に日を送られたので、世人は白河・鳥羽兩帝以後に於ける最幸福の君であると稱した

### ごさくらまらてんのう 後櫻町天皇

**名號** 御名を智子といふ。はじめ以茶宮と稱し、後に緋宮と改稱された。

**系統** 櫻町天皇の第二皇女で、御母は青崎門院皇太后藤原舎子である。第百十七代の天皇である。

**事蹟** 元文五年八月三日に降誕され、寛延三年三月内親王となり、寶曆十二年七月二十七日に踐祚し、同十三年十一月二十七日に即位された。時に御年二十四歳である。關白近衛内前が攝政となつたが、江戸では十代將軍徳川家治が幕政を執つた。  
天皇は本邦に於ける最後の女帝であつて、文化十年閏十一月二日、聖壽七十四歳で崩せられた。山城國京都下京區今熊野町月輪陵に葬る。

### ごさんでうてんのう 後三條天皇

**名號** 御名を尊仁といひ、法諱を金剛行といふ。

**系統** 後朱雀天皇の第二皇子で、後冷泉天皇の御弟である。御母は三條天皇の皇女陽明門院親子内親王である。第七十一代の天皇である。

**事蹟** 寛仁二年正月、藤原能信(頼通の弟)の翼賛により、御年十二歳で皇太弟になられた。東宮に在ること二十餘年に及んだが、御母は藤原氏の出でなかつたから、外戚の後援がなく、殊に頼通は東宮に在す事を嫌つたので、人々はこれを危殆に感じた。併し嚴明・剛毅の性格で、よく藤原氏の抑壓を忍ばれた。また大江匡房に師事し、日夜講論し、頗る政理に通じ、藤原氏の專權を見て、心甚だ平かならず、また屢々事によつて頼通を怒まれた。

治暦四年四月、後冷泉天皇が崩せられたので、三十五歳で即位されたが、藤原氏の専横を抑制しようとし、政務を親裁し、他人の干渉を受けず、理に合はぬ事は太后の命でも退けられた。故に公道が行はれ、紀綱が張り、皇室の威權が上がり、群臣が肅然として来た。頼通は意の如くならざるを察し、天皇の即位の日に宇治に屏居したが、兄に代つて關白職に上つた頼通も、たゞ員に備はるのみとなつて来た。

此の頃、貴族・社寺などの莊園——國司の支配を受けない、租税を納めない私有地——が増加し、朝廷の費用が大いに減じたので、天皇はこれを改めようとし、新に記録所(記録莊園券契所)を太政官の内に設けて莊園を取調べ、新に置いた莊園及び證文の不明な莊園は、悉くこれを廢止された。また國司(任期四年)の重任を禁じ、實官の惡弊を改め、斗升の制を定められた。世にこれを延久宣旨

樹といふ。また後冷泉天皇の末年から、風俗が華奢に流れたので、親ら節儉を行つて奢侈を戒め給ふなど、治績が大いにあがつた。

曾て關白頼通は、其の氏寺である奈良興福寺に南圓堂を建て、大和の國司に工事を監督させたが、任期が満ちたので、自家の便宜上その重任を奏請した。天皇が許されなかつたので、強ひて請ふたが、天皇は大いに怒つて、「攝關の憚かる可きは、たゞ其の外戚たるに由るのみ。朕は則ち長るゝ所なし」と宣はれた。頼通も顔色を變じ、衣を拂つて起ち、「藤原氏の上達部、みな罷り立て。春日大明神(藤原氏の氏神)の御威も、今日限り失せ果てぬ」と、大音聲に呼び、一族の公卿を率ゐて朝廷を退出した。天皇はやむなく藤原氏の諸卿を召還され、教通の請ひを聽許された。藤原氏の積威が大で、改革の困難であつた事が察せられる。併しこれから教通は天皇を憚る様になつた。

母は和泉式部である。

曾て天皇が石清水八幡宮に行幸された時、拜觀者の車に金色の飾金具を打つたのを見られ、轂を駐めて其の飾を取去らせられた。蓋し當時は下吏の車にも、金を以て飾る者が多かつたからである。後に賀茂神社に行幸された時には、そんな華奢な車は絶えてなかつたといふ。また天皇の御扇は楡柄に藍紙を張つたもので、膳部には青魚の頭を炙り、それに胡椒を塗つたものを供へさせられたといふ。御檢索の程を憶ふべきである。在位四年、延久四年十二月白河天皇に讓位し、翌五年五月七日聖壽四十歳で崩せられた。山城國葛野郡花園村大字谷口圓宗寺陵に葬る。天皇の崩御を聞き、頼通は嘆じて「天皇は季世の明主なり。而して早世此の如きは、眞に邦家の不幸なり」といつた。

### こじまたかのり 兒島高德

名 號 本姓は三宅氏である。備後三郎と稱し、確鑿して志

### 小式部内侍

系 統 和泉守橋道貞の女で

曾て天皇が石清水八幡宮に行幸された時、拜觀者の車に金色の飾金具を打つたのを見られ、轂を駐めて其の飾を取去らせられた。蓋し當時は下吏の車にも、金を以て飾る者が多かつたからである。後に賀茂神社に行幸された時には、そんな華奢な車は絶えてなかつたといふ。また天皇の御扇は楡柄に藍紙を張つたもので、膳部には青魚の頭を炙り、それに胡椒を塗つたものを供へさせられたといふ。御檢索の程を憶ふべきである。在位四年、延久四年十二月白河天皇に讓位し、翌五年五月七日聖壽四十歳で崩せられた。山城國葛野郡花園村大字谷口圓宗寺陵に葬る。天皇の崩御を聞き、頼通は嘆じて「天皇は季世の明主なり。而して早世此の如きは、眞に邦家の不幸なり」といつた。

純と號した。

系 統 三宅(兒島)範長の子である。

事 蹟 元弘年中、後醍醐天皇が笠置山に遷幸された時、勤王の兵を擧げたので、天皇は錦旗を賜はつた。既にして聖駕の隱岐運幸を聞き、途に據して奉はうとし、一族從士を率ゐて舟坂山に據つたが、偶々聖駕の山陰道出向を聞き、間行して美作國の杉坂に行くと、聖駕は既に此の地を過ぎて居たので、衆は力を落して散じた。獨り高德は天皇に見えて、其の衷情を述べようとし、急いで聖駕の後を踵いだしたが、天皇に見える事が出来なかつたので、或る夜、御館に忍び入り、櫻樹を削つて、天莫(空)に勾踐(時非)無(范)蠡(こ)と書した。天皇は之を見て、心竊に喜ばれたといふ。

既にして天皇は隱岐を脱し、伯耆國の船上山に幸されたが、高德は父範長と共に、其の族を率ゐて詣つた。ついで北畠忠顯に屬し、

共に六波羅を攻めて利あらず、忠顯が敗走したので、萩野朝忠と共に、錦旗を收めて高山寺城を守つた。間もなく足利尊氏が藤原に兵を擧げ、將士の屬する者が多かつたが、高德は其の節度を奉ずるを深しとせず、朝忠と共に若狭から入り、諸將と共に六波羅を陥れ、ついで備後に還つた。

建武二年、飽浦信胤が福山城に據つて、尊氏に應じたので、高德は屢々信胤と戦つて敗れ、走つて山中に匿れた。延元元年、新田義貞は弟脇屋義助を遣つて舟坂を攻めさせたが、高德は義助に應じ、二百餘人を率ゐて天明熊山を守つた。敵兵三千餘人の來襲を受け、力戦して屈せず、偶々十餘騎を従へて突進奮闘するに當り、重傷して馬より墜ち、僅に死を免かれたが、併し官軍は舟坂を陥れた。ついで備後守に任ぜられた。建武三年、高德は越前に往つて義貞に屬したが、義貞の戦死するに及び、義助に従つて伊豫に赴き、

義助の病歿するに及び、逃れて備前に還つた。興國六年、脇屋義治と上野國で兵を起さうとして成らず、義治と共に海路京都に入つたが、尊氏の探知する所となり、義治と共に信濃國に逃れ、後に確鑿して志純と號した。

### こじまほうし 小島法師

事 蹟 太平記の作者であるといふ。洞院公定公日次記應安七

年(後龜山天皇の文中三年)五月三日の條に、「傳へ聞く、去る廿八九日の間、小島法師圓寂すと、云々、是れ近日、天下に賑ふ太平記の作者なり、凡そ卑賤の器たりと雖も、名匠の聞えあり、無念と謂ひつ可し」とある。即ち文中三年五月に寂して居るが、其の傳記は詳かでない。

太平記は四十卷からなり、外に劍卷が一巻ある。花園天皇の文保二年から、後村上天皇の正平二十二年に至るまで、凡そ五十四年間の戦亂記である。文勢が壯快雄大で、和漢混淆文の上乗なものである。戰記物語の常として、稍々其の事を誇大にし、月日の誤などがあるけれども、概して當時の日記文書と一致して、吉野朝廷時代の歴史研究に關く可らざる良書である。或る學者は史學研究に益なしと言つたけれども、それは公平な議論でない。江戸時代には太平記と稱し、太平記を讀み聞かせて人心に娛樂を興へたものである。

### 後白河天皇

名 義 御名を雅仁といひ、法諱を行眞といふ。

系 統 鳥羽天皇の第四皇子である。御母は大納言藤原公實の女で、待賢門院藤原璋子である。第七十七代の天皇である。

事 蹟 久壽二年七月、近衛天皇が、御年十七で崩せられたので、鳥羽法皇の寵姫美福門院は、關白忠通と謀り、法皇に請ふて雅仁親皇を立てた。即ち後白河天皇である。

これよりさき、鳥羽法皇は御子崇徳天皇を愛せられず、強ひて位を美福門院の出なる近衛天皇に譲らしめられたので、崇徳上皇は甚だ不平であつた。然るに近衛天皇が崩せられたので、自ら重祚するか、または皇子重仁親王を立てようと考へられた。ところが美福門院の計らひで後白河天皇が即位さ

れたので、愈々不快に思はれた。時に左大臣藤原頼長は、兄の忠通と仲が悪かつたので、崇徳上皇は頼長と結び、保元元年七月鳥羽法皇崩御の翌日、源爲義・源爲朝・平忠正を白河殿に召集して、愈々兵を擧げられた。仍て後白河天皇(後白河天皇)



は、源爲朝・平清盛らを召して、白河殿を夜襲させ、崇徳上皇の軍を攻め破り、九月に亂が平定した。頼長は流失に中つて薨じ、爲義・忠正は降つて斬られ、爲朝は伊豆の大島に流された。これを保元の亂といふ。後白河天皇は、かねて莊園の弊

害を知り、且つ保元の亂により、敵方から没收した莊園が多く、また此の亂に乗じて、莊園を押領する者などが多かつたので、保元元年十月記録所を置いて、莊園券契を糺さしめられた。また和漢の學に精通した藤原通憲——入道して信西といふ——を用ひて政を行はせ、廢れた朝廷の典禮を復せられた。三年八月、位を二條天皇に譲り、院中で政を行はれたが、それは二條・六條・高倉・安徳・後鳥羽の五朝三十餘年に及んだ。

さて後白河上皇は院中で政を執られるに際し、深く藤原通憲を信任されたが、時に藤原信賴も上皇の恩顧を蒙り、近衛大將たらんとこを望んだが、通憲に妨げられて果さず、深くこれを怨んだ。時に平清盛は通憲と婚を通じて勢を得、其の聲望が遙かに源義朝の右に出て居たから、義朝はこれを喜ばず、密に信賴と結び、機會を見て通憲・清盛を倒さうとし

た。平治元年十二月、信賴・義朝は清盛・重盛の館野に詣でた不在に乗じ、通憲を討たうとした。通憲は豫め變の有ることを覺り、三條殿に後白河上皇を訪れて奏上しようとしたが、たま／＼上皇が宴遊中で面陳が出来なかつたので、密に宮女に告げて奈良に走つた。信賴は通憲の逃亡したのを知らず、院中に在るものと考へ、即夜、兵を率ゐて三條殿を圍み、火を放つて燒き、後白河上皇を一本御書所に幽し、二條天皇を黒戸御所に遷し、義朝を播磨守に任じ、自ら大臣・大將となつた。因に通憲は田原に赴き、穴を穿つて其の中に隠れたが、義朝の將源光泰の爲に捕はれ、信賴の爲に斬首されて獄門に梟された。

さて清盛は變を聞き、途中から馳せ歸り、竊かに天皇を六波羅の自邸に迎へたが、上皇も眼を變じて仁和寺に行幸された。天皇は清盛に命じて、信賴・義朝を討たせ

られた。義朝らは宮城に立籠り、多くの白旗を立て、清盛の軍の來るのを待つた。清盛は子重盛・弟頼盛を遣はして攻めさせた。平家の赤旗は朝風に翻つて勇ましく進んだ。時に信賴は紫宸殿に居たが、平家の來攻を聞き、出でて之を拒がうとしたが、股がふるつて階を下ることが出来ず、左右を扶抱して馬に上せて賣つたが、地に落ちて顔を傷けた。重盛は兵を勵して、「年號は平治、土地は平安、我等は平氏なり。此の敵必ず平がん」といひ、五百騎を率ゐて待賢門を攻めたが、信賴は守を棄て、逃げ去つた。平氏の軍兵が宮庭に入り、紫宸殿の前に來たので、義朝は、長子の義平をやつて拒がせ

た。義平は馬を走らせ、左近衛・右近衛を廻つて重盛を追つた。義朝・義平は平家の軍を追ふて六波羅に進んだ。信賴は再び平家の來攻を恐れて、徐ろに宮城を出で、義平の軍後に従つて河原に行き、軍を棄て、逃げ去つた。其

の間に官軍は宮城を恢復した。此の時、信賴は仁和寺に入り、涕泣して上皇に哀を請ふたが、官兵に捕へられて、六條河原で刑せられた。義朝は東國に逃亡したが、尾張で舊臣長田忠致に殺され、その三子頼朝(年十四)は伊豆の鉦ヶ小島に流された。これを平治の亂といふ。

此の亂が濟んでから、平清盛の威權が盛んになり、終に顯要の職は其の一族から出る様になつた。清盛の官位は次第に進み、六條天皇の御代には、從一位太政大臣となり、武人にして始めて政治の實權を握ることになつた。また清盛は藤原氏に倣つて、皇室の外戚にならうと欲し、己が妻の妹の所生なる高倉天皇を立て、また己の女徳子を中宮(建禮門院)に納れて皇室の外戚となつた。斯くて清盛の二子重盛・宗盛は大臣・大將に進み、一門に公卿十六人、殿上人三十餘人、受領三十餘國、莊園五百餘箇所及び、榮華の限りを

盡し、平氏でない者は人でないといふに至つた。

清盛の專横は日に甚だしくなつたので、後白河法皇は之を厭はせられた。治承元年、法皇の寵姫藤原成親・僧西光・僧俊寛・源行綱・平康頼らは、京都の鹿ヶ谷に會し、密に平氏を除かうと謀つたが、行綱が裏切つたので、事が露はれて捕へられ、西光・成親は殺され、康頼・俊寛は流論された。これを治承の變といふ。ついで清盛は法皇をも幽しようとし、一旦重盛に諫止されたが、重盛の薦後には遂に法皇を幽し、關白藤原基房以下の官職を奪ひ、其の女徳子(建禮門院)の所生なる安徳天皇(御年三歳)を位に即けた。また己の信仰する嚴島神社に高倉上皇の御幸を請ふなど、專横の限りを盡した。

斯様に平氏が榮華に耽つて居る間に、諸國に散在した源氏は再興の機を待つた。源賴光の支孫に當る源賴政は、かねて平氏を滅ぼさ

うと考へて居たが、治承四年、後白河法皇の皇子以仁王の令旨を請ひ、諸國の源氏に傳へて兵を募つたが、謀が露はれたので、賴政は急に兵を擧げ、平氏の軍と宇治に戦つて敗れ、七十七歳で自殺した。以仁王は流矢に當つて薨せられた。清盛は遂に法皇を福原新京の板屋に幽し、十一月清盛は京都に還り、法皇を重盛の舊第六波羅に遷し、十二月には平頼盛の弟に遷した。併しこれから諸國の源氏が大いに興起した。

源義仲は以仁王の令旨を奉じて信濃に兵を擧げ、北陸道を平定した。平宗盛は難盛を遣つて之を撃たせたが、却つて俱利伽羅峠に大敗したので、壽永二年七月、義仲は進んで京都に攻め入つた。宗盛は法皇及び天皇を奉じて西海に逃れんとしたが、法皇は夜密に延暦寺に逃れられた。宗盛は天皇及び建禮門院を奉じ、神器を擁し、一族を率ゐて西海に奔つた。法皇は法住寺殿に還り、義仲に勅して平氏

を討たしめられた。時に法王は、京都に主がなかつたので、新帝を立てようとしたが、義仲は以仁王の子北陸宮を立てようとした。法皇は義仲の勢力を得るを恐れ、龍姫丹後局の勳によつて、高倉上皇の皇子尊成親王を立てられた。これが後鳥羽天皇である。義仲は大いに憤り、士卒をやつて法皇の輩下を侵した。法皇は延暦寺・園城寺の僧徒を召して之に備へられた。義仲は遂に叛いて法住寺殿を襲ひ、火を放つて焼き、法皇を近衛基通の五條亭に遷した。十二月法皇は大江山忠の六條西洞院第に徙御された。

である。壽永三年正月、範頼・義経は義仲を討つた。義仲は其の將今井兼平と宇治・勢多に防いだ。頼朝の將佐々木高綱・梶原景季らは、宇治川を渡つて義仲の軍を敗り、義仲は栗津に戦致した。此の間に、平氏は勢を得て京都を恢復しようとして、天皇を奉じて福原に還り、一ノ谷附近の要害によつた。法皇は頼朝に命じて、平氏を討たせられたので、範頼・義経は平氏を一ノ谷に破り、屋島に破り、逃ぐるを追つて長門の壇浦に破つた。安徳天皇は清盛の妻二位尼に抱かれて入水され、宗盛は捕虜となつて殺された。これが壽永四年三月である。

平氏滅亡後、義経と頼朝とが隙を生じたので、法皇はこれを制しようとした。義経は叔父行家と法皇に迫り、頼朝追討の院宣を請ふた。既にして義経は京都を去つて大和に入り、北陸道を経て陸奥に入つた。文治元年十一月、頼朝は北條時政を遣り、義経追捕を口

實として、守護地頭を置くことを請ふたが、法皇はやむを得ずこれを許された。こゝに於て頼朝は天下の兵馬の權を得て、常に法皇を壓迫したので、遂に朝廷の權は延びない様になつた。法皇は建久三年三月十三日、六條殿で崩せられた。聖壽六十六歳である。京都市下京區三十三間堂回り町法住寺陵に葬る。

### 後朱雀天皇

ごすざくてんのう  
御名を教良といひ、法諱を精進行といふ。

一條天皇の第三皇子で、御母は上東門院彰子である。

第六十九代天皇である。

寛弘六年十一月二十五日に降誕され、同七年正月に親王と爲り、長元九年七月十日に即位された。時に御年二十八歳である。天皇は頗る英明であられたけれども、關白藤原頼通の威權が盛んであつた爲に、如何とも爲し給ふことが出来なかつたので、世人これを遺憾に思つたといふ。在位九年、寛徳二年正月後冷泉天皇に讓位し、同年正月十八日、聖壽三十七歳で崩せられた。高隆寺で火

幕に附し、御骨を山城國葛野郡花園村圓乘寺に葬る。著書に長曆御記がある。

### 巨勢金岡

こせのかなをか  
中納言巨勢野足の後裔で、巨勢派の祖である。

藤原時代初期の有名な畫家である。清和天皇の貞觀年中に、神泉苑監となり、後に從五位下采女正に進んだ。最も繪畫に秀で、屢々宮中に召されて障子・屏風などに描き、名手の譽が高かつた。陽成天皇の元慶四年には、釋奠の先聖の畫像を描いたが、其の畫像は歴世の釋奠に用ひられた。宇多天皇の仁和四年九月十五日には、源直方・藤原興基・藤原時平らに命じて、弘仁以後儒者の詩に巧な者を選ばせ、金岡に命じて其の畫像を清涼殿の東西の障子に描かせられた。また紫宸殿の賢聖障子にも描いたことがある。

金岡は馬を描く事が巧で、古今著聞集に據れば、宮中の朝餉の間の障子に描かれた金岡の馬が、毎夜、放れて萩の戸の萩を食つたので、詔して其の馬を縛いだ様に描き改めさせられてから、放れない様になつたといふ。また宇多法皇が仁和寺に居られた時、金岡に命じて御室の壁に馬を描かせられたが、其の馬が夜毎に放れて附近の田を荒したので、其の目を傷けさせられてから、全く荒さなくなつたといふ。是等は固より傳説に過ぎないけれども、金岡が如何にも名手で、其の妙技の世に重んぜられた事を窺ふに足るものである。彼の生死年代は詳かでないが、陽成・光孝・宇多の三朝に歴仕した事は疑を容れない。金岡は一代の巨匠であつたが、其の的確な遺作がない。古畫備考などに載せてある遺品などは信賴するに足らない。根津家所蔵の那智瀑布圖は、傳金岡筆として名高いが、併し金岡筆として確證があるのではない。巨

勢派の遺作といつた方が妥當であらう。

### 後醍醐天皇

ごだいごてんのう  
御諱を尊治といふ。

後宇多天皇の第二皇子である。御母は參議藤原忠綱の女で、談天門院忠子である。第九十六代の天皇である。

幼時から穎悟であられたから、御祖父龜山上皇は深くこれを愛し、常に左右に置き、早く即位する様に願はれた。延慶元年九月、花園天皇の皇太子となり、文保二年三月二十九日に即位され

た。後宇多法皇が院政を執られたが、正中元年六月に法皇が崩せられてからは、天皇が親ら政を執られ、吉田定房・萬里小路宣房・北畠親房らの諸名士が天皇を輔弼した。

時に關東の執權北條高時は、心疾を得て昏愚で、日夜遊宴に耽り、幕府の訴訟は紛雜を極め、これを輔ける長時高資も、權威を恣にして悪政が多かつたから、人心は次第に北條氏を離れ、幕府衰亡の兆が漸く現はれた。

天皇は後鳥羽天皇以来の遺志を繼ぎ、早くから政權恢復の志を抱かれたが、人心が北條氏を去るを見て、これを減ほさうとし、日野資朝・日野俊基らと謀つて、密かに地方の武士を召された。土肥頼兼・多治見國長らが召に應じて入京したが、遂に計があらはれて、資朝は佐渡に流され、俊基は鎌倉に送られ、頼兼・國長は京都で斬られ、天皇は宜房を鎌倉に遣はし、宸筆の誓書を高時に賜つて漸く解



決した。これを正中の變といふ。時に正中元年である。嘉暦元年三月、皇太子邦良親王(後二條天皇の皇子)が薨せられた。仍て天皇は、皇子尊良親王を(後醍醐天皇)



皇太子に立てようとしたが、高時は天皇の御旨に背き、量仁親王(後深草天皇の皇子)を皇太子に立てた。故に天皇は怒つて讓位を行はず、皇子尊雲法親王(後の讓良親王)と謀り、親王を天宮座主

に補し、以て延暦寺・興福寺の僧徒と結び、遊宴法談に託して、陰に討幕を畫策された。然るに謀が漏れ、高時は之を聞いて大いに怒り、元弘元年、大兵を發して西上させたので、天皇は神器を奉じ、藤原藤房を從へて、ひそかに笠置山に行幸し、讓良親王は吉野に遁れ、共に勅を發し、令旨を傳へ、諸國の勤王の士を召された。高時は擅に量仁親王を擁立して天皇と稱した。これを光嚴院といふ。北條氏は兵を進めて笠置山を陥れたので、天皇は藤房を從へ、徒歩で笠置の行在を逃れ、晝は隠れ、夜は迷ひ、難を凌いで有玉山に向はれた。この時の御製に「さして行く笠置の山を出でしより、あめが下にはかくれ家もなし」とあり、藤房の歌に、「いかにせん頼むかげとて立ちよれば、なほ袖ぬらす松の下露」といふのがある。天皇は有玉山で敵の手に落ちられ、二年三月、遂に隱岐に遷幸され、事に與つ

た人々も悉く新刑・流刑に處せられた。これよりさき、楠木正成は勤王の兵を河内に擧げ、赤坂城・千早城に據つて敵と戦ひ、讓良親王は吉野で義兵を募り、また赤松則村は播磨に、菊池武時は肥後に、土居通増・得能通綱は伊豫に、名和長年は伯耆に、相前後して義兵を擧げたので、北條氏は四面に敵を受ける形となつた。天皇はこれを聞かれ、六條忠顯を從へて密かに隱岐を出で、伯耆に渡つて長年を頼り、船上山の行宮に幸された。時に元弘三年閏二月である。

高時は官軍の勢の日に盛んなのを見て驚き、足利高氏(後に尊氏と改む)に命じ、軍を率ゐて西上させたが、高氏は却つて天皇に歸順し、赤松則村・六條忠顯らと六波羅を攻め、元弘三年五月七日にこれを陥れた。時に新田義貞は兵を上野に起し、南下して鎌倉に討ち入つたので、高時以下其の一族は悉く自殺し、北條氏は遂に亡び

た。時に五月二十二日である。天皇は大波羅陥落の報を聞き、直ちに船上山を發し、長年を從へて京都に向はれた。時に千早城の圍みも解け、正成は天皇を兵庫に迎へ、鎌倉陥落の捷報も達し、元弘三年六月五日、めでたく京都に還幸された。

よつて天皇は光嚴院を廢し、一統の新政を實現された。(一)中央政府では、先づ記録所を再興して萬機を親裁され、正成・長年らの十一人を寄人に任命された。また雑訴決斷所を置いて、土地に關する訴訟を裁判させられた。また武者所を置いて武士を取締らせ、義貞を頭人に任せられた。また征夷大將軍を置いて、讓良親王を之に任せられたが、間もなく成良親王を之に任せられた。(二)地方政治では、新に國司を任じ、勤功にあつた公卿・武士を之に任じて、在來の守護を抑へしめられた。また北畠顯家を陸奥守とし、結城宗廣と共に皇子義良親王を率じて奥

羽を擁護させられた。また足利直義を相模守とし、皇子成良親王を奉じ、鎌倉に居て東國を治めしめられた。また二條師基を大宰權帥とし、九州を鎮撫させられた。元弘四年正月、改元して建武といひ、高氏・義貞・正成・長年・則村、其の他の功臣に恩賞があり、天下の政權が悉く京都に聚つた。これを建武の中興といふ。

併し恩賞が不公平で、公卿は政務に慣れない上に、武士と不和を生じ、大内裏造營の爲に、下民は過税に苦しみ、政府は財政困難に陥り、紙幣を發して反つて士民を困窮に導き、社會は甚だしい混亂に陥り、人民は朝廷の新政を喜ばず、ひそかに武家政治を慕ふ様になつて來た。藤房の如きは時事の非を慨き、屢々天皇を諫めて容れられず、遂に官を捨て、隱退するに至つた。

この時に當り、尊氏は時勢を洞察し、武家の再興に志した。彼は新政に不平の將士に私恩を施し、

巧みに人心を收攬し、先づ天皇の寵姫藤原康子(新待賢門院)と結び、讓良親王を護衛して、鎌倉に幽閉させた。建武二年、高時の子北條時行が、父の遺志を繼いで鎌倉を恢復しようとし、兵を信濃に



(圖地要畿近)

擧げ、進んで鎌倉を襲つたが、直義は之を拒ぐ事が出来ず、讓良親王を殺させ、成良親王を奉じて西走し、參河から急使を派し、援を尊氏に求めたので、尊氏はこれを機として時行討伐を請ひ、勅許を待たずに東下して之を破り、遂に

鎌倉に據つて叛し、同年十月、自ら征夷大將軍と稱し、義貞を除くを名として西上したが、かねて新政に不平を抱く將士が從つた。天皇は震怒し、尊良親王を征東將軍とし、義貞・顯家に命じて討

たせられたが、顯家の未だ陸奥から到着しな

河)・箱根(相模)に戦つて敗退した。よつて尊氏兄弟は西上したが、則村も播磨に叛いて尊氏に應じたので、相共に東西から京都を犯した。天皇は比叡山の延暦寺に行幸されたが、やがて顯家が來たので、義貞・正成・長年と協力して、尊

氏兄弟を紀河原に破り、これを九州に走らせ、京都を恢復したので、天皇は京都に還幸された。時に元弘元年正月である。

然るに尊氏兄弟は九州に入り、菊池武敏・阿蘇惟時を筑前の多々良濱に破り、九州・四國・中國の新鋭を率ゐ、元弘元年四月、海陸兩道から東進した。時に義貞は則村と播磨の白旗城に交戦して居たが、尊氏兄弟の東上するを聞き、急いで兵庫に軍を廻し、正成と協力して之を迎へ討つたが、衆寡敵せず、正成は湊川に戦死し、義貞は敗れて京都に還つた。天皇は再び比叡山に行幸されたが、長年・忠顯も戦死し、官軍は振はなくなつた。

尊氏は入京してから、賊名を避ける爲に、同年八月、光嚴院の弟光明院(豐仁親王)を擁立して天皇と稱した。ついで比叡山に遣使して、僞り降つて還幸を請うたので、天皇は假にこれを許し、十月京都に還幸されたが、尊氏は直ち

に花山院に幽し、神器を光明院に傳へられんことを要請した。仍て天皇は偽器を授けられ、ひそかに吉野に幸し、行宮を建て、政を執られた。時に延元元年十二月である。これから吉野を南朝(大覺寺統)といひ、尊氏の體に立てたのを北朝(持明院統)と呼んだ。

既にして顯家は、天皇の催促により、京都を恢復しようとして謀り、義良親王を奉じて再び西上し、尊氏の子足利義隆を鎌倉に破り、進んで攝津に入り、北朝を驚かしたが、賊將高師直と阿部野に戦つて敗れ、延元三年五月、和泉の石津に敗死し、遂に京都を恢復する事が出来なかつた。義貞は勅旨を奉じ、皇太子恒良親王及び皇子尊良親王を奉じ、越前の金崎城・柚山城に據つて北朝を經營して居たが、賊將足利高經と戦ひ、三年七月、越前藤島に戦死した。顯家の父北高親房は、常陸の小田城に在つて東國を指揮して居たが、やがて城が陥り、關・大賀に移つて再

學を謀つたが成らず、陣中に神皇正統記を著して南朝の正統を明瞭にした。斯くて南風は漸く衰へたが、延元四年八月十五日、天皇は位を後村上天皇に譲り、復興に力むべき事を遺詔し、翌十六日に崩せられた。聖壽五十二歳である。楠木正行らが宿衛戒嚴した。天皇は天資英毅で、博く書史に渉り、篤く佛敎を信じ、眞言宗及び禪宗などを研究された。また心を典故に用ひ、諸道を再興された。崩御の際に諸親王に遺詔して、賢を任じ、能を使ひ、軍事を勵み、以て恢復に力めよと仰せられ、左手に法華經を把り、右手に劍を按じて崩せられた。北面して藏王堂の塔尾に葬る。現今大和國吉野山如意輪寺の東丘にある塔尾陵はこれである。

政を奉還するに當り、譜代の諸侯及び幕臣はこれを喜ばず、攝政二條齋教と結び、これを阻まうとしたので、象二郎は更に齋教を訪ふて切論し、遂に朝議を動かし、平和の裡に大政奉還を行はせた。時に慶應三年十月十四日である。同年十二月九日、明治天皇は王政復古の基礎を固くし、國是を定める爲に、小御所御前會議を開かれた時には、象二郎も出席の榮に浴した。偶々豐信は、「この變革を行ふに際し、慶喜を召して意見を諮詢するは、公議を採る上に必要なり」と主張したが、具視は之に反對し、「未だ朝廷の大議に參與せしむ可らず」と論じ、賛否兩派があり、大激論が起つた。具視は短刀を懐にし、「尙ほ山内氏の固執するあらば、一呼吸の内に決定せん」と、淺野茂勳に意を語つた。茂勳は象二郎に説く所があり、象二郎は豐信を説得したので、無事に會議が済んだ。

### 後土御門天皇

ごつちみかどてんのう

名 號 御名を成仁といひ、法諱を正等觀といふ。

系 統 後花園天皇の第一皇子で、御母は嘉樂門院藤原信子である。第百三代の天皇である。因に藤原信子は、贈太政大臣信宗の女となつて居るが、實は藤原孝長の女である。

事 蹟 寛正六年十二月二十七日に即位された。應仁元年、山名宗全・細川勝元らは、互に黨を集め、京都を中心として合計二十餘萬の兵が交戦し、十一年間も解けなかつたので、花洛の地は兵災の爲に半ば焼土となり、遂に六十餘州は亂れて、群雄割據の時代を演出した。隨つて皇室は、衰微の極に達した。御料は能登・加賀・越前・丹波・美濃の諸國に散在したけれども、武士がこれを私して上納しなかつた。朝臣を派遣して催促されても、僅か十分の一を辨するに過ぎなかつたから、新年祭・月次祭・小朝拜・元日節會・踏歌節會

以下の朝儀は行はれなかつた。偶々其等の儀式を行はうとしても、多くの公卿は貧乏で參與する事が出来なかつたので、やむを得ず中止することも多かつた。天皇は比の世の果敢ない有様を見て、大いに宸襟を惱まされ、出家しようと思はれたが、侍臣の諫めによつて留まられた。また文明九年には、東宮(勝仁親王)に讓位しようと思はれたが、東宮は未だ御元服前であつたから、若し登極後に其の儀を行ふとすれば、費用が嵩んで出資の道に困るから、先づ元服の儀のみを舉行された。ところが幕府からの獻金は、僅かに其の用を辨したに留り、更に讓位を行はれる事が出来なかつた。天皇は遂に素志を果されなかつた。天皇は在位三十六年で、明應九年九月二十八日、聖壽五十九歳で崩せられた。時に公卿・武家共に衰微して、幕府は大葬の費用を上ることが出来ず、遺體を黒戸に安置すること四十九日の久しきに亘

り、十一月に漸く泉涌寺で葬儀を行つたけれども、費用が少なくて辨ずるに足らず、御棺と稱して桶に入れ奉つたといふ。山城國紀伊郡深草村大字深草法華堂に葬る。

### 後藤象二郎

ごとうしやうじらう

事 蹟 土佐藩士である。慶應三年十月、岩倉具視・西郷隆盛・小松帶刀・大久保利通・木戸孝允らは幕府を倒さうと謀り、まさに討幕の密勅が薩・長二藩に下るに至つた。時に前土佐藩主山内豊信(容堂)は此の計畫を聞き、兵力に訴へて討幕をなすを好まず、平和の裡に解決しようとしたが、此の時、象二郎は福岡孝弟と共に豊信の命を受け、具視・隆盛に談判する所があつたけれども、功を奏しなかつたので、更に大阪に往つて將軍徳川慶喜に謁し、時勢の趨向を説き、大政を皇室に奉還する事の急務を建白した。慶喜が大

政を奉還するに當り、譜代の諸侯及び幕臣はこれを喜ばず、攝政二條齋教と結び、これを阻まうとしたので、象二郎は更に齋教を訪ふて切論し、遂に朝議を動かし、平和の裡に大政奉還を行はせた。時に慶應三年十月十四日である。同年十二月九日、明治天皇は王政復古の基礎を固くし、國是を定める爲に、小御所御前會議を開かれた時には、象二郎も出席の榮に浴した。偶々豐信は、「この變革を行ふに際し、慶喜を召して意見を諮詢するは、公議を採る上に必要なり」と主張したが、具視は之に反對し、「未だ朝廷の大議に參與せしむ可らず」と論じ、賛否兩派があり、大激論が起つた。具視は短刀を懐にし、「尙ほ山内氏の固執するあらば、一呼吸の内に決定せん」と、淺野茂勳に意を語つた。茂勳は象二郎に説く所があり、象二郎は豐信を説得したので、無事に會議が済んだ。

任じて大政を輔弼した。明治六年には隆盛・副島種臣・板垣退助・江藤新平らと征韓論を唱へたが、偶々具視・利通・孝允・博文らが歐米の視察を終つて歸朝し、内治の急を説いて外征の非を論じたので、其の爲に征韓論は破れ、十月隆盛らと共に連袂辭職して野に下つた。七年一月、象二郎は種臣・退助・新平らと謀り、民選議員の設立を建白したが、政府は加藤弘之の尙早論に賛成して採用しなかつた。

「みなものよしひら・源義平」の項を参照されたい。

ことしるぬしのみこと

事代主命

名 號 八重言代主神・積羽八重事代主命・葛城一言主神ともいふ。

系 統 大國主命の長子で、神皇比賣命の生む所である。

事 蹟 出雲の杵築に在つて

父大國主命の國政を助けられた。天照大神は經津主神・武甕槌神を出雲に降し、大國主命に國土を獻上するやうに傳へさせられたが、偶々事代主命は出雲の三穗崎に漁獵に出掛けて居られたので、大國主命は遣使して國土獻上の旨を傳へられた。時に事代主命は誦んで天照大神の旨に従ひ、此の國は天孫の御子に奉るべし」といひ、海の中に入重着柴籬を造り、船樁を踏んで避けられた。因に船樁は船端で、即ち海中に柴で入重垣を造り、其の中に船を踏み傾け、顯世を隔て避けるの意である。後に下野の二荒山に祀られ、また山城葛城に在つて高賀茂神と祀られた。

### 後鳥羽天皇

名 號 御名を尊成親王といひ、法諱を良然といふ。また顯徳院といひ、世に隱岐院と稱する。系 統 高倉天皇の第四皇子

である。御母は贈左大臣藤原信隆の女で、七條院藤原賴子である。第八十二代の天皇である。事 蹟 壽永二年、源義仲が京都に侵入したので、平氏は安德天皇及び建禮門院を奉じ、神器を擁して西奔した。時に京都には主がなかつたので、後白河法皇は新帝を立てようといふが、義仲は以仁王の子北陸宮を擁立しようとした。法皇は義仲の勢力擴張を恐れ、丹後局の勸によつて、高倉上皇の皇子尊成親王を立てられ、八月二十日に神器なくして踐祚された。これが後鳥羽天皇である。併し東西同時に二帝を存する譯になるから、安德天皇の崩御までの間を御鳥羽院と稱する。壽永四年三月二十四日、平氏が壇浦に敗れ、安德天皇が入水されたので、源義經は神鏡・神璽を擁して奉つたが、神劍は失せて見當らなかつた。故に畫御座の御劍を代用された。文治元年十一月、源賴朝の奏請によつて、守護・地頭を置くこと



を許されたが、これから武家政治が大いに發達して来た。建久三年三月、後白河法皇の崩後は政を親裁され、九年正月、位を土御門天皇に譲られてからも、上皇として久しく政を聽かれ、土御門・顯徳・(後鳥羽天皇)

世に御所鍛冶といつた。また上皇は政權の幕府に移つたのを憤り、陰に源實朝を咒詛し、官を右大臣に進めて其の心を騙らせ、内亂に乗じて之を斃し、以て大權を恢復しようといふ。故に宇治に幸して親ら水練を習ひ、或は城南寺に幸して流鏑馬を行ひ、常に武を練つて時機を待たれた。斯様に後鳥羽上皇は英邁で、政權恢復の御志があつたが、偶々實朝が公曉に殺されたので、政權が皇室に還るものと思はれたに拘らず、北條義時は藤原良經の三子頼經を迎へ、陽に有名無實の將軍に置き、陰に執權となつて天下の政權を握り、且つ屢々上皇の意に逆つたので、遂に顯徳上皇と謀つて、承久三年五月、義時征討の院宣を發し、諸國の武士を召された。土御門上皇は、「關東を討つには、未だ時至らず」といつて、後鳥羽上皇を諫められたけれども、聽かれなかつたのである。

然るに謀は早くも北條氏に漏れた。即ち京師に番直して居た三浦胤義は、事によつて義時を怨み、任期が満ちても鎌倉に歸らず、喜んで後鳥羽上皇の詔を奉じ、兄の三浦義村に院宣を傳へて京都に誘つた。ところが義村は胤義の誘ひに應ぜず、反つて義時に密告したので、義時は之を聞いて政子と謀り、大江廣元・三善康信と謀し、弟時房・子泰時を將として、東海・東山・北陸の三道から合計十九萬の兵を進め、官軍を美濃・尾張及び宇治・勢多に被つて京都に討ち入つた。

時に官軍は兵數も少く、未だ戰備も整はず、悉く利を失ひ、後鳥羽上皇は計の出づる所を知らず、勅使を泰時の陣營に遣つて院宣を下し、義時の官爵を復し、符を謀臣に歸せられた。泰時は之を拜受し、時房と共に六波羅の館に入つて京都を鎮撫し、官軍に戴した者を殺した。やがて義時は、仲恭天皇を廢して、後堀河天皇を立て、

後鳥羽上皇を隱岐に、土御門上皇を土佐(後に阿波)に、顯徳上皇を佐渡に遷した。時に承久三年七月である。また官軍に参加した公卿・武士をそれ／＼斬刑・流刑に處し、其の領地三千箇所を收めて部下の將士に分け與へた。これを承久の變といふ。變後、泰時(北方)・時房(南方)を南北兩六波羅に留めて京都を鎮め、ひそかに朝廷を抑へ、兼ねて近畿・西國を統制した。これが六波羅探題の始めで、恰も鎌倉幕府の出張所の如きものである。

後鳥羽上皇は鳥羽殿で薙髮し、隱岐郡荊田郷に遷され、巖穴を宮とし、僅かに風雨を蔽ふのみであつた。上皇は隱岐で十九年の星霜を重ね、延應元年二月二十二日、同地で崩せられた。聖壽六十歳である。荊田山中で火葬し、藤原能茂が御骨を納めて京都に歸り、大原の西林院に藏し、顯徳院と稱したが、四條天皇の仁治二年二月、大原に法華堂を造つて、御骨を安

### 後奈良天皇

名 號 御名を知仁といふ。系 統 御柏原天皇の第二皇子

子で、御母は贈左大臣勸修寺教秀の女豐樂門院藤原藤子である。第百五代の天皇である。事 蹟 大永六年四月二十九日、御柏原天皇の後を承けて踐祚された。當時は戰國時代のこととて、諸國にある公卿の領地はいふ

じ、後醍醐天皇の朝に後鳥羽院と改めた。後鳥羽上皇は、敏達多能で、和歌・管絃・琵琶・蹴鞠に精通された。建仁元年には和歌所を禁中に置き、源通親・九條良經・藤原定家・源親長・鴨長明らを召して和歌を詠じ、歌合を行はれた。また源通具・藤原有家らに古今和歌集を撰集させ、親ら裁定されたこともある。

に及ばず、皇室の御料地さへ、勢力ある豪族の私有する所となつたので、朝廷の式儀は其の極に達した。隨つて公卿は職をたよつて各地に散り、京都に在る者は生活難に陥つた。老人雑話に記する所に據れば、「常盤井殿といふ公家に、目見えを望む人あり。媒介の人、云ひ入れければ、夏衣裳にては恥かしきと宜ふ。苦しからずとて、具して行きたり。彼人も夏の裝束ならんと思ひしに、帷子無くして、蚊帳を身に巻きて會はれしとぞ」とあるが、此の文を見ても、公卿の貧窮を知るべきである。當時、朝廷にも幕府にも費用が缺乏し、天皇は即位の大禮を行はれる事が出来なかつたので、三條西實隆らを四方に派遣して費用を募られたが、北條氏は五萬疋を、今川氏は三萬疋を、朝倉氏は一萬疋を、白山は百疋を獻じ、ついで天文四年に至り、大内義隆が其の總費用二十萬疋を上納したので、五年二月二十六日に即位式を舉行された。

天文五年七月、比叡山延暦寺の天台宗徒は、京都の日蓮宗徒と相争ひ、火を放つた爲に、京都の過半は延焼し、洛中の喪類は益々甚だしくなつた。蓋し皇室が極度の衰微に達したのは、實に天皇の御代で、遺老物語に據れば、紫宸殿の臺地が壞れて、三條橋の上から内侍所(賢所)の燈明が見え、左近の橋の附近には、茶を煎じて賣る者が店を開き、其の茶店の子孫たちが、年に一度天皇に茶を奉つたといふ。此の頃、銀など様の物に札付けて、例へば百人一首・伊勢物語など云ふ札つけて、御殿に結び置き、數日の後に赴けば、宸筆を添へて差出されたといふ。また關白料といつて、袋を提げ、京中を歩いて米を賣つたといふ。老人雑話に據れば、兒童が禁中に往つて、縁で土などを握りて遊んで居たといふ。是等は最も人口に膾炙した話であつて、今人の想像も及ばない異い事である。

天文九年は全国的な大飢饉で、

且つ疫癘の爲に、萬民は非常に憫んだが、天皇は救恤の力の及ばない事を歎かれ、今は神佛の加護に頼る外に道がないと思はれ、日本六十餘州の人民の平安和樂を祈る爲に、熱心に般若心經を書寫され、これを山城國醍醐寺三寶院の僧義堯に授けられ、大供養を命ぜられた。其の宸筆の終りには、「今茲(このとき) (後奈良天皇の御筆蹟)

## 般若心經

天下大いに疫み、萬民多く死亡に陥つ。朕、民の父母として、徳覆ふ能はず。甚だ自ら痛む。竊に般若心經一卷を金字に寫し、義堯僧正をして之を供養せしむ。庶幾くば瘡疾の妙薬たらんことを。時に天文九年六月十七日(原文漢文)とある。

或る日、天皇は夢中に歌を詠まれた。「祥弓とるとも菊を厭ふな

よ、野は藤袴いつれをかみん」と。まことに悲惨な御製である。在位三十一年、弘治三年九月五日、聖壽六十二歳で崩せられた。山城國紀伊郡深草法華堂に葬る。天皇が御自身の難儀を忘れられ、下萬民の苦を憂慮され、御自身の徳が足りない爲だと歎かせられたのは、誠に長い極みである。

## 小西行長

こにしゆきなが

名號 通稱を彌九郎といふ。

系統 小西傳徳の子である。後に備前岡山の商人某の養子となり、字喜多家に出入して其の家臣となつた。豊臣秀吉は行長の才を愛し、召して祿二百石を與へた。行長は兵を好み、善く戦ひ、屢々軍功があり、寵遇が日に増して、食邑一萬石に封せられ、從五位に

叙し、内匠頭となり、後に攝津守と改め、やがて十萬石を食み、豊臣の姓を賜ひ、天正十年、佐々成政が滅んでから肥後半國二十四萬石に封せられ、宇土城に居した。文祿元年征韓の役に際しては、命ぜられて先鋒となり、加藤清正と共に各日交互に其の任に當つたが、爾來、兩人は功を争つて隙を生じた。四月、松浦鎮信・有馬晴信・大村喜前・宗義智・五島純支らと共に、第一軍の兵一萬八千七百人を率ゐて名護屋を出發し、十三日釜山に到着し、諸城を抜いて京城に入り、更に北進した。

偶々明主は我が鋭鋒に當り難きを知り、陽に講和を申込み、陰に事を謀らうと考へ、沈惟敬を朝鮮に派遣して行長と謀議させた。行長は間に在つて周旋に力めたが、明は其の際に乘じ、李如松に大軍を授けて平壤城を襲はせた。行長の軍は破れて京城に歸つたが、小早川隆景は李如松を碧蹄館に撃破した。時に文祿二年正月である。

豊前館の役後、明軍は意氣沮喪し、沈惟敬は再び行長を通じて和議を請じた。よつて秀吉は、(一)明國の皇女を日本の皇妃となし、(二)貿易を舊に復し、(三)朝鮮の慶尙・忠清・全羅の三道を日本に割讓し、(四)朝鮮の王子・大臣を質として日本に送る事などを條件として和を許し、釜山に守將を留めて兵を收めた。然るに此の和約は、沈惟敬が恣に定めたもので、而も慶長元年九月に、秀吉に捧呈した明の國書には、「特封(特封)日本國王」といふ語があつたから、秀吉は大いに怒り、直ちに明使を迫ひ、小早川秀秋を總大將とし、再征の命を下した。

慶長二年正月、行長は清正と共に、再び先鋒となつて渡韓した。七月には元帥の率ゐる水軍を破つて開山島を抜き、また南原を取り、ついで十二月には加藤清正・淺野幸長らを蔚山城に救つた。三年八月、秀吉が歿するに及び、諸將と共に兵を班した。

時に豊川家康の威望が獨り盛んであつたが、石田三成らは、之を以て豊臣氏に不利であると觀じ、密に家康を除かうと謀つたが、行長も此の謀に同じ、慶長五年九月、家康の軍と關ヶ原に戦ひ、敗れて捕虜となり、十月、京都の三條河原で斬られた。

## 後二條天皇

こにでうてんのう

名號 御名を邦治といふ。系統 後宇多天皇の第一皇子で、御母は西華門院源基子である。第九十四代の天皇である。

事蹟 弘安八年二月二日に降臨され、永仁六年八月に皇太子となり、正安三年正月二十一日に後伏見天皇の禪を受け、同年三月二十四日に御年十七歳で即位された。時に御深草・龜山・後宇多・伏見・後伏見の五帝が院にあり、政務は龜山・後宇多兩上皇が決められた。後宇多上皇は、權中納言

經長を關東に遣り、後醍醐上皇の遺詔により、永く大覺寺統で繼承すべき旨を陳辨せしめられたけれども、北條貞時はこれを聴き容れなかつた。天皇は在位六年で、徳治三年八月二十五日、聖壽二十四歳で崩せられた。山城國愛宕郡白河村北白河陵に葬る。

## 近衛天皇

このゑてんのう

名號 御名を體仁といふ。系統 鳥羽天皇の第九皇子で、御母は美福門院得子である。第七十六代の天皇である。

事蹟 保延五年五月十八日に降臨され、七月に親王となり、八月に崇徳天皇の皇太子となられた。幼少から鳥羽法皇に寵せられ、其の故を以て、永治元年十二月二十七日に即位されたが、時に御年三歳である。天皇は容姿が甚だ美しく、稍々長じて和歌を好み、古作者の風が

あつたといふ。在位十四年に及んだが、政治は悉く鳥羽法皇が執られた。左大臣藤原頼長は攝政藤原忠通を嫉み、之を法皇に讒した。天皇は忠通と善かつたけれども、法王を憚つて意の如くならず、居常鬱々として樂まず、久壽二年七月二十三日、聖壽十七歳で崩せられた。山城國紀伊郡竹田村安樂壽院南陵に葬る。

## 後花園天皇

こはなごのてんのう

名號 御名を彦仁といひ、法諱を圓滿智といふ。初め後文徳院と諡し、後に後花園院と改む。系統 崇光院の曾孫である。後崇光院(貞成親王)の第一皇子で、御母を敷政門院源幸子といふ。第百二代の天皇である。

事蹟 永享元年七月、稱光天皇が病に罹られたけれども、未だ皇儲が定まらなかつた。故に後小松上皇は皇嗣を讓せられたが、

僧宗純（一休和尚）が彦仁王をすすめたので、上皇は此の議を決せられた。よつて十二月二十九日に即位されたが、これが後花園天皇で、御年僅か十歳である。天皇は在位三十六年に及んだが、在位中には災異が屢々起り、人民の憫む事が一通りでなかつた。時に將軍義政は奢侈を事とし、日夜宴樂に耽り、人民が大風・洪水・饑饉・疾病に憫むのを顧みず、盛んに土木を起して室町殿を修築した。天皇は大いに厭慮を懐かれ、「殘民爭採首陽薇、處處閉鎖鎖鎖、竹屋、詩興吟酸春二月、滿城紅綠爲誰肥」の御製を賜ひ、これを戒められたので、義政は恐懼して工事を中止したといふ。天皇は在位三十六年、寛正五年七月に位を御子成仁親王（後土御門天皇）に譲られたが、偶々應仁の亂が起り、京都は兵亂の巷となつたので、應仁元年八月、主上及び神器を擁して、室町第に臨幸された。公卿は離散し、文籍は灰燼となり、朝綱の衰微が甚だしかつたが、此の混亂の中に室町第で崩せられた。時に文明二年二月二十七日で、聖壽五十二歳であつた。大葬の儀も甚だ備はらず、將軍義政は草履を穿ち、徒歩で送葬し、細川勝元らは儀仗に任じ、所司代浦上則宗は街路を守つた。丹波國北桑田郡山園村大字井戸後山園陵に葬る。

甚だしかつたが、此の混亂の中に室町第で崩せられた。時に文明二年二月二十七日で、聖壽五十二歳であつた。大葬の儀も甚だ備はらず、將軍義政は草履を穿ち、徒歩で送葬し、細川勝元らは儀仗に任じ、所司代浦上則宗は街路を守つた。丹波國北桑田郡山園村大字井戸後山園陵に葬る。

### 小早川隆景

幼字を徳壽丸といひ通稱を又四郎といひ、法名を黃梅院泰雲紹閑といふ。世に三原中納言と稱する。

毛利元就の三子で、吉川元春の弟である。小早川正平の後を承けて、小早川氏を嗣し、小早川又四郎隆景と號した。田高山城に入り、竹原の地を併有し、中務少輔・左衛門佐と稱した。父元就に従つて出陣し、見元春と

共に、戰ある毎に先登し、向ふ處敵がなかつたので、世に兩川（吉川・小早川）といひ、兄弟並び稱せられた。爾來、元就を輔けて東西を經營し、元就の没後は、甥輝元を輔佐した。毛利氏が山陰・山陽の殆ど全部を領し、更に九州の一部を略するを得たのは、隆景の輔導の功が多い。天正十年、豊臣秀吉が織田信長の命を受け、軍を率ひて播磨・備前地方を侵し、高松城を圍んだ時は、隆景は元春と共に輝元を率ひ、高松城を救はうとしたが、相峙して未だ戦はない中に和議が成つたので、兵を收めて歸國した。これから深く秀吉と結び、毛利氏の社稷を保つことを得た。天正十三年、豊臣秀吉に従つて四國の長曾我部氏を征して殊功があり、秀吉から伊豫三十五萬石を與へられた。十四年、秀吉が鳥津氏征討の師を起すに際し、元春と共に選ばれて其の先驅となり、役

が濟んでから轉封され、筑前及び肥前・筑後の二郡を領し、立花山城を治した。十六年、輝元に従つて京都に赴いたが、秀吉から厚く遇せられ、梶の記號と豊臣の姓とを授けられ、從五位下に叙し、侍從に任ぜられた。此の年、名島城を築いて移つた。十八年には更に三原に城を築き、沼田高山城を廢したが、小田原征伐の際には、秀吉に従つて關東に赴き、畫策する處が頗る多かつた。天正十九年には、秀吉の甥秀秋を養つて嗣とした。蓋し此の時に當り、輝元も隆景も嗣がなかつたが、秀吉は輝元の後を秀秋に繼がせようとする意志があつたので、隆景はこれを聞き、宗家を奉はれることを恐れ、自ら進んで秀秋を其の嗣に請うたのである。文祿元年二月には征韓の諸將が出發したが、隆景は兵一萬を率ゐて渡鮮し、各處に轉戦した。二年正月には、明將李如松が兵二十萬を率ゐて來攻し、我が軍を平壤に

圍んだ。小西行長は防戦して利あらず、狼狽して京城に奔つた。李如松は、追撃して京城を恢復しようとしたので、我が諸將の中には、京城を退かうとする者さへあつた。時に隆景は、開城を守つて居たが、立花宗茂と共に、京城に引き揚げる事を好まなかつた。併し諸將の催促により、やむを得ず、兵二萬を併せて京城に還り、更に軍議をこらし、李如松を防ぐことに力め、各々部署に就いた。乃ち隆景は、宗茂と共に京城の南大門に陣し、高橋直次・毛利元康・毛利秀包が之に従つた。李如松は親ら兵十萬を率ゐ、高昇・孫守廉・祖承訓を先鋒とし、進んで碧蹄館に迫つた。我が軍の斥候は明軍と碧蹄館の附近で衝突し、夜中に戦つて多くの死傷者を出したが、早朝になると、一里程の前面に明軍の赤旗が空を蔽ふた。よつて隆景は先鋒となり、宗茂・直次・元康・秀包は奇兵となつて其の

傍に陣した。先づ隆景が火蓋を切つて奮戦した。明軍は鋒で突く事を主とし、我が軍は太刀で自由に斬る事を旨とした。兩軍が入り亂れた時に、宗茂・直次・元康・秀包が側面から攻めたので、明軍は敗れて多くの死傷者を出し、李如松は僅に脱出する事が出来た。時に正月五日である。隆景は更にこれを追撃し、また晋州の城を陥れた。其の功に據り、四年には從三位に叙し、權中納言に任ぜられた。ついで家を秀秋に譲り、三原城に退居し、世故を謝絶して優遊自適し、慶長二年六月、六十五歳で歿した。隆景は容貌が秀麗で、沈毅、英邁、宏量で、最も軍略に長じ、信義を重んじ、苟も戲言をいはなかつた。秀吉はこれを敬重し、「隆景の才智は小松内府に勝る」といひ、屢々引いて大政に參與させようとした。歿するに及んで、「孤吾邦の鑑を失へり」と嘆じたといふ。

こばやし いつき  
小林 一茶  
通稱を彌太郎といふ。はじめ菊明・竹阿と號し、後に一茶・蘇因坊と改めた。俳諧寺と稱する。信濃の農民彌五兵衛の子である。寶曆十三年、信濃國上水内郡柏原に生れた。幼時から學を好み、中村新甫に就いて讀書・習字を學び、新甫の死後は長月庵若翁に學んだ。新甫も若翁も俳諧を好んだが、一茶が將來俳人として世に立つ基礎は、此の際に造られたものやうである。安永五年十四歳の時、繼母の爲に家から逐はれ、江戸に遊んで儲家の奴僕となり、或は昌平校の小使となつたが、寛政二年四月、其日庵素丸の門に入り、俳諧を學んで出藍の譽があつた。然るに一茶は天才飄逸で、古式に泥まなかつたから、

大いに同門の徒に忌まれ、素丸の没後、白芹が其の後を享くるに及び、一派の規矩を過つたといふ理由で、遂に破門されたが、時に文化年間の事である。寛政年間には歸郷し、俳諧を以て業とし、時に興が到れば四方に行脚した。文政十年十一月十九日、六十五歳で歿した。信濃柏原顯明寺に葬る。こぶかくさてんのう  
後深草天皇  
御名を久仁といふ。世に常磐井殿・富小路院殿と稱する。後嵯峨天皇の第三皇子で、御母は西園寺（藤原）實氏の女で、大宮院藤原嫡子である。第八十九代の天皇である。事 寛元元年八月十日に後嵯峨天皇の皇太子となり、同四年正月二十九日に受禪し、三月十一日に即位された。時に御年四歳である。後嵯峨上皇が院中で政を

執られ、關白一條實經が攝政となり、三月、前右大臣西園寺實氏が太政大臣に任じた。

天皇は御位に在ることが十三年で、正元元年十一月二十六日に、皇太弟龜山天皇に讓位された。後醍醐天皇は龜山天皇の英邁を愛せられ、其の御子孫に永く皇統を繼がせようとの志を抱かれたが、崩御に臨んで之を遺詔し、萬事鎌倉の成敗を仰がせられた。これが爲に後深草・龜山の兩院は、鎌倉によつて互に皇位を争ひ、皇室は愈々衰へる様になつた。

既にして龜山天皇の皇子後宇多天皇が即位されたが、然るに後深草上皇は、御嫡男の御身でありながら、御子の皇統を繼ぐ事の出来ないのを不満に思はれたので、北條時宗は深く同情し奉り、且つ龜山上皇に奏請し、後深草上皇の皇子伏見天皇を以て、後宇多天皇の嗣と定め奉つた。爾來、後深草・龜山兩上皇間の御不和が接頭し、近臣もこれに干渉し、黨をなして

争ふに至つた。

後深草上皇は、正應元年三月、伏見天皇の即位の時から院政を聽かれたが、嘉元二年七月十六日、聖壽六十二歳で崩せられた。山城紀伊郡深草村深草法華堂に葬る。「ごさがてんのう・後醍醐天皇」の項を参照されたい。

### ごふしみてんのう 後伏見天皇

**名** 御諱を胤仁といふ。  
**系** 伏見天皇の第一皇子

で、御母は參議藤原經子の女で、准三宮藤原經子である。第九十三代の天皇（持明院統）である。  
**事** 正應元年三月に降誕され、八月に親王となり、二年四月に皇太子となり、永仁六年七月に伏見天皇の禪を受け、十月十三日に即位された。時に大覺寺統の後宇多上皇は、鎌倉幕府に遣使し

て、後伏見天皇の即位を以て後醍醐上皇の遺詔に違ふことを責められた。よつて天皇は在位僅か三年で、正安三年正月、大覺寺統の後二條天皇に讓位し、二條宮小路殿に移り、新院と稱せられたが、後醍醐天皇の即位後に本院と稱せられた。花園天皇の正和六年に伏見上皇が薨せられてからは、後伏見上皇が専ら院政を執られた。

文保二年、伏見上皇は後宇多法皇と兩院十年迭立の約を結び、後二條天皇の皇子邦良親王を皇太子に立てられた。蓋し邦良親王の祖母は、後深草天皇の女遊義門院であるから、持明院統を和げようとしたのである。

併し後伏見上皇は之を悦ばず、元享元年十月、皇子量仁親王を皇太子に立てようと石清水宮に祈られた。正中二年、皇太子邦良親王が薨せられると、北條高時の力を借りて、同二年に量仁親王を皇太子に立て、且つ早く大統を承ける様に賀茂社に祈願された。これは

後醍醐天皇に御讓位の意志なく、約を違へられたのを憤られた爲である。

元弘元年、後醍醐天皇が笠置山に遷幸されたので、高時は量仁親王を擁立したが、これが光嚴院である。後伏見上皇は常磐井殿で院政を執られた。三年三月、赤松則村が後醍醐天皇の勅を奉じて來攻するに及び、上皇は御光嚴院及び花園上皇を六波羅に徙して、諸方の兵を集められた。五月に足利尊氏が上京したので、上皇は大いに喜ばれたが、然るに尊氏は、却つて後醍醐天皇の勅を奉じて、六波羅を攻めたので、上皇は大いに驚き、圍を突いて近江國伊次大平護國寺に行幸され、十八日の後に京都に歸り、六月持明院で薨せられたが、延元元年四月六日、聖壽四十九歳で崩せられた。山城國紀伊郡深草村法華堂に葬る。著書に後伏見院御記二十二卷があるが、今は散佚して數卷を傳ふるに過ぎない。

### ごほらう 吳鳳

**事** 今から約二百年前の人で、時の官憲の蕃語通譯として令聞があり、よく臺灣蕃人を悦ばせしめたが、賊首の惡風が止まないのを慨き、自ら變装して故らに蕃人の兇刃に斃れ、終に臺灣阿里山蕃を悔悟させた人で、爾來、阿里山蕃に於ては全く此の惡習を絶つに至つた。嘉義郡中埔庄の吳鳳廟は、身を殺して仁を成した一代の義人吳鳳を祀つたものである。曾て故佐久間總督は此の廟に参拜して、「殺身成仁」の扁額を供へた。今では成仁廟とも呼ぶ。

### ごほりかはてんのう 後堀河天皇

**名** 御名を茂仁といふ。  
**系** 高倉天皇の御孫である。守貞親王の第三皇子で、御母

は北白河院藤原經子である。第八十六代の天皇である。

**事** 承久三年七月、承久の變に際し、北條義時は仲恭天皇を讓し、御年僅か十歳の茂仁王を位に即けたが、これが後堀河天皇である。天皇は容姿が温雅で、喜怒が色にあらはれず、資性が寛仁で、政事が奇酷でなかつた。また學を好まれ、頗る文藝があり、屢々儒臣を召見して論議されたといふ。在位十一年、貞永元年十月に位を四條天皇に讓り、文曆元年八月六日に崩せられた。聖壽二十三年である。京都市下京區今熊野町觀音寺陵に葬る。

### こまつのみやあきひ としんわう 小松宮彰仁親王

**名** 初め豐宮といひ、後に仁和寺宮嘉彰親王といひ、更に小松宮彰仁親王と改められた。  
**系** 伏見宮邦家親王の第



(ふ賜を刀節に王親彰嘉)

四子である。  
**事** 慶應三年十二月讓定になられた。明治元年正月、徳川慶喜は討藩の表を上り、會津・桑名の兵を先鋒として大阪から上洛したが、薩・長の兵は朝命を奉じてこれを鳥羽・伏見に迎へ撃つた。朝廷は仁和寺宮嘉彰親王を征討大將軍に任じ、錦旗節刀を賜はり、幕軍を追討させられたが、慶喜は事の成らないのを知つて大阪城に退き、更に海路から江戸に逃れたので、嘉彰親王は大阪城を收められた。また此の年の六月には北越に出征された事もある。

明治十五年には小松宮彰仁親王と改名され、近衛都督・參謀總長などに歴任し、常に軍務に盡瘁されたが、明治二十七年に元帥府に列せられ、三十六年二月、御年五十八歳で薨せられた。

### こ ま い せ 狛 伊 勢

「あとかもん・阿閉掃部」の項を参照されたい。

ごみづのをてんのう

### 後水尾天皇

名 號 幼稱を三宮といひ、御名を政仁といひ、法諱を圓淨といふ。

系統 後陽成天皇の第三皇子で、御母は中和門院藤原前子である。第百八代の天皇である。

事 蹟 慶長五年十二月に親王となり、十六年四月十二日、御年十六歳で即位された。元和二年五月、大坂夏の陣が終り、徳川家康が四海を統一し、始めて武を偃せ、文を修め、世は太平を見るに至つた。天皇は英明で、夙に幕府の専横を厭はれたが、偶々幕府が朝命に反し、一旦勅許のあつた僧澤庵らの紫衣を奉つて罷流したの

で、大いに御立腹になり、俄に讓位を決せられた。乃ち在位十八年で、寛永六年十一月に中宮東福門院（徳川秀忠の女）の御腹なる皇女興子（明正天皇）に讓位され、（後水尾天皇）



爾來、院で政を聽くこと五十一年に及び、延寶八年八月十九日、聖壽八十五歳で崩せられた。京都今熊野町月輪院に葬る。天皇は和歌・插花を嗜好され、

南庭に數間の假屋を設け、貴賤を論せず、世に名ある者を召集して其の技を競はれたので、世人は禁中の大立花と稱した。「あしはらや茂らばしげれおのがまゝ」とても道ある世とは思はず」といふ御製がある。また天皇は典故に志を留め、當時の年中行事を撰んで親書された事もある。

ごむらかみてんのう

### 後村上天皇

名 號 初名を憲良といひ、後に改めて義良といふ。

系統 後醍醐天皇の第七皇子で、御母は新待賢門院藤原康子である。第九十七代の天皇である。

事 蹟 「のりながしんわう・義良親王」の項を参照されたい。延元四年八月、後醍醐天皇が崩せられたので、十月、吉野の行宮で即位された。時に御年十二歳である。

同年九月五日に讓印されたものである。明治四十一年七月に組織された桂内閣の時には、再び外務大臣となつたが、四十三年八月には日・韓兩國の併合に功があり、また條約改訂の事に當り、四十四年、關稅改正の事に成功し、米・英・獨などと調印を終り、條約上に於ては列國と對等の地位に進む事が出来る様になつた。壽太郎は功によつて侯爵を授けられたが、明治四十四年十一月、五十七歳で歿した。

正平三年正月、足利尊氏は官軍の振ふのを見て安んぜず、高師直に大兵を授けて之を征せしめた。師直は四條で楠木正行を破り、進んで吉野に入り、行宮に火を放ち、神社佛閣を蕩盡した。天皇は避けて穴太に行幸された。

六年、尊氏は弟足利直義と隙を生じ、諸將も各々二派に別れて相争つた。そこで尊氏・義詮は僞つて天皇に降りを請ひ、一時を彌縫して直義を謀らうとしたので、天皇も僞つて之を許し、七年二月、賀名生——七年正月穴太を賀名生と改む——を發して京都に入り、男山を行宮とされた。

やがて義詮は叛き、兵を率ゐて男山の行宮を攻めたが、官軍が敗れたので、七年五月、天皇は甲冑を被つて馬に御し、關を突いて奈良に幸し、ついで賀名生宮に還幸された。十三年に賊軍がまた行宮に迫らうとしたので、天皇は金剛山の觀心寺に幸し、後に住吉行宮に御し、二十三年三月十一日に崩

ぜられた。聖壽四十歳である。河内國南河内郡川上村大字寺元輪尾陵に葬る。

### こむらじゆたらう 小村壽太郎

事 蹟 日向國の出身で、明治時代の外交家である。明治二十八・九年の交、韓國政府は露露政策を取り、朝鮮に於ける我が國の勢力が頗る衰へたので、我が政府は壽太郎を駐韓公使に任じ、此の趨勢を挽回せよとしたが、壽太郎は露國公使ウエーバーと會商し、二十九年五月十四日附で、覺書交換するに至つた。

明治三十四年六月に組織された桂内閣の時には、壽太郎は外務大臣に任じた。當時、露國は清・韓兩國の弱いのを好機とし、また我が國を輕視し、滿洲南下を企て、盛んに増兵したので、明治三十五年一月、我が政府は英國と同盟し、（一）清・韓兩國の領土を保全し、

（二）他の二國以上が聯合して、東洋で同盟國の一方と關戰する時、他の一方は之を援く可き事を約したが、これを日英同盟といふ。時に外務大臣であつた壽太郎は、三十四年の冬から三十五年の春にかけて、病氣を起して奔走し、元老・閣僚を説いて此の同盟を成立させた。

こ・から・くわろ

既にして日露戰爭が起り、海陸ともに勝利は我が國に歸したが、明治三十八年六月、日・露兩國は米國大統領ルーズベルトの勸告を容れ、ポーツマス條約を結ぶことになつた。時に外務大臣であつた壽太郎は、八月、駐米公使高平小五郎と共に全權委員となり、露國の全權委員ウキッテ及びローゼンと、米國ニューハムプシア州のポーツマスに會談し、（一）朝鮮に於ける我が國の優越權を認めさせ、（二）樺太の南半を我が國に讓渡させ、（三）南滿洲鐵道と旅順・大連一帯の租借權を我が國に讓渡させた。これをポーツマス條約といひ、

### こももとのてんのう 後桃園天皇

名 號 御名を英仁といふ。

系統 桃園天皇の第一皇子で、御母は恭禮門院藤原富子である。第百十八代の天皇である。

事 蹟 寶曆八年七月二日に降誕され、明和五年二月十九日に後櫻町天皇の皇太子となり、同七

こやましようたらう

### 小山正太郎

事 蹟 安政五年、越後の長岡藩に生れたが、維新の戦亂の際、父が王師に抗して戦死したので、母及び弟妹と共に會津に行き、一時寺院に隠れて生を繋いだ事もある。明治四年東京に出で、川上冬崖の隨香讀書館で洋書を修め、また陸軍省軍教師アベルグリンに學んで得る所があり、七年以來陸軍兵學寮（後の陸軍士官學校）に出仕し、生徒に圖書を教へたが、自分も兵學寮圖書教師佛人ゲリノ

1に學んで得る所があつた。九年伊太利畫家フォンタネジが工學寮美術學校に招聘されてからは、官海を辭して同校の學生となり、フォンタネジに學び、間もなく同校の助教となつたが、私淑せるフォンタネジの歸國後は、其の後任教師フェレッチの凡庸畫技に憚らず、同志と連袂退學して十會を組織した。十一年以來東京師範學校(後の高等師範學校)の圖畫教師となり、傍ら公私の美術事業の發達に盡力し、二十年には不同舎と呼ぶ私塾を起して洋畫を教授したが、中村不折・岡精一・藤谷國四郎・石川寅治・吉田博・中川八郎・鹿子木孟郎・坂本繁二郎・青木繁・高村眞夫は不同舎の出身である。二十二年には明治美術會を組織し、三十三年には巴里萬國大博覽會開催を機として佛蘭西に遊び、歸朝後は東京高等師範學校に教鞭を執り、四十年文部省主催美術展覽會開催後は、長く其の審査員となつて貢献したが、大

正五年一月七日六十歳で歿した。

ごやうぜいてんのう  
後陽成天皇

名 號 御名は初め和仁といひ、後に周仁と改められた。

系 統 正親町天皇の御孫である。陽光院誠仁親王の第一王子で、御母は内大臣藤原晴右の女新上東門院藤原晴子である。第百七代の天皇である。

事 蹟 天正十四年九月、正親町天皇の御養子となり、十一月二十五日に即位された。時に御年十六歳である。十六年四月十四日、關白豐臣秀吉の請によつて、聚樂第に行幸された。時に秀吉は參内して天機をうかゞひ、文武百官・諸將群臣を従へて供奉したが、儀衛兩薄の盛んな事は、古今稀に見る所であつた。天皇は此の第に滞留されること五日に及んだが、其の間、樂宴歡樂は感嘆を盡した。十五日、秀吉は京中の地子銀五千

系 統 後朱雀天皇の第一皇子で、御母は贈皇太后藤子(藤原道長の女)である。第七十代の天皇である。

事 蹟 寛徳二年四月八日、

後朱雀天皇の讓を受け、二十二歳で即位された。藤原頼通の女寛子は中宮となり、頼通の弟教通の女歡子は皇后となつた。天皇は英明で、學を好まれ、學才ある者を拔擢して要路に置かれたけれども、頼通の權威を抑壓されることが出来なかつた。前九年の役は此の朝に起つたことである。在位二十三年で、治暦四年四月十九日、聖壽四十四歳で崩せられた。山城國葛野郡花園村大字谷口圓教寺陵に葬る。

これやすしんわう  
惟康親王

系 統 後嵯峨天皇の御孫である。宗尊親王の御子で、御母は攝政藤原兼經の女である。鎌倉第

これいぜいてんのう  
後冷泉天皇

名 號 御名を親仁といふ。

五百三十餘兩、並に米地子八百石を御料として獻じ、又五百石を關白料として六ノ宮に獻じ、近江國高島郡八千石を諸公卿に給與し、且つ諸大名を饒下に盟はせ、皇室を尊崇する起請文を朝廷に納れさせた。天皇は十八日に還幸されたが、世に之を聚樂第行幸といひ、世人は其の盛大を稱した。文祿元年正月二十六日には、再び豐臣秀次の聚樂邸に行幸されたが、儀式はすべて天正の例によつた。慶長九年に徳川家康は供御料を獻じ、一萬石を以て其の額とした。天皇は在位二十六年に及び、慶長十六年に後水尾天皇に讓位され、元和三年八月二十六日、聖壽四十七歳で崩せられた。山城國紀伊郡深草村深草法華堂陵に葬る。

し、葡萄牙人を妻に迎へたが、偶々マルコロポロの東方見聞録を讀み、東洋、特にジバング(日本)に興味をもち、また希臘のプトレミの地理書を讀み、益々世界の球形を確信し、歐羅巴から西航してジバングに赴かうと志した。星

コロンブスは、自己の計畫を葡



(陸上のスパンロコ)

マリア號  
・パンタ  
號・ニナ  
號の三隻  
を建造し  
水夫・醫  
者・書記  
・職人・  
冒險好き  
の青年な  
ど合計百

學者トスカネリは「歐羅巴の西の海を進めば、ジバングに着くに相違ない。たとへジバングを見落したにしても、印度には必ず到着する。故に同志を集めて東洋に赴く航路を發見せよ」と、コロンブスを激勵した。

二十名を分乗させ、西紀一四九二年八月三日(我が土御門天皇の明應元年)に同港を解纜し、カナリ1島を経て、大西洋を横斷し、航海の不安及び水夫の陸國強要に克ち、頭として初志を貫徹し、十月十二日、遂に今の西印度の一島に

七代の將軍である。

事 蹟 文永三年七月、北條時宗らに迎へられ、父宗尊親王に繼いで將軍になられたが、時に年僅か三歳である。七年十二月、詔して源姓を賜ひ、從三位に進み、左近衛中將に轉じ、累進して正二位中納言に至り、左近衛大將を兼ね、弘安十年に再び親王となり、二品に叙せられた。正應二年九月、執權北條貞時は、親王が「北條氏を圖る」といふ事を口實とし、これを廢して京都に追ふた。爾來、京都の嵯峨に居られたが、十二月に薨斃し、嘉暦元年十月三十日に六十三歳で薨せられた。

コロンブス

事 蹟 西紀一四五六年(我が後花園天皇の康正二年(但し生年に異説あり))伊太利のジェノアに生れた。家業の織物業に従はず、十四歳の時に船員となり、地中海の諸港を航海したが、其の間に地球の圓いといふ説を信じた。三十歳の時に葡萄牙のリスボンに移住

コトコト

事 蹟 十九世紀に於ける佛蘭西バルビゾン派の風景畫家である。西紀一七九六年(我が光格天皇の寛政八年)巴里に生れて大學にも學んだが、天性畫道を好み、



着いた。コロンブスは此の島に上陸して、高く西旗を揚げ、國王と皇后に代つて占領し、サンサルバドルと命名した。「助の島」の意である。ついでキューバ、ハイチの二島を發見し、附近の島々を探検し、破れた一隻の船材を用ひてハイチ島に砦を造り、こゝに衛兵を駐め、翌一四九三年一月四日に歸航の途に就き、二月十八日に葡萄牙領アゾレス島を過ぎ、三月十五日にバロス港に着き、珍禽異木を携へて都府バルセロナに入り、國王と皇后との大歓迎を受け、西印度副王に任ぜられた。

既にしてコロンブスは、第二回の探検航海を企てたが、此の時には諸準備が容易に整ひ、大船が三隻で、サンタマリア號位のもの四隻程集り、探検隊・旅行者・貴族・僧侶・醫者・軍人・船員などの希望者も多く、西紀一四九三年九月二十五日（明應二年）にバロス港を解纜し、七週間目の十一月三日にレサター・アンチルの二

群島を發見し、ハイチ島に着いて植民に好都合の土地を開き、キューバ、ジャマイカなどを探検し、西紀一四九六年に西班牙に歸つた。西紀一四九八年（明應七年）には、皇后イサベラの援助によつて六隻の船を用意し、第三回の探検航海を試み、航路を稍々南方に取つて進み、オリノコ河口に着いて南亞米利加大陸を發見し、轉じてハイチ島に入つたが、在島の西班牙人が謀叛して、ハイチの根據地は大いに亂れ、西班牙へ歸る者が續出したが、彼等はコロンブスを護衛した。國王・皇后はフランシス・コロンブスを派遣し、コロンブスを援けさせたが、コロンブスは却つてコロンブスを捕縛し、西紀一五〇一年（後柏原天皇の文龜元年）に西班牙に護送し、且つコロンブスに不利な報告をしたが、皇后イサベラの同情によつて許された。コロンブスは不運に屈せず、東洋に往きたいといふ志を固め、更に第四回の探検航海を企て、西紀

一五〇二年五月五日（文龜二年）に西班牙を出帆したが、今回は中央アメリカを發見し、東部の一地方に到達したものと確信し、西紀一五〇四年十一月（永正元年）に歸國したが、既に皇后イサベラも歿し、自分は大病に罹つて再び立つ勇氣がなく、偉大な功績を遺して西紀一五〇六年五月二日（永正三年）ヴァリアドリッドの住居で淋しく歿した。子のチェゴは父の位を繼いで西印度副王となり、フアーナンドは歴史家となつて父の傳記を著した。

### Constantine

羅馬のコンスタンチン大帝は、西紀三〇六年（我が應神天皇の三十七年）近衛軍に擁立されて即位したが、頗る英邁で、雄略に富み、デオクレチヤウス帝の時

に東西に分裂されて居た帝國を統一し、三三三年（仁徳天皇の十一年）に一帝國となし、三三〇年に都をビザンチンに遷した。これから此の都をコンスタンチノブルと稱する。現今のスタンブルである。大帝は基督教を公認し、全國を四大部十三區及び百十六州に分ち、各知事を派遣して之を統治させ、行政の統一を圖ると共に、土木を起してコンスタンチノブルの外観を飾り、貧民救済に意を用ひた許りでなく、更に大いに外夷を討ち、一時國威を發揚することが出来たが、未だ準備が成らない中に病歿した。時に三三七年（仁徳天皇の二十五年）である。

### Constable

十九世紀初葉に於ける英國風景畫家である。西紀一七七六年（我が後桃園天皇の安永五年）にサフオータの田舎町に生れ、同郷の先輩ダンスポロの開いた風景畫を大成した人である。

父は製粉業を営んで居たが、彼は父の粉挽きを助けながら、師匠にもつかず、専ら自然を研究した。二十歳の時に美術學校にも學んだが、やはり師とするものはサフオータの自然であり、自然に對する熱愛と従順とを以て、自ら工夫して畫業を大成した。ターナーと相並んで、同時代の二大風景畫家で、彼の遺作としては倫敦ナショナル・ギャラリー所蔵の乾草車などが名高い。歿したのは一八三七年（我が仁孝天皇の天保八年）である。

### 近藤重藏

幼名は丹次郎、名を守重といひ、通稱を重藏といふ。號を正齋・昇天眞人などといひ、法名を自休院俊峯玄逸といふ。事蹟 明和八年、江戸に生れた。寛政六年、試に應じ、七年長崎奉行手附となつた。十年、露

西遊人が蝦夷に感したもので、重藏は中川勘定奉行に從ひ、高田屋嘉兵衛を案内者として、樺根島に渡つて露西亞人の建てた標柱を撤去し、之に代ふるに我が國の標柱を以てした。爾來、心を邊海防備の事に盡し、邊要分界圖を作つた。また松前を官に收め、こゝに奉行を置き、事を計らしめた。

文化四年、誼實を蒙つて小春請となつたが、既にして書物奉行に任ぜられ、楓山文庫中の文書を悉く通覽した。また家藏の書が多かつたが、林述齋・市河寬齋・龜田鵬齋・太田南畝らと往來した。文政二年、執政の沼津侯と合はず、出でて大阪弓矢奉行となつた。重藏はこれから憂鬱となり、志操を破り、六年、また小春請となつた。居を江戸下總谷に定め、子の富藏に經營させたが、富藏は隣家の農夫と事を構へ、遂に之を殺害したので、幕府は富藏を八丈島に流し、重藏を分部光寧に預けた。時に文政九年十月である。

### さ

### Sargent

十九世紀に於ける英國の風俗及び肖像畫家である。西紀一八五六年（我が孝明天皇の安政三年）に伊太利のフロレンスで生れた。父は米國人の外科醫である。カロリユス・デュランに師

事し、後に西班牙でヴェラスケスなどを研究して巴里に入り、漸く識者に認められ、倫敦に移住してロイヤルアカデミー會員となり、肖像畫家として名聲が揚つた。頗る健筆家である。歿したのは一九二五年（大正十四年）である。倫敦のテートギャラリーに藏する「カーネーション・リリー」イロロズ」と題する繪は、花畑の中で提灯をつけて居る少女達を描いた繪で、驚嘆する程美麗で、子供の求める美しい夢の世界が如實に描現されて居る。

### 西園寺公望

姓は藤原である。後一條天皇の治安元年に太政大臣になつた藤原公季の支孫に、三條權大納言公實があつたが、西園寺氏は公實の四男大宮權中納言通季に出て居る。通季の曾孫公經は、後堀河天皇の元仁元年山城國葛野郡

北山莊に堂宇を建立して西園寺殿と號したので、子孫は西園寺を氏とし、世々野篁を家業として傳へ、相繼いで明治に至り、華族に列し、侯爵を授けられたが、公望は通季から三十代目の裔である。

事蹟

二十九代目の師季に嗣いで、西園寺家の主となつた。明治元年正月、鳥羽・伏見の戦後に山陰道鎮撫總督となり、兵を率ゐて丹後に入り、進んで鳥取に至り、全道を平定した。明治九年、我が朝廷は元老院に憲法取調局を置き、中島信行・細川潤次郎・神田孝平らを委員に任命したが、國會開設の大詔が下ると、政府は其の準備のため、同十九年、公望及び伊藤博文・伊東巳代治・平田東助らを歐洲に派遣して、各國の制度・法律を調査させた。公望らの一行は、滯歐一年有餘で歸朝したが、同十七年、博文は制度取調局長官となり、憲法及び諸制度の起草に従事したので、公望もこれを援助した。

爾來、公望は政界に身を投じ、伊藤博文と提携したが、二十五年八月、第二次伊藤内閣成立の際には、文部大臣となり、臨時に外務大臣を兼ねた。三十一年一月、第三次伊藤内閣成立の際には、また文部大臣に任じた。三十三年十月に組織された第四次伊藤内閣（一名政友會内閣）の時には、臨時に入閣して總理大臣兼大藏大臣となつた。

ついで樞密院議長となつたが、偶々政友會總裁伊藤博文が樞密院議長となるに及び、公望は之に代つて政友會總裁となり、三十九年一月、自ら總理大臣となつて内閣を組織し、臨時に外務大臣・文部大臣を兼ねた。四十四年八月にはまた總理大臣となつて内閣を組織したが、偶々明治天皇の崩御と大正天皇の踐祚とがあり、公望は總理大臣として時務に當つた。大正三年（西紀一九一四年）七月、埃太利・セルビアの國交斷絶を發端として、獨・埃は露・英・

佛・伊の列強と開戦した。我が國は、日英同盟の誼と東洋平和の爲に、八月、獨逸に對して宣戦し、海陸呼應して青島を攻撃し、海軍は十月に獨逸南洋諸島を、陸軍は十一月に膠州灣を占領した。また我が艦隊は、英國艦隊と協力して、印度洋・太平洋の敵艦を全滅し、六年二月には更に地中海に出動し、聯合國の運送船・商船を保護した。

然るに大正七年（西紀一九一八年）十一月に至り、獨逸及び其の同盟國は、聯合國に降服したので、關係二十七箇國の講和全權委員は、八年一月、佛國巴黎のヴェルサイユで會議を開く事になつた。我が國からは公望・牧野伸顯・珍田捨巳・松井慶四郎・伊集院彦吉らが列席し、英・米・佛・伊と共に五大國の一として會議に與つた。而して二月以來、米國大統領ウィルソンの提唱した十四箇條を基準として會議を進め、國際聯盟を結び、歐洲諸國の國境を決定し、獨逸植

民地を處分し、平和條約を作つて其の調印を終つた。時に大正八年（西紀一九一九年）六月である。この條約の結果、我が國は膠州灣及び山東省に於ける全獨逸の利權を獲得し、舊獨逸領南洋諸島の委任統治權を獲得した。公望らの講和大使が歸朝したのは同年八月である。爾來、公望は興津の坐漁莊に隱居し、國家の元老として、殊に内閣更迭の際に天皇を輔弼した。

西行法師

さいぎやうほうし

名 號 佐藤義清といふ。號を大寶房・大本房といひ、法名を圓位、または西行ともいふ。

系 統 藤原秀郷九世の孫で左衛門尉康清の子である。

事 蹟 義清は武家に生れ、勇武で射に秀で、頗る戰略に通じ、鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉に任ぜられた。和歌を嗜み、造詣高妙であつたから、

人の學び得る所に非ず」と仰せられ、後人は斯道の權威と崇め、柿本の再誕と賞した。著書には山家集・御家河合歌合・宮河歌合などがある。

西郷隆盛

さいがうたかもり

名 號 幼字を吉之助といひ號を南洲といふ。一時、菊池源吉・大島三右衛門と號名したことがある。

系 統 鹿兒島藩士西郷吉藏の長子で、西郷從道の兄である。

事 蹟 文政十年十二月、薩州鹿兒島に生れたが、幼より豪放不羈であつた。早くから藩主島津齊彬の近侍となつて知遇を受け、後に江戸に出て諸名士と交際したが、當時、鎖港攘夷論が漸く喧しく、處士の積議が頗る盛んであつた。

而して將軍家定には子が無かつたので、將軍後嗣問題に就いて議

上皇は深く其の才を愛し、甚だ優遇された。併し義清は榮譽を悦ばず、常に遁世の志があつたので、上皇は之を諭して檢非違使になさうとされたが、義清は罪人を逮捕するのを嫌つて辭した。

偶々鳥羽の新宮が成就したので上皇は名士を召して、障子の畫に題する和歌を作らしめられた。義清は即日十首を進め、大いに御感にかなり、名朝朝日丸を賜ひ、宮中からも恩賜があり、親族一同これを賀したが、義清は獨り喜ばなかつた。

曾て憲康と鳥羽殿に朝して還り明日また朝すべき約束をなし、憲康の家を訪れると、哭聲が家の外に聞えて居た。怪んで訪ねると、昨夜憲康が急死したといふ。義清は人生の無常を感じ、出家の志が愈々堅くなり、遂に意を決して官を辭した。上皇は其の才を惜んで許されなかつた。

曾て出遊して家に歸ると、四歳になる其の女が嬉笑して出迎へ、

衣を穿いて敷れた。義清は心中で甚だ之を憫んだが、やがて孫者し、我が出家の障害をなすものは此の女であると考へ、蹴つて牀から墜したが、女は泣き慕つて去らなかつたので、義清は強く忍んで顧みず、遂に妻子を棄て、嵯峨に往つて僧となつた。時に保延六年十月で、年僅に二十三歳であつた。

義清は豪宕の才を抱き、一朝にして官を棄て、少しも顧みず、或は關東に旅し、或は西海に遊び、意の儘に嘯吟自適した。神護寺の文覺は西行を惡み、「沙門は唯々修業を勤むべし、然るに四方に周遊して吟咏に日を送る、實に沙門の賊なり、我れ西行を見れば、必ず其の頭を擊破すべし」と門徒に語つた。西行が高雄に赴くと、文覺は頗りにこれを歡待して語つた。

前言に背くので、門徒が怪んで問ふと、「西行の状貌を見るに、固より我れに敵らるゝ者に非ず、反つて我れを敵らん」と答へた。文治二年、僧業源の命を奉じ、

東大寺大佛殿建立の資を得る爲に陸奥の藤原秀衡を訪れようとし、途中鎌倉を過ぎた。時に源賴朝は西行を召見し、強ひて和歌及び弓馬の術を談せしめ、侍臣にこれを筆記させたが、海野幸氏は之を傳へて、永く射家法則とした。翌日辭して東北に赴いたので、賴朝は銀猫を遣したが、西行は偶々門前に遊戯して居る兒童に之を興へて去つた。建久元年二月十六日、河内國弘川寺で入寂したが、年七十三歳であつた。曾て櫻の歌を詠じ、「ねかはくは花の下にてわれしな

ん、そのささらぎのもち月のころ」と言つたが、其の言の襟になつたといふ。

義清は最も堪忍強く、出家後には道心が固く、時人に稱せられ、大峯二度の行者となつた。また時の名士藤原俊成・藤原定家・九條良經・僧慈圓と親交し、保元の亂後歌道の衰頹せるを歎じ、これを復興しようとした。曾て後鳥羽天皇は、「西行才思天成にして、常

論があり、識者は徳川齊昭の子一橋慶喜を世子に選した。隆盛は夙に齊彬の旨を受け、慶喜を立てようとして奔走したが、井伊直弼が徳川慶福（家茂）を紀伊家から迎立して十四代の將軍としたので、隆盛の奔走は全く失敗に終わった。

既にして水戸藩士などは京都に入り、譜紳家に遊説し、所謂密勅下賜の事があつたが、隆盛も其の謀議に與つた。然るに直弼は幕府に反對せる公卿・諸侯・志士を一掃しようとし、所謂安政五年の大獄が起つたので、隆盛は同志僧月照・平野國臣と薩州に走つた。時に齊彬は歿し、甥忠義が封を襲ぎ、其の生父久光が後見となつて政權を握り、公武合體の意見を抱いたから、隆盛らの主唱は藩廳に喜ばれなかつた。よつて日向に逃げようとし、五年十一月十六日、有明灘を夜航したが、舟中で國事を談じ、萬感胸に迫るものがあり、月下の遠舟を追手の船と思ひ、月照と擁して海に投じた。國臣及び舟

人は之を引揚げようとしたが、潮流が急で儘ならず、やつとの事で援けて見ると、隆盛は蘇生したけれども、月照は遂に絶命した。而して薩州藩は、幕府の嫌疑を慮り、隆盛を薩南大島に流したが、後に赦されて國に歸り、或は薩（西郷隆盛）



長聯合の策を講じ、或は尊王討幕の謀を企て、名聲が天下を壓するに至つた。時に諸藩士の京都に在る者が頗る多かつたが、就中、最も勢力を有したのは薩・長の二藩で、薩州は隆盛・大久保利通を代表者とし、長州は木戸孝允・高杉晋作を代表者とし、其等の言論は

能く朝旨を動かした。慶應三年、隆盛は岩倉具視・小松帶刀及び利通・孝允らの同志と謀り、また藩主久光に説き、遂に十月十四日、薩・長二藩は討幕の密勅を拜受するに至つた。時に前土佐藩主山内豐信（容堂）は討幕の計畫を聞いて大いに驚き、其の臣後藤象二郎・福岡孝弟を大阪に遣り、將軍徳川慶喜に政權奉還を説かせ、薩州藩からは帶刀が出て熱心に賛成したので、慶喜は遂に意を決し、十月十四日に大政を奉還し、將軍職を辭した。よつて新に薩・長二藩を中心とする新政府が成り、隆盛は其の參與職に補せられ、樞機に與ることになつた。

時に慶喜は二條城にあり、この新政に與らない許りでなく、内大臣を辭し、領土を返納せよとの内命さへあつたので、舊幕臣及び會津・桑名の二藩はこれを薩・長二藩の所爲と解し、新政府の行爲に不平を抱き、形勢不穩を極めたので、慶喜は閣下に事變の起るを憂

へ、急に大阪城へ退いたが、偶々江戸では薩州浪士の暴行があつたので、慶喜は意を決し、明治元年正月、會津・桑名の兵を先鋒として、討薩の表を上つて上洛したから、薩・長の兵は朝命を受けて鳥羽・伏見に迎へ撃つて破り、更に仁和寺宮嘉彰親王（後の小松宮彰仁親王）が征討大將軍となつて追討されたので、慶喜は海路から江戸に逃れた。

隆盛はこれを以て討幕の機會となし、東征大總督有栖川宮徳仁親王の參謀となり、東海・東山・北陸の三道から江戸に向つて進撃した。慶喜は上野寛永寺に退いて恭順の意を表し、家臣山岡鐵太郎を駿府に遣つて意を隆盛に傳へさせた。官軍が江戸に入らうとするに當り、勝安房は徳川氏を代表して來謝し、隆盛と會見して進撃を止めん事を請ひ、且つ江戸開城の約を結んだ。隆盛は其の間にあつて周旋したので、大總督宮は江戸攻撃を止め、江戸城及び軍艦兵器を

収め、慶喜を水戸に幽閉させられた。其の後、朝廷では徳川家齊の曾孫田安家達に宗家を嗣がせ、駿河・遠江・陸奥の内七十萬石を賜ふことになつた。

然るに舊幕臣中には、慶喜の恭順を喜ばぬ者があり、伴門五郎・本多敏三郎らは彰義隊を組織し、輪王寺宮公現法親王（後の北白川宮能久親王）を擁して上野に據つたので、隆盛は市内の紛擾を避けて解散を命じたけれども、應じなかつたので、撃つて會津に走らせた。大島圭介は下總の鴻巣に至り、轉じて宇都宮に據つたが、これも官軍に破られて會津に走つた。

時に會津藩主松平容保は、奥羽・越後の諸藩と結んで江戸幕府の恢復を志し、若松城に據つて抵抗したので、官軍は白河口・越後口から進み、包圍殆ど一箇月に亘つたが、明治元年九月、城中は食糧・彈薬に窮し、容保は城を致して降伏した。これよりさき八月二十二日、藩中の少年から成る白虎隊

三十八名は、藩主に従つて瀧澤村に至り、戸の口原に奮戦し、二十三日、萬難を排して若松城に入らうとしたが、官軍の爲に道を塞がれたので、残る十六名は飯盛山に登り、若松城の天主閣の煙煙に没するのを眺めて、城の陥るものと考へ、「主辱めらるれば臣死す」と慷慨し、跪いて城を拜し、互に刺しちがへて死んだ。飯沼貞雄・林八十治・梁瀬竹次・西川勝太郎・井深茂太郎・石田和助・伊藤俊彦・有賀織之助・津川潔美・梁瀬勝三郎・野村駒四郎・篠田義三郎・鈴木源吾・間瀬源七郎・安達藤三郎・永瀬雄次など、十六七歳の少年である。

然るに幕府の海軍副總裁であつた榎本武揚は、明治元年八月、軍艦八隻を率ゐて品川灣を脱し、途中で颶風の爲に二隻を失ひ、會津に應援しようとして松島灣に居たが、若松城が陥るに及んで、偶々來り投じた大島圭介と共に函館に航し、五稜廓に據つたので、朝廷

は黒田清隆・山田顯義を遣つて討たせられた。明治二年五月、武揚が降伏したので、海内は全く平定した。

隆盛は東征參謀としての功を成し、一旦薩州に歸り、大參事として藩政に參與したが、明治四年には再び東京に出で、正三位參議に叙任し、六年九月には陸軍大將に進み、近衛總督を兼ね、威望が天下に重かつた。これよりさき、朝鮮では國王李熙の生父大院君が實權を握り、堅く鎖國主義を執り、我が朝廷から宗重正を朝鮮に派遣し、王政復古を告げ、且つ修交を求められても應ぜず、我が國書に「大日本皇帝」・「奉勅」などの文字あるを見て、拒絶して受けなかつたので、遂に重正は復命して、「朝鮮頑冥、兵力に據るに非ざれば服し難し」といつた。其の後、吉岡弘毅及び花房義質を遣つて修交を促したが、相變らず無禮を續けたので、我が朝野には征韓論が喧しく起つた。時に隆盛は、「先づ

禮を以て望み、應ぜずんば問罪の師を起すべし」と論じ、自ら渡鮮して事を辨理しようとした。副島種臣・後藤象二郎・板垣退助・江藤新平らが之に賛成し、朝議は殆ど之に決したが、偶々岩倉具視・大久保利通・木戸孝允・伊藤博文らが海外から歸朝し、内治の急を力説して、征韓の非を論じたので、征韓論は破れ、隆盛・種臣・象二郎・退助・新平らは連袂辭職し、茲に輿論は自ら二派に分れた。時に明治六年十月である。

隆盛は直ちに鹿兒島に歸つたが、桐野利秋・篠原國幹も之に従つたので、共に私學校を建て、子弟に文武の道を講じた。隆盛の名望を慕つて、來り學者者が甚だ多く、何れも政府に對して不平を抱いて居た。明治七年二月、新平が佐賀で亂を起した時にも、九年十月、熊本的神風連の騒動にも、私學校徒が應じようとしたので、隆盛はこれをおさへて事なきを得た。政府は此の形勢を察して、十年一月、

鹿兒島にある彈藥を大阪に移さうとしたので、私學校徒は急に立つて陸軍製彈廠・海軍機銃所を占領した。二月、警視官中原尚雄以下二十一名が歸郷したが、私學校徒はこれを以て隆盛を刺さんが爲に來た刺客と見做し、遂に兵を擧げた。時に隆盛は大隅山に狩獵して



(圖地要役南西)

居たが、變を聞いて歸つたけれど、勢を制することが出来ず、遂に子弟の擁する所となり、新政厚徳の機を諷へし、君側の奸を除くを名とし、兵一萬五千を率ゐ、二月十五日鹿兒島を發し、進んで館本城を圍んだが、遠藤司令官谷千

城は固守して降らなかつた。朝廷は二月十九日、隆盛・利秋・國幹らの官爵を削り、有栖川宮熾仁親王を征討總督とし、陸軍中將山縣有朋・海軍中將河村純義を參軍とし、諸軍を發して之を討たせられた。親王は福岡に總督府を置いて指揮されたが、三月、賊

得ず、殊に田原坂では激戦が十七日に亘り、抜刀隊が入り亂れて互に勝敗があり、四千餘人の死傷者を出すに至つた。また熊本城との聯絡が通ぜず、城兵は籠城五旬に及び、兵糧・彈藥が殆ど盡き、漸く危論が迫つたが、四月、陸軍中

將黒田清隆の別軍は長崎から統して八代に上陸し、敵の背後を突いて熊本城に進んだが、偶々奥保繁は手兵を率ゐて城を出て、清隆の軍と聯絡を取り、城兵は大いに勢を得たので、賊軍は圍を解いて南走した。

官軍は四月十七日、總督府を館本城に移し、進んで人吉・佐土原・延岡の賊軍を掃蕩した。隆盛は利秋と共に鹿兒島の城山に據つたが、九月、官軍が大舉して城山を攻めたので、隆盛は利あらず、遂に五十一歳で自害した。時に明治十年九月二十四日である。世にこれを西南の役といふ。隆盛は剛毅で識量があり、明治維新の大業を翼賛し、一世の重望を荷つたが、子弟の爲に誤られて賊名を貽したのは惜むべきである。明治二十二年二月十一日、憲法發布の日に當り、朝廷は維新の勳功を思ひ、特赦して賊名を除き、正三位を追贈された。世に利通・孝允と共に維新の三傑といふ。

さいがうつぐみち  
西郷從道

系統

西郷隆盛の弟である

事蹟 兄隆盛と共に國事に盡瘁した。明治四年十一月、琉球の漂民五十餘名が臺灣の生蕃に殺され、六年三月、備中小田縣の漂民四名もまた殺された。そこで外務卿副島種臣は修好條約の批准交換を兼ね、生蕃の暴舉を買した。然るに清國は之を化外の民として我が要求を拒絶したので、翌七年政府は從道(海軍中將)を都督に任じ、陸軍少將谷干城・海軍少將赤松則良を參軍とし、日進・孟春・明光・三邦の四艦に兵三千六百餘名を分乘させ、五月、長崎を發して恒春に上陸し、兵を進めて討伐した。然るに生蕃の諸酋は競ひ降り、兇猛であつた牡丹社も遂に平定した。

明治十一年には、兵部卿兼文部卿となり、十二年から十三年まで

は兵部卿となり、十四年から十八年までは農商務卿となり、十八年十二月に組織された伊藤内閣の時には海軍大臣・農商務大臣となり、二十一年四月に組織された黒田内閣の時には海軍大臣となり、二十二年十二月に組織された山縣内閣の時には海軍大臣・内務大臣とな

た。功によつて伯爵を贈はり、元帥府に列し、大勳位に叙せられたが、明治三十五年七月、六十歳で歿した。



り、二十四年五月に組織された松方内閣の時には内務大臣となり、二十五年八月に組織された伊藤内閣の時には海軍大臣兼陸軍大臣となり、二十九年九月に組織された松方内閣の時には海軍大臣となり、三十一年に組織された伊藤内閣・憲政黨内閣・山縣内閣の時には海軍大臣及び内務大臣になつ

さいちよう  
最澄

名號

俗名を廣野といひ、隆號を傳教大師といふ。

系統 姓は三津氏である。其の先祖は漢の獻帝の苗裔で、應神天皇の時に歸化したものである。父を三津淨足(百技ともいふ)といひ、内外の學問に稱通して居た。最澄は本邦天臺宗の開祖である。

事蹟 近江國滋賀郡の人で稱徳天皇の神護景雲元年八月に生れた。幼にして近江の國師行表に學び、十八歳の時に得度し、二十歳の時に具足戒を受けた。後に奈良に遊び、僧鑑眞が唐から持つて來た三大部(法華支義・法華支句・摩訶止觀)を手に入れ、晝夜これ

を誦讀し、天臺の釋義の精妙に心服し、此の宗を弘通しようとして決心し、桓武天皇の延暦七年、比叡山に根本中堂を建立して比叡山寺と號したが、これが延暦寺の起源である。同十三年に供養會を修した



時には、桓武天皇の行幸を仰いだり、後に勅額を賜ひ、同十六年に内供奉十禪に補し、近江國の正税を分つて寺費に賜はつた。

當時の人々は、最澄の天臺の妙義を聞いて、感じない者はなかつたが、桓武天皇は深く感動され、

延暦二十一年、勅して入唐を命じ、天臺の奥義を探らせられた。最澄は高弟義眞を従へ、同二十三年、空海と共に遣唐大使高野麻呂に従つて入唐し、天臺山の國清寺に入り、智者大師七世の法孫道遠和尚に従つて一宗の支旨及び菩薩戒を受け、また佛觀寺の行滿和尚に就いて法要經書を學び、更に越府の龍興寺に移り、順曉阿闍梨に従つて眞言三部の大法輪經道具などを授かり、轉じて唐興縣に赴き、愍然禪師に就いて北宗一派の禪法を修めた。

斯くて延暦二十四年六月に歸朝し、七月に入京して、其の持ち歸つた經書二百三十部に遺具・圖標などを添へて朝廷に奉獻した。桓武天皇は大いに喜ばれ、勅して奈良の高僧八人の爲に、天臺の宗義を講せしめられた。また高雄山寺に法壇を設けて、遺證・修圓らに灌頂を受けたが、これが本邦灌頂の始めである。最澄は更に比叡山寺の規模を擴張し、同二

十五年に上表して、従来の諸宗に天臺宗（一名法華宗）を加へ、年の度者を置き、奈良の戒壇の外に、別に比叡山に大乘の戒壇を設けることを請うたが、併し奈良諸大寺の高僧が妨げたので、容易に行はれなかつた。桓武天皇の崩後平城・嵯峨兩天皇の歸朝が益々遅く、弘仁四年、始めて宮中で後七日の密法を修した。同五年には宮中で法門を講じ、同六年には奈良で法門を講じ、それが畢つてから東國を巡化し、熱心に布教したが、同十三年六月四日、比叡山の中道院で入寂した。時に年五十六歳である。

支那の天臺宗は、天臺山の智者大師の大成したもので、法華經に基づいて教を立てたものである。故に法華宗ともいふ。最澄が比叡山で創立した天臺は、智者大師の天臺宗に加味するに、金剛智・不空の眞言宗と、達磨の禪宗とを以てしたもので、支那の天臺宗とは稍々趣を異にする。最澄は其の生涯の徳行が内外に光揚して、修證の教法を以て道義を千歳に留めた功績も尠少でない。或は平安遷都に盡力したり、或は茶種を將來して物産を興起したり、或は人里離れた信濃・美濃の境に廣濟廣極院を建て、譯經の便を開いたり、或は多くの子弟を教養して、學徳の高い僧侶の輩出を圖つたりした。最澄の入寂後、朝廷は其の生前の請願を悉く聽許されたが、清和天皇の貞觀八年七月十二日、勅して傳教大師の號を贈られた。蓋し我が國に於ける大師號の始めである。最澄の著書は頗る多いが、註法華經十二卷・註金光明經五卷・註仁王經三卷・註無量義經三卷・守護國界章十卷・内證佛法相承血脉譜などは、其の主なものである。

さいとうたつおき 齋藤 龍興

幼字を喜太郎といひ

さいとうべつたう 齋藤 別當

齋藤實盛といひ、長

井齋藤別當と稱する。

事蹟 世々越前に住んだ。實盛の時に武藏國の長井に移り、源爲義及び義朝に仕へ、保元の亂には義朝に従つて白河殿に戦ひ、平治の亂には待賢門に戦つて功があつた。義朝の敗死するに及び、平宗盛に仕へたが、富士川の戦の時には、關東將士の騎射精強で當り難いのを稱したので、平軍は之を聞いて懼れ、遂に戦はないで走るに至つた。平維盛に従つて源義仲を北陸に討つに際し、宗盛に請うて、「臣必ず死を此の役に致し、以て前日の恥をそゝがんと欲す、唯越前は臣の郷國にして親姻のあるあり、古より曰く、錦を衣て郷に歸ると、顯はくば錦直垂を着て以て身後の榮と爲す事を得ん」といつた。宗盛は之を憐んで許したが、既にして藤原に戦つに及び、鬘で鬘髪を染めて出陣し、衆の敗走するをも心に掛けず、獨り止つて奮戦し、手塚光盛と相搏つて殺された。時に七十三歳である。

さいみやうじにふだうときより 最明寺入道時頼

「ほうでうときより・北條時頼」の項を参照されたい

さいめいてんのう 齊明 天皇

御名は寶皇女、天璽財重日足姫天皇とも稱する。即位して第三十五代皇極天皇となられたが、重祚して第三十五代齊明天皇となられた。

敏達天皇の曾孫である。御父は茅渚王で、御母は吉備女王である。

孝徳天皇の崩後、飛鳥板蓋宮で再び即位された。中大兄皇子が皇太子となり、政を輔けられた。齊明天皇は越の國司阿倍比羅夫（武渚川別命の後）を遣つて越蝦夷を討たせられた。比羅夫は舟師百八十艘を率ゐて進發し、先

通稱を右兵衛大夫と言つた。

事蹟 父に嗣ぎ國政を執つた。併し暗弱であつたから、小牧道家・野木治左衛門が輔佐した。後に此の二名が威權を争ひ、互に忿闘して死んでから、國勢は日々に衰へた。龍興には妹があり、馬場殿と稱したが、織田信長はこれを納れて妾にしよつとした。龍興が聽かなかつたので、信長は之を憤り、互に兵を構ふるに至つた。永祿七年八月、信長は瑞龍寺を襲つて焼き、稻葉山城を圍んだ。龍興は拒ぐことが出来ず、和を請うて關城に逃れ、ついで越前に走つた。天正元年八月、梁瀬に敗れて潰走し、朝倉義景と共に力戰して斃れた。時に年二十二歳である。

さいみやうじにふだうときより 最明寺入道時頼

「ほうでうときより・北條時頼」の項を参照されたい

さいめいてんのう 齊明 天皇

御名は寶皇女、天璽財重日足姫天皇とも稱する。即位して第三十五代皇極天皇となられたが、重祚して第三十五代齊明天皇となられた。

敏達天皇の曾孫である。御父は茅渚王で、御母は吉備女王である。

孝徳天皇の崩後、飛鳥板蓋宮で再び即位された。中大兄皇子が皇太子となり、政を輔けられた。齊明天皇は越の國司阿倍比羅夫（武渚川別命の後）を遣つて越蝦夷を討たせられた。比羅夫は舟師百八十艘を率ゐて進發し、先

さかゐただきよ 酒井 忠清

参照されたい。

上野國厩橋城主酒井忠行の子である。

事蹟 寛永十四年正月、父の封を襲ぎ、厩橋城十萬石を領し、原封の内二萬五千石を弟忠能に分與した。十五年十一月、叙爵して河内守と稱し、十六年、徳川家光の女千代姫が尾張家へ入興の際には、未だ十六歳の童形で貝桶の役を勤めた。十八年九月、從四位に陞り、二十年七月、侍從に進み、慶安四年十月、家綱の將軍宣下の副使を命ぜられて少將に進み、雅樂頭と改め、承應二年六月、大事に連署すべき靈命を受け、寛文三年二月、三萬石の加封があり、六年三月、連署を免ぜられて大老と稱し、延寶八年正月、更に二萬石を加へ、凡て十五萬石を領するに至つた。

延寶八年五月、將軍家綱が歿して、未だ嗣子が定まらなかつた。時に忠清は、京都から正仁親王を迎へて將軍にしようとする意志があつた。蓋し大奥の女房の中に懐

終したとの風聞があつたので、一旦支族から將軍を立てた後に、若し公子が生れたならば、差誤を生ずるの恐があつたから、一時、便宜の處置として正仁親王を立て、公子誕生の場合に、京都に還さうとする策謀であつたけれども、老中堀田正俊を首め、反對者が多かつたので、遂に行はれなかつた。斯くて信林綱吉が入つて大統を嗣ぐに及び、延寶八年十二月、大老職を辭し、翌天和元年二月に致仕した。爾來、快々として樂まず、同年五月十九日、五十八歳で歿した。

忠清は能く祖先の節度を守り、諸家の舊格を尋ね、不遇の者を登庸した。板倉重規・戸田忠昌・甲斐庄正親・北條氏平・水野忠増らは、忠清に拔擢された適任者である。而して家光を輔佐するに際しては、寡言敦整、威儀嚴肅であつたから、土井利勝・青山忠俊の徒も、忠清が出る毎に手を束ね、容を改めたといふ。



### さくまつとむ 佐久間 勉

系 統 佐久間可盛の三子である。

事 蹟 明治十二年、福井縣三方郡八村北前川に生れた。家は



世々村の前川神社に奉仕して居たが、勉は小學時代から身體が強健でなかつたけれども、成長と共に運動で鍛練し、軍人になるだけの立派な體格となつた。學業も優等ではなかつたが、熱心に勉強した爲に、進級と共に進歩した。いつも濃厚で、無口の方で、禮儀が正しく、且つ意志が強く、何となく一

種の品格を備へて居た。小學校を終へてから、福井縣立小濱中學校に入學し、後に海軍兵學校を経て、三十四年十二月、二十三歳の時に海軍少尉候補生を命ぜられ、海軍軍人になつた。明治三十七八年職役には、旅順口外の海戦及び日本海海戦にも奮闘し、三十九年九月、海軍大尉に昇進した。

明治四十三年四月、吳鎮守府所屬の第一潜水艇隊は、母艦豊橋丸・親海丸と共に、別府灣まで巡航する事になつた。勉を艇長とする第六潜水艇は、小型な爲に、他艇と同一行動を取る事が出来ないから、唯一隻母艦豊山丸に率ゐられて廣島沖に出で、十一日から十四日に亘つて、諸種の演習を行つて好成績を収めた。十四日の午後は岩國に上陸して、乗組員の慰勞會を催はし、吉香園の櫻花を眺めた。

ルプ(通風筒の底部にあつて外部から水の進入するのを遮断する小

佐久間勉の遺言  
陛下、般に沈み部下  
の救ふ、減り申下  
るし、せしが般  
向死をせんが  
皆さうし、申下  
り、快著るゝり、  
を、我し、  
固あ、為、  
さい閉鎖)を動かす鎖が切れたので、急いで手で締めたが、もう

其の時は既に遅く、海水は艇の後部に満ちて、艇は二十五度の傾斜をなして沈んで往つた。勉は直ちに應急手段を取らせ、手備のポンプで排水に努めたが、どうしても浮き上らず、また悪瓦斯が發生して、呼吸は次第に困難になり、且つ電燈が消えて眞闇になつた。機寸や煙燭などの使用は、艇内では危険である。勉は既に覺悟を決め、海水を透して司令塔上部の覗孔から来る微光の下で、靜かに手帳に遺言を認め、乗組員十四名と共に、職務の爲に死した。

第六潜水艇に故障が起つたといふ無線電信が、母艦豊山丸から發せられたので、下關から豊橋丸・親海丸などが急航し、數十隻の水電燈・水蒸氣船と共に、新海沖で捕海に従事したが、十六日午後四時頃、伊吹艦載水雷艇の掃海索に掛つたので、潜水夫を沈めて檢べ、直ちに起重機を使つて艇の引揚げを始め、十七日の午前七時頃に艇を水平にし、やがて淺瀬に曳き、排水に着手し、正午頃に浮び上る程度になり、愈々死體を引揚げたが、十四名は最後まで自分の受持場所を離れず、職務の爲に盡して居る事が分つた。

其の將來の研究の爲に、沈没の原因及び沈没後の状況を詳記し、それに對する自分の所感を附加し、次に部下の遺族を思ひやつて、それを困窮せしめない事を獻願し、更に上官・先輩・恩師の名を連ねて告別の言葉を遺し、最後に瓦斯に酔つた事を記して、時刻は十二時四十分と書いて筆を絶つて居る。人事を盡して天命を待つた壯烈な最後が偲ばれる。

### さくまもりまさ 佐久間 盛政

名 號 幼名を理助といひ、

支養允と稱し、法名を美俊英伯といふ。世に夜叉玄蕃と稱せられたが、これは驍勇無雙を目したものである。

系 統 佐久間盛次の長子

で、母は柴田勝家の妹である。事 蹟 織田信長に仕へ、後に加賀守護となつて、一向宗の門徒を征し、連戦して勝つた。天正

八年、伯父信盛が罪を信長に得るに及び、盛政も憚つて出でなかつた。既にして信長は盛政を教し、柴田勝家に仕へしめたので、勝家は盛政を尾山城の城主とした。十年六月、石動山衆及び温井實正らが兵を起すに際し、盛政は兵二千五百餘を率ひ、金澤を發して能登に入り、高島に陣して前田利家を授けた。また衆徒が越後の上杉景勝の援軍と共に荒山に城くを聞き、兵を發して夜襲し、實正らの首級を獲て利家に送つた。十一年、勝家が豊臣秀吉と隙を生ずるに及び、盛政は勝家の先鋒となり、兵一萬五千に將として木本に到り、二月二十日、大岩寨の守將中川清秀を攻め、奮戦して之を斃した。時に秀吉は美濃の岐阜に在り、敗報を得て賤ヶ嶽に急行し、攻撃が頗る激しかった。

是勝政の引足になつたのを見て、鐵砲組を遣つて攻め立てたので、勝政の軍は總崩れの體になつた。時に秀吉の家來の關島正則・加藤清正・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・精屋武則・片桐且元らは、槍を提げて突進したが、これを勝ヶ嶽の七本槍といふ。此の時、清正と山路正國と組打した事は人口に膾炙して居る。盛政は敗れて尾山城に歸らうとし、山路を行く途中で捕へられ、五月、六條河原で斬られた。時に三十歳である。

### さくらもちゆうをん 櫻井 忠 温

事 蹟 明治十二年、愛媛縣松山に生れた。文筆にすぐれ、明治三十七八年戦役には陸軍中尉を以て滿洲に出征し、後に有名な戦争小説「肉弾」・「銃後」を出して名聲を揚げた。其の他にも著作が多い。現に豫備陸軍少將である。

さくらまちてんのう

櫻町天皇

名 御名を昭仁といふ。

系 中御門天皇の第一皇子で、御母は近衛家熙の女新中門院藤原尚子である。第百十五代の天皇である。

事 享保五年正月一日に降誕され、同十三年六月十一日に中御門天皇の皇太子となり、二十三年三月二十一日に受禪、同年十一月三日に即位された。時に御年十六歳である。天皇は在位十二年、延享四年五月に櫻町殿に行幸し、同月二日桃園天皇に譲位し、太上天皇の尊號を稱せられた。寛延三年四月二十三日、聖壽三十一歳で崩せられた。山城國京都市下京區今熊野町月輪陵に葬る。

ささきげんざう

佐々木源三

「みなものよしひら・源義平」の項を参照されたい。

ささきたかつな

佐々木高綱

名 通稱を四郎といふ。

系 佐々木三郎秀義の第四子で、佐々木盛綱の弟である。

事 資性驍健で、且つ膽略があつた。鎮に従つて京都の吉田に住んだが、治承四年五月、源頼朝が以仁王の令旨を奉じて兵を擧げたので、伊豆に住つて之に屬した。石橋山の戦に敗れ、頼朝は杉山に逃れたが、道路が險峻で進むことが出来なかつた。偶々大庭景親が急迫したので、高綱は馬首を廻らして防戦し、危く頼朝を脱走させることが出来た。壽永二年、頼朝は弟範頼・義経を遣つて源義仲を討たせたので、高綱も軍に従つた。時に頼朝は生味・磨墨の二名馬を有し、生味は最も勝れて居た。範頼及び磨墨

た。先に景季は磨墨を與へられて得意で、高丘に上つて衆に示した。然るに高綱が生味を得たのを見て怒り、路に要して高綱を刺さうとした。時に高綱は温言を以て之を慰めたので、景季は怒りが解けて、相共に西征し、義経に従つて宇治に向つた。時に義仲の將根井行親らは、宇治の橋板を撤し、水中に綱を張つて拒いだので、東軍は渡る事が出来なかつた。此の時、景季は眞先に流れに馬を入れようとしたが、高綱に馬の腹帯の延びて居る事を注意され、左右の綱を踏返して縮めて居る中に、高綱が馳せ抜いて河へ入つたので、景季は水底に大綱を張つてある事を注意したので、高綱は太刀を抜いて、馬の足にかゝる大綱を切りながら進み、向ふ岸に上り、大智院をあげて、宇多天皇九代の後胤、近江の國の住人佐々木三郎秀義が四男、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや」と名乗つた。後に功を重ねて、備前・安藝な

ど七國の守護となり。左衛門尉に任じた。始め頼朝が杉山に逃れた時、高綱に謂つて曰く、「我々今日死を免れしは汝の力による。他日天下に號令するを得ば、必ず其の半を割きて功に報いん」と。また義仲を討つに及んで、「事平ぎなば、必ず前言を踐むべし」といつた。乃ち高綱は賞の薄いのを怨み、薙髮して高野山に入つたが、歿年は明瞭でない。

乃ち散兵を集めて北白川に屯し、足利義晴を奉じ、神樂岡を経て坂本の常在寺に入り、永祿元年、將軍足利義輝を奉じて如意嶽に軍した。松永久秀はこれを拒み、連戦して勝敗が決しなかつたので、やがて和を講じ、義輝もまた京都に歸つた。五年、家を義朝に讓つて剃髮し、幕府の相伴衆となつた。十一年八月、織田信長は大學して近江に入り、義賢を觀音寺城に圍み、遂に之を陥れたので、義賢父子は逃れて甲賀山に匿れた。後に再擧を謀つて成らず、元龜元年、罪を謝して信長に降り、慶長三年三月、七十八歳で歿した。

ささきよししかた

佐々木義賢

名 承頼と號し、拔開齋と稱する。法名を梅心院といふ。

系 佐々木定頼の子である。

事 世々近江國を領した。天文八年、従五位左京大夫となつた。十八年に細川晴元を救はうとし、兵を率ゐて京都に入り、東九條に次したが、晴元が出奔するに及び、義賢の先鋒は潰えた。

義賢は馬術を好み、齋藤好玄に學んで一派を開き、更に中村孫兵衛義佐に傳へた。これを佐々木流といひ、大西吉久は最も傑出し、末流は諸國にひろまつた。

さゝなりまさ

佐々成政

名 内蔵助と稱し、法名を道閑といふ。

系 佐々盛政の子である。

事 世々織田氏に仕へたが、盛政も早くから信長に従つて軍功があり、陸奥守に任ぜられた。天正三年八月、越中半國に封せられて十萬石を食み、府中城に居したが、九年三月、越中を悉く平定して其の守護に任ぜられ、富山城に移つた。本能寺の変に際しては、柴田勝家と謀つて明智光秀を討たうとしたが、鉄せられたのを聞いて清洲に赴き、織田秀信に謁して還つた。十二年三月、豊臣秀吉が織田信雄と難を構へた時には、成政は兵を富山に起して、信雄に應じ、邑を侵略しようとした。時に越後の上杉氏も、加賀の前田氏も、共に秀吉の黨であつたから、成政は一策を案じ、其の女を前田利家の子利政に配する事を約し、利家の稍々職備を殺にするに乘じ、頼りに

その采色を侵し、連戦して未だ決しなかつたが、其の中に信雄の編弱で共に謀るに足らざるを知り、徳川家康に與して中原に鹿を争はうと決し、利家と戦ふ事をやめて病と稱し、密に數人を従へ、深雪を侵し、さらさら越を踰へ、問道を馳驅して濱松に至り、十二月に家康に會見し、西上して秀吉を討つ策を勧めたが、家康はこれを承諾しなかつたので、成政は更に清洲に赴き、信雄に再擧を勧めたけれども、信雄も聽かなかつたので、望を失つて歸國した。

天正十三年、秀吉は雪解けをまぢ、師十萬に將として成政を討ち、利家を先鋒として越中に向つた。成政は俱利伽羅峠に據り、三十餘處に城寨を列ねて防戦した。秀吉は石動山に登り、兵を分つて攻伐し、先鋒は既に富山城に迫つた。九月、成政は奮戦七日の後に降伏し、薙髮して道閑と號したので、秀吉はこれを京都に置き、引いて諷友とした。



天正十五年六月、秀吉は九州を征服するに及び、成政は肥後に封ぜられ、從四位下陸奥守侍從に任じ、熊本城に居した。間もなく成政は令を諸豪に下し、民田を勾檢したが、其の爲に封内は騷擾し、土寇が大いに起り、諸豪もまた之を援助した。成政は兵を出して征討したけれども、容易に鎮靜するに至らず、秀吉が遠西の諸大名に命じ、成政を援けしむるに及び、僅に之を平げる事が出来た。よつて秀吉は成政を賣めたが、成政は大いに恐懼し、十六年正月、僧惠瓊と共に大阪に赴いて陳謝した。併し秀吉は聽かず、これを尾ヶ崎に拘留し、閏五月に人を遣つて、「汝苛酷を以て民を御し、民人離叛し、軍旅起る、是れ大罪なり」と告げしめ、死を賜はつたが、時に年五十歳であつた。

貞純親王

系統 清和天皇の第六皇子である。  
事蹟 清和天皇は貞固・貞元・貞純・貞數・貞眞らの諸親王の子孫及び長瀬・長猷に源氏の姓を賜ひ、臣籍に入れられたが、併し貞純親王の子孫のみが繁榮し、他は顯はれなかつた。貞純親王の長子源經基は、之を六孫王といひ、承平・天慶の間に軍功があり、鎮守府將軍に任ぜられ、村上天皇の天徳五年に姓源朝臣を賜はつた。經基の子に滿仲・滿政・滿季・滿快・滿重があり、滿仲の子に頼光・頼親・頼信・頼平・頼賢があり、頼信の子に頼義・頼清があり、頼義の子に義家・義朝・義光があり、特に義家は前九年・後三年の役に功があり、義家から爲義・義朝を経て頼朝に至り、始めて鎌倉に幕府を開いた。源氏には數流があるが、清和天皇から出に清和源氏が最も名高く、清和源氏では貞純親王の子孫が最も繁榮し、諸國にひろがつた。

貞成親王

名號 法諱を道欽といひ、諡を後崇光院といふ。  
系統 崇光院(興仁親王)の御孫である。有栖川榮仁親王の第二子で、御母は權中納言阿野實治の女大納言局である。後花園天皇の御父である。  
事蹟 文中元年三月に誕生され、應永八年に加冠された。兄の治仁王が薨せられたので、其の後嗣となられたが、御家は衰微して振はず、親王宣下さへなかつた。稱光天皇の應永三十年四月、後小松上皇は之を懐み、貞成王を宣して親王とされた。時に御年五十四歳である。  
偶々稱光天皇が病に罹られた。世人は「天皇憂駕の後には、貞成親王、立ち給はん」と言つた。天皇は貞成親王を惡み、これを聞いて喜ばず、上皇に上書して位を避けてよ

佐藤信

系統 奥州信夫の莊司佐藤元治の子で、佐藤忠信の兄である。

是は眞理千郎清綱の女である。據つて居た時、源頼朝は以仁王の令旨を受けて兵を擧げた。義經は伊豆に赴いて頼朝を授けようとしたが、秀衡は天下の形勢を觀望して、義經を留めて遣らなかつた。義經は情として忍びず、潛に平泉を逃れたので、秀衡は之を知り、勇士佐藤藤信・佐藤忠信兄弟を隨從させ、義經の身邊を保護してやつた。

繼信は此の時から義經に仕へ、屢々軍功があり、弟の佐藤忠信及び鎌田盛政・鎌田光政と共に、義經麾下の四天王と稱せられたが、後に義經の奏請によつて兵衛尉となつた。屋島の戦に於て、平教經は勁弓長矢を持ち、頼りに義經を狙つたので、麾下の勇士で義經の馬前を蔽ひ、教經に射殺された者が十餘騎に及んだ。繼信も義經をかばはうとして教經の矢に當り、重傷を負つて歿した。時に二十八歳である。義經は悲歎し、僧に命

じて厚く弁禮林中に葬らせ、愛馬を飾つて碑とした。

佐藤信淵

名號 名を信淵といひ、字を元海といひ、推園・融齋・松庵などの號がある。通稱を百祐といひ、法名を眞武院堅剛德祐居士といふ。  
系統 姓は藤原氏で、其の先は佐藤繼信に出て居る。父を佐藤信季といひ、母は蒲生氏である。  
事蹟 明和六年六月、出羽國雄勝郡郡山村に生れた。父信季は醫者であつたが、信淵は十三歳の時に、父に従つて蝦夷に遊んだ。父の歿後江戸に出で、蘭學を宇田川玄隨・大槻玄澤(野水)に學び、經濟を井上藩に學び、また天文・地理・博物及び曆算・測量の術をも精究した。因に玄隨は津山藩醫で、桂川甫周に就いて蘭學を修め、内科を専攻し、寛政四年に「西説

内科提要」を譯し、寛政九年、四十三歳で歿した人である。後に信淵は時勢に感じ、江戸で醫を業とし、外科に長じ、殊に癩病を治するに效を得た。寛政初年に津山侯・遠州侯などに召されて富國策を講じ、寛政十年、母の歿後、諸國を周遊して經世、濟民の法を説いた。文化年間、外交多事の秋に當り、日夜兵學軍事を講じ、鐵砲寫理論・三銃用法論を著し、また自走火船を發明した。蓋し我國で西洋砲術を講究した者は信淵を最初とする。また航海貿易の大利を説き、海防外交の大計を論じて一世の耳目を驚かしたが、幕府の嫌疑する所となり、上總に退去した。

文化十三年に江戸に出で、吉川神道談所の學頭となつたが、師家の爲に罪を蒙り、江戸を放逐され、後に深川に住み、天保三年にまた江戸追放の刑に處せられた。其の後、諸藩に招聘されて領内を經緯したが、弘化三年、赦されて江戸

佐藤信季

「さとうのぶひろ・佐藤信淵」の項を参照されたい。  
さのげんざるもんつねよ  
佐野源左衛門常世

事蹟 謡曲「鉢の木」の主人公で、登に屈せず、鎌倉武士の面目を保った。

北條時頼が、執権職を辭めてから、併となつて諸國を巡視し、地方の風俗・人情を調べて居る中、上野國佐野の里で、雪の夜に一夜の宿を借つた。家の主人公が、大切な鉢植の木を伐つて薪にし、親切にもてなして呉れたので、身分を尋ねると、佐野源左衛門常世といふ武士で、今は斯様に零落して居るが、いざ鎌倉に何か事が起つたといふ場合には、第一番に馳せ参するつもりである」と、忠誠を顔に現して物語つたので、其の夜は其の儘に別れ、後に鎌倉に歸つて不意に諸國の兵士を召集して見ると、言葉に違はず、常世が第一番に馳せ参じたので、厚く恩賞を與へたといふ筋である。

佐野常世なる人物は、固より假作の人物であつて、佐野氏（藤原秀郷の後裔である）には斯様な人物はない。

さのつねたみ 佐野常民

名 佐賀藩士である。明治十年、西南の役が起り、戦闘が激甚を極め、官軍も賊軍も死傷者が甚だ多かつた。常民はこれを憐れみ、大船「博愛社」を組織し、五月三日、總督府の許可を得て病院を戦地に設け、官兵・賊徒の別なく、これを收容して傷病を治療したが、これが日本赤十字社の起源で、明治十九年に至り、瑞西の萬國赤十字條約に加盟するに至つた。

Francis-Xavier ザビエルは、バスターであつて、巴里大學で哲學を講じて居たが、西紀一五三四年（天文三年）に、イダナチオリヨラの同志六人と耶蘇會を組織し、羅馬公教會復興の爲に努力する様になつた。既にして羅馬法王及び葡萄牙王ジョアン三世に選ばれて、印度布教に従事する様になり、西紀一五四一年四月七日（天文十年）に、葡萄牙の東洋派遣艦隊に便乗してリスボンを出發し、翌年五月六日に印度のゴアに到着し、更にマラッカに渡つて布教して居たが、西紀一五四八年（天文十七年）にマラッカで日本（薩摩）人彌次郎と邂逅し、日本へ渡つて基督教を弘めようと決心し、共に印度に往つた。

ザビエルは日本渡航の準備として、彌次郎をゴアの神學校に入學させ、數箇月間基督教の陶冶を加へ、遂に洗禮を受けさせた。これが本邦最初の基督教徒である。ザビエルは彌次郎以下數人の宣教師を従へ、印度のコチンからマラッカを経て鹿兒島に來たが、これが西紀一五四九年八月十五日（天文十一年七月三日）である。薩摩の領主島津貴久は、印度から異人の來た事を知り、彌次郎を伊集院の居城に召して、歐羅巴及び印度の事情を聴取した。ザビエルは島津氏の許可を得て、鹿兒島で基督教を弘めた。併し佛僧の反對があり、遂に島津氏が布教を禁ずるに至つたので、ザビエルは信徒の指導を彌次郎に依頼し、自分は海路から平戸に入り、松浦隆信の許可を得て布教に従ひ、更に山口を経て京都に入つたが、これが西紀一五五〇年（天文十九年）の春である。ザビエルが京都に入つたのは、朝廷及び足利將軍の許可を得て、

猿田彦

名 猿田彦大神ともいふ。事蹟 天孫瓊瓊杵尊が天兒屋根命・太玉命・石凝姥命・玉祖命・天細女命らを供奉とし、天忍日命・天津久米命に兵を授けて護衛とし、豊葦原の瑞穗國に降臨しようとした時、國神猿田彦は先導者となり、天孫を導いて筑紫の日向の高千穂峯に降りついた。後世、道案内の神として祭る。

三條實美

系 統 姓は藤原である。九條右大臣師輔の十男閑院太政大臣公季から出て居る。即ち公季から五代目の實行は、従一位太政大臣に昇り、出家して八條入道相國と號したが、其の第が三條の北に在

つたから、また三條とも號し、子孫はそれを氏とした。實行から二十七日目を三條實美といひ、實美の子は即ち實美である。事蹟 天保八年二月八日、京都で生れた。嘉永二年、從五位下に叙し、安政元年、從五位上侍從に進み、禁色昇殿を許された。文久二年、從三位權中納言に異進したが、此の年、朝廷では幕府が攘夷を實行しないのを責めようとされたので、十一月、實美は其の任を帯びて勅使となり、姉小路公知と共に江戸に下り、將軍家茂の上洛と攘夷の決行とを促した。

當時、攘夷の張本である長州藩のものは、實美らと密に謀を通じて朝廷を動かす、大和の神武天皇の御陵に孝明天皇の行幸を仰いで攘夷の親征を議し、其の機に乗じて幕府を討たうと企てた。然るに京都守護職松平容保（會津藩主）は、薩州藩と謀つて朝議を一變させたので、文久三年八月、朝廷では大和行幸を中止し、長州藩の皇

日本全國に基督教を弘めようと思へた爲である。ところが京都に來て見ると、戰國時代の事として、朝廷の式微は甚だしく、足利將軍の命令などは、少しも行はれなかつたので、ザビエルは此の狀勢に愛想を盡かし、都大路で數回説教を試みたのみで、僅かに二週間滞在した後に、平戸に引揚げた。而して更に山口に入り、葡萄牙領印度副王の書翰及び贈物を大内義隆に獻じ、其の許可を得て山口で布教した。

既にして大友宗麟に招かれて豊後に入り、四十六日間滞在して布教したが、西紀一五五一年（天文二十年）の冬に、數人の日本人を伴ひ、ドアルテリダリガマの船に乗つて豊後から印度に向つた。我が國に基督教（切支丹宗・天主教）が弘まつたのは、ザビエルの布教からである。後に支那布教に従事しようとして、西紀一五五二年澳門で病歿した。時に年四十七歳である。

總裁を兼ね、十一年には修史館總裁を兼ね、十五年四月には大勳位に叙し、十七年には公爵を授けられ、十八年には内大臣に任ぜられ、ついで辭職したが、十九年一月には其の勤勞を賞せられ、終身年金五千圓を賜はつた。

明治二十二年十月には、臨時に内閣總理大臣となり、十二月に辭した。二十四年二月十八日に病が革るに及び、聖駕臨問があり、正一位に叙せられ、同日五十五歳で歿したが、朝廷では痛惜三日間朝を廢せられ、武藏北豊島郡菅羽護國寺に國葬された。

さんでうてんのう  
三條天皇

名號 御名を居貞といひ、法諱を金剛淨といふ。  
系統 冷泉天皇の第二皇子で、御母は贈皇太后超子(藤原兼家の女)である。第六十七代の天皇である。

事蹟 寛弘八年六月、一條天皇の訓を受け、十月十六日即位された。時に藤原道長が左大臣として政權を握つた。天皇は其の專權を惡まれたが、道長から忌まれるのを心配され、常に御心を安んぜられなかつたといふ。道長は敦成親王(後一條天皇)を擁立するの意があり、天皇の眼疾に乘じ、諷刺して位を後一條天皇に譲らせた。偶々其の夜、月が明かであつたから、天皇は「心にもあらで憂世にながらへば、戀しかるべき夜半の月かな」と詠せられた。時に長和五年正月である。天皇は在位五年、寛仁元年五月九日、三條院で崩せられた。聖壽四十二。山城國葛野郡衣笠村大字北山北山陵に葬る。

さんでうにしさねた  
三條西實隆

名號 本名を公世といひ、

また公延ともいふ。法名を燒空といひ、逍遙院と號し、耕隱・逃虛子・聽雪などの別號がある。  
系統 内大臣公保の次男で母は左大辨房長の女である。兄實遠が十七歳で歿したので、實隆が其の後を承けて家を繼いだ。

事蹟 後花園天皇の長祿二年、從五位下侍從に任ぜられ、異進して正二位内大臣に陞り、永正三年にこれを辭した。十二年十二月、後柏原天皇は實隆に詔して、例によつて大臣の上位に列せしめられたいけれども、固辭して就かず、翌十三年四月に剃髮し、僧侶全刺斗に從つて戒を受け、黒衣を著し、律を持し、八月、更に別解曉戒を受け、衣鉢を持たした。爾來、諸國を行脚して名風を採り、高野に詣つて高野參詣日記を作つた。

明應九年九月二十八日、後土御門天皇が崩せられ、十月二十五日、後柏原天皇が踐祚されたが、當時戰國時代の事として、朝廷の式微は甚だしく、幕府も窮乏して費用を

獻することが出来ず、踐祚後二十餘年間も、即位の大禮を擧げさせられることが出来なかつたのである。  
然るに實隆は、本願寺主光兼を説いて錢一萬貫を獻せしめ、また幕府(將軍義隆)も實隆の促しによつて資を獻じたので、永正十八年三月二十二日に至り、漸く即位式を擧げさせられた。

大永六年四月七日、御柏原天皇が崩せられ、同日二十九日、後奈良天皇が踐祚されたが、前代と同様に即位の大禮を擧げさせられることが出来ず、踐祚後十年を経て、また實隆の盡力により、大内義隆から二十萬匹の獻金を得て、天文五年二月二十六日に即位式を擧げさせられた。

實隆は天文六年十月三日、八十歳で歿したが、天性才多多く、詩を好み、古調の和歌を詠じた。著書には高野山參詣日記の外に雪玉集・源氏細統があり、また史料となる日記が數十卷ある。

し・ち

Jenner

名號 エドワード Jenner  
系統 英國人ステーションナーの子である。  
事蹟 西紀一七四九年五月(我が國の天保二年)英國ダロスター侯の領地バークレーに生れた。五歳の時に父を喪ひ、兄の家に養育されたが、後に外科醫ダニエル・ロドワに從つて醫術を學んだ。當時、牛痘を搾つて居る人々の間には、「牛痘に罹つた事のある人々は、痘瘡に罹らない」といふ話が傳はつて居たが、ジェンナーは之に頗る興味を惹き、「牛痘から液を搾り取つて、これを人體に植えたならば、恐ろしい痘瘡を防ぎ、多くの人々を救済する事

が出来ると相違ない」と考へ、愈々堅い決心を以て、世人の嘲笑するのを物ともせず、牛痘を植えて痘瘡を防ぐ事を研究し始めた。二十二歳の時、ロンドンに名醫ジョン・ハンターの家に身を寄せ、研究上の指導を仰ぎ、實地に行つて見る事をすゝめられた。二十七歳の時には、郷里バークレーに歸つて研究したが、或る時、牛の乳房に出来て居る痘瘡菌及び牛乳搾女の手に出来て居る牛痘菌などを寫し、有名な醫者 ニューランド・ポームらに送つたが、世に認められずに終つた。

ジェンナーは此の研究を始めてから二十年目に、愈々これを實施に試みる機會が到来した。即ち或る資産家の娘が痘瘡に罹り、看病者も悉く感染したが、其の中の小娘のみが罹らなかつたので、其の手を調べて見ると、確に牛痘の痕が残つて居た。よつて愈々自分の考への正しい事を信じ、一大決心を以て牛乳搾女の手に出た牛痘か

ら液を取り、それを八歳になる自分の子供の腕に植まつけた。之が人體に種痘をやつた最初である。其の子供はよく感じたので、二箇月の後に痘瘡の液を取り、其の子供の皮下に注射したが、少しも痘瘡になる様子がなかつた。  
よつてジェンナーは、「牛痘論」及び「牛痘研究の追加」などの著述をなし、多年の研究發表をなしたが、此の貴い研究に對して、世の學者は嘲笑を浴せかけた。よつてジェンナーは、英吉利の大學の贊成を得て後に世人の信用を得るのが近道と考へ、其の研究物を二十三四回も大學に送つたが、一回も顧みられず、相變らず批難された。併し之に屈せず、五十二歳の時、三たびロンドンに赴き、エグレモンド公の賛成の下に牛痘研究所を建て、以て種痘を弘める事に盡力したが、先づエグレモンド公邸の在るサッセクス州の人々に信用され、またバークレー公がジェンナーの發明を英國皇帝に奏上するに

しきのわうじ  
施基皇子

名號 芝基・志貴にも作る。田原天皇と稱し、追尊して春日宮天皇といふ。  
系統 天智天皇の第三皇子で、御母は宮人越道伊羅都賣である。一説には天智天皇の第七皇子ともいふ。  
事蹟 天智天皇の七年二月に誕生され、二品親王に叙せられた。常に繪畫を好まれたが、本朝畫史・畫工便覽に據れば、皇子の作品が大和の多武峯に珍藏されて居るといふ。元正天皇の靈龜二年

八月十一日に薨せられた。後に御子白城王(光仁天皇)は、生父の故を以て田原天皇と追號された。

しげとみへいざゑも

### 重富平左衛門

「くりばやしじへゑ・栗林次兵衛」の項を参照されたい。

しげひとしんわう

### 重仁親王

系統 第七十五代崇徳天皇の長子である。

事蹟 鳥羽法皇は、御子崇徳天皇を愛し給はず、強いて位を寵姫美福門院の御腹なる近衛天皇(御年三歳)に譲らしめられた。

間もなく近衛天皇(御年十七歳)が崩御されたので、崇徳上皇は自ら重祚するか、重仁親王を位に即けようと思はれ、衆議もまた重仁親王に歸したのに、美福門院は關白藤原忠通と謀り、鳥羽法皇に勸

を参照されたい。

しくわうてい

### 始皇帝

事蹟 秦の始皇帝は、名を

政といひ、莊襄王の子である。十三歳の時に王位を繼いだ。當時は戰國時代といつて、小國が分立して、互に勢を争つて居たのを、次々に滅ぼして、遂に天下を一統した。時に西紀二二一年(我が孝靈天皇の七十年)である。

於是、臣下に令して帝號を讓せしめた。丞相王綰・廷尉李斯・御史大夫馮劫らは、尊號を上つて秦皇と稱し、命を制といひ、令を詔といひ、天子自ら稱して朕と言はん事と請うたが、王は秦皇の號を退けて皇帝と稱し、且つ天子死して諡するは、子にして父を諡し、臣にして君を諡するもので、甚だ謂れがない。よつて今から後は諡法を除き、朕を始皇帝と爲し、以後二世・三世と稱し、位を無窮に傳へ

る様にした。

ついで郡縣の制を布き、今迄の制度の改革に意を用ひ、また萬里の長城を増築した。蓋し長城の始源は、支那古代の車戰が戰國時代から變じて騎士戰となつたので、之が防守の爲に起つたものであるといふ。されば戰國時代には、既に各國に築かれ、單に北國のみならず、齊・楚・韓などにもあつた。

始皇帝は天下を一統し、匈奴を河北に逐ふに及び、河の北方に新に長城を築き、また燕・趙及び秦の舊長城を修築して之を連續し、遂に西は臨洮から東は遼東の襄平の北方に至つた。

始皇帝はまた宏大な阿房宮を首め、多くの宮殿を建て、時の學者の政事を批難するを惡み、民間に藏する詩書、百家の語を收めて焚き、挾書の禁を設け、詩書を語る者を死刑に處する事とし、遂に咸陽の書生四百六十餘人を拘へて生埋めにした。その他、暴政が多かつたので、天下は再び亂れたが、

西紀前二一〇年(我が孝元天皇の五年)に殺し、少子胡亥が即位して二世皇帝を稱したが、遂に漢の高祖の爲に滅ぼされた。

しだうしやうぐん

### 四道將軍

名號 崇神天皇が地方を鎮める爲に四道に派遣された四人の將軍のことで、後世の人が追稱して四道將軍といふ。

系統 崇神天皇の朝、大和地方は安らかであつたが、遠荒の地方には、王化に浴しない人民があつたので、即位の十年、之を教化する爲に、四人の皇族を選び、四道に分遣された。即ち大彦命は北陸に、武渟川別命は東海に、吉備津彥命は西海(山陽道)に、丹波道主命は丹波路(山陰)に向つて出發したが、時に十年十月である。當時の詔には、「教を受けざるものあらば、兵を以て伐て」とあり、各々印綬を授けて將軍に

任命されたのである。北陸に向つた大彦命と、東海に向つた武渟川別命(大彦命の子)とは、陸奥で相遇ふたので、其の地を相津(會津)といつた。路次(四道將軍派遣圖)



は詳かでないが、一は北陸から越後の國々を征服し、越後の新發田から會津に入り、一は東方十二國を次第に平定し、常陸から白河を経て會津に入つたのであらう。西征の人々の路次は明瞭でない

が、西軍日記に、「橋瀨を道の口として吉備國を平けたり」といへば、山陽道に向つた事が明かであり、丹波といふのは、單に一國ではなくて、山陰道の數國に亘つたものであらう。

日本書紀に據れば、四道將軍の發遣は十年十月で、而して翌年四月に至り、共に歸還して平定狀況の報告をなして居るが、此の年月は信ずる事が出来ない。何故なれば、上古蠻族征服の命を受けて遠荒の地に赴いた者が、斯様な短日月に功を奏する事は不可能だからである。且つ四道將軍の發遣は、一時の巡回のやうに傳ふるけれども、實は其の方面の鎮めとして、恰も後世の封建せられた大名のやうで、各皇族の子孫は、其の地方に住んで次第に繁殖し、遠荒の土民が次第に王化に服し、版圖が益々擴張するに至つたのである。

### 四條天皇

名號 御諱を秀仁といふ。

系統 後堀河天皇の第一皇子で、御母は藤原道家の女藤原院藤原鶴子である。第八十七代の天皇である。

事蹟 寛喜三年二月十二日に降臨され、四月十一日に親王となり、十月二十八日に後堀河天皇の皇太子となり、貞永元年十二月五日、御年二歳で即位された。文暦元年八月に後堀河上皇が崩せられたので、天皇の外祖光明寺關白藤原道家が輔弼した。在位十年、仁治三年正月九日、御年十二歳で崩せられた。山城國京都市下京區今熊町月輪陵に葬る。

### 十返舎一九

名號 姓名を重田貞一といふ。

ふ。通稱を與七といひ、號を解齋ともいふ。

**系統** 重田與八郎の二男である。

**事蹟** 父與八郎は駿府の町同心であつた。一九は稍々長じて大阪に出で、大阪町奉行小田切土佐守に仕へたが、性質が放蕩無頼で、花柳の街に遊び、吏務に不熱心で、遂に辭職して同地の材木商某の女婿となり、間もなく離縁され、流浪して江戸に來り、寛政の末、江戸長谷川町の某家に入夫したが、間もなく離縁された。

斯様に社會生活には失敗を重ねたけれども、藝術の範圍では、相應の伎倆を備へた様である。大阪に居た頃、志野流の香道を修めて其の技に熟したが、後にこれを廢したけれども、十返舎の號は、黄熟香の十返を採つて名づけたものであるといふ。當時、大阪の淨瑠璃作者と交際し、並木千柳・若竹笛舩と共に、近松余七といふ署名で、「木下藤十郎合戦」と呼ぶ院

本を作つた。小説は寛政七年に出版した「心學時草」を處女作とし、種々の作を出したが、世人から「滑稽の口重く、豚の糞の如し」と嘲笑されたので、暫く著作を見合せた。併し能く狂歌を讀み、繪を器用に描き、酒も飲み、人挨拶もよかつたので、書肆に鼻負されて、滑稽を交へた菊葉本を作り、遂に膝栗毛の一流をはじめた。此の本が大いに世に流行したので、種々の道中記を著したけれども、自ら趣向を設ける才が無かつたらしく、事柄はみな他作から剽竊したものであつた。天保二年七月二十九日六十九歳で歿した。江戸淺草上富田善龍寺地内東陽院に葬る。

著書には東海道膝栗毛・江の島土産・金の草鞋・吉原談話など數十種がある。

### しばくわう 司馬光

**名號** 世に司馬溫公・司馬

相公といふ。

**事蹟** 支那の宋代の名臣である。幼時水變を破り、其の中に落ち入つた子供を救つた事で聞えて居る。始め宋の仁宗（我が後冷泉天皇の頃）に仕へたが、仁宗は恭儉で民を愛し、賢人を登用し、學術を奨励し、宋代第一の明君と稱せられた。仁宗に繼いで英宗・神宗が立つたが、神宗（我が白河天皇の頃）は雄心があり、四夷を征伐して國威を張らうとしたけれども、財貨が足らなかつたので、王安石に政治を委ね、富國強兵の術を行はせ、種々の新法を作らせたが、新法は祖宗の法を變じ、財利を貪るものであつたので、これに對して評議が起り、人民は賦歛の重きに苦しんだ。司馬光は此の新法を非とした爲に、王安石に嫌はれ、歐陽修・文彦博・范鎮・韓琦・富弼の諸名臣と共に官を去つた。

司馬光は官を辭してから、多くは洛陽に在り、有名な資治通鑑の編纂に従事し、十九年の歳月を費

し、西紀一〇八四年（我が白河天皇の應徳元年）に完成して神宗に上つた。翌年に神宗は歿し、十歳になる哲宗が繼ぎ、宣仁太后（神宗の母）が攝政するに及び、直ちに司馬光を擧用し、弊政の改革に従事させた。當時、天下の人望は司馬光に集り、眞の宰相であると稱讚し、司馬相公と號し、神宗の喪儀に入朝した時には、民衆が道路に集つて拜し、馬を進める事が出来ない程であつたといふ。

司馬光が宣仁太后の意を奉じ、弊政を改革するに際しては、時人は括目して新政を觀ようとした。彼は呂公著と共に日夜朝政に參畫し、先づ保甲法を廢し、市易・保馬・青苗・募易など、すべて王安石の新法を廢して、舊制を復興した。また訴理所を置き、新法の發布以來、無辜にして罪を得たものは、これを訴へる事を許し、すべて新法によつて生じた弊害を拯はうとしたが、未だ悉く改革を實行するに至らず、西紀一〇八六年五

月に歿した。

### しばかうかん 司馬江漢

**名號** 通稱を安藤吉次郎といひ、四十餘歳で土田氏に入夫したといふ。名人忌辰録には、通稱を勝三郎といひ、後に孫太夫と改めたとある。名を峻といひ、字を君岳といひ、春波樓・不言同人などの號がある。司馬江漢といふのは、漢學を學んで支那風に做つたので、「司馬」は住み馴れた江戸の「芝」を唐風に書き、「江漢」は祖先の郷里紀伊の日高川・紀ノ川を江水・漢水にたとへて、其の頭字を附けたのである。

**事蹟** 幼時から學を好み、英才の聞えがあつた。はじめ狩野古信に學び、また宋紫石（楠本雪溪）に従つて南蘋風の寫生畫を學んだ。鈴木春信の浮世繪に似せて描き、春重と號した事もある。壯年時代に平賀源内から銅版畫の話を

聞いた事もある。天明三年に大槻玄澤と謀り、和蘭書を讀んで銅版畫を研究した。彼は銅版畫を復興すると同時に、多くの油繪を描いたが、彼が西洋畫を描いたのは、美術的興味を満足する事の外に、西洋の科學・天文・曆數を研修する補助手段として描いたのである。天明八年五十二歳の時、長崎に（司馬江漢）



遊び、西洋畫に優れた人を探したが、適當な人がなかつたから、和蘭船載の畫帖に便つて研修した。江漢が油繪の秘訣を體得したのは、長崎渡邊後である。江漢は西洋畫に就いて、西畫の法に至りては、濃淡を以て陰陽・凸凹・遠近・深淺をなすものにて、其の眞情を極

せり」といひ、「和漢の法にては、決して眞を畫く事能はず。其の所以は丸圓の物を畫くに輪を描いて彈丸の形とす。中心の堆き所を巧む事能はず。正面の像を畫くと雖も、鼻の中心の高き所を描く事能はず。畫もと筆描より起るにあらず。日の蔭より起る」といひ、西洋畫の寫實を謳歌して居る。

江漢の春波樓筆記に、「今日七十有五、心を放肆にし、諸侯召せども住かず、己の業を務めず。冬月日當に臥し、夏月は樹下に坐し、性好んで山水を愛す、數々東西に旅行す。名山風景を繪ては家に歸りて畫に模し、また我が天文地轉の説を好む者と窮理を談じ、樂これに過ぎず」とあるのを見ると、晩年の生活が分る。「江漢が年が寄つたで死ぬるなり、浮世に残す浮畫一枚」といふ狂歌を贊に書いた油繪自畫像を遺し、文政元年十月二十一日、八十二歳で歿した。江漢には和・漢・洋の遺作があるが、現存する油繪には東

京美術學校所藏富士山圖・杉浦家所藏富嶽圖・徳川侯爵家所藏海邊鳴圖・本間家所藏高輪海景圖・嚴島神社所藏木更津風景圖・吾妻家所藏阿闍梨風俗圖・波止場圖・海邊圖・松平子爵家所藏江戸風景二十四面などがある。銅版畫も多く刊行して居り、著書には春波樓筆記・西洋畫談・長崎見聞誌・和蘭奇工・西遊旅譚などがある。

### しばたかついへ 柴田勝家

**名號** 通稱を權六といひ、後に修理進といつた。世に斐藏柴田といふ。

**系統** 柴田義勝の孫である

**事蹟** はじめ織田信長の弟織田信行に仕へたが、弘治二年五月、密に信長を除き、信行を擁立して主にしようとして謀つて成らず、擁護して信長に陳謝したが、後には信長に仕へ、常に軍中に従つて功を立てた。

元龜元年、信長の命を受けて、近江の長光寺城を守った。六月、佐々木承頼(六角義賢)が来攻し、包圍して水道を絶つたので、城内は水が漸く盡き、僅に兩三甕を残すのみとなつた。承頼は偽つて和を講ずると稱し、平井甚介を城内に遣つて、密に水の有無を窺はせた。時に勝家は甚介を偽り、一策を設けて、用水の豊富なる事を見せつけ、後に兩三甕の水を盡く士卒に分飲させ、自ら槍で水甕を破り、「今日、既に死を決せり。何ぞ水を惜まんや」と、士卒を激勵し、夜半に門を開き、吶喊して敵陣に突進したので、承頼は圍を解いて逃れた。勝家は之を追つて首七百級を取り、功によつて食邑三萬貫を與へられた。よつて時人は甕破柴田と稱した。

元龜二年には、伊勢長島の一向一揆と戦ひ、天正元年には、淺井・朝倉の軍と姉川に戦ひ、何れも殊功があり、大いに信長に認められ、三年には越前に封せられて北國の重鎮となつた。四年六月には淺井長政の寡婦小谷ノ君と婚したが、此の小谷ノ君は、信長の妹である。

天正八年には越中の末森城を陥れ、十年には能登の畠山氏の殘黨遊佐・三宅・温井の三氏を撃つたが、三氏は越後に逃れて上杉景勝に據つたので、勝家は進んで魚津・松倉の二城を攻め、五月に景勝と天神山に戦ひ、六月に魚津城を陥れ、將に越後に入らうとしたが、偶々信長書死の報に接して軍を班した。

勝家は領邑越前北ノ庄に歸り、明智光秀の誅に伏した事を確め、尾張の清洲に至り、豊臣秀吉・池田信輝・瀧川一益・丹羽長秀・森長可らと會し、織田氏の後嗣を諷し、信忠の子三法師(秀信)を嗣とした。此の時、信長の遺領を一族諸將に分與したが、勝家は秀吉に請うて近江の長濱を得た。

時に秀吉は、光秀誅伐の功と其の天賦の英才とにより、威望が頗

る高かつたが、勝家は織田氏の宿將たることを自負し、其の下風に立つのを潔しとせず、遂に秀吉と仲が悪くなつた。而して織田信孝も、事によつて秀吉を悪んだので、勝家は信孝を引いて餘黨となし、更に佐々成政・瀧川一益と相議し、密に秀吉及び織田信雄を除かうと謀つた。そこで信孝は美濃に歸り、勝家は越前に歸り、機を見て同時に發しようとした。

天正十年十一月、秀吉は勝家らの謀を知つたので、兵を率ゐて岐阜に迫つたが、信孝は恐れて降伏した。勝家は積雪の故を以て來援が出来ず、忍んで明春をまつた。秀吉は兵を率ゐて近江に入り、長濱の柴田勝豊を降し、勝家南出の路を塞いだ。

天正十一年三月、勝家は加賀・能登・越中の兵を率ゐ、佐久間盛政と共に近江に出で、木本に陣して諸將を守つた。偶々秀吉は瀧川一益を征して伊勢に在つたが、これを聞いて長濱に赴き、二十餘船

を賤ヶ嶽に築いて之に備へ、更に美濃の大垣に轉じて信孝を討たうとした。時に勝家は秀吉の不在に乗じて、盛政を遣つて賤ヶ嶽を襲はせ、四月二十日、大岩繁の守將中川清秀を攻殺した。秀吉は之を聞いて賤ヶ嶽に急行し、盛政及び柴田勝政の軍と大いに清水坂に戦つた。時に加藤清正・福島正則・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・片桐且元・精屋武則らは槍を掲げて突進したので、世に之を賤ヶ嶽の七本槍といふ。また石川貞友・櫻井左吉・伊木遠雄らは刀を振つて躍進したので、世に之を賤ヶ嶽の三振太刀といふ。斯くて盛政は大敗し、勝政は捕虜となつた。勝家は柳瀬の本營に在つて敗報を聞き、毛受家照を遣つて秀吉に當らせ、間に乘じて越前の北ノ庄に歸つた。二十三日、秀吉は諸將と共に北ノ庄の城を包圍したが、勝家は敵す可らざるを知り、四月二十四日、城樓に登つて火を放ち、夫人織田氏と共に自盡した。時に五

しばたかつまさ  
柴田勝政

「さくまもりまさ・佐久間盛政」の項を参照されたい。

しばのりつざん  
柴野栗山

**名 號** 名を邦彦といひ、通稱を彦助といひ、栗山・古馬軒などと號した。尾藤二洲(良助)・古賀晴里(彌助)と共に、寛政の三助・三學士と稱せられた。

**事 蹟** 讃岐の高松の人である。はじめ後藤芝山に學び、後に江戸に遊んで林氏の門に入り、好んで經籍を研究し、また詩文を善くした。學成つて阿波藩に仕へ、藤四百石を食んだが、既にして京都に移り、専ら宋學を唱へた。天明八年、幕府の招聘に應じて江戸に赴き、聖堂學問所の教授に

しまづなりあきら  
島津齊彬

**名 號** 幼字を邦丸といひ、通稱を又三郎といふ。諡を順聖公といひ、神に祀つて昭國大明神といふ。

**系 統** 島津齊興の嫡子で、島津久光の兄である。

任じ、幾二百包を賜ひ、林述齋・岡田寒泉らと共に、大學頭林信敬を輔けて學制の改革に功があり、また有名な異學の禁——幕府は朱子學を官學としたので、朱子學以外のものを異學と稱した——の如きも、栗山らの畫策する所であつた。ついで布衣に進み、西丸の侍讀となり、俵米二百俵を増された。文化四年十二月朔日、七十四歳で歿した。江戸小石川大塚坂下町御厩島に葬る。著書には國鑑・雜字類編・聖賢畫像・資治概言・冠服考證・栗山文集などがある。

生れた。七年、從四位下兵庫頭に叙任し、將軍徳川家齊の偏諱を賜ひ、始めて齊彬と稱し、天保五年、少將に任じ、十四年、豊後守と改め、十五年、修理大夫と改めた。弘化元年、薩摩の附庸國たる琉球の那覇港に佛國軍艦が渡來し、通商貿易を求めた。齊彬は父齊興の報を得て、幕府の指令を請うた。時に齊彬は海外の事情に通じ、鎖國の不可能を知り、開國の策を案じ、密に老中阿部正弘に謀議する所があり、正弘も齊彬の議を認め、三年六月、齊彬を歸國せしめ、警備交渉の任に當らせた。齊彬の意見は開國にあつたけれども、俄に決する事は時勢と容れないから、先づこれを孤島の琉球に試み、かねて操縦を宜しくし、力めて外船の内地渡來を緩うしようとし、正弘も此の意見に賛し、軍制・兵器の改革に力め、外籍の研究に力を注ぎ、徐々に開國の歩調を進めようとして謀つた。斯くて歸國の後には琉球の措置を命じ、海岸を巡視して

砲臺を築造し、武器製造局を創設するなど、著々として治績の見るべきものがあつた。

弘化四年、齊興の讓を受けて封を繼いだ。これよりさき、軍艦・兵器改革の資として家臣に蘭書を學ばせ、自らも研究を怠らず、或は反射爐を造つて互砲を鑄造し、或は砲臺を改築し、或は火藥製造の法を研究して、所謂薩摩火藥の名聲が各藩に響いた。また洋書によつて水雷・地雷・電信の諸器械を模作し、悉く試験を経て其の功を確め、之を利用するに勤めたが、既に封を襲ぐに及び、益々政治に精勵し、齊彬の名は四方に聞え、志士の欽慕する所となつた。

弘化六年、上書して大砲船(軍艦)建造の許可を受け、更に幕府の軍艦四隻の建造を依頼され、翌年の末に至つて竣工した。齊彬は夙に勤王の志があり、安政二年には、孝明天皇から「武士も心あはせて秋津洲の國は動かす共に治めん」といふ御製を賜はつた。齊彬

は感激して、身を以て皇室に盡さんことを期した。此の時、幕府は開國の意志を抱いたけれども、時に勢に制せられて、これを決行する事が出来ず、内は水戸烈公一派の攘夷論に苦められ、外は外國公使の開國催促に苦められた。阿部正弘は従来の歴史的感懐を捨て、齊彬の勢力才能に依頼する必要をさとり、齊彬の妻女を將軍徳川家定に納るゝ策を案じ、齊彬も之を語して幕府の爲に力を盡さうとし、安政三年、政略的結婚が結ばれたが、四年、正弘が歿した爲に是等の計畫は水泡に歸し、五年七月十五日、齊彬も五十歳で病死した。朝廷及び幕府から、從三位權中納言を贈られ、後に照國神社に祀られ、明治十五年、別格官幣社に列せられ、三十四年五月、正一位を贈られた。

**しまづひさみつ**

津齊彬の弟である。齊彬の歿後、久光の子の忠義が藩主となつたので、久光は之を輔けて藩政を執り、齊彬の遺志を繼ぎ、勤王論の實行を企圖し、先づ庶政を改革し、人心の動搖を防ぎ、西郷隆盛らの人材を登用した。當時、攘夷討幕の議論が盛んで、世の中が頗る騒がしかつたのを憂へ、文久二年三月、公武の間を取り持たうとし、兵を率ゐて入京し、先づ過激な志士を鎮め、六月、幕府に派遣された勅使大原重徳を護つて江戸に下つた。八月、江戸を辭して歸る途中、生妻村(横濱市鶴見區)附近で、英

**しまづよしひさ**

向守惟宗基言の子廣言に出て居る。廣言は京都に在り、比企能員の姉丹後内侍と通じて忠久を生み、近衛天皇の朝に播磨少掾に任じ、後に近衛氏に仕へ、島津莊の地頭となつたので、島津を氏とした。源頼朝の時に忠久が日向・大隅・薩摩の守護となつてから、其の子孫の多くは南九州の豪族となり、貴久の時には薩摩の伊集院に居した。貴久の長子を義久といひ、次子を義弘といふ。

策に盡すなど、功績が頗る多く、殊に洋書を研究して其の文字に通じたのは、齊彬の識見を大にするに與つて力あつたものであらう。

八四人が騎馬のまゝ行列を横切つたので、久光の家来は怒つて其の一人を殺し、三人に重傷を負はせた。これを生妻事件といふ。やがて久光は薩摩に歸つたが、三年二月、英國側は怒つて幕府に償金百萬圓を要求し、七月、英艦七隻は鹿兒島灣に入り、藩廳に交渉して兇行人の處刑と弔慰金二十五萬圓を要求したが、藩廳は聽かず、互に發砲して戦ひ、城下の市街が兵火に罹つた。久光は自ら軍を指揮したが、英艦は遂に破れて敗走し、殊に其の一艦は抜鎗の邊がなく、鎖網を中断して逃れた。明治維新の後、參議・左大臣などに任ぜられ、功によつて公爵を賜はり、從一位・大勳位に叙せられたが、明治二十年十二月、七十一歳で歿した。

島津義弘の兄である。永祿七年、正五位に叙せられ、修理大夫に任ぜられた。父貴久は日向守護伊東義祐(三位入道)と連年交戦して利あらず、遂に薩摩の半國を割譲した。既にして貴久・義祐は歿し、義祐の子祐兵は、柔懦で、國勢が振はなかつたので、義久は之に乗じて侵地を恢復し、また日向・大隅の二州を併せ、凡て三國を領有し、武威が大いに振ひ、九州の將士の島津氏に屬する者が多かつた。天正七年、從四位下に陞り、十三年、薩摩の守護職を弟義弘に譲つた。後に屢々出兵して、筑前・筑後・肥前・肥後・豊前の諸國を略し、また大友宗麟を滅ぼして豊後を併せようとした。

然るに豊臣秀吉が政權を握るに及び、九州征服の志があつたが、偶々祐兵は日向を離れて京畿に來り、秀吉に給仕して本國に安堵したい事を望み、また大友宗麟も上

落して、若し島津征討の軍が起つたならば、其の先鋒にして賣ひたいと請うた。時に義久は家臣鎌田某を秀吉の下に遣使し、「年來略取する處の八箇國の守護職相違なきに於ては、幕下に伺候すべし」と告げた。然るに秀吉は之に答へて、「大隅・薩摩は本領なれば、相違あるべからず。また日向・肥後・筑後は各々半國を賜はるべし。但し日向半國は伊東の國の領なれば祐兵に與へ、豊後・筑後及び肥後の半をば宗麟にかへし、肥前をば毛利輝元に割譲し、筑前は御領の爲に獻すべし」と命じたけれども、義久が應じなかつたので、秀吉は仙石秀久・長曾我部元親・大友宗麟らに命じて義久を討たせた。

て秀吉の軍門に降つた。よつて秀吉は舊の通り薩摩國を安堵し、また大隅・日向の地を義弘父子及び家人に與へた。後に義久は大坂に伺候して軍事を勤め、十六年七月、在京料一萬石を賜ひ、三位法印に叙せられた。文祿征韓の役には、義弘父子を從軍させて殊功があつたので、慶長三年、徳川家康は大坂の五奉行と議し、義弘の封五萬石を増した。五年、關ヶ原の役が起るに及び、義弘は石田三成に與し、大敗して國に歸つた。義久は福島正則に就いて陳謝したので、七年四月、本領安堵の教書を賜はつた。十六年七月二十二日、七十九歳で歿した。

天正十二年、兄義久の嗣となり、翌年、薩摩の守護職となつた。十四年、義久と共に豊臣秀吉の軍を防ぎ、一時勝利を得たが、十五年、秀吉が親征するに及んで、遂に其の軍門に屈し、大隅國に封ぜられ、十六年六月、從五位下侍從に任じ、やがて從四位に進んだ。

文祿元年征韓の役には、森吉成・高橋元種・秋月種長・伊東祐兵・島津忠豊らと、第四軍の兵一萬四千名を率ゐて渡鮮し、各地に轉戦して軍功があり、四年、薩摩するに及んで、改めて薩摩・大隅の二國及び日向の諸郡を賜はつた。慶長二年には、諸將は命を受けて再び渡鮮し、釜山を根據地として各地に轉戦したが、義弘は八月の南原攻撃に殊功があつた。我が軍は全羅道を平定したが、天候が冬寒の季に近まつたので、諸將は相議して營を分ち、加藤清正は蔚山に、小西行長は順天に、義弘は泗川に屯した。三年八月、秀吉は致するに際して、出征の兵を收めることを遺命した。同年十月、偶々明將董一元は、兵二十萬を率ゐて泗川を圍み、大砲を放つて我が軍を攻めた。時に義弘は子家久と共に城外に進出し、奮戦して大いに之を破り、首を斬ること三萬八千七百餘級に及んだ。また征韓の諸將が兵を引き揚げる際には、明の水師提督陳璘は、海路に要して我が軍船を遮つた。よつて義弘は立花宗茂と協力して陳璘の舟師を破り、十二月に歸朝した。我が軍

初め忠平・義珍といひ、後に義弘と改めた。薙髮して維新といふ。姓は惟宗である。日

が無事に兵を引き揚げる事を得たのは、義弘の力による事が大である。

慶長四年正月、五大老は相議して、義弘の戦功を賞し、封五萬石を加増したが、此の年に少將に昇り、宰相に任ぜられた。五年、石田三成に與して兵を擧げたが、關ヶ原の戦に大敗し、逃れて本國に蟄居し、陳謝して罪をまつた。家康は之を追撃するの不利を知り、赦免して其の本領を治めさせた。やがて國務を家久に譲り、閑居して餘生を送り、元和五年七月二十一日、八十五歳で歿した。

### 清水宗治

備中國高松城主で、小早川隆景に従屬して居た。織田信長は、天正五年の頃から中國經略の策を決し、羽柴秀吉らに命じて山陽・山陰の地を侵させた。秀吉は姫路城を根據とし、頻りに上



(圖) 高松城攻撃

五月、遂に高松城(備中國賀陽郡高松村、岡山市の西三里餘)を圍んだ。宗治は、兵五千餘を督して籠城し、且つ急を毛利氏に報じて救を請ひ、殊死して防戦したので、容易に陥らなかつた。秀吉は、力攻

月・三木・鳥取の諸城を屠り、到る處、毛利輝元の軍と衝突したが、更に播磨・因幡・但馬の兵を率ゐて西下しようとし、天正十年三月十五日、姫路城を發して備中に入り、先づ宮地・冠山の二城を陥れ、

すれば多くの兵を損するを慮り、長圍の策を決し、附近の地形を熟視し、河流と季節とを利用して、水攻をなす事の有利を知り、先づ附近の村落を焼き、五月五日に陣を蛙ヶ鼻に移し、城の附近一帯に巨堤を築き、足守川の

の水を引き入れたが、偶々梅雨の爲に水量が増し、新堤から山麓に至る面積約百八十八町歩の地は、一面渺茫たる大湖沼に變じ、斯くて六月二日になると、城の水に浸されない處は僅か數尺に過ぎなくなつて來た。併し宗治は城が水に没する標になつても尙ほ能く力戰苦闘した。秀吉は長堤の上に櫓を構へ、堤外に廠舎を造り、數町を距る毎に哨所を置き、晝は旗を連ね、夜は篝火を焚き、巡視を嚴にして城兵の脱出と夜襲とを防いだ。

既にして宗治の急報が毛利氏に達すると、吉川元春・小早川隆景は兵三萬餘を率ゐて來り、五月二十一日、岩崎山・目蓋山に到着し、諸隊を天神山・服部山・寺山に屯させ、輝元も本軍を率ゐて猿掛山に到着し、一部隊を幸山城に置いた。秀吉は兵一萬を分遣して是等に備へた。時に兩軍の先頭は僅か數町を隔てたに過ぎなかつたが、其の間に足守川の支流長良川があり、水勢が相當に強かつたので、兩軍は對陣したまゝ、戦ふことが出來ず、隨つて城兵は非常に失望した。

害に構和を申込んだ。

秀吉は宗治を殺さなければ構和しないと云つたので、惠瓊はこれを憂ひ、私に兩軍の間を奔走調停し、また自ら城中に入つて、宗治に説くに義を以てした。よつて宗治は、六月二日に書を秀吉に送り、自ら割腹して城中の士民の命に代りたると願つた。秀吉は義として之を許し、四日を以て宗治自盡の期と定めた。時に本能寺の變報が三日の夜半に達したので、秀吉は大いに驚き、四日の朝惠瓊を招き、前日提議の構和を承諾し、割腹地の幾分を讓歩して宗治の死に代へる事にし、毛利氏に説かせた。

此の日、宗治は月清入道・末近信實・難波傳兵衛らと共に、小舟に乗つて城を出で、蛙ヶ鼻にある秀吉の本陣に往つた。秀吉は堀尾吉晴を檢使として派遣し、且つ酒肴を贈つて勞つた。宗治は其の好意を謝し、侍臣と共に數杯を傾け、欣然として舟中で自刃し、月清・信實らが殉つた。毛利氏は、未だ

本能寺の變を知らなかつたので、遂に和議書書を交換した。

### シャールヴァンヌ

事蹟 ビュヴィスロッドリシャールヴァンヌは、十九世紀に於ける佛蘭西の畫家である。一八二四年(我が仁孝天皇の文政七年)に工藝の盛んなリヨンで生れた。父は繪山技師であつたが、シャールヴァンヌは伊太利に遊び、美術に感興を惹かれ、遂に畫道に志すに至つた。一八四八年に再び伊太利に遊び、専心畫技を練つた。はじめ十六世紀の大家、殊にヴェニス派の感化を受け、またバルビゾン派の影響を受け、アルグールドラクロアの畫法をも取り入れ、而して最後にプロレンス派並びに古典美術に深い泉を汲んだ。故に彼の畫風は、古來の優れた要素を攝取し、渾然たる自己の特色を發揮したもので、裝飾風の理想畫を描き、印

### 釋迦牟尼

名 姓を喬多摩(Caunda-ma)といひ、釋婆とも書く。名を悉達多(Siddharta)といひ、略して悉達ともいふ。世に悉達多太子・悉達太子といふ。

釋迦といふのは、本來、種族の名であるが、佛教の教祖が此の種族中から出たので、これを釋迦牟尼といふ。牟尼は梵語のMuniで、邦語に譯すれば寂默・智者といふ

譯になるから、釋迦牟尼といふのは、「釋迦種族の智者」の義になる。

### 系統

父は中印度迦毗羅城主の首領檀那(Śuddhodana)で、世に淨飯王といひ、母は摩耶(Māyā)夫人で、何れも釋迦種族である。

### 事蹟

迦毗羅城は今のネパール國タライ地方に當つて居る。釋迦の出生年には異説が多いが、西紀前五六五年頃に生れた。即ち四月八日に當り離宮藍毘尼(Sumnera)園の無憂樹下で生れた。隣邦の拘利(Koli)城主の女耶輸陀羅(Yashodhara)を娶り、一子羅喉羅(Kaushala)を生んだ。天性聰明で、諸般の學業に熟達したが、曾て王城の四門に遊び、人間の老・病・死と隱遁の狀とを見て、深く人生の無常を感じ、隱遁して生・老・病・死の苦を除く方法を案出し、以て衆人を救はうとし、二十九歳(一説には十九歳の時、夜に乗じて城を脱出し、深林に入つて出家



し、中印度の摩揭陀(Magadha)・毗舍離(Vaisali)の諸國に高徳を歴訪し、修業すること六年(一説には十二年)に及んだが、苦行は成道の所以に非ざるを知り、恒河の一支流なる尼連禪(Niranjana)河に浴し、其の河畔の佛陀伽耶(Budha Gaya)の菩提樹下に坐して靜慮し、遂に廓然大悟して成道した。時に三十五歳(一説には三十歳)である。乃ち鹿野苑(Mildapaas)今のベナレスの北東四英里を距るサルナト)で始めて法を説き、摩揭陀國に歸つて、王舎城(Kalasiya)今のベハールの南西ラーヂヤギル)で布教に従ひ、また恒河の南北諸國の間を往來し、八十歳に至る迄熱心に道を説き、西紀前四八五年頃、拘尸那竭羅(Kushinara)今のカシヤとアンドルダアとの間)の沙羅双樹の下で入寂した。入滅年代にも異説が多い。釋迦の教を傳教といふのは、佛の位置に到達するのを教の目的とするからで、佛とは覺者の義で、

眞理に到達した人の義である。釋迦の成道といふのは、此の佛位に達したことをいふ。

しゆしゆんすゐ 朱 舜 水

名 號 名を之と號といひ、字を魯典といひ、舜水と號し、私諡して文恭といふ。

系 統 朱存之の子である。

事 蹟 明國浙江餘姚の人である。神宗の萬曆二十八年に生れたが、早く父を喪ひ、稍々長じて朱永祐・張育堂・吳鍾釐らに學び、拔擢されて恩貢生となつた。ついで明朝から屢々徵命があつたけれども、辭して就かず、避けて舟山に赴き、始めて日本に來り、ついで交趾に移り、再び舟山に移つた。時に明朝は清軍の爲に攻圍され、國勢が日に衰へる際であつたから、舜水は事の成す可らざるを知り、安南に赴かうとしたけれども、風利が悪かつたので、再び日本に

來り、また舟山に移つた。これは海外の援兵を得て、明朝の恢復を圖らうとしたからで、三たび日本に來たが、志を得ずに安南に至り、ついで故國に移らうとしたけれども、既に清朝が四方を混壹したので、義として其の粟を食はず、四たび日本に來て歸化した。時に後西天皇の萬治二年である。

舜水は我が國に來歸してから、十餘年の間飄飄落魄し、頗る困窮したが、偶々柳川の儒士安東省庵を弟子として教へ、謙の一半を贈らるゝに及び、漸く米鹽の途を得ることが出來た。寛永五年、徳川光圀は舜水の才徳文行を開き、招聘して賓師としたが、水戸藩士の學ぶ者が多かつた。舜水は人と爲り嚴毅、剛直、博覽、強記で、學生に教授するに際しては、孜孜として倦まず、且つ古今儀禮の大典から農圃梓匠及び衣冠器用の制に至るまで、大小凡百の事に精通したので、人々はその多能に服した。光圀が「嗚呼忠臣補子之憂」の詩

文を書かせた話は有名である。天和二年四月十七日、八十三歳で歿した。常陸國久慈郡太田郷瑞龍山麓に葬る。舜水は頗る儉素で、三千餘金を蓄へて居たが、蓋し明朝恢復の資金にする爲のものであつたらしい。

JUNO

傳 略 希臘神話のヘラの事である。オリンポス山上に宮殿を造り、其處に住んで居たゼウス神の妹で、且つ其の妻で、婚姻を掌ることを仕事としたといふ。希臘名のヘラ(Hera)は、羅典名でジュノーといふ。

JUPITER

傳 略 希臘神話のゼウスの事。天上界を支配し、晝夜四季を分ち、萬物を創造する男性の神

である。力も智慧も凡ゆる神々に優れ、オリンポス山上に宮殿を造り、其處に住んで居たと傳へられて居る。有名なオリンピアの祭禮は、此の神を祀る祭禮である。因に希臘名のゼウス(Zeus)は、羅典名でジュピターといふ。

しゆんくわん 俊 寛

事 蹟 俊寛は法勝寺の執事行である。平清盛の專横が日に甚だしかつたので、後白河法皇はこれを厭はれた。時に法皇の執事權大納言藤原成親は、近衛大將にならうと欲して、法皇に請う所があつたが、平家の爲に妨げられて目的を果さず、内心甚だ不平であつた。よつて法皇の寵臣僧西光(藤原師光)と謀り、法皇の密旨を受けて俊寛・檢非違使平康頼・藏人源行綱らと結び、京都の鹿ヶ谷にある俊寛の山莊に會し、遊宴に托して軍事を議し、平氏を滅ぼさう

じゆんとくてんのう 順 徳 天 皇

名 號 御名を守成といひ、世に佐渡院と稱する。

系 統 後鳥羽天皇の第三皇子で、御母は藤原範季の女備門

と謀つた。時に治承元年で、法皇も親臨しようと思つたが、僧靜憲の諫めによつて止められた。

六月、源行綱は平氏討伐の急に成らないのを見て、福原に行つて清盛に密告したので、清盛は驚いて六波羅に歸り、西光を捕へて斬り、成親を備前の兒島に流し、やがて人を遣つて殺し、成親の子成経・康頼・俊寛を鬼界ヶ島に流した。成経・康頼は翌年召還されたが、俊寛は赦されず、終に島中で歿した。赦免の使が島に着いた時、俊寛は自分一人残されるのを足摺りして残念があつたが、此の事は平家物語及び源平盛衰記に見えて居る。

事 蹟 正治二年に土御門天皇の皇太弟となられた。當時、英邁な後鳥羽上皇は、源氏及び北條氏が政權を握つて居るのを憎み、王政の復古を企圖しようと思つて居られた。温雅な土御門天皇はこれを危み、屢々諫められたが、其の爲に御仲が何となく不快になられた。皇太弟守成親王は英邁で、且つ關東征討の舉に賛成されたので、後鳥羽上皇は守成親王と謀議しようと思つた。土御門天皇に迫つて讓位を決定せられたので、承元四年十二月二十八日、守成親王が即位された。これが順徳天皇である。

爾來、順徳天皇は、後鳥羽上皇を輔けて、着々擧兵の策を講ぜられたが、在位の儘では自由活動に不便が多かつたから、承久三年四月、位を仲恭天皇に讓られた。五月、後鳥羽上皇の院宣を頒つて兵を募り、征討の軍を起されたが、

謀が早くも關東に漏れ、北條義時は子泰時・弟時房に大軍を授け、東海・東山・北陸の三道から京都に進んだ。官軍は忽ち敗れたので、義時は相讓して、七月、後鳥羽上皇を隱岐に、土御門上皇を土佐に、順徳上皇を佐渡に遷した。世にこれを承久の變といふ。

順徳上皇は、後嵯峨天皇の仁治三年九月十二日、佐渡の配所で崩せられた。聖壽四十六である。同國眞野陵に葬つたが、寛元元年、更に御骨を山城國愛宕郡大原村大原法華堂の側に奉安した。明治七年四月、神靈を遷遷して攝津國水無瀬宮に合祀した。

上皇は資性鋭敏開朗で、典籍を好まれ、最も和歌に長ぜられた。佐渡で詠まれた御製に、啼けば聞く聞けば都の戀しきに、この里過ぎよ山ほととぎす」といふのがあつた。

著書に八雲鈔・禁鈔などがある。「ことばてんのう・後鳥羽天皇」の項を参照されたい。

じゆんなてんのう

### 淳和天皇

**名** 御名を大伴といふ。

日本根子天高麗御遠尊と稱し、世に西院の帝とも稱する。

**系** 桓武天皇の第三皇子

で、御母は藤原百川の女旅子である。第五十三代の天皇である。

**事** 延暦五年に降誕され

た。長じて兵部卿・治部卿・中務卿などに歴任し、弘仁元年九月、嵯峨天皇の皇太子となり、同十年四月に即位された。

天皇は詩を嗜み、また書を善くされたが、在位十年、天長十年二月に皇太子正良親王（仁明天皇）に譲位し、西院に遷御された。西院は即ち淳和院である。

皇后正子内親王は、嵯峨天皇の皇女で、櫻林皇后の所生である。貞淑の聞え高く、平素深く佛法を信じ、仁慈心に富み、京中の粟兒・孤兒を養育し、野戸五分の一を

せうけんくわうたい

### 昭憲皇太后

**名** 御幼名を勝子・富貴

壽榮といひ、入内して美子と改められた。追號して昭憲皇太后といふ。

**系** 一條左大臣藤原忠香

の第三女で、新畑大膳源種成の長女民子の御腹である。第二百二十二代明治天皇の皇后である。

**事** 嘉永三年四月十七日

に降誕されたが、十歳の頃、家臣と共に京都郊外の風光を賞し、偶々一壺の酒を折つて曰く、「苗而不秀、秀而不稔（論語）の一句を思ひ、「稻の丈け延びたればとて、實らざれば役に立たず。人も徒らに生長したりとて、美果を結ばざれば採る處なし。我れ今にして論語の尊きを悟れり。今後、心を改めて學びの道にいそしまん」と。慶應三年六月、女御決定の沙

割いて、其の費に充てられた。

淳和上皇は承和七年五月八日、聖壽五十五歳で崩せられたが、遺詔して火葬させ、大葬の儀を薄くさせられた。山城國乙訓郡大原野村大原野西嶺上陵に葬る。

じゆんにんてんのう

### 淳仁天皇

**名** 御名を大炊といひ、

世に淡路廢帝と稱する。

**系** 天武天皇の皇子舍人

親王の皇子である。御母は常麻山背といふ。第四十七代の天皇である。

**事** 天平五年に降誕し、

天平寶字元年四月に孝謙天皇の皇太子となり、同二年八月朔日に即位し、都を近江の保良に遷して居られた。

時に孝謙上皇は、始め惠美押勝（藤原仲麻呂）を寵し、ついで僧道鏡を用ひられたが、押勝は道鏡の信任されるのを見て安んぜず、遂

に兵を擧げたが、藤原豐成の爲に

破られた。淳仁天皇は、孝謙上皇が道鏡を寵遇されるのを見て屢々諫められたが、上皇は之を聞いて悦ばず、「天皇は押勝と謀を通じ、將に我を害せんとするなり」と仰せられ、八年十月、遂に天皇を廢して淡路公となし、淡路に配流された。蓋し天皇は押勝の女婿で、其の擁立する所であつたから、押勝が既に破るに及び、天皇の地位が動いたのである。やがて孝謙上皇は重祚して稱徳天皇となり、佐伯助を淡路守となし、淡路公（淳仁上皇）を監せしめられた。

翌天平神護元年、朝臣が淡路に通ずることを慮り、益々其の守衛を嚴にされたので、淳仁上皇は大いにこれを憤り、此の年の十月、配所で崩せられた。時に聖壽三十三歳である。淡路國三原郡賀集村淡路陵に葬る。明治三年七月、明治天皇は淳仁天皇と諡し、神靈を京都に遷護して、白峯宮に合祀された。

しやうくわうてんのう

### 稱光天皇

**名** 御諱を實仁といひ、

法諱を大智諱といふ。

**系** 後小松天皇の第一皇子

である。御母は日野資國の女で、光範院藤原資子といふ。第一代の天皇である。

**事** 應永八年三月に降誕

され、十八年に親王となり、十九年八月二十九日に後小松天皇の禪を受けて踐祚し、二十一年十二月十九日に即位された。時に御年十二歳である。後小松上皇が院政を執られた。南北朝合一の際には、兩統迭立の約束があつたから、後小松天皇の次には南朝の皇子の立たれるのが順序であるけれども、迭立の約束の如きは、固より南朝誘引の手段に過ぎなかつたから、朝廷も幕府もこれを履行しなかつた。併し異議の起る事を恐れたの

せうけんくわうたい

ごう

### 昭憲皇太后

**名** 御幼名を勝子・富貴

壽榮といひ、入内して美子と改められた。追號して昭憲皇太后といふ。

**系** 一條左大臣藤原忠香

の第三女で、新畑大膳源種成の長女民子の御腹である。第二百二十二代明治天皇の皇后である。

**事** 嘉永三年四月十七日

に降誕されたが、十歳の頃、家臣と共に京都郊外の風光を賞し、偶々一壺の酒を折つて曰く、「苗而不秀、秀而不稔（論語）の一句を思ひ、「稻の丈け延びたればとて、實らざれば役に立たず。人も徒らに生長したりとて、美果を結ばざれば採る處なし。我れ今にして論語の尊きを悟れり。今後、心を改めて學びの道にいそしまん」と。慶應三年六月、女御決定の沙

で、稱光天皇の如きは、立太子の

事がなく、直ちに即位された。天皇は佛法を好まれ、常齋して嗣がなかつたので、御花園天皇に譲位された。在位十六年、正長元年七月二十日に聖壽二十八歳で崩せられた。山城國紀伊郡深草村深草法華堂に葬る。「さだふさしんわう・貞成親王」の項を参照されたい。

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

じやうてう

法あり、専ら皇后宮としての修養

を積み、明治元年十二月從三位を授けられ、同月入内して、明治天皇の皇后となせられた。時に御年十九歳である。爾來、四十五年の間天皇に仕へて淑徳のほまれが高く、常に御聖徳の發揚に努め、また御心を萬民の上に注がせられた。

皇太后は仁慈の心が深く、日清

・日露の兩役には、屢々豫備病院に行啓して、親しく傷病兵を慰問され、敵國の捕虜の負傷者に義手・義足を賜はつたこともある。また慈善事業を奨励され、屢々慈善病院・赤十字病院などに行啓され、日本赤十字社の總會ある毎に行啓して、令旨を賜はつた。また曾て米國のワシントンに開かれた萬國赤十字大會に十萬圓を寄附された事もある。

皇太后は和漢の學藝に通じ、最も和歌を嗜まれ、其の歌歌が五萬餘首に及んだといふ。四民の拜誦する御歌が尠少でない。また屢々

學校に行啓され、費島の道によつて學問・技藝を勵まされたことが多し。「みがかずば玉も鏡も何かせむ、まなびの道もかくこそありけれ」といふ御歌は、明治九年二月、東京女子高等師範學校に下賜されたものである。

皇太后は敬神の念に富み、毎朝

伊勢大廟を遙拜され、また曾て神武天皇其の他の皇陵へ参拜された事もある。殊に明治天皇崩御の後には、毎朝、御眞影を拜せられ、毎月、御使を桃山に派遣して、天皇の山陵を代拜させ、また親しく法華經を寫して冥福を祈らせられたといふ。

大正三年三月、沼津御用邸で御病あり、四月十日、東京に還啓されたが、十一日に赤坂御所で崩御された。時に御年六十五歳である。五月九日に昭憲皇太后の追號を上つたが、これは内大臣秘書官長野孫が撰撰し、上奏して勅定を得たものである。伏見桃山御陵に葬る。

學校に行啓され、費島の道によつて學問・技藝を勵まされたことが多し。「みがかずば玉も鏡も何かせむ、まなびの道もかくこそありけれ」といふ御歌は、明治九年二月、東京女子高等師範學校に下賜されたものである。

皇太后は敬神の念に富み、毎朝

伊勢大廟を遙拜され、また曾て神武天皇其の他の皇陵へ参拜された事もある。殊に明治天皇崩御の後には、毎朝、御眞影を拜せられ、毎月、御使を桃山に派遣して、天皇の山陵を代拜させ、また親しく法華經を寫して冥福を祈らせられたといふ。

大正三年三月、沼津御用邸で御病あり、四月十日、東京に還啓されたが、十一日に赤坂御所で崩御された。時に御年六十五歳である。五月九日に昭憲皇太后の追號を上つたが、これは内大臣秘書官長野孫が撰撰し、上奏して勅定を得たものである。伏見桃山御陵に葬る。

年、其の賞として法橋に叙せられた。後冷泉天皇の永承三年三月、山階寺の佛像を作り、其の賞として法眼に叙せられた。これが佛工に綱位を授ける事の始めである。定朝の製作した佛像は多いが、宇治平等院の阿彌陀佛、大原勝林院の佛像、壬生寺の地藏、陸奥の平泉寺金堂の佛像などが最も佳作である。

平安朝初期から此の頃までの佛像は、多く僧侶の手に成り、其の面相には威厳、品格があり、刀を施す事も精密であるが、併し其の體態は頗る不整頓で、寸尺の權衡を失ひ、四肢・服飾などは粗漫であつた。定朝の作は、面相はいふに及ばず、全體の姿容にも威嚴、品致を現はさうとし、寫實にも意を用ひ、寸尺の權衡をも得しめ、また木刻法・彩色術なども大いに精巧を加へた。而して定朝の製作技術が、當代人の好尚に應じた諸點は、顔面が圓く、眉目が細長く、全身が豐滿で、製様が柔かて、高麗

の風格を帯びた所などである。

定朝は後冷泉天皇の天嘉五年八月一日に歿したが、定朝の子覺助は七條の佛所に在り、父の業を繼いで法橋に叙せられた。覺助の子に頼助・院助があり、頼助の子に康助があり、康助の子に康朝があり、また院助の子に院覺・院朝があり、院覺の子に院尊があり、何れも定朝の技を繼いで世に名を揚げた。定朝の弟子長勢も彫刻に秀で、法印に叙せられ、三條佛所の祖となつた。定朝の宅地の跡は、京師七條の金光寺の地であるといふ。

### 上東門院

じやうとうもんゐん  
名 號 藤原彰子といひ、法名を清淨覺といふ。  
系統 法成寺開闢白藤原道長の一女で、母は左大臣源雅信の女倫子である。一條天皇の中宮で、後一條・後朱雀兩天皇の御母である。

る。

事 蹟 長保元年十一月に一條天皇の女御となり、二年二月十五日に中宮となり、寛弘九年二月十四日に皇太后となり、寛仁二年十月十六日に太皇太后に進んだ。曾て式部に師事して學を修められた事もある。萬壽三年正月十九日に尼となり、同日上東門院の號を賜はつたが、時に三十九歳である。承保元年十月三日、八十七歳で薨せられた。歿時には八十五歳・八十六歳説などがある。

### 聖德太子

しやうとくだいし  
名 號 御名を厩戸皇子といひ、また上宮皇子・豐聰耳皇子・上宮厩戸豐聰耳皇子ともいひ、後世其の德行を尊んで聖德太子といふ。  
系統 用明天皇の第一皇子で、御母は穴穗部間人皇后である。

事 蹟 穴穗部間人皇后が、この皇子を懐胎して臨月になられた時、たま／＼宮省を巡視されたが、馬殿に行かれた時に安産されたので、厩戸と名づけられた。

厩戸皇子は生れつき聰敏で、稍々長じて、好んで書を讀み、一時に能く十人の評を聽いて、はゞ違錯のない位であつた。佛法を高麗の僧惠慈に學び、篤く之を信じ、また儒學を博士覺智に習ひ、何れにも通達された。用明天皇は太子を愛重し、宮南の上殿に置かれたので、上宮厩戸豐聰耳皇子といふ。

用明天皇が、瘡を患はれた時には、太子は晝夜御側侍つて、佛に祈誓された。用明天皇が崩せられてから、物部守屋は穴穗部皇子を立てようとしたが、蘇我馬子は遂に穴穗部皇子を書し、また厩戸皇子と謀つて守屋を攻め殺し、皇弟崇峻天皇を立てたので、物部氏は滅び、獨り蘇我氏が政權を握る様になつた。

崇峻天皇は馬子の驕暴を惡まれ

たが、馬子のために就途にあはれたので、群臣は敏達天皇の皇后を迎立した。これが推古天皇で、我が國最初の女帝である。厩戸皇子は攝政となつて萬機を攝せられ、我が國固有の制度・習慣を本とし



(像 畫 子 大 德 聖)

から傳はつた曆を天下に頒布し、(四)馬子と共に國史を撰修された事などである。併し此の國史は、蘇我氏滅亡の時に焼けて、今は傳はらない。十七條の憲法は次の通りで、道徳上の訓戒である。

- (一)和を以て貴しとなし、竹ふことなきを宗とせよ。
- (二)篤く三寶(佛敎)を敬へ
- (三)詔を承けては必ず謹め。
- (四)群臣・百官は禮を以て本とせよ。
- (九)信はこれ義の本なり、事ごとに信あるべし。
- (十二)國司・國造は百姓より欽めとることなかれ。國に二君なく民に兩主なし。國民は王を

て、それに大陸文化の長所を加へ、種々の新政を行はせられた。新政の主なもの、(一)冠位十二階を制し、諸臣に冠を賜はつて等級を分ち、(二)十七條の憲法を作つて官民の心得を示し、(三)先に百濟

以て主とす。(十三)諸の官吏は皆責任を重んぜよ。(十七)大事は獨り斷むべからず、必ず衆と與に論すべし。

厩戸皇子は、推古天皇の十五年に、小野妹子を隋に遣はして、國書を送り、始めて支那と公の國交を開かれた。此の頃、隋は煬帝が位に在り、支那を一統して勢が盛んであつたが、此の時の我が國書には、「日出づる處の天子、書を日没する所の天子に致す。恙なきや云々」と記され、對等の禮を以てされた。

聖十六年、隋使 裴世清は妹子を送つて來朝したが、妹子は更に隋使を送つて支那に赴いた。其の時、南淵請安・高向玄理・僧旻など、八人の僧侶・學生を留學させられた。

やがて隋は滅び、唐となつたが、唐と我が國との交通は頻繁で、從來、朝鮮を経て我が國に渡來した大陸文化は、直接に唐から渡來する様になり、大いに我が文化の發

達を促した。

厩戸皇子は、篤く佛敎を信じ、馬子と共に其の興隆に盡力された事が大である。(一)自ら佛敎の註釋を作つて經文を講じ、(二)攝津に四天王寺を、大和に法隆寺を建て、(三)また多くの佛像を造り、大いに佛敎を弘められた。故に推古天皇の末年には、四天王寺・法隆寺を始めとして、寺院の数は四十六個寺に上り、僧侶の数は千三百八十五名の多きに達した。欽明天皇の十三年に始めて佛敎が傳來してから、こゝに至るまで僅か七十餘年である。

我が國に於ける佛敎の興隆は、厩戸皇子の崇佛に負ふ所が大であるが、佛敎の興隆に伴つて、大陸から寺工・瓦工・佛工・畫工などが來朝し、建築・彫刻・鑄金・繪畫・刺繍などの美術工藝が著しく進歩し、また鞍作・鳥(鳥佛師ともいふ)の様な大彫刻家を出したので、此の時代を美術史上推古時代(飛鳥時代)といふ。

聖徳太子は、未だ即位されない中に斑鳩宮で薨せられたが、時に推古天皇の二十九年で、御年四十九歳である。天下の人々はこれを哀惜し、哭泣の聲が道路に満ち、月を踏んで絶えなかつたといふ。著書は勝鬘・維摩・法華經疏（上宮疏ともいふ）及び天皇記・國記などがある。『あさたし・阿佐太子』の項を参照されたい。

### 聖徳太子妃

しやうとくたいしひ

**名** 聖徳太子の妃、位奈部イナベ大郎女をいふ。

**系統** 推古天皇の三十年二月、聖徳太子が御隠れになつた後で、橋大郎女は太子を遺慕するの餘り、天壽國に往生されて居る太子の御姿を、繪畫に表現して見たいといふ熱望から、推古天皇の許可を受け、棕部奈久麻に監督させて、天壽國曼陀羅繪帳を作らせられた。此の時に作られたのは、長

さ一丈六尺のものの二帳で、其の下繪は東漢末賢・高麗加西遊・漢奴加巴利らの歸化人が描き、それに多くの采女（女官）が刺繍したが、今に中宮寺に傳はつて居る天壽國曼陀羅繪帳の断片はこれである。

天壽國といふのは、無量壽國の事である。古くは「無」の字を「无」と書いたが、これは天の字と誤られ易い字形である。而して後に量の字を脱落し、それが訛傳されて、天壽國になつたのであらう。無量壽國は極樂淨土の事であるから、橋大郎女は極樂淨土に往生して居られる太子を繪圖に表現させられたのである。中宮寺にある残片では、全體の圖様は分らないが、其等の残片を集めて見ると、多くの人物・鬼形・日月・雲様・龜甲・宮殿・蓮華などが施されて居り、蓮華の中から子供の生れた有様を描いたものもある。

天壽國曼陀羅繪帳の材料を見るに、繪の地は紫の紗と、黄色の綾

との二種で、色絲には植物性染料で染めたと思はれる朱・丹・黄・緑・藍・紫及び白などの練絲を用ひ、頗る單純に施工してある。刺繍であるから、單純な色彩になり易いが、併し當時はこれ位の染料しか使用されなかつたものとも考へられる。

### 稱徳天皇

しやうとくてんのう

**名** 御名を阿閉（阿倍）といひ、法名を法基尼といひ、高野姫尊・高野天皇とも稱する。

**系統** 聖武天皇の第二皇女で、御母は光明皇后である。第四十八代の天皇である（重祚）。

**事蹟** 天平二十一年七月に即位して、第四十六代孝謙天皇となられたが、藤原仲麻呂（不比等の孫）を信任し、在位十年、仲麻呂の勸めによつて、位を淳仁天皇に譲り、自ら太上天皇（上皇をいふ）となつて政をとられた。時に

天平寶字二年である。其の後、仲麻呂は上皇の寵を得て、姓名を惠美押勝と賜はり、頗る専恣を極めて居たが、僧道鏡が用ひられる様になつてから、之を怨んで叛を謀り、藤原豐成に征せられた。

ついで上皇は淳仁天皇を廢して淡路にうつし、自ら重祚して第四十八代稱徳天皇となられた。厚く道鏡を信任され、道鏡を太政大臣禪師に任ぜられたが、遂には法王の位を賜はつて、恣に政を執り行つた。時に太宰主神智宣阿曾麻呂が道鏡に媚び、宇佐八幡の神託と稱し、「道鏡をして皇位に即かしめたまはゞ天下太平ならん」と奏上した。よつて天皇は和氣清麻呂を宇佐に遣はし、更に神託を受けさせられた。清麻呂は宇佐から還つて、「我が國は、開闢以來君臣の分定まれり。未だ臣を以て君とせることあらず。天日嗣は必ず皇緒を立てよ。無道の者は速に除くべし」と奏上した。道鏡は大いに怒り、清麻呂の名を別部磯城麻呂

と改め、官を奪つて大關に流した。併し清麻呂の爲に道鏡の非望が挫け、我が國體は全きを得た。稱徳天皇は在位五年、神護景雲四年八月四日、聖壽五十三歳で崩せられた。大和國生駒郡平城村高野陵に葬る。「わけのきよまる・和氣清麻呂」、「だうきやう・道鏡」の項を参照されたい。

### 少貳頼尙

せうによりひさ

**系統** 少貳貞經の子である

**事蹟** 太宰大貳に任じ、筑後守となり、從五位に叙せられた。元弘年中には、後醍醐天皇の命により、父貞經に従つて、九州探題北條英時を攻め殺した。

後に足利尊氏に黨したが、延元元年二月、尊氏が京都の東北札河原の戦に敗れ、九州に落ちて来た時には、頼尙は父の命を受けて之を迎へようとした。偶々菊池武敏は兵三千を率ゐて、頼尙を水木

邊に逐撃したので、頼尙は大いに敗れ、走つて赤馬關に逃れ、尊氏と共に蘆屋池に至り、箕尾濱に陣した。

武時は頼尙を水木渡に破つてから、更に貞經を太宰府に襲ひ、遂にこれを内山に斃し、大兵を擡して多々良濱に陣し、尊氏の來るのをまつた。時に尊氏は頼尙を召して軍略を講し、自ら多々良濱に戦つて武敏を破り、頼尙は筑後川に戦つてまた武時を破つた。

同年四月、尊氏は東上の途に就いたが、此の時、頼尙は兵二千に將として、足利直義に従つて陸路から進み、澁川の戦に殊功があり、遂に京都に入り、延暦寺を攻めて敗れ、ついで官軍を阿彌陀峰に破り、後に筑前に歸つた。

正平十四年七月、菊池武光が征西大將軍懷良親王を率じて來攻したので、頼尙は筑後川を隔て、對陣した。武光が川を渡つて進んだので、退いて大原に陣取つた。八月十日の夜襲に遇つて大敗し、翌

日、苦戰數十回に及んだが、遂に敗れて太宰府に退き、豐萬ヶ嶽を保つた。筑後川の戦に就いては、「きくちたけみつ・菊池武光」の項を参照されたい。

### 聖武天皇

しやうむてんのう

**名** 御名を首といふ。また天壽國押開豐彦尊・勝寶感神聖武皇帝とも稱する。法諱を勝滿といふ。

**系統** 文武天皇の第一皇女で、御母は藤原不比等の女宮子である。第四十五代の天皇である。

**事蹟** 和銅七年六月、元正

天皇の皇太子となり、神龜元年二月、讓を受けて即位された。天平元年八月、夫人藤原安宿媛（藤原不比等の女）を立て、皇后にされた。これが光明皇后である。我が國の慣例及び令制では、皇后となるものは皇族に限られて居たが、安宿媛の册立によつて是等の古制が破れた。

聖武天皇の世は、奈良時代の最盛期で、時恰も唐の極盛期（玄宗の開元の治）に當り、我が國の文化も其の影響を受けて著しく進歩した。年號にちなんで天平時代といふ。

天皇は深く佛教を尊信し、諸國に勅して國分寺・國分尼寺を建て、親ら經文を書寫し、天下泰平・國土安穩を祈られ、また奈良に東大寺（大和の國分寺）を建て、金銅の盧舍那佛を安置された。奈良の大佛はこれである。この大佛の開眼式の時には、親しく佛前に北面して三寶の奴といはれた。此の他多くの寺院を建立して、土地を密

附されたことが頗る多く、其の爲に國家の財政が亂れた位である。併し美術工藝の進歩したことは前後無比である。在位二十五年で、位を孝謙天皇に譲り、自ら太上皇と稱し、出家入道して勝滿と號せられた。改元三回、天平勝寶八年五月二日に崩せられた。聖壽五十六。大和國添上郡佐保村大字法蓮佐保山の南陵に葬る。「くわうみやうくわうごう・光明皇后」の項を参照されたい。

### 諸葛孔明

名 號 名は亮、字は孔明、諡號を忠武公といふ。

事 蹟 支那三國時代（我が神功皇后攝政の世）に於ける蜀の忠臣である。はじめ亂を避けて曩陽の隆中（今の湖北省の地）に寓居し、常に自ら管仲・樂毅に比した。曾て蜀の劉備は、司馬徽に賢士を尋ねたが、徽は孔明を以て

時務を識つた俊傑であると稱し、徐庶もまた孔明を臥龍と稱した。よつて劉備は三たび孔明の草廬を訪ひ、始めて面會する事が出来たので、天下の大計を問ひ、禮を盡して招聘したので、遂に孔明は其の知遇に感じて劉備に仕へ、蜀の領内を治め、國力を養ひ、領土を廣め、劉備と交情が日に密であつた。然るに關羽・張飛をはじめ、劉備の近臣は之を喜ばなかつたので、劉備はこれを慰撫して、「孤之有孔明、猶魚之有水也、願諸君勿復言」といつた。

劉備が吳の孫權と結び、魏の曹操を赤壁に破つて北に遂ひ、更に益州即ち巴蜀（四川）の地に入つて之を經略し、成都を首府とし、荊州の守將關羽をして曹操を衝かせたのは、實に孔明の策を實現したもので、斯くて魏・吳と相並んで、蜀の勢を盛んにし、所謂三國時代を作つたのは、實に孔明の力である。劉備は漢朝の子孫であつたから、帝位に即いて國號を漢（蜀）

漢ともいふ）と稱し、孔明を丞相に任じ、大いに蜀を興さうとしたが、未だ志を得ない中に歿した。時に西紀二二三年（神功皇后攝政の二三年）である。

劉備は歿するに臨み、天下の大事を孔明に託し、「嗣子（劉禪）輔く可くば之を輔けよ、若し不可ならば自ら代りて天下を取れよ」と言つた。孔明は遺詔を奉じ、劉備の子劉禪を輔け、内に在つては宰相として政を治め、吳と結んで魏に當るの策を定め、外に出でては自ら軍を率ゐて魏を侵し、また南夷を征し、終身漢業の恢復に任じたが、西紀二二四年（神功皇后攝政の三四年）に魏を討ち、五丈原（陝西郿縣西南）の陣中に病歿した。敵將司馬仲達は之を聞いて直ちに蜀軍を追撃したが、蜀軍の逆襲にあひ、恐れて退却し、「死せる孔明生ける仲達を走らす」といふ物笑ひの種を残した。其の誠忠の情は、前後二回劉禪に奉つた有名な「出師表」に現はれ、切々

として人を感動させる。じよめいてんのう

### 舒明天皇

名 號 御名を田村といふ。また息長足日廣額天皇とも稱する。

事 蹟 敏達天皇の皇孫である。御父は押坂産人大兄皇子で、御母は敏達天皇の皇女嬖手姫である。第百三十四代の天皇である。

推古天皇の崩後、大臣蘇我蝦夷は群臣を其の家に會して皇嗣を議した。大伴鯨は田村皇子を立てようとし、許勢大麻呂・佐伯東人・紀理手らは、聖德太子の御子山背大兄王を推し、衆議が決しなかつた。蝦夷は心を田村皇子に傾け、これを叔父の按部麻理勢に謀つた。然るに麻理勢は山背大兄王を立てようとして主張したので、蝦夷は兵を遣つて麻理勢を殺し、田村皇子を即位させた。これが舒明天皇である。

しらかはてんのう

### 白河天皇

名 號 御諱を貞仁といひ、法諱を融覺といふ。世に六條帝と稱する。

系 統 後三條天皇の第一皇子で、御母は藤原公成の女茂子である。第七十二代の天皇である。

事 蹟 天喜元年六月に降誕され、延久元年に後三條天皇の皇太子となり、同四年十二月二十九日に即位された。時に御年二十歳である。

天皇は剛毅で、また果斷で、後三條天皇の遺志を繼いで皇權の擴張に努め、萬機を親裁されたので、藤原氏の勢威は漸く衰へ、大政が宸衷から出る様になつた。併し愛

憎が意の儘で、授官任職は舊典に據らず、最も源俊明・藤原順隆らを任用されたので、攝政の巨も之を憚るに至つた。

應徳三年十一月二十九日、堀河天皇に讓位されたけれども、尙ほ院政を置いて政を執られた。これを院政の起源とする。これから堀河・鳥羽の二朝を経て崇徳天皇の大治四年に至る四十餘年間は、政權は全く其の掌中に移り、院宣は詔勅よりも重く、大臣・關白は殆んど空名の職となつた。寛治元年に鳥羽宮を營み、これに徙られたが、嘉保二年には閑院を造り、郁芳門院と共にここに徙御し、此の年に始めて院中に北面の武士を置かれた。永長元年には郁芳門院を喪ひ、哀悼して佛門に入り、遂に落飾して法皇となられた。

白河法皇は深く神佛を敬し、佛法の興隆に盡されたが、それは法皇の豪奢と相俟つて發展した。自ら金字で大藏經を寫し、法華經を増譽に受け、支義文句止觀を良眞

に受けられたが、承暦元年十一月には勅願寺を白河に建て、法勝寺といひ、百官を率ゐて臨幸し、封戸一千五百戸を給せられ、後屢々此の寺に行幸して大法會を行ひ、千僧に讀經させられた。其の在世中に、高野に行幸すること前後四回、熊野に行幸すること前後八回に及び、それを慶する所の靈佛五千四百七十餘幅、丈六の佛像百二十七軀、等身の佛像三千五百五十軀、三尺以下の佛像二千九百三十餘軀、七寶塔二十一基、小塔四十四萬六千六百三十餘基に及んだ。且つ天下の殺生を嚴禁し、鷹・隼、其の他の鷹鳥を放たせ、漁網八千八百餘張を燒かせ、式條に載せた諸國の買魚を停め、平日の供御も殆んど六齋日の様であつた。

法皇はまた土木を好み、屢々華麗な宮殿・寺塔を造られたので、崇佛と土木の爲に國用が足らず、財政は大いに亂れ、賣官の弊風が再現し、米一萬石または絹一萬匹を上る者は、容易に國司に任せら

られたので、國司の遷替が舊典に非き、頗る紊亂を極め、地方の政治が廢弛した。而も上下競つて華麗を尚び、奢侈は天下を風靡し、延曆寺・園城寺・興福寺・東大寺の僧徒は我が儘を振舞つたので、朝威は再び衰へる様になつた。曾て法皇は、「天下、朕が意の如くならざるもの三つあり。鴨河の水、雙六の采、山法師これなり」と嘆せられた。

また法皇は射に秀で、詩歌を好まれたが、後拾遺集・金葉集・續本朝秀句などは、みな勅撰である。大治四年七月三日、聖壽七十七歳で崩せられた。山城國紀伊郡竹田村成善提院陵に葬る。

じんぐうくわうごう

### 神功皇后

名 號 御名を息長足姫命といふ。

系 統 開化天皇五世の孫である。御父は息長宿禰王で、御

母は葛城高祖媛である。

事蹟 幼少の頃から、聰敏で、また容貌が壯麗で、仲哀天皇の二年に其の皇后となられた。天皇と共に越前角鹿(敦賀)の雷飯宮



(圖路進后皇功神皇天哀仲)

に行啓されたが、たま〜熊襲背叛の報に接し、穴門(長門)の豊浦宮に至つて天皇に會し、共に筑紫に行き、筑前の櫛日宮で熊襲征伐の事を議し、「熊襲が叛くのは、新羅の後援に因る。故に新羅

を討てば、熊襲は自ら服しよう」と主張されたけれども、天皇に用ひられなかつた。間もなく天皇は熊襲を親征し、陣中に崩されたので、皇后は大皇太后(武内宿禰)と謀り、天皇の喪を秘し、別將鴨別を遣つて熊襲に當らせ、自ら男装して、急に新羅征伐に向はれた。時に紀元八百六十年である。即ち舟師を率ゐて、對馬の和珥津に至り、この地から順風に乘じて直ちに新羅に達せられた。時に新羅王波沙家錦は、皇師を見て大いに畏れ、御船の前に進み、「今からは何部となり、且つ毎年に貢物を上らう」といひ、また「たとひ太陽が西から出で、鴨綠江がさかさまに流れ、河原の石が天に昇つて星となつても、永く貢物を缺く事はない」と誓つた。

よつて皇后は、彼を伺部となし、其の國都に入つて府庫を封じ、國籍文書を收め、大矢田宿禰を止め、鎮將とし、新羅の人質及び貢船八十艘を従へて凱旋された。三韓文化が傳來して、日本文化の發達を促したのは、實に神功征韓の結果である。凱旋の途次、筑紫で響田別皇子を生まれた。これが應神天皇である。皇后は群臣を率ゐて、穴門の豊浦宮に移り、仲哀天皇の喪を發し、海路から京師に向はれた。大また仲哀天皇の庶王子麩坂皇子・忍熊皇子は、皇后の行爲に不平を抱き、兵を擧げて之を道に要撃された。よつて皇后は、武内宿禰らを率ゐて二王子の亂を平定し、爾來、應神天皇を奉じ、久しく政を攝せられた。これが我が國に於ける攝政の始めである。御年百歳で崩せられた。後世、其の盛業を仰ぎ、神功皇后と尊稱する。大和國生駒郡平城村山陵院城盾列池上陵に葬る。

### 新見正興

しんみまさおき

名號 新見豐前守正興といふ。

系統 江戸時代末葉の幕臣で、外國奉行に擧げられた。萬延元年、幕府は米國に對して關印した通商條約の交換を米國の首府ワシントンで行ふ事になり、始めて遣米使節を派遣する事になつた。

即ち外國奉行の新見豐前守を正使とし、同役の村松淡路守と、目付の小栗豐後守とを副使とし、七十餘名の隨行員と共に、米國に派遣する事にしたが、一行は通商條約の交換を終つて歸朝した。

此の時、米國は我が使節の渡航費用を負擔する事とし、此の使節を迎へる爲に軍艦ボーハタン號を日本へ派遣した。使節の一行は神奈川で乗込み、萬延元年正月十三日に出發した。時に幕府は、時の軍艦奉行木村敏(芥舟)を使節護

衛として、軍艦成隆丸(八百噸)を派遣した。成隆丸は乗組員約七十名で、艦長は勝安芳であつた。一行が太平洋に乗出すと、天候不良の日が續き、狂風怒濤の爲に成隆丸の船二艘は甲板から奪はれた。成隆丸の航行は頗る危まれたが、安芳の沈毅に勵まされ、乗組員の操縦宜しきを得て、神奈川出帆後三十八日目に、桑港に安着した。蓋し我が軍艦が太平洋を横斷したのはこれが始めである。

### 神武天皇

じんむてんのう

名號 第一代の天皇で、御諱を狹野尊・若御毛沼命・豊御毛沼命といふ。また神日本尊余彦火火出見天皇と稱する。

系統 鸕鷀草葺不合尊の第四皇子で、御母は海神の女王依姫である。すなはち鸕鷀草葺不合尊は高千穂宮に在し、五瀬命・稻氷命・三毛入野命・狹野

尊を生まれたが、五瀬命は東征の際に流矢に中つて薨じ、稻氷命は海神國に入り、三毛入野命は常世國に行かれ、狹野尊が大統を嗣がれたのである。因に神武天皇の御兄弟の順序は諸書によつて若干の異同がある。臨以來、九州地方は既に皇化に浴したけれども、東國地方は未だ皇化に浴せず、多くの酋長が各地に割據し、互に争鬪を事として居たが、當時、東國の事情は既に高千穂宮にも聞えて居た。神武天皇は日向の地が餘り南に偏り、其の爲に皇化が國中に及ばないので、皇兄五瀬命と鬪り、東方の美地に遷つて天下を治めようとして、諸皇族及び群臣を率ゐて、



(圖路順征東皇天武神)

これらから筑紫の岡水門に行き、こゝに岡田宮を建て、居り、更に途を瀬戸内海に轉じ、安藝の埃宮

御東征の壯途にのぼられた。紀元前七年十月、先づ舟師を率ゐて日向を發し、海路速吸門を過ぎ、漁人珍彦の嚮導により、國の蕨狹に行かれた。時に土臺の蕨狹津彦・蕨狹津彦・足尾彦・足尾彦を建て、宮を建て、皇軍を構つた。

に居り、吉備の高島宮に移り、この地で大いに舟楫を整へ、兵食を蓄へ、一擧にして大和を平定しようとなされた。紀元前三年二月、高島宮から海路東航して浪速に着き、河内から膽駒山を越えて大和に入らうとした。時に大和の鳥見長髓彦があり、天神の齋庭連日命を奉じて勢が強く、皇軍を孔舎衛坂に拒ぎ、五瀬命は流矢に中つて負傷された。そこで天皇は、「我は日の神の裔であるから、日に向つて戦ふのは利を得る所以でない。日を負つて戦はう」と決心され、軍を班して河内に退き、海路茅渚水門を過ぎ、紀國の雄水門に行かれた時に、五瀬命は傷を病み、龍山で薨せられた。天皇は回航して熊野に到り、海を絶つて進まれたが、暴風の爲に御船が漂着したので、稻氷命・三毛入野命は憤つて海に没せられた。天皇は荒坂津の丹敷戸畔を征し、道臣命・大日命を先導とし、險を越えて



す

推古天皇

御名を豊御食炊屋比賣命といふ。

御名を豐御食炊屋比賣命といふ。欽明天皇の第三皇女で、御母は蘇我稻目の女堅鹽姫である。敏達天皇の皇后であられたが、天皇の崩後、朝廷に重きをなされ、後に第三十三代の天皇になられた。本邦女帝の始めである。

御名を神海名川耳尊命といふ。神武天皇の第三皇子で、御母を媛蹈鞬五十鈴媛命といふ。第二代の天皇である。

綏靖天皇

御名を神海名川耳尊命といふ。神武天皇の第三皇子で、御母を媛蹈鞬五十鈴媛命といふ。第二代の天皇である。

御名を神海名川耳尊命といふ。神武天皇の第三皇子で、御母を媛蹈鞬五十鈴媛命といふ。第二代の天皇である。

垂仁天皇

御名を活目尊といふ。また活目入彦五十狹茅天皇とも稱する。

御名を活目尊といふ。また活目入彦五十狹茅天皇とも稱する。崇神天皇の第三皇子で、御母は大彦命の女御間城姫命である。第十一代の天皇である。

天皇が崩せられ、庶兄の手研耳命が政治を預り開かれたが、密に皇位を望んで、神海名川耳尊を害しようとなされたので、尊は兄の神八井耳命と謀り、手研耳命を殺して即位された。これが綏靖天皇である。天皇は容貌が魁偉で、沈毅で、武藝が衆に勝れ、葛城の高丘ノ宮で天下を治められたが、在位三十三年、聖壽八十四歳で崩せられた。大和國高市郡白檮村大字四條桃花鳥田丘上陵に葬る。

天皇は敬神の念が深く、天照大神鎮座の地を探されたが、神託によつて伊勢國を可とし、二十五年三月、八咫鏡と天叢雲劍とを笠羅邑から伊勢五十鈴川のほとりに遷し、ここに天照大神を祀り、皇女倭姫命をして奉仕せしめられた。これが皇大神宮で、一に内宮とも

天皇は敬神の念が深く、天照大神鎮座の地を探されたが、神託によつて伊勢國を可とし、二十五年三月、八咫鏡と天叢雲劍とを笠羅邑から伊勢五十鈴川のほとりに遷し、ここに天照大神を祀り、皇女倭姫命をして奉仕せしめられた。これが皇大神宮で、一に内宮とも

御名を豊御食炊屋比賣命といふ。欽明天皇の第三皇女で、御母は蘇我稻目の女堅鹽姫である。敏達天皇の皇后であられたが、天皇の崩後、朝廷に重きをなされ、後に第三十三代の天皇になられた。本邦女帝の始めである。



御名を神海名川耳尊命といふ。神武天皇の第三皇子で、御母を媛蹈鞬五十鈴媛命といふ。第二代の天皇である。



(輪 埴)

御名を活目尊といふ。また活目入彦五十狹茅天皇とも稱する。

陶晴賢

名を隆房・興房といひ、確鑿して卓錫軒全蓋(全義)と號した。

大内氏の一族で、世々其の重臣である。晴賢は幼少から大内義隆に仕へ、中務大輔に任じ、尾張守を兼ね、從五位上に叙した。時に義隆は心奢り、文事を弄び、武備を怠り、専ら便俗を寵し、嬖臣に國事を任せた。晴賢はこれを憂へ、屢々諫言したが、容れられなかつたので、杉重政・内藤興盛らの宿臣と共に、竊かに異圖を抱くに至つた。また嬖臣相良武任は、屢々晴賢以下の徒を讒したので、義隆は晴賢を嫌惡するやうになつた。天文十九年、晴賢は黨を結んで武任を討たうとした。時に武任は



識を構へ、「晴賢、臣を討つを以て名と爲し、實は國家を謀らんとす」といつたので、義隆は識を信じて大いに怒り、人を遣つて晴賢を詰責させた。よつて晴賢は陳謝し、富田若山城に歸り、人を豊後に遣り、密に大友宗麟に告げて、「臣、義隆の疎斥する處となり、危急漸く至る。因りて廢立を圖らんとす。請ふ貴族一人を奉じて社稷を保たん」と言つたが、宗麟は喜んで之を許諾した。然るに義隆は、晴賢が陳謝して若山城に歸つたのを見て、畏怖蟄居するものと思ひ、武備を怠り、益々佚樂に耽つた。二十年五月、義隆は始めて晴賢の異圖を知り、援を大友宗麟に請うたけれども、宗麟は應じなかつたので、冷泉豐隆らに命じて兵を集めさせたが、事急な爲に、集まる者は六千餘人に過ぎなかつた。

天文二十年八月、晴賢は杉重政・内藤興盛らと共に兵を擧げ、山口に迫つて筑山館を包圍し、火を放つて攻めたが、義隆の軍は死傷者、逃走者が多く、義隆は家士と共に長門に逃れ、深川大軍寺に入つて自殺した。時に同年九月朔日である。乃ち晴賢は、大友宗麟の弟義長(義隆の甥)を迎立し、大内家の嗣となし、自ら權を恣にし、薙髮して全義と號した。

時、毛利元就は、陽に晴賢に通じ、陰に之を討つ機會を待つた。即ち仇を復するを名として、嚴島の有ノ浦に宮尾城を築き、己斐豊後守に守らせ、反間を放つて晴賢の大兵を險隘の地に誘ひ、寡兵を以て一舉に勝敗を決せんとした。弘治元年九月、晴賢は船艦五百艘に兵二萬を率ゐ、周防の岩國を發して渡島し、嚴島の左方塔ヶ岡に陣した。時に元就は夜陰に乗じ、小船に數千の兵を積み、嚴島の西南岸を迂迴し、鼓ノ浦に上陸させ、山頂を攀ぢ、晴賢の本陣の背後に出で、十月一日の黎明に、鯨波を擧げて襲撃した。晴賢の軍は大いに狼狽した。三浦越中守・弘中三河守らが奮戦したけれども、軍規

を亂して潰走し、晴賢は船で逃れようとして果さず、青苔濱で自殺した。元就は其の首を洞雲寺に送つて陳謝し、佛事を修したといふ。「おほうちよししたか・大内義隆」、「まうりもとなり・毛利元就」の項を参照されたい。

すゑよしまござらぬ

**末吉孫左衛門**  
名 號 名を吉康といひ、通稱を孫左衛門といふ。  
系 統 末吉氏は坂上田村麻呂の後裔である。吉康の父を末吉利方といひ、攝津の大阪で南洋貿易を営んだ。

**菅原道眞**  
名 號 字を三といひ、幼字を阿呼といふ。世に菅丞相と稱し、薨後、神に祀られて天滿天神と號する。  
系 統 菅原氏は野見宿禰の裔である。最初土師氏を稱したが、光仁天皇の朝、道眞の曾祖父(よらふ)は奏請して姓を改め、其の居地に因んで、菅原を氏とした。古人の子を清公といひ、清公の子を是善といひ、是善の第三子は即ち道眞

である。古人・清公・是善は、何れも學者である。

**事 蹟** 道眞は幼少から穎悟で、十一歳の時に詩を作り、「月耀如晴雪、梅花似照星、可憐金鏡轉、庭上玉房馨」と賦したので、是善は嘆賞したといふ。清和天皇の貞觀中に文章得業生となり、下野權掾を授けられた。或る日、道眞が都良香を訪ふた時、偶々良香は射をじしたが、「道眞は儒生であるから、弓術は知らないであらう」と、試みに弓矢を道眞に授けたが、道眞は一發で的中したので、觀る者は驚いたといふ。ついで對策に及第して文書助となり、少内記に任せられたが、やがて母の喪に會つて辭した。十六年從五位下を授けられ、兵部少輔・民部少輔を経て、陽成天皇の元慶中には式部少輔兼文章博士となり、詔を奉じて後漢書を講じた。仁和二年正五位下讃岐守に遷り、任地に赴いた。而して道眞が阿衡事件の際に、書を關白藤原基經に呈し、

權衡相を教つたのは、讃岐在任中に上京した時の事である。

道眞は寛平二年に任期が満ちて歸京したが、三年二月、宇多天皇に召されて昇殿し、藏人頭に任せられた。蓋し此の時に當り、關白基經が既に薨じて居たので、宇多天皇は藤原氏の權を殺がうとする御心があり、密に道眞の用ふるに足る事を看破し、引いて眞黨と爲し、累りに官位を進められた。四年には從四位下に陞り、左京大夫を兼ねた。宇多天皇が敦仁親王を立て、皇太子とされてからは、獨り道眞と議し、他は與かるものになかつた。以て信任の厚きを知るべきである。五年には參議に任じ、式部大輔・左大辨・勘解由長官・春宮亮を兼ねた。六年八月、遣唐大使に任せられたが、偶々在唐の僧中瓊が書を寄せて、唐國擾亂の事を報じたので、道眞は奏上して遣唐使を止めんことを請ふた。朝議はこれに賛成したので、遣唐使は遂に停廢に歸した。此の年、道

眞は五十歳であつたから、門人は宴を設けて之を賀した。偶々一老父が賀章及び沙金を案上に置き、顧みないで去つたので、衆は之を見て怪んだが、後で探聞すると、實に天皇の設けられた所であつた。以て其の寵遇を知るべきである。爾來、累進が著しく、七年には從三位中納言になり、八年には民部卿を兼ね、九年には大納言となり、右大將を兼ね、氏の長者となつた。同年七月、天皇は位を敦仁親王(御年十三歳)に讓られたが、これが醍醐天皇である。

思ふに宇多天皇には皇子が多かつた。醍醐天皇は内大臣藤原高藤の女胤子の生む所である。基經の女胤子、道眞の女胤子の腹には皇子がなかつた。晩年、藤原時平の女養子の腹には三親王があつたけれども、皆讓位の後であつた。故に藤原氏の權を抑へようとされる宇多天皇の御意志では、藤原氏の勢力を代表して居る時平の女に皇子の生れない以前に讓位すること

が極めて肝要であつたから、密にこれを道眞に謀議し、且つ其の意見により、停留すれば事變が起るに相違ないと推察し、七月三日、敦仁親王の元服と同時に、これに讓位されたのであつた。

醍醐天皇が即位され、道眞・時平の兩人が幼主を輔けて機務を參決した。併し讓位は道眞の贊助によつたのであるから、天皇は特に道眞を重んじられた。昌泰二年には、時平を左大臣に任じ、道眞を右大臣に任じ、相並んで政を行はせられた。時平は家柄はよかつたけれども、年が若く、學識に於て道眞に匹敵することが出来なかつた。道眞の寵遇は日に厚く、禁中の内宴には常に道眞が關與した。三年、天皇は朱雀院に行かれ、宇多法皇と謀り、道眞を召して關白になさうとされ、「天下の政は、卿、宜しく專決して奏すべし」と内諭されたけれども、道眞は固辭して受けなかつた。

道眞は學者の家に身を起し、宇

多法皇に遭遇して不次登用され、位は將相を極め、また頗る治體に諳練し、裁決は流れる様で、紀綱が振肅した。時平は常に寵任の己れに勝るを嫉み、且つ朱雀院で密詔のあつた事を聞いて益々悦ばず、かねて道眞を快く思つて居ない源光・藤原定國・藤原菅根らと結び、協力して排陥しようとする。道眞は天皇を廢して、女婿の齊世親王を立てようとする志がある」と議奏した。時に天皇は御年が若く、在位の日がなほ淺く、遂にこれに惑はれ、道眞は俄かに太宰權帥に左遷された。時に昌泰四年正月である。源將を首め、常々時平と仲の悪い人々の連坐する者が多かつた。道眞は憂悶して自ら辯ずることが出来ず、和歌を以て法皇に哀訴した。「流れ行く我れは水府となりはてぬ、君、しがらみとなりて止めよ」(大鏡)。法皇は大いに驚き、天皇に見えて道眞を救はうとし、急いで清涼殿に赴かれたが、藤原菅根らは、門を閉ぢて入

れなかつたので、法皇は空しく還御された。道眞には二十三人の男女があつたが、みな配處を異にして遷された。僅かに少男少女の隨行を許されただけである。道眞が筑紫に行く途中、明石の驛で賦した詩に、「驛長無驚時變政、一榮一落是春秋」といふのがある。道眞は太宰府に居ること三年、此の間、深く謹慎して門を出でず、日々皇恩の厚いのを感拜して居た。近くにある觀音寺の鐘聲を聞いて、「都府樓觀看瓦色、觀音寺只聽鐘聲」と賦した。九月十日、都にあつて宮中の御宴に侍した時の事を思ひ、追懐の情を禁ずる事が出来ず、誠忠の心を詩に賦した。「去年今夜侍清涼、秋思詩驚馬斷腸、恩賜御衣今在袂、捧持毎日拜餘香」と。延喜三年二月、五十九歳で薨じた。筑前安樂寺に葬る。著書に三代實錄(諸儒と共編)・菅家文章・菅家詩集・新撰萬葉集・類聚國史などがある。

道眞は文章を能くし、詩歌に長じ、また博く經史に涉り、更に書道に達し、空海・小野道風と共に三聖と稱せられた。而して其の薨後、時平・菅根も相繼いで歿し、加ふるに屢々京都に災があり、また文献太子が暴かに薨せられたので、世人は之を道眞の祟りだといつた。醍醐天皇は深く悔悟され、延長元年に本官に追復し、正二位を贈られ、左遷宣旨及び外記の文書など、すべて道眞に關するものは焚失させられた。降つて一條天皇の正暦四年に至り、左大臣正一位を贈られ、ついで太政大臣を贈られた。

村上天皇の天曆中に、民間で始めて詞を北野に建て、道眞の靈を祀り、稱して天滿天神といつた。爾來、貴賤の別なく崇奉したが、朝廷では八月四日を以て祭禮を設け、二十二社の數に入れられた。一條天皇は寛弘元年に始めて北野神社に行幸されたが、これから歴朝相承て奉幣が絶えない。世に聖廟と稱する。太宰府神社と共に尊崇が厚い。後世、更に文字の神となし、各地に祀る者が多くなり、天神といへば、殆んど道眞に限るやうな有様となつた。

すぎうらしげたけ  
杉浦重剛

安政二年、近江の所<sup>所</sup>に生れた。夙に教育の事に携はり、生涯後進の黨陶に従ひ、其の感化が深大であつた。大正三年、東宮御學問所の設けあるに及び、召されて御用掛を命ぜられ、倫理科を擔任する事になり、誠心を傾けて進講の大臣を果し、大正十三年、七十歳で歿した。

重剛は人となり、高潔英邁で、友誼に厚く、其の交友も廣かつたが、永眠の数日前、地方の或る中学校長が、「先生の高風を慕ふの餘りにお訪ね致しました。是非拜顔の榮を得たい」と訪ねて来たが、病中で容態が悪かつた爲に、「折

角ではあるが、病床でお目にかゝるのも失禮と思ふから、纏つたならばお目にかゝる」と言はれて中学校長は歸つた。其の後二十分間ほど過ぎてから、重剛は取次ぎの書生を呼び寄せ、「何處の何といふ旅館にお泊りか、それとも親戚か友人の許にでも御滞留かな」と聞いた。書生が「お訊ねしなかつた」と答へると、重剛は「それはいけない事をした。纏つたならば私の方からお訪ねせねばならぬのに、お住所を聞いて置かなかつたのは誠に申譯がない。私が君に言ひつけなかつたのが悪かつた」と、心苦しさに言つたといふ。

すぎたきこ  
杉瀧子

長州萩藩士村田右中の第三女で、兒玉太兵衛の養女となつた。長じて杉百合之助の妻となり、吉田松蔭を生んだ。

生れたが、二十歳の時、兒玉太兵衛は其の人物を愛して養女とし、甥の杉百合之助に娶はせた。百合之助は杉七兵衛の長男で、敬神の念に富み、勤王の志の厚い人物であつたが、文化十年三月、大火の爲に家は焼け、城東郊外の松本村に移り、人の家に厄介になつて居たが、後に茅屋を立て、移つた。瀧子が嫁したのは文化十年で、百合之助は未だ藩役に就いて居なかつたので、家祿だけでは生活が出来ず、農業を営みながら細い畑を立てた。瀧子は二十一歳で長男の松蔭を生み、二十四歳で次男の松を産んだので、家事が次第に増したが、併し貧乏の中にも、よく姑に孝養を盡し、善く子供の教育に力めた。

人の子供が生れて居た。瀧子が嫁した時には、家が最も貧乏な時であつたが、夫を助けて勤め働んだ爲に、漸く暮しもよくなり、子供達も心掛けのよい立派な人になつた。長男の民治は、萬延元年父に代つて家を繼ぎ、後に藩吏となつて働いた。次男の松蔭は人物も優れて勤王の志が厚く、少壮から國家の爲に活動して、屢々國難や不運に遇つたが、瀧子はよく之を勵まして、最後まで愛國の志士として働かせた。百合之助は固より松蔭の後援者・激勵者であつて、海外渡航に失敗した後に、松下村塾を開く事が出来たのも、主として父の援助である。瀧子は松下村塾に集つた三百の門人を、我が子の様に愛し、自ら親切に衣食の世話をした。

瀧子の一生は、實に多難多事であつた。貧困と戦ひ、不運と戦つた許りでなく、四人の子供と四人の孫を喪ひ、更に多くの近親を失ひ、五十九歳の時には百合之助に別れた。併し此の貧乏、不運、不幸の裡に力強く生きて、少しも正道を誤る事がなく、妻・母・主婦として全力を發揮したが、晩年には極めて平和、光榮に満ち、其の寫眞は三條實美によつて明治天皇の御覽に供せられ、恩賜の羽二重を賜はり、昭憲皇太后からは病氣見舞の御菓子も賜はり、八十四歳の齡を保つた。

すぎたげんばく  
杉田玄白

名を震といひ、字を子鳳といひ、通稱を玄白といひ、九幸と號した。

若狭小濱藩の醫員杉田甫仙の子である。

玄白の分曉と同時に母は難産で絶命した。左右の人々は、母體救済に努力した爲に、生兒を顧る暇がなく、且つ難産の子であるから、到底生育覺束なしと思ひ、布片に包んで尊側に置き、

後にこれを顧みるに、なほ命を全  
らうし、而も男兒であつたから、人  
々は再び愁眉を開き、乳哺養育し  
て漸く生長するに至つた。  
十七八歳の頃、江戸牛込矢來の  
若州侯酒井氏の邸内に在り、或る  
(杉田玄白)



日、父に告げて曰く、「不肖兒、  
此の齡に至るまで、疎慢にして徒  
に日を消したり、願くば今より新  
に良師を求めて本業を習はん」と。  
父は喜んで之を許し、當時、二本  
儀に任んだ官醫西立首に就いて外

科術を學ばせ、また本郷の儒者龍  
門先生(宮瀬三郎左衛門)に就い  
て歴史を學ばせた。

二十五歳の時、藩主から部屋料  
五人扶持を賜はつたので、父に請  
うて外宅した。父が歿してから、  
新大橋にある藩の中屋敷に移つた  
が、こゝで蘭學開始の學があつ  
た。居ること数年の後に再び濱  
町に外宅し、これから家學を全  
備しようとし、奕世傳來の和蘭  
瘍科と稱する書を檢するに、何  
れも譯官を以て蘭人から聞書し  
たものゝみで、取るに足るもの  
がなかつた。また漢士の外科書  
を形儀するに、これも疎漏であ  
つて、何れに従へばよいか迷ふ  
位であつた。よつて新に日本一  
派の外科を創立しようと考え、  
日夜研究する所があり、遂に瘍科  
大成數卷を撰述した。  
其の後、和蘭原書内言圖を見て、  
臟腑筋脈などの漢説と大いに異な  
るを疑ひ、明和八年三月、小塚原  
で刑死の屍を解剖し、これを其の

すぎむらひろたらう

### 杉村廣太郎

號を楚人冠といふ。

繼續と號したこともある。明治五  
年、和歌山市に生れ、東京芝のユ  
テリアンの學校を出で、京都の本  
願寺文學寮に教鞭を執つた。三十  
二年、米國公使館の翻譯官となり、  
三十六年、東京朝日新聞社に入り、  
現に朝日グラフの主幹である。才  
氣が發揚に發露し、幾回も歐米に  
渡り、新聞記者として、社會批評  
家として、第一流の人物である。  
著書も尠少でない。

すぎゆりのすけ

### 杉百合之助

「すぎたきこ・杉瀧子」の項を參  
照されたい。

すくなひこな

### 少彦名

「まほくにぬしのみこと・大國主  
命」の項を參照されたい。

すけひとしんわう

### 典仁親王

名號 號を自在王院とい  
ひ、追諡を慶光天皇といふ。

系統 東山天皇の御孫で、  
直仁親王(閑院宮)の御子である。  
光格天皇の御父である。

事蹟 享保十八年二月に生  
れ、寛保二年三月に中御門天皇の  
猶子となり、三年九月に親王とな  
られた。延享元年九月に加冠し、  
ついで三品に叙し、太宰帥に任じ、  
寛延元年九月、一品に叙し、隨身兵  
仗を賜はり、安永九年、一品に進  
まれた。

時に光格天皇は、生父典仁親王  
を臣視するに忍びず、太上天皇の  
尊號を上つらうと思はれ、天明八  
年、議奏權大納言中山愛親に命じ  
て先例を考査せしめ、寛政元年八  
月、傳奏萬里小路政房・久我信通

す

圖に照合するに、恰も符節を合せ  
る様であつたから、大いに心服し、  
遂に同志と共に其の圖説を翻譯し  
ようと企て、前野玄澤を會主とし、  
玄白及び桂川甫周・中川淳庵・石  
川玄常らが毎月數回相會して、其  
の文意を考定した。四年間に改  
稿十一回に及んで成つた。名を新  
譯解體新書といふ。安永三年に版  
刻が成り、これを幕府及び諸家に  
獻進した。實に蘭書翻譯の嚆矢で  
ある。乃ち玄白の名聲は海内に轟  
き、治療を請ふ者が門前に市をな  
すに至つた。晩年に至り將軍に拜  
謁を許され、文化十四年四月十七  
日、八十五歳で歿した。著書に解  
體新書並に約圖(合書)・外科備考  
・和蘭醫學問答・和蘭醫説・蘭學  
事始・養生七不可・天眞樓漫録・  
後見草・形影夜話などがある。

すぎのまごしち

### 杉野孫七

「ひろせたけを・廣瀨武夫」の項  
を參照されたい。

事蹟 典仁王は建武元年四  
月に誕生されたが、後村上天皇の  
正平三年十月に至り、足利尊氏に  
擁立されて天皇となられた。これ  
が崇光院である。六年、足利直義  
は兄尊氏と隙を生じ、其の黨を率  
ゐて南朝に降つた。尊氏は大兵を  
擁して關東に赴き、子義詮に京都  
を留守させたが、義詮は兵が寡く、  
鎮護の不可能を慮り、僞つて南朝  
と講和し、南朝も僞つて之を許可  
された。よつて十一月七日、義詮は  
崇光院と其の太子直仁親王を廢し  
十二月二十三日神器(偽器)を後村  
上天皇に奉つた。故に天皇は崇光  
院に太上天皇の尊號を奉られた。

正平七年二月、後村上天皇は天  
王寺に幸され、伊勢の國司北畠顯  
能は兵を率ゐて之に従つた。つい  
で男山に幸し、更に顯能及び楠木  
正儀らに命じて、急に京都を襲は  
せられた。時に細川頼春は官軍を  
防ぎ、戰つて驚るゝに及び、義詮  
は大いに懼れて近江に走つた。よ  
つて顯能は持明院殿を圍み、光嚴

院・光明院・崇光院・直仁親王を  
捕へて賀名生に幽した。十二年に  
許されて京都に還幸されたが、崇  
光院は伏見殿に御し、元中九年十  
一月に薨斃し、後小松天皇の應永  
五年正月十三日、御年六十五歳で  
崩せられた。山城國紀伊郡堀内村  
大光明寺陵に葬る。

すざくてんのう

### 朱雀天皇

名號 御名を寛明といひ、  
法諱を佛陀譯といふ。

系統 醍醐天皇の第十一皇  
子で、御母は藤原基經の女孺子で  
ある。第六十一代の天皇である。

事蹟 延長元年七月に降誕  
され、三年十月に醍醐天皇の皇太  
子となり、八年九月に受禪して踐  
祚し、十一月に即位された。當時  
政綱は既に弛み、京都と地方との  
氣脈は通せず、政令は四方に及ば  
ず、旱水風蝗の災害は屢々起り、  
群盜は各地に横行し、山陰・南海

の地には海賊が出没し、公私の船を掠奪する事が多く、地方の豪族は漸く興起の姿を呈し、また都志を得ない者は、多く地方に出て國司となり、任期が満ちても歸らず、土地・人民を私有し、常に武を練り、兵を蓄へ、自衛の策を講じたが、これが武士の起源である。斯くて天慶年間には、平將門・藤原純友らが、東西に亂を起すに至つた。

はじめ平高望は、上總の國司となつて赴任し、其の一族は東國にはびこつたが、其の孫の將門は、勇悍で騎射を能くし、京都に出て藤原忠平に使へ、檢非違使たらん事を求めたが、遂に聽かれなかつたので、怒つて東國で亂を起し、承平五年に常陸大掾平國香を攻め殺し、天慶二年に下總の猿島に據つて叛し、海賊を率ゐて山陽・南海を荒した。よつて朝廷では、(一)天慶三年に藤原忠文を征東大

將軍に任じ、將門を討たしめられたが、忠文が未だ到らない中に、國香の子貞盛は、下野の押領使藤原秀郷と共に、將門を攻めて討滅した。(二)翌年源經基・小野好古は、朝命を受けて純友を討ち平げた。これを承平・天慶の亂といふ。源平二氏の威名は、これから漸く聞えて来た。

朱雀天皇は、頗る寛仁の態度で政を執られたので、人々は寛に過ぎると評した。忠平も此の事を奏上して、密に諫める所があつたが、天皇は忠平に答へて、「朕これを先帝に聞く、卿の先人曾て云ひしに、政は琴を張るが如し、大絃急なれば小絃絶えんと、朕もし嚴急にせば、下民は堪へざるべきなり」と仰せられた。また服御常侍を減じて下民を惠まれた事も屢々であつた。天皇は在位十六年、天慶九年四月に村上天皇に讓位して朱雀院に移り、爾來、屢々嵯峨・醍醐・大井河・宇治・東山などに幸し、或は芹川野・栗隈野などに遊獵を

試みられた。天曆六年三月に薨じ、四月に仁和寺の本院に遷り、八月十五日、聖壽三十歳で崩せられた。山城國宇治郡醍醐村醍醐院に葬る。

素盞鳴尊

すさのをのみこと  
系統 天照大神の御弟で、御父を伊弉諾尊といひ、御母を伊弉冉尊といふ。

事蹟 伊弉諾尊・伊弉冉尊は大八洲國を生まれ、國土經營の功がやゝ成就してから、更に天の下の主になるものを得ようとして、大日靈貴(天照大神)・月夜見尊・素盞鳴尊の三貴子を生まれ、天照大神には高天原を、月夜見尊には葦原原を、素盞鳴尊には天の下を治めさせられた。古事記・日本書紀の一書には、「素盞鳴尊を葦原原の君に定む」とある。然るに素盞鳴尊は勇悍で、天の下を治めず、暴悪の仕業が多かつ

たので、父神も母神も大いに心配され、「汝のやうに無道なもの、此の國の君となる資格がない」といつて、遂に根の國に追ひやられた。根の國は何處であるか詳かでないが、恐らく今の出雲地方であらうといはれて居る。

素盞鳴尊は、根の國に行く前に一度天照大神に面會しようと思つて、高天原に向はれたが、尊の雄健な爲に、高天原の山河が鳴動したので、大神は大いに驚き、「これは素盞鳴尊が異心を起し、國を奪ひに来たのに相違ない」と、大いに兵備を整へて待たれた。時に尊は悪意のないことを辯じ、大神と誓約を結び、赤心を證明する爲に五皇子を生まれた。尊はすなはち、「女を生めば濁つた心を抱いて居る。男を生めば清い心を抱いて居る」と誓はれたが、確に天忍德耳尊・天照日命・天津彦根命・活津彦根命・能野槌日命の五男・神を生まれたので、大神は疑が解け、是

等の五男神を引取つて御子とされた。此の誓約の時には、大神も三皇女を生まれた。すなはち、田心姫・湍津姫・市杵嶋姫の三皇女はそれである。

然るに素盞鳴尊の行動は、間もなく傲慢、横暴となり、或は大神の御田を害し、一たび播種した田に再び播種したり、田の畔を毀つたり、溝を埋めたり、多くの串を田の中に立てたり、實つた稻の中に馬を入れて踏みこじらせたり、或は大神の新嘗殿を汚したり、或は神衣を織つて居られる齋殿の裳を穿つて、天孫馬の剥皮を投げ込んだり、亂暴なことが多かつたので、大神は大いに怒り、天岩窟にこもられた。これを天岩窟の變といふ。

ところが天地は暗くなり、邪神が多く出たので、多くの神々は、大いに心配し、天安河邊に會して、大神迎出の策を講じた。時に思兼命の建議に従ひ、石凝姥命は八咫鏡を作り、玉祖命は

八咫鏡曲玉を作り、天日靈命は青和幣・白和幣を作り、天香具山の櫛を擧取り、其の技に鏡・玉・和幣を懸けて、太玉命が之を持ち、天兒屋根命は祝詞を奏し、(出雲要地圖)



火を岩窟の前に燃き、鶏を鳴かせ、天鏡・玉命に舞踊をやらせた。多くの神々はこの神樂を見て大いに笑ひ、其の際が天地に振つた。天照大神はこれを聞き、不思議に

思つて、戸を少し開いて外部を窺はれた。時に力の強い手力男命は直ちに其の戸を開き、大神の御手を取つて外へ出したところが、天地が再び輝いたので、諸神は大いに喜び、大神を率じて新殿を遷し、素盞鳴尊を罰し、根の國に追ひやつた。

斯くて素盞鳴尊は、皇子五十猛神を率ゐて、新羅の國に降り、曾戸茂梨の地に居られたが、やがて出雲の國に渡り、兼川上の鳥上峯に行かれた。時に八岐大蛇があり、土人足名椎・手名椎夫妻の願ひにより、これを征して、其の尾から一刀を得られたが、これが天叢雲劍である。彼の大蛇の居る處には、常に其の上に雲氣が立つて居たので、これに因んで命名されたものである。素盞鳴尊は、「これは神劍である、私有すべきものではない」といひ、高天原に遣使して、天照大神に献上された。斯くて尊は、

足名椎の女稲田姫と結婚し、新に須賀に宮殿を營んで居られた。母の歌に、「八雲立つ出雲八重垣妻籠に、八重垣作る其の八垣を」といふのがあるが、今日に傳はる三十一文字の短歌の最古のものである。稲田姫は多くの子を生んだが、就中、大國主命が最も名高い。

崇峻天皇

すしゆんでんのう  
名號 御名は泊瀨部、また長谷部岩倉、天皇とも稱する。  
系統 欽明天皇の第十二皇子で、御母は蘇我稻目の女小碓君で、第三十二代の天皇である。  
事蹟 繼體天皇の十四年に降臨された。用明天皇が二年四月に崩せられたので、炊屋姫(敏達天皇の皇后)に推され、同年八月に即位された。即位の元年、百濟から佛舍利を獻じ、また僧侶・寺工・瓦工・畫工・鐵工などを獻じ、佛法が漸く盛んになつて來

た。天皇は心を政治に注がれ、二年七月、近江君瀧を東山道に、突人臣雁を東海道に、阿倍臣を北陸道に派遣し、共に諸國の國境を巡察させられた。

これよりさき、欽明天皇の朝に任那は新羅の爲に滅ぼされ、日本府も毀たれたが、四年八月、崇峻天皇は任那の復興を企て、紀男麻呂・互勢比良夫・隨賀托夫・大伴鴨・葛城鳥奈良らを大將軍とし、兵二萬餘を授けて筑紫に屯させ、吉士金を新羅に派遣し、吉士木蓮子を任那に派遣し、日本府再興の事を察問させられた。

時に大臣蘇我馬子の威權は朝野を傾け、頗る專横であつたから、天皇はこれを嫌ひ、密に厩戸皇子に告げて除かうと謀られた。皇子は天皇を誦めて、「陛下只少し忍び給へ」と言はれたけれども、天皇は忍ぶ事が出来ず、五年十月、偶々山猪を獻じた者があつた時、左右に語つて、「何れの時か、除が能める者を奪ふこと、此の猪の

頭を斷つが如くせん」と仰せられた。馬子は之を聞いて大いに懼れ、東漢直駒を遣つて、天皇を寢殿に就せしめた。時に十一月三日で、聖壽七十三歳(七十二歳説あり)である。大和國磯城郡多武峯村の倉梯岡上陵に葬る。

馬子は驛使を馳せ、男麻呂らに告げて、「内亂に依りて外事急る勿れ」と。併し出征するに至らな

### 崇神天皇

すじんてんのう  
名 號 御名を御間城入彦尊といふ。また御間城入彦五十瓊殖天皇と稱し、なほ其の德化を養ひて御肇國天皇とも稱する。

系 統 開化天皇の第二皇子で、御母は大織麻呂命の女伊香色織命である。第十代天皇である。事 蹟 開化天皇の十年に降臨され、二十八年正月に皇太子と

なられた。時に御年十九歳である。幼少から聰敏で、また雄略を好み、長じて實博謹慎で、特に敬神の念が篤く、恒に天業を経綸しようと思はれたが、六十年四月に父天皇の喪にあひ、翌元年正月に即位された。

即位の五年、疫病が大いに流行し、人民の死亡流離する者が多かつたので、天皇は之を憂ひ、天神地祇に祈禱された。從來、天照大神及び大國魂神を宮中に祭り、三種の神器を宮中に安置してあつたが、天皇は神威を演ずることを恐れ、六年、八咫鏡と瓊瓊杵とを大和の笠置邑に遷し、皇女饒織入姫命に奉仕させ、別に鏡と劍とを模造して、八坂瓊曲玉と共に宮中に留め、護身の御璽とされた。爾來、歷代の天皇が授受して、皇位の御璽とされたのは之である。また大國魂神を宮中から出して、大和の市磯邑に遷し、皇女饒織入姫命に祀らせられたが、皇女は病の爲に果されなかつた。

當時、近畿地方は王命に服したが、遠國には未だ王化に服しない者があつたので、十年九月、四人の皇族を四道に派遣して、鎮定の任に當らせられたが、これを四道將軍といふ。即ち大彥命を北陸に、武彥川別命を東海に、吉備津彥命を西海(山陽道)に、丹波道主命を丹波路(山陰道)に遣り、教化を布かせ、命に従はない者は討伐させられた。其の土地に皇族を分布する精神に出たものらしい。故に古事記・日本書記・新撰姓氏錄に據れば、將軍などの後裔が任國附近に蕃衍し、皇族の威望が能く荒服の豪族を壓した事情が想像される。四道將軍の發するに際し、武壇安彦の叛があつたが、間もなく鎮定した。

四道將軍發遣の結果、四方が悉く平定したので、十二年に詔して人民を校し、長幼の序を知らせ、課役の先後を定め、始めて調役を課せられた。其の方法は、男は狩獵によつて獲た鹿・鹿などの皮角

を上り、女は編織した布帛を獻じた。故にこれを男の弓射の調、女の手末の調といひ、本邦に於ける調税制度の始めである。時に神祇和享し、風雨時に順ひ、五穀よく登り、家給人足り、天下泰平であつたから、世に天皇を稱して御肇國天皇といつた。

十七年には、天下に詔して船船を造らせ、四十八年には、皇子豐城命を東國に遣つて鎮撫させられたが、其の裔は東國に繁衍した。上毛野君・下毛野君らはこれである。六十二年七月には、「農は天下の大本にして、百姓の恃みを以て生くる所以なり」と詔し、依瀨池・荊坂池・反折池などの池溝を開き、水田灌溉の便を圖られた。六十五年には大伽羅の使者蘇那葛叱智が來朝し、「臣が國の東北に三已汶の地あり。上已汶・中已汶・下已汶といふ。地方三百里ありて、土地肥沃にして民また富む。然るにいま新羅と争ひ、干戈止まずして、民大いに苦しむ。よ

りて將軍を貴國より請ひ、此の地を治めしめ、且つ此の地を以て永く貴國に獻せん」といつた。即ち新羅の壓迫に苦んで援を求めたので、天皇は鹽乘津彥を派遣して鎮めさせられたが、日本府の起原は此の時にある。次の垂仁天皇は、大伽羅に任那の國號を賜はつた。六十八年十二月五日、崇神天皇は聖壽百十九歳で崩せられた。大和國磯城郡柳木村の山邊道(のみのみち)岡上陵に葬る。

### 薄田淳介

すすきだじゆんすけ  
事 蹟 號を泣菫といふ。明治十年、岡山縣連島町に生れ、獨學で學歴はない。明治中期、即ち三十四年代に於ける明治詩壇第一位の詩人であつたが、其の後は童話・隨筆などに筆を染める様になつた。長く大阪毎日新聞社員であつたが、現在も其の客員である。詩集及び隨筆の著が多い。

### ステッセル

事 蹟 露西亞皇帝ニコラス二世の頃の將軍である。日露戦争の際には、旅順要塞司令官となつて、我が包圍軍を悩ました。

旅順を包圍したのは、陸軍大將乃木希典の統率する第三軍で、明治三十七年(西紀一九〇四年)二月以來、海軍の港口閉塞活動などと相呼應して、數度の攻撃を試み、七月、旅順要塞の前進陣地の敵を掃蕩し、八月、遂に其の本防線線を包圍し、愈々難攻不落と誇つた。要塞に肉迫した。斯くて旅順の敵は全く無援孤立の状態に陥つたけれども、堅塞である上に、ステッセルが固く守つたので、容易に抜く事が出来ず、我が數回の總攻撃も功を奏せず、たゞ多くの士卒を失ふのみであつた。

時、歐羅巴露西亞からバルチック艦隊が大舉東航するといふ飛報があり、且つ其の陸軍が兵氣を恢復して遼東に迫るといふ情報があつたので、我が軍はそれ以前に旅順を陥落させる必要があり、八月に大孤山・小孤山・磐龍山などを占領し、九月十九日から二〇三高地に向つて砲火を開き、あらゆる力戦苦闘をつゞけた。此の高地は港内を瞰下する形勝の地であるから、ステッセルの最も固守したところ、其の争奪戦の壯烈は言語に絶したが、十二月六日に至り、確實に之を占領し、此の高地から港内の敵艦及び諸砲臺を撃射し、其の艦隊を全滅させ、東鷄冠山・二龍山・松樹山などの諸寨を攻略し、將に旅順の牙城を粉砕しようとした。

ステッセルは終に保ち難きを知り、明治三十八年(西紀一九〇五年)一月一日、希典に親書を致して降伏の意を陳べ、翌二日に開城規約に調印した。乃ち我が軍は保艦・砲臺・軍用諸品を收め、特にステッセルが其の國に盡した忠節

を思ひ、將士に許すに帯劍の名譽を以てした。ステッセルが希典と水師營に會見したのは五日で、其の時、希典に馬を献じた話は人口に膾炙して居る。斯くて我が軍が要塞全部を受取し、入城式を挙げたのは一月十日である。

### 須藤 刑部

「みなものよしひら・源義平」の項を参照されたい。

### 崇徳 天皇

御名を順仁といふ。世に讃岐院と稱する。

鳥羽天皇の第一皇子で、近衛天皇・後白河天皇の御兄である。御母は大納言藤原公實の女で、待賢門院璋子である。第七十五代の天皇で、永治元年十二月近衛天皇に讓位し、太上天皇となられた。よつて崇徳上皇といふ。

保安四年二月に即位された。時に御年五歳である。白河法皇が院中で政を聴かれたが、大治四年七月、法皇が崩御された後には、鳥羽上皇が同様に院中で政を聴かれた。

保元五年、鳥羽上皇の寵姫美福門院は、體仁親王を生んだ。上皇はこれを寵愛せられ、永治元年十二月、崇徳天皇に迫つて、強ひて讓位させられたが、これが近衛天皇(御年三歳)である。此の年、鳥羽上皇も禪髪して法皇となられたが、この讓位問題から、鳥羽法皇と崇徳上皇との仲が悪くなつて来た。

久壽二年、近衛天皇が御年十七歳で崩せられたので、崇徳上皇は自ら重祚するか、また皇子重仁親王を立てようと思はれ、衆議も重仁親王に歸した。然るに美福門院は近衛天皇が崩せられたのは、上皇が咒咀されたからだと言ひ、關白藤原忠通と謀り、法皇に勧め

雅仁親王を即位させた。これが後白河天皇である。上皇の不滿は益々昂じた。

時に關白忠通の弟に藤原頼長があり、左大臣をして居たが、兄忠通と仲が悪く、兄に代つて關白にならうと希望して居た。保元元年七月、鳥羽法皇が崩せられたので、崇徳上皇は頼長と謀り、源爲義・源爲朝・平忠正らを召し、白河殿に據つて兵を擧げられた。仍て後白河天皇は、源義朝・平清盛らを召し、俄かに白河殿を夜襲させられた。爲義・爲朝らは善く戦つたが、上皇軍は遂に敗れ、頼長は流矢に中つて薨じた。爲義・忠正は降つて斬られ、爲朝は伊豆の大島に流され、重仁親王は禪髪された。時に保元元年九月で、これを保元の亂といふ。

崇徳上皇は、元年八月讃岐に遷され、同國の松山に幸し、宮を直島に造られたが、後に志度の鼓岡に移られた。ついで血を刺して五部大業經を觀書し、三年の後に

完成し、覺性法親王に送つて、安樂壽院に納めようと請はれた。よつて親王及び藤原忠通は、此の事を後白河天皇に奏請したけれども、天皇はこれを許されず、返還されたので、上皇は大いに怒り、舌を噛んで血を出し、其の血で軸毎に、「願くは大魔王となりて、天下を懼亂せん、謹で五部大業經を以て惡道に廻向す」と書せられた。爾來、髪を剃らず、爪を剪らず、憔悴して骨が出て、忿々として過されたが、二條天皇の長寛二年八月二十六日、志度で崩せられた。聖壽四十六歳である。讃岐國綾歌郡松山村白峰陵に葬る。世に讃岐院といふ。明治元年九月、神靈を京都飛鳥井町白峰宮に遷還して奉祀したが、現今官幣中社である。

### 炭 太 祇

江戸の人で、京都に住んだ。俳諧に秀で、芭蕉の後に名を現したが、明和八年六十三歳で歿した。

### 角 倉 了 以

本姓は吉田氏、幼字を與七といひ、名を光好といひ、後に了以と改めた。

吉田宗桂の子である

江戸時代初期の貿易商である。天文二十三年、京都に生れ、工役を嗜んだが、後に徳川家康に仕へ、慶長八年、家康の命を受けて巨船を造り、九年、朱印狀を得て安南・東京の各地と通商して利益を得た。世に其の持船を角倉船といひ、朱印船の中で名高い一つである。

了以はまた社會事業に力を注いだ。曾て美作の和計川に往き、偶々帆船を見て、「凡百の河川は悉く船を通すべきなり」と言ひ、河川を開鑿して交通の便を圖らうと考へ、畿域に歸つて大堰川を浜り、丹波の保津に至り、其の地勢水路を調査し、慶長三年、子女之を江

戸に遣はし、開鑿の事を請はせて許可を受け、自ら工役を督し、河中に横たはる巨巖を除き、土砂を浚へ、水深を大にし、八年の秋に至つて概ね竣功した。従來、保津川は筏を通するに過ぎなかつたが、了以の盡力により、丹波世喜村から嵯峨に到る間に舟楫を通ず

る事になり、兩國の民の利を享くるものが頗る多くなつた。慶長十二年の春、更に幕府の命によつて、富士川の水運を圖つたので、河岸の民は運漕の便を得て喜んだ。曾て駿河の岩淵から舟を挽いて甲府に到つた時、山峽の洞民は初めて舟を見て驚き、「魚に非



る事になり、兩國の民の利を享くるものが頗る多くなつた。慶長十二年の春、更に幕府の命によつて、富士川の水運を圖つたので、河岸の民は運漕の便を得て喜んだ。曾て駿河の岩淵から舟を挽いて甲府に到つた時、山峽の洞民は初めて舟を見て驚き、「魚に非

### せ

せいせうなごん  
清少 納言  
氏を清原といふ。名

は詳かでない。後宮に入つて少納言と稱し、更に清原の頭字を冠して清少納言と呼んだ。

肥後守清原元輔の女である。

一條天皇の朝、皇后藤原定子に仕へて眷遇され、才學を以て紫式部と名を齊しうした。或る雪降りの日、天皇が後宮で宴を張られた時、皇后宮は左右を顧みて、「香爐峰の雪は如何」と言はれた。衆は其の意を解せなかつたが、清少納言は言下に座を起つて、御前の簾を撥つた。これは唐の白樂天が、老後に盧山の麓に草堂を結んだ時の詩に「遺愛寺鐘歇」杜鵑、香爐峰雪撥簾看」とある故事に基いたもので、時人は其の敏捷を稱嘆したといふ。

また百人一首に入つて居る「夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふ坂の關はゆるさじ」の歌は、拾遺集雜二に出でて、詞書に「大納言行成、物がたりなどして侍りけるに、内の物忌にこもれば

とていそぎ歸りて、つとめて、鳥の聲に催されてといひをこせて侍りければ、夜ふかりけん鳥の聲を、函谷關のことにやといひ遣はしけるを立かへり、これは逢坂の關に侍るとあればよめる」とある。皇后宮は深く其の才華を嘉し、奏して内侍にしようと思はれたけれども、御兄の藤原伊周が不敬罪で流罪された爲に、遂に果されなかつた。

清少納言の末年の状況は詳かでない。老後零落して陋屋に住んで居たらしく、門前を通過する年少の殿上人たちが、其の貧窶を見て憫笑した事がある。時に清少納言は簾の中から、「駿馬の骨を買ふ者あるを聞かずや」と呼んだので、憫笑者は慚ぢ去つたといふ。

清少納言は、才學が一世に卓絶したが、資性が活潑で、稍々才に誇るの風があり、好んで故事古語を引いて、當世の學士と議論し、頼房男子をして屢々後に歐若たらしめるものがあり、また幾多の男

子を誘弄して嘲諷を試みた事があり、従つて其の内行も修らず、枕草子を檢するに、情交の有つた者は二三人に留まらなかつたらしい。

### せいひてんのう 成務天皇

名 號 御名を稚尼 尊

景行天皇の第四皇子である。御母は八坂入彦皇子の女八坂入姫命である。第十三代の天皇である。

事 蹟 景行天皇の十三年に降誕され、五十一年に皇太子となられた。六十年正月に天皇の喪にあひ、翌元年正月に即位し、先帝崩御の地たる近江國志賀穴穂宮に都し、武内宿禰を大臣として政を執られた。當時、王化が漸く四方に及んだから、山河の地勢によつて國・縣を分ち、才幹ある者を拔擢して、新に國造・縣主・宿禰などに任命された。國造本記に據

れば、新置の國造の数が六十三國に及んだといふ。以て地方制度の整備を察すべきである。六十年六月、聖壽百七歳で崩せられた。大和國生駒郡平城村の狭城厩列池後陵に葬る。

### せいねいてんのう 清寧天皇

名 號 御名を白髮 尊といふ。また白髮武廣國押稚日本根子天皇とも稱する。

維略天皇の第三皇子である。御母は葛城國の女葛城尊媛である。第二十二代の天皇である。

事 蹟 允恭天皇の三十三年に降誕された。雄略天皇の二十二年に皇太子となられたが、天皇の崩後、磐城皇子・星川稚宮皇子らが皇位を窺つたので、皇太子は大伴室屋・東漢・直らと諱して諱伐し、やがて即位されたが、これが清寧天皇である。都を大和の磐余栗葉宮に遷されたが、大臣

平群眞鳥・大連大伴室屋らが政務に參與した。天皇には皇子がなかつたので、其の名の後世に傳はらないのを憂へられたが、二年十一月、播磨國司伊與來日部小楯は、市邊押磐皇子（履中天皇の皇子）の二子億計王・弘計王が同國明石郡に在ることを奏上したので、天皇は大いに喜び、遣使してこれを迎へ、三年四月に億計王を皇太子とし、弘計王を皇子にされた。天皇は在位僅に五年で、聖壽四十一歳で崩せられた。河内國南河内郡西浦村坂田門原陵に葬る。

### せいわてんのう 清和天皇

名 號 御名を惟仁といひ、法諱を素眞といふ。世に水尾帝と稱する。

文德天皇の第四皇子で、御母は藤原良房の女明子である。第五十六代の天皇である。嘉祥三年三月に降誕

され、同年十一月に文德天皇の皇太子となられた。蓋し文德天皇は皇長子惟喬親王（紀名虎の女静子の所生）を寵愛し、これを皇太子に立てようと思はれたけれども、藤原氏を憚つて決行することが出来ず、遂に惟仁親王を皇太子にされたのである。天安二年十一月、九歳で即位されたが、これが清和天皇で、九歳の天皇は未だ前例を見ない。此の年、陵制を立て、遠陵・近陵の別を設け、十陵四墓を定め、貞觀三年には宣明曆を頒行させられた。

清和天皇が幼冲であられたので、外祖父の良房が攝政を攝行した。尤も此の時には、未だ攝政の名はなかつたが、貞觀七年に天皇が元服され、機務を親裁し給ふに及び、翌八年八月、詔して良房に天下の政務を攝行させられた。これが藤原氏の攝政の始めで、爾來、藤原一族が政權を握る様になつた。當時、皇族に姓を賜ひ、諸臣に下す事が行はれたが、清和

天皇は皇子皇女五人に源氏を賜はつた。殊に第六皇子貞純親王の子源經基に出た源氏は最も聞え、源朝に至つて鎌倉幕府を開いた。

清和天皇は風儀が美はしく、舉動が禮に遵ひ、神の様に端儼であられた。また寛明、仁恕、温和、寡言で、書傳を好み、釋教を思ひ、よく政理に通じ、恭儉を以て下を率ゐ、輔弼の臣も濟益を務めたので、朝廷には事なく、内外肅然たるものがあり、世に貞觀の治といふ。在位十八年、貞觀十八年十一月に陽成天皇に讓位し、常に蔬菜を御し、聲色を斷ち、元慶三年五月に出家されたが、爾來、深く世累を厭ひ、酒醴饗設を御せず、隨を絶ち身を捨てようと思はれ、諸の苦行を修せられた。太田元貞は説を爲し、「清和天皇は榮殿後の御子にて、忠仁公良房の外孫なり、外戚の勢にて、兄の惟喬皇子を踰えて踐祚ましませり、後に此の事を深く悔ひ給ひしにや、御一生の行狀、苦行僧に似たり」と言つて

居る。十一月には大和の名山大川を巡幸し、十一月には栗田山莊園覺寺に遷幸し、十二月四日に崩せられた。時に聖壽三十一歳である。山城國葛野郡嵯峨村水尾山陵に葬る。

### セガランチニ Sequanti ni

事 蹟 十九世紀に於ける伊太利の畫家である。西紀一八五八年（我が孝明天皇の安政五年）に生れ、幼少にして孤兒となつたが、或る富豪に其の畫才を認められ、ミラノのブレラアカデミーに學ばせられた。其の後獨立してアルプ山中のサゲーニンに居り、更にマローマに轉じた。山中の自然・風俗・人事に取材して描き、最初は嚴格な寫實家であつたが、晩年に至るに伴れて、頗る神祕的傾向を帯びた。世界的な山岳畫家である。歿したのは一八九九年（明治三十二年）である。其の遺作は伊

大利本國よりも、却つて瑞西及び伯林・ハンブルグ・ミュンヘンの畫室に保存されて居る。

### せきじらう 關次郎

「みなものよしひら・源義平」の項を参照されたい。

### セザンヌ Sezanne

事 蹟 ポール・セザンヌは十九世紀後半に於ける佛蘭西の畫家である。西紀一八三九年（我が仁孝天皇の天保十年）エクス・アン・プロヴァンスの町に生れた。父は銀行家で、彼は最初法律を學び、銀行に務めたが、後に畫家を志して巴里に遊び、アカデミー・シュイスに通學し、ポトレイ街に畫室を借りて製作に従つた。巴里ではドラクラー・タールベールの感化を受けたが、殊にタールベールの寫實主義は、根本に於て彼の畫

風と共通して居たので、随つてクルベールの感化になる作品が多数である。

またマネー・モネー・ルノアルらとも交際し、印象派の繪を描いたが、印象派主義者が目に見える瞬間的な處のみを採り、思想の神祕的中心を探さないのに不満を感じ、個性の魂に感覚を歸屬させる綜合的觀照を高調し、永久性のある美の表現に進み、沈靜で諧律的なものを描いたが、非常に強い性格の彼は、何時も自己獲得のセザンヌ式の深刻さを示した。即ち印象派の袋路を開いて、畫界に新しい精神的領域を展開したので、後の批評家はセザンヌ・ゴッガン・ゴッホらを後期印象派の三大巨匠といふ。

セザンヌの作品では、三角の構圖に纏められた「浴女の群」などが名高い。歿したのは一九〇六年（明治三十九年）である。日本の洋畫界にも影響を與へ、直接間接にセザンヌを學んだ畫家が少くない。

### 雪舟

名號 姓を小田といひ、名を等楊といふ。雪舟・備後齋・米元山主人・漁樵齋・雲谷などの諸號がある。

事蹟 備中國都宇都赤濱の人である。幼時、備中の寶福寺に入つて僧となつたが、天性繪畫を好み、經卷を事としなかつた。師僧は屢々戒めたけれども、聞き入れなかつたので、遂に其の意に任せたが、畫技は益々進んで妙境に達した。

彼の涙鼠の挿話は、此の寶福寺に居る頃の事である。即ち「或る日、師僧は大いに怒つて、雪舟を堂の柱に縛り、晩に及んで縛を解かうとして、親ら堂上に往つて見ると、忽ち雪舟の膝下から鼠の走り出るのを認めた。師僧は驚いて、急にこれを追はうとしたけれども動かない。怪んで熟視すると、雪舟が自分の脚の指を以て、堂上

に滴る涙痕を點じ、鼠の形を描いたものであつた。師僧は其の妙に服し、復た畫を作る事を咎めなくなつた」といふ。

雪舟は壯年に及び、京都相國寺の洪徳禪師に師事し、また鎌倉に赴いて建長寺の玉隠永興に師事した。永興は漁樵齋記を作つて雪舟（雪舟）



に與へたので、雪舟は漁樵齋を別號とした。雪舟の畫才は周文に師事する様になつてから大いに發揮された。雪舟は如拙・周文を我が祖と呼んで居る。雪舟を號としたのは、彼が好んで昔賢の墨蹟を集めた中に、楚石老人の書いた「雪舟」の二大字があり、これを愛し

た爲であるといふ。

其の後、周防の大内氏の客となつて居たが、土御門天皇の應仁元年、便船を求めて明國に入り、寧波の東にある四明山の天童寺に入り、其の禪班の第一位に陞つた。雪舟は明に在る間に長有聲・李在・高彦敬らの諸家に師事し、また夏珪・馬遠らの遺墨を研究し、畫道の奥義を體得し、遂に自然を師とする境地に達し、明國の山水・遠寺・晚鐘・瀟湘・風俗などを寫して意らなかつた。明國の君臣は、共に雪舟の畫技を賞し、詔して北禮部院の驛に描かせた。

また明人の請に應じて、日本の富士・三保・清見の三絶景を描いたが、當時の鴻儒詹仲和は、「巨嶽稜層瀟湘海涯、扶桑堪作上天梯、岩壑六月常留雪、勢似青蓮直過氏、名利雲清建清古、虛堂塵遠老禪栖、乘風吾欲東遊去、特到松原一窺羽衣」といふ詩を作つて賞した。雪舟は圖二幅を作り、一を明に留め、一を持ち歸つた。

此の畫幅は京都の妙心寺にあつたが、後に轉々して肥後細川侯の手に歸したといふ。雪舟は此の圖を描く時、何心なく寺山列樹の間に塔を描いたが、歸國の後に清見寺を過ぎて見ると塔がない。雪舟は其の畫の虚談になつたのを惜み、遂に資金を集め、曾て描いた地位に適する處を選び、寺から十八町ばかり離れた處に塔を建立したが、其の熱心は概ね此の類である。因に此の塔は天明年間に燒失したといふ。

雪舟は明國に在ること三年、文明元年に歸朝し、禪の流行地であつた豊後に居を定めた。即ち豊後の府内の西北隅に一小樓を建て、天開圖畫樓と名づけ、特意の墨繪を描いたが、其の名聲は頗る高く、貴紳から工商に至るまで、彼に畫を請むる者が甚だ多かつた。雪舟は豊後に在る間にも、興に乗じて諸方を展遊し、思ふ儘に畫材を求めた。雪舟は文明八年頃に、豊府で最も盛んに描いた様である。

雪舟は後に周防の山口に移り、天花山下の雲谷寺に居した。年代は明瞭でないが、東福寺の僧了庵桂悟の記に、「爾後、防城の郡府に來り、地を下して新に之を築く」とあり、また、「雲谷古稱に垂んとして、乾坤の間に屢屈し、寂寞の隈に燕居す」とあるのを見ると、雪舟は七十に近い頃、此の地に住んで居た事が分る。其の後、雪舟は石見國の豪族益田兼亮に招聘され、同國益田郡乙吉村萬福寺の大喜庵に移り住んだが、永正三年八月八日、八十七歳で遷化した。

周南の雪舟傳に據れば、大内氏は曾て明國に繪畫を注文した時、明國から作者不明の名畫が送つて來た。雪舟は此の繪を見て、「これは拙僧が明國に在る時に描いたものだ」といつた。大内氏は此の言を聞き、雪舟がいゝ加減の嘘を吐くものと信じて怒つたので、雪舟は悠然として石州に引き越した。後に大内氏は工人に命じて繪絹の汚齋を洗滌させたところが、其の

汚齋の下から雪舟の署名が露はれたので、雪舟が己を欺いて居ない事を知り、慚愧の餘り、使を石見に遣つて雪舟を召したが、雪舟は既に歿して居たといふ。これは一種の挿話であらう。

雪舟は稀世の天才で、畫名が噴々として居たに拘らず、温厚謙讓の美德を備へた寡欲な禪僧畫家であつた。そして彼に畫を需める者には、利慾を離れて誰人にも快く描いてやつたので、時人はこれを徳とした。梅花無盡藏に據れば、雪舟が描かうとする場合には、「先づ半器の漆を酌み、快く尺八を吹くこと數聲、或は俵歌を唱へ、或は唐詩を吟じ、箕坐盤礴して後、筆を洗つて紙に望み、意氣揚々として、恰も龍の水を得る様な態度で、生意の眞に逼るものを描いた。淡泊な畫聖の佛が偲ばれる。雪舟は水墨畫を好み、特に山水・龍虎をよくした。其の好んで描く所は水墨畫で、風致を尊び、意

を寫して形似を求めず、氣魂が雄渾で、筆致が勁拔で、また氣品に富んで居る。主として北畫の剛健な風を傳へて居るが、まゝ南畫の輕雅なものもある。其の妙處に至つては、古人の蹤跡を踐まず、天性に得たものである。雪舟の門から秋月・宗淵・周耕・楊月・周徳・楊門らの僧體畫家を出したが、其等の畫風は當代の嗜好に適ひ、其の畫風を學ぶ者が多く、遂に雲谷派と稱する様になつた。

### 宣化天皇

名號 御名を檜隈高田といふ。また高田尊・武小廣國押盾のふ。また高田尊・武小廣國押盾のふ。また高田尊・武小廣國押盾のふ。

系統 繼體天皇の第二皇子で、御母は尾張連草香の女目子媛である。安閑天皇の同母弟で、第二十八代の天皇である。

事蹟 雄略天皇の十一年に降誕された。安閑天皇の崩後、御



年六十九歳で即位し、大和國橿原  
入野宮で政を執られたが、大伴  
金村・物部麁鹿火が政治に參與し  
た。また蘇我稻目・阿部大庭呂を  
任用された。二年十月、新羅が任  
那を侵したので、大伴挾手彦を遣  
つて任那を鎮め、且つ百濟を救は  
せられた。天皇は人と爲り、器宇  
が清通で、神樂が朗遇で、君子の服  
する所となつたが、在位四年、聖  
壽七十三歳で崩せられた。大和國  
高市郡白檮村身狭桃花鳥坂上陵  
に葬る。

宣宗

清朝第八代の皇帝である。「そ  
うこくはん・曾國藩」の項を参照  
されたい。

そ

宗祇法師

名 號 俗稱は飯尾氏、號を  
自然齋・見外齋といひ、また種玉  
庵ともいふ。

系 統 玉勝間にある異傳で  
は、「姓は中臣、氏は飯尾、宗充  
子也」とある。遠碧軒記に據れば、  
或る武士の子で、これを傀儡師に  
托したのを、高山宗朝が養つたの  
であるといふ。湯川彦右衛門覺書  
には、宗祇は氏も無い者であつた  
が、花下になつてから湯川の氏を  
借りたとある。また紀州の伎樂師  
の子であるともいひ、異説が多く  
て、種姓が詳でない。

事 蹟 普通には紀州在田郡  
の産であるといふ。併し景徐周麟  
(宗祇と同時代の人)の宗祇庵主  
肖像贊には、「江東地に産す」と  
あるから、近江人といふことにな  
る。

少にして律僧となつたが、天性  
歌道を好み、はじめ連歌を宗祇に  
學んだ。それから玉勝間の異傳に  
據れば、心敬に師事したとある。  
宗祇が心敬を先輩として、其の風

を仰いだ事は考へられるが、師事  
したかどうかは分らない。親元日  
記には「尊順」の名の下に「宗祇  
師」と注して居るが、當時の人の  
記録であるから、濫りに否定は出  
来ない。思ふに始め宗朝に學び、  
後に尊順に就いたのであらう。宗  
祇が連歌道に入つたのは、中年の  
頃からであると思はれるが、曾て  
(宗祇の事蹟)

宗祇

猪苗代兼載に就いて、連歌の事を  
問ふた時、兼載は答へて、「連歌  
を學ぶには二十年の練磨を要す。  
今、子、己に壯なり。惜い哉、十  
歳を晩れたり」といふと、宗祇は、  
「十年の間、功を晝夜に積まば如  
何」といつた。斯くて刻苦勵精し  
て連歌の堂奥に達し、斯道の第一  
人者となつた。時に連歌が大いに

起り、これを學ぶ者が天下に多く、  
推して宗祇を宗匠とし、朝廷から  
花下の號を賜はつた。

宗祇は連歌の外に和歌に達し、  
二條家の和歌の嫡統を受けて、こ  
れを後世に傳へた。また物語にも  
通じ、其の道の著書は、國文學研  
究史上重きをなして居る。

また宗祇は東西に旅行し、定居  
しなかつた事で名高い。いま和歌  
・連歌・紀行などを綜合して見る  
と、東は白河關から西は太宰府  
に至り、北は越後に往いて居る  
が、併し四國・山陰に赴いた證  
はない。即ち應仁二年秋には、  
白河關で百韻連歌を興行し、文  
明元年春には河越千句に参加し、  
七月には奈良に赴き、間もなく東  
國に轉じ、文明二年正月元日には  
品川で名所獨吟百韻を賦し、三月  
には隅田川に近い寓居で吾妻問答  
を著した。其の後は美濃郡上の東  
常陸の宅に居り、古今集の傳授  
を受け、また奈良にも居たらしい。  
文明十二年には、周訪から太宰府

に就き、十月には山日に還つた。  
其の後は姑く旅行のことが知らな  
い。明應八年には越後の國府に下  
り、上杉氏の許に在る事三年に及  
んだが、文龜元年に門人宗長が來  
訪したので、二年三月、宗長と美  
濃に赴かうとして越後を出で、信  
濃・上野・武藏を経て相模に出た  
が、美濃から迎に來た東素純と國  
府津に出逢ひ、七月三十日、箱根  
湯本の旅宿で病歿した。時に年八  
十二歳である。宗長・素純は遺骸  
を奉じて足柄山を越え、駿河國境  
邊にある桃園山定輪寺に葬つた。

宗祇は門人が天下に洽く、一代  
の宗師として敬重された。三條西  
實隆は其の計を聞き、「驚嘆無と物  
干取難、周章尤二比類者也」と嘆  
息し、兼載は警城の寓居から遙々  
湯本に來て、臨終の地を見て追悼  
の長歌をよんだ。里村紹巴は常に  
「歌には定家、連歌に宗祇」とい  
ひ、塵塚物語には、「誠俗生いや  
しなどいへど、歌徳によりて其名  
は獨家清華も及給はず」とある。

宗祇は著書も多い。連歌に關す  
るものには竹林抄・新撰寛政波集  
があり、連歌に關する意見を述べ  
たものには宗祇袖下・白髮集・吾  
妻問答・老のすさみ・連歌語體秘  
傳抄・分葉などがあり、宗祇の連  
歌を集めたものには葦草・下草・  
老葉・自然齋發句などがある。

宗祇は人と爲り、生死の境を超  
越し、死するまで其の徒と連歌を  
賦した。曾て山行して賊に遇ひ、  
悉く金銀を奪はれた。宗祇は顧み  
ないで數里を行くと、賊が追つて  
來て其の髻を取らうとした。宗  
祇が其の故を問ふと、「髻で掃子  
を作つて京に鬻ぐのだ」といつた。  
時に宗祇は悵然として、「我がた  
めに掃子ばかりは免せかし、塵の  
浮世を棄て果つるまで」と賦した。  
賊は感悔謝し、悉く奪ふ所を還  
し、且つ山路を送り出して他盜に  
備へたといふ。宗祇の佳句は頗る  
多いが、胸中抄には、「古里の垣  
根あらはに打置、ながれたえたえ  
蛙鳴なり」、「うしや我にもあらず

成ゆく、毒の戸の花に吹たつ夕嵐」  
「心ほそくもぬる夜かなしも、雨  
ながら花落盡す草の庵」といふの  
がある。

曾國藩

事 蹟 支那の清朝時代の忠  
(曾國藩)



臣である。湖南湘鄉の人で、禮部  
侍郎に任ぜられたので、軍事は其  
の職とする所でなかつたが、長髮  
賊の亂が起るに及んで、征討の事  
に従ふに至つた。長髮賊の亂とい  
ふのは、洪秀全が基督教を假りて  
徒弟を誘ひ、清の朝廷に對して起

した亂で、漢人の風俗である髻  
髪を廢して、髪を長く延ばして結  
んだので、長髮賊と呼ばれたが、  
文宗の在位十一年間は、其の亂を  
以て滿され、其の蹂躪する所は支  
那十七省に及び、清朝の開かれて  
以來の大叛亂である。

はじめ洪秀全は、宣宗の時に廣  
西地方に亂を起して勢を振ひ、而  
も官軍の勢が弱くて、之を平定す  
る事が出来なかつたが、宣宗が  
歿して文宗が即位するに及び、  
曾國藩に命じて討伐させた。個  
々曾國藩は母を喪ひ、湖南の湘  
郷に歸郷して居たが、文宗の詔  
を奉じ、羅澤南らと謀り、西紀  
一八五三年(文宗の咸豐三年・  
我が孝明天皇の嘉永六年)湘郷  
の義勇兵を集めて、所謂湘勇を組  
織し、湖南・湖北・江西の諸省で  
長髮賊の討伐に従事し、李鴻章・  
左宗棠らも各々安徽・湖南の郷勇  
を召集して、討賊に従事したので、  
一八五六年(我が孝明天皇の安政  
三年)の末頃から、湖廣・江西の地

方は漸く平定するに至つた。此の頃、長髮賊の中に内訌が起り、巨頭の楊秀清・韋昌輝らは、相互に攻殺したけれども、而も賊勢は尙ほ盛んで、主に安徽・江蘇の方面に勢を振つたので、官軍も容易に之を鎮定する事が出来ず、文宗は一八六一年に歿し、穆宗が即位したが、曾國藩は此の間に處して悪戦苦闘し、一八六四年(穆宗の同治三年、我が孝明天皇の元治元年)に鎮定した。曾國藩が湘勇を組織してから、實に十二年目である。「こうしうぜん・洪秀全」の項を参照されたい。

また曾國藩は經世家として政治に力を盡し、親しく穆宗に謁して兵馬の權を收め、財政を整理し、官吏登庸の法を改むるの議を奏上した事があり、また留學生を派遣して歐米の新文化を輸入し、洋式の造船・造兵の業を起したが、學者・總行家としても稀有の人物であつた。晩年には内閣大學士となつたが、一八七二年(穆宗の同治十

一年・我が明治五年)に歿した。李鴻章は彼の部下である。

曾 参

「こうし・孔子」の項を参照されたい。

副島種臣

事 蹟 肥前佐賀藩士で、はじめ藩の學校(弘道館)の教授となり、傍ら洋學を修めた。明治元年に參與となり、ついで參議に進んだ。二年から六年にかけて、外務卿の職にあり、屢々外交問題を處理して功があつた。六年、清國に使して歸るに及び、西郷隆盛らと征韓論を唱へ、議が破るゝに及び、辭表を提出して野に降つた。七年には板垣退助・後藤象二郎・江藤新平らと圖り、民選議院の設立を政府に建白した。後に樞密顧問官・樞密院副議長などに任ぜら

れ、二十四年五月に組織せられた松方内閣の時には内務大臣となつた。年來の功によつて伯爵を賜はつたが、明治三十八年、七十八歳で歿した。

蘇我石川

名 號 蘇我石川宿禰といふ

系 統 武内宿禰の子で、蘇我氏の祖である。

事 蹟 河内石川の別業に生れたので石川といひ、宗我大家を賜はつて居としたので、氏を蘇我といふ様になつた。百濟の辰斯王は、我が朝廷に禮を盡さなかつたので、應神天皇の三年、石川宿禰は紀角宿禰・羽田矢代宿禰・木菟宿禰と共に、百濟に往つて其の無禮を責めた。百濟國では、辰斯王を殺して謝したので、我が問罪使一同は、阿花を立て、王として歸つた。其の後、石川宿禰の傳記は詳かでないが、石川の子蘇我滿智

は國事に奔走し、履中天皇の朝には三藏(齋藏・内藏・大藏)の長官に任ぜられた。

蘇我稻目

系 統 蘇我石川宿禰の玄孫で、蘇我高麗の子である。

事 蹟 宣化天皇の元年に大臣となつた。欽明天皇の十三年十月、百濟の聖明王は、其の臣怒曠斯致を派遣し、金剛經一巻、幡蓋若干及び經論若干卷を獻じ、上表して佛の功德を贊した。天皇は大いに喜ばれたが、併しそれを禮拜するか否かは重大事であるから、輕々に決せず、これを群臣に諮られた。時に大連物部尾與及び中臣勝子は、「我が朝、古より天神地祇を祀る。然るに今新に善神を敬せば、天神地祇の怒りを招かん」と奏したが、稻目は之に反對し、「西方諸國、皆之を禮拜す、我が邦何ぞ獨り然らざるを得んや」

と奏した。よつて天皇は、佛像を稻目に賜ひ、試みに禮拜させられた。稻目は大いに喜び、これを小聖田の家に安置にして勸修を事とし、遂に向原の家を捨して寺となし、向原寺と稱した。これが我が國に於ける佛寺の始めである。間もなく諸國に惡病が流行し、死者が多かつたが、尾與・勝海の徒は、外神を祀つた爲に國神の怒りに觸れたのであると稱し、天皇の許可を得て、有司に命じて佛像を難波の堀江に投じ、且つ向原寺を焼いた。これから蘇我・物部の争ひが盛んになつて来た。二十三年、大伴狭手彦は高麗から歸り、其の獲る所の美女及び甲刀鐘撞若干を稻目に遺つたが、稻目は其の美女を納れて妻とし、輕曲殿に置いた。三十一年三月に歿した。

蘇我入鹿

名 號 鞍作大臣といひ、ま

そ

系 統 蘇我蝦夷の子である

事 蹟 皇極天皇の時、國政を専らにし、其の威權は父に過ぎたので、上下震恐して嚴酷を憚つた。これよりさき、蘇我氏は聖德太子の諸皇子と仲が悪かつたので、入鹿は之を除き、舒明天皇の皇子で、蘇我馬子の女の生んだ古人大兄皇子を立て、天皇と爲さうとし、皇極天皇の二年、巨勢德太古・土師・蘇我を遣つて、山背大兄王を蘇我宮に襲はせて殺した。三年二月、入鹿は家を甘榜岡に起し、父蝦夷の宅を宮門と呼び、自分の宅を谷宮門と呼び、其の子を王子といひ、櫓を宅外に構へ、傍に兵庫を設け、防火の設備をなし、常に佩刀の力士に護衛させた。中大兄皇子は深く入鹿の不臣を憎まれ、藤原鎌足と謀つて誅伐を策し、四年六月、三韓貢進の日、天皇が大極殿に出御され、入鹿がまた侍座するのを窺ひ、俄に躍り出て入鹿を斬つた。入鹿は傷きながら、御

座に近づいて天皇に哀訴した。中大兄皇子は伏して、「鞍作不遜にして將に天位を傾けんとす。故に誅伐を加ふるのみ」と奏上された。天皇が立つて内に入られたので、大養嗣田は遂に入鹿を斬つて誅した。「ふじはらのかまたり・藤原鎌足」、「てんちてんのう・天智天皇」、「そがのえみし・蘇我蝦夷」の諸項を参照されたい。

蘇我馬子

名 號 號を島大臣といふ。

系 統 蘇我稻目の子である

事 蹟 敏達天皇の元年に大臣となつた。十三年九月、鹿深臣某・佐伯連某が、百濟から彌勒石像及び佛像各々一軀を齎らしたので、馬子は其の佛像二軀を請ひ、また司馬連等・池邊氷田・鞍作村主を四方に派遣して修行者を索めたが、偶々高麗の還俗僧慧便が播磨に来て居たので、馬子は慧便に

師事し、また司馬連等の女島を度して善信尼といひ、別に二女(禪藏尼・惠善尼)を度して善信尼の弟子とした。これが我が國に於ける出家の始めである。馬子は三尼を司馬連等・池邊氷田に附けて衣食を給與させ、佛殿を家の東に經營し、彌勒の石像を安置し、三尼を屈請して齋會を行つたが、これが我が國に於ける齋會の始めである。時に司馬連等は佛舍利を馬子に獻じたので、馬子は佛舍利に靈の有るのを見て大いに驚き、益々佛法を崇信し、修行することを怠らず、遂に佛殿を石川の宅に造つたので、佛法はこれから大に世に行はれる様になつた。

二七九

佛を講らんことを請うた。天皇は素より文史を好み、佛法を喜ばれなかつたので、これを既戸皇子に語り、「本朝自ら神あり、いま馬子異域の神を祀らん事を請ふ。これを如何にすべきか」と仰せられた。時に皇子は答へて、「佛法は神道と毫も違ふ所なし、馬子の佛法を起さんと請うは、これ國家の福なり」と奏せられたので、勅して馬子の請を許された。時に天下に悪疾が流行し、人民の死する者が多かつた。大連物部守屋及び中臣勝海は、これを以て蘇我氏が外神を祭つた結果、國神の怒りに觸れた爲であると奏したので、天皇は勅して佛法を禁ぜられた。よつて守屋は自ら寺に赴き、堂塔・佛像を燒き、餘燼を難波の堀江に投じ、且つ馬子の崇信する三尼を瀬相櫛市に引き出して燒たせた。時に十四年三月である。然るに瘡を患つて死する者が京師に續出したので、「これ佛像を燒くの致す所なり」といふ流言が起つた。六月、

馬子は奏して、「臣の病久しく癒えず、三寶の力を藉るに非ざれば救治し難し」と請うたので、天皇は馬子に勅して、「汝獨り之を行ひ、他人を惑はす事勿れ」と仰せられ、且つ三尼の禁錮を解いて還附されたので、馬子は大いに喜び、新に稱舎を營み、三尼を迎へて供養した。

十四年八月十五日に敏達天皇が崩せられ、同年九月五日に用明天皇が即位された。馬子は舊の通り大臣の任に在つたが、二年正月、用明天皇が病に罹られたので、既戸皇子は傍に侍して佛經を誦せられた。天皇も佛法に歸依しようとする御志があり、守屋・勝海らは絶対に反對を唱へたけれども、馬子は「たゞ詔の儘に従はんのみ、誰かまた異議を挿むべき」と稱し、豐國法師を内裏に引き入れた。守屋は大いに怒り、法師を啤脱したが、既戸皇子は左右を顧み、「守屋、因果の理に迷ふ、禍、今に至らん」と言ひ、馬子と共に守屋を

滅さうと謀られたので、守屋も阿都の別業に退き、兵を集めて自ら衝つた。蓋し大臣・大連の争議には深い由来があるが、茲に至つて遂に衝突する様になつた。

二年四月九日に用明天皇が崩せられたので、守屋は穴穂部皇子を立てようとしたけれども、馬子は敏達天皇の皇后炊屋姫命を奉じ、六月、兵を發して穴穂部皇子を害し、七月、更に守屋を伐つて之を斃した。亂が平定してから、馬子は飛鳥に法興寺を建てたが、これは守屋と戦つた時に、勝利を佛に新つた爲であり、約九年餘の歲月を経て落成した。

用明天皇に繼いで崇峻天皇が立たれたが、天皇は蘇我氏の出であるに拘らず、深く馬子の專横を憎まれ、密にこれを除かうと謀られたが、馬子はこれを察知し、五年十一月三日、東漢直駒を遣つて天皇を寢殿に弑せしめた。時人は馬子の威權に恐れ、敢て諷する者がなかつた。馬子は即ち炊屋

姫皇后を擁立したが、これが推古天皇である。

推古天皇の時には、既戸皇子が攝政されたけれども、實權は馬子の掌握する所で、新羅を伐つて隋唐と修交し、十一年十二月に始めて冠位十二階を定め、十二年正月には始めて曆法を行ひ、また天皇記・國記などの國史を撰録したるなど、其の治績の見るに足るものが多かつた。これ蓋し既戸皇子らと相讓して制定したものであるけれども、馬子の力の多い事は争はれない。彼の十七條の憲法の如きも然うである。二十九年二月、既戸皇子が薨せられたので、馬子は周圍に憚る者がなくなり、天下は益々其の威を仰ぎ、專恣がまた増長した。馬子は人と爲り、武略に長じ、且つ才辯があり、深く三寶を敬した。飛鳥川上に營んだ邸には、池を穿ち、島を築いたので、世に島大臣といつた。推古天皇の三十四年五月に薨した。桃原の地に葬る。

蘇我蝦夷

名號 豐浦大臣と稱する。  
 系統 蘇我馬子の子である。  
 事蹟 推古天皇の三十四年に大臣となつた。天皇の崩後、皇嗣が未だ定らなかつたが、蝦夷は田村皇子を立てようとし、境部麻理勢は山背大兄王を立てようとし、兩々大いに争つたが、蝦夷は兵を遣つて麻理勢を殺し、遂に群臣と共に田村皇子を奉戴した。これが舒明天皇である。

爾來、僭越の舉動が頗る多く、皇極天皇の時には、祖廟を葛城の高宮に建て、八佾舞を舞はせ、歌を作つて誦はせた。また諸國の人民並びに百八十部の部民を使役し、豫め二墓を今來に築き、其一を大陵といつて、自分の墓とし、他の一を小陵といつて、入鹿の墓にした。此の時、蝦夷は上宮の乳部の民をも使役したので、聖徳

太子の御女上宮大姫姫王は憤つて、天に二つの日なく、國に二人の君なきに、蝦夷が國政を擅にして無禮多し。何故に恣に我が乳部の民を役するか」と言はれた。これから兩家は怨恨を結んだといふ。

舒明天皇の二年十月、病と稱して朝せず、私に紫冠を入鹿に授けて大臣に擬し、次子某を呼んで物部大臣といはせた。蝦夷の母は物部守屋の妹であつたから、蝦夷は悉く母の資財を收めて益々富りとなつた。

既にして中大兄皇子と藤原鎌足とが相謀つて、入鹿を大極殿で誅し、其の屍を蝦夷の家に移られた時、蝦夷は親戚兵士を集めて備へる所があつたけれども、間もなく散じ去つたので、豫て撰んだ天皇紀・國記及び寶貨を燒いて自殺した。「ふちはらのかまたり・藤原鎌足」、「そがのいるか・蘇我入鹿」の諸項を参照されたい。

Socrates

事蹟 希臘アテネの大哲學者である。西紀前四六九年（我が孝昭天皇の七年）に生れた。父ソフロニクスは彫刻家で、母フェナレテは産婆であつた。ソクラテスも父の職を繼いで彫刻に従つたが、後に感ずる所があつて之を廢し、一身を精神的事業に捧げようとし、大いに學問を勵んだ。ソクラテス以前の哲學者は、主に萬物の起源の如き高遠な哲理を論じたが、ソクラテスは主に人倫道德を説いた。故に羅馬のシセロは、「ソクラテスは哲學を天より引きて地に降せり」と評した。

當時、アテネの人心は大いに腐敗し、殊に讒辯學派の徒は、辯を弄し、辭を飾り、是非を亂し、人心の適從する所を知らず、青年の毒された者が尠少でなかつた。ソクラテスは此の有様を見て、慨然

として起ち、これを救済しようとして、或は街頭に立ち、或は集會所に現れ、相手を選ばずに談論して、熱心に青年を導いたが、其の風采の奇異と、辯論の巧妙とを以て、痛く時人の注意を惹き、「青年の戀人」と稱せられた。

ソクラテスは、克己の精神に富み、操守が頗る堅く、如何なる事に臨んでも、從容として動かず、常に「汝自身を知れ」といふ語を以て、自ら戒め、他をも戒め、死に至るまで熱心に知識を追求してやまず、其の高徳は實に萬世の師表となすに足るものである。併し此の大聖人も、遂に時流に容れられず、反對徒の惡む所となり、時の政府に讒奏され、「青年を惑はし、神祇を侮る」の故を以て、死刑に處せられる事になつた。時に西紀三九九年（我が孝昭天皇の七年）である。

ソクラテスの死に臨むに際し、弟子達は其の無實の罪を悲み、殊にクリトンは獄舎を訪ひ、他國

に逃さうと圖つたが、ソクラテスは、國法の尊重すべき事を説き諭し、儼然として「吾、今罪なくして死するも何ぞ悲まんや。汝等、吾が罪ありて死するを欲するか」と言ひ、從容として毒杯を傾けて致した。世に釋迦・孔子・基督・ソクラテスを世界の四聖といふ。

### 蘇東坡

**名** 姓名を蘇軾といひ、字を子瞻といひ、號を東坡といひ、世に大蘇と稱する。

**系** 蘇洵の長子で、蘇轍の兄である。

**事** 父の蘇洵は、字を明允といひ、號を老泉といひ、蜀の眉州に生れ、最も文に長じ、嘉祐集の著がある。東坡は宋の仁宗(我が後冷泉天皇の頃)の晩年に仕へたが、湖北黃州に貶せられた時、其の住地の名に因んで、東坡居士と號した。詩・文に長じ、歐陽修と

共に宋の大家と稱せられ、著書に東坡全集がある。弟の蘇轍は、字を子由といひ、號を穎濱遺老といひ、最も文に長じ、樂城集の著がある。斯様に蘇氏は、父子三人とも名高い文人であつたから、世に三蘇といひ、洵を老蘇、東坡を大蘇、轍を小蘇といつた。

### た

### ダーウイン

**名** チャールス・ダーウインといふ。

**事** 英國の自然科学者である。西紀一八〇九年二月十日(我が光格天皇の文化六年)に生れ、夙に父祖の性質を傳へ、幼時から博物學を好んだ。一八二五年エジンバラ大學に入學し、醫學を修めたけれども、其の業務に就く事を好まなかつたから、一八二八

年、ケンブリッジ大學に轉じ、博物學を専攻する事三年、パチェロル・オブ・アーツの學位を受け、ついでセント・ヘレナ島に航行して、博物學の實習をなし、また南米・南洋其の他の地方を實地に調査し、地理・生物・人種などに関する資料を集めた。而して一八五四年以來種の變遷に関する研究を(ダーウイン)



始め、其の該博な知識と、鋭敏な觀察力と、且つ多年蒐集した豊富な材料などによつて、「種の起源」を草し、一八五九年に之を發表し、多年の難問題を明瞭に解決するものが出来た。即ち生物界に存するものは、各自生存競争の結果、自然淘汰によつて、不適者は死滅し、

適者のみが生存し、且つ次第に發達進化するものなる事を明瞭にした。

ダーウインは、西紀一八八二年(我が明治十五年)に七十四歳で歿したが、英國のウォーレス、獨逸のワイズマンらは、大體に於て彼の進化論に賛成し、殊にワイズマンは多少の異説を主唱し、細胞學上の研究を進化論に加味し、「生物進化の原因は、全く自然淘汰のみにある。其の淘汰の行はれんが爲に、多數の個體間に生存競争を起し、適者は生存し、弱者は滅亡する。其の相違は、雌雄生殖によつて異つた個體の生殖質が種々の割合に混する事に起因する」と結論した。

### ターナー

### Turner

**事** ジョセフ・ターナーは十九世紀初葉に於ける英國の風景畫家である。西紀一七七五年

(我が後醍醐天皇の安永四年)倫敦の理髮師の子として生れた。幼時から繪畫を好み、水彩畫家トーマス・ゲイティンに學び、一七八九年から倫敦ロイヤルアカデミーの研究生となり、一七九三年には始めて力作の油繪を展覧した。一八〇二年にはアカデミーの會員に推薦され、且つアカデミーの透視畫教授に擧げられた。同年佛蘭西・瑞西に遊び、後に伊太利に赴くこと三回に及び、殊にヴェニス

の風景に感激した。ターナーの製作は可なりに多いが、水彩畫は其の大部分を占めて居る。彼は當時の水彩畫の大家ウィルソンに倣つたが、後には却つてウィルソンが彼を追隨した。ターナーは最も多く和蘭のヴァン・デル・ヴェルデ・キンプ・ヴァン・ゴイエン及び佛蘭西のクロード・ローランらの影響を受けて居る。然るに一八三〇年頃から畫風が變化し、一種の急激な筆觸によつて、瞬間の光景を抹刷することを得意とし、太陽

の光や、海の輝や、霧の趣などを表現したが、此の點に於て彼は美術史上獨自の地位を占めて居る。英國最大の民衆畫家であつたが、併し生涯殆んど恵まれず、一八五一年(我が孝明天皇の嘉永四年)に窮死した。遺志によつて國家に遺寄した作品數千點は、今尚ほ倫敦のテート・ギャラリーにある。油繪の遺作中では、「鐵艦テメルールの最後」が名高い。

### 醍醐天皇

**名** 御名を敦仁といひ、または延喜帝と稱する。

法諱を金剛寶といふ。世に小野帝または延喜帝と稱する。

**系** 宇多天皇の長子で、御母は藤原高藤の女鹿子である。第六十代の天皇である。

**事** 宇多天皇の寛平元年十二月に親王となり、同五年四月に皇太子となり、同九年七月十三日に即位された。時に御年十三歳

である。

大納言藤原時平と、權大納言菅原道眞とが天皇を輔佐したが、ついで時平は左大臣になり、道眞は右大臣になり、相並んで政事を參決した。天皇の即位には、道眞の贊助が與つて力があつたから、天皇は特に道眞を信任された。道眞(醍醐天皇)



は年が長じ、學徳が高く、頗る治體に諳練し、裁決が流れる様で、紀綱が振肅した。然るに時平はこれを喜ばず、寵任の己れに勝るのを嫉み、「道眞は天皇を廢して、女婚の齊世親王を立てようとする志がある」と讒奏したので、道眞は天皇の忌憚に觸れ、昌泰四年正

月、太宰權帥に貶せられた。

道眞の左遷された昌泰四年の七月、延喜と改元された。時平に黨して道眞を陥れた大納言源光が右大臣となり、左大臣時平と相並んで朝に立つたが、政權は専ら時平の掌中にあつた。後世の人々は道眞に比して時平を惡むけれども、時平は決して凡庸大臣ではなく、よく天皇を輔けて庶政の改革を斷行した。天皇は年長じて英明で、銳意治を圖られ、群臣には必ず顔を和けて接せられ、また百姓を憐れ、冬夜に御衣を脱いで人民の凍寒を忍ばれたことは、音く人口に膾炙する所である。當時、畿内は無事太平で、人民が堵に安んじたから、後世の人は延喜の治といひ、醍醐天皇を仁德天皇に比する。併し畿外の地は、國司が政を失し、武門が漸く起らうとし、騷亂が諸國に起つた。

延喜時代には、京畿に文運が起つたが、延喜元年には時平に詔し

て三代實錄を撰ばせ、同五年には紀貫之らに詔して古今和歌集を撰ばせられたが、これが和歌勅撰の始めである。また時平らに命じて格式を編ませられたが、同七年に延喜格十二巻が成り、延長五年に延喜式五十巻が成つた。格式の撰定はこれを以て最後とする。醍醐天皇は延長八年九月二十二日に位を朱雀天皇に譲つて落飾し、其の日に崩せられた。聖壽四十六、在位三十三年、改元三回、山城國宇治郡醍醐村大字醍醐の後山科陵に葬る。「すがはらのみちざね・菅原道眞」、「うだてんのう・宇多天皇」の項を参照されたい。

たいしやうてんのう

大正天皇

名 誠 御名を嘉仁といふ。

幼稱を明宮といふ。

系統 明治天皇の第三皇子で、權典侍柳原愛子の御腹で、第二百二十三代の天皇である。

事蹟 明治十二年八月三十日に降誕され、二十年九月から學習院へ御降學あり、二十二年十一月三日、御年十一歳で皇太子となり、壹切の御剣を承けられた。三十三年五月十日に九條節子姫と御成婚あり、後屢々見學の爲に諸地方を巡啓され、鶴駕の轡のない地方は殆どない。明治三十七八年戰役の際には、或は大木營の護に參じ、或は令旨を下して戦功を嘉賞し、或は慰問使を派遣されるなど、頗る繁忙を極められた。四十年十月には韓國に行啓し、韓國帝室を御訪問あり、四十五年七月三十日、明治天皇の崩後直ちに踐祚され、大正と改元されたが、時に御年三十四歳である。

はせられた。晩年、御不例に渡らせられたので、十年十一月、皇太子裕仁親王を攝政に任じ、靜養に日を送らせられたが、同十五年十二月二十五日、聖壽四十八歳で崩御された。東京府下多摩御陵に葬る。天皇は在位十五年に過ぎなかつたが、其の間に世界大戰・關東大震災などの大事件があつた。

大正三年七月、埃太利・セルビヤの國交斷絶を發端として、獨逸の同盟軍は、露・佛・英・伊・米などの聯盟軍と開戦し、前後五年間に亘つて空前の大戦争が行はれた。此の戦亂の起ると共に、獨逸は膠州灣の防備を嚴重にし、此の地を東亞の策根據地とし、獨逸の軍艦は東亞の海上に出没し、英國及び日本の海上貿易は障礙を受けるに至つた。我が國は日英同盟の誼と東洋平和の爲に、八月二十三日、獨逸に對して宣戦し、直ちに海陸呼應して青島を攻撃し、南洋諸島を攻略し、また遠く地中海に艦隊を派遣するに至つた。

先づ膠州灣攻略に當つたのは、第二艦隊司令官海軍中將加藤定吉である。定吉は八月二十七日膠州灣租借地全部の封鎖を宣告し、陸軍中將神尾光臣は、九月二日、第十八師團の兵を率ゐて龍口灣に上陸し、背面から青島に向ひ、海陸呼應して進み、十月十二日に非戦闘員救助の聖旨を傳へ、其等の非戦闘員を受領して濟南に送り、十月三十一日の天長節の佳節を卜して總攻撃を開始し、十一月七日イルチス・ビスマルク・モルトケなどの諸砲臺を占領したので、青島要塞司令官ワルデックは、遂に白旗を掲げて降伏し、青島は完全に我が支配に屬するに至つた。

青島に在つた獨逸南洋艦隊の主力は、遙かに南洋に浮び、聯合國の商船を砲撃し、交通運輸に妨害したので、海軍中將加藤友三郎は第一艦隊を率ゐて南洋に出動し、英國の濠洲艦隊と協力して、十月三日から十九日迄の間に、マリーシャル・マリヤナ・カロリンなど、

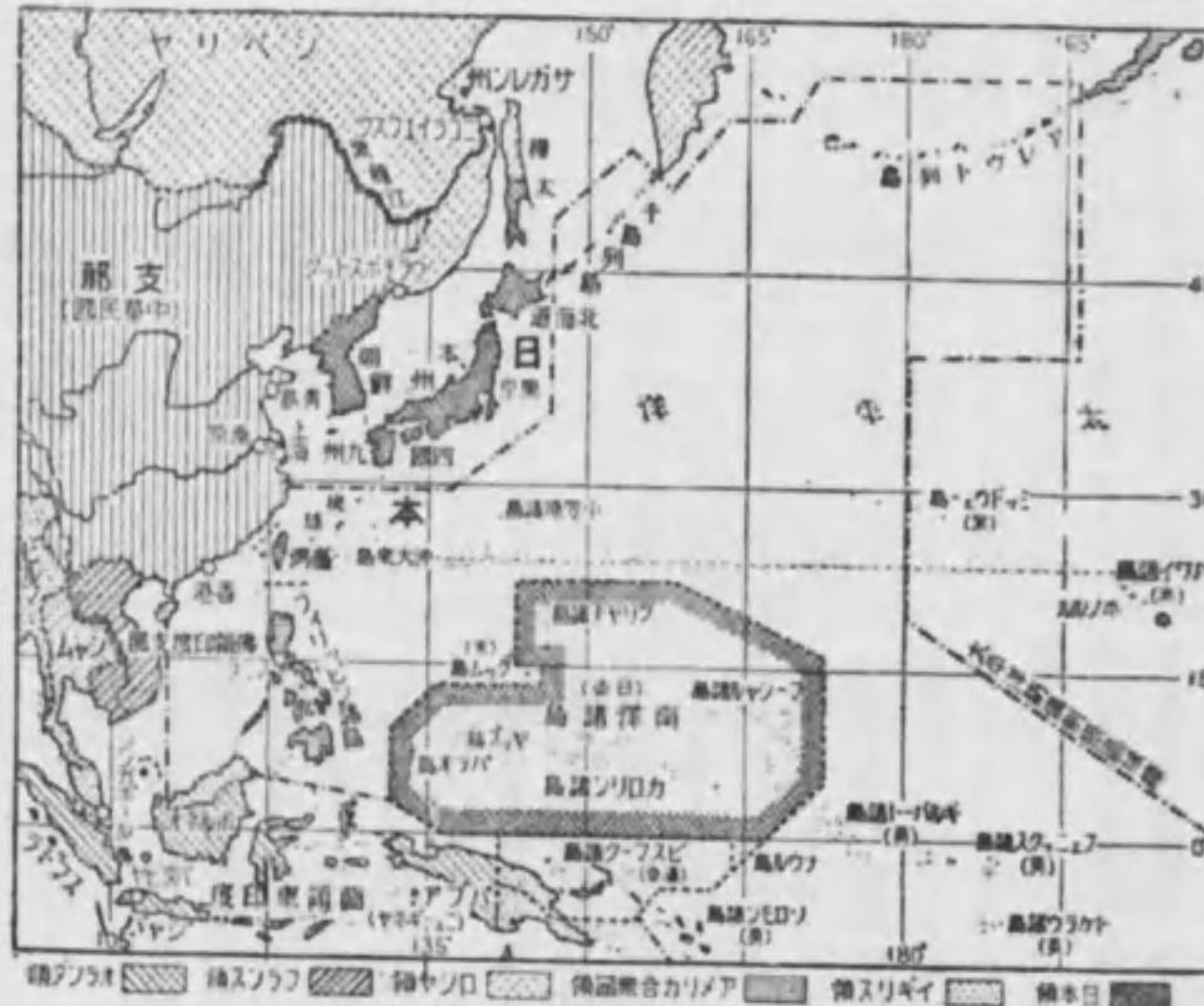
赤道以北の獨逸南洋諸島を占領し、太平洋に於ける獨逸の根據地を一掃した。

然るに獨逸の艦艇は、印度洋・地中海などにも出沒し、各國の商船を撃沈し、交通運輸を妨害したので、更に我が艦隊は印度洋方面に出動し、英國驅逐艦隊と協力して、警戒掃蕩の任に當り、印度兵・濠洲兵の出征を授け、更に大正六年二月には地中海に出動し、獨逸の潜行艇と戦ひ、聯合國の商船を保護し、運送船の護送二百回に及び、我が海軍の光輝を添へた。

斯くて大正七年十一月に至り、獨逸及び其の同盟國は、聯合國に降服して休戦條約を結んだので、關係二十七國の媾和全權委員は、八年一月、巴里のヴェルサイユに集つて會議を開く事になつた。我が國からは西園寺公望及び牧野伸顯・珍田捨己・松井慶四郎・伊集院彦吉らが列席し、英・米・佛・伊と共に五大國の一として會議に與つた。而して二月以來、米國大統領

領ウィルソンの提唱した十四條條約を基準として會議を進め、國際聯盟を作つて其の調印を終つた。

し、獨逸の植民地を處分し、平和條約を作つて其の調印を終つた。



盟を結び、歐洲諸國の國境を決定  
パラオ・マーシャルなど

(圖勢形洋平太近最)

時に大正八年六月である。此の條約の結果、我が國は膠州灣及び山東省に於ける全獨逸の利權を獲得し、舊南洋領島(マリアナ・カロリン)の委任統治權を獲得した。

大正十年に至り、米國大統領ハーチングは日・英・米・佛・伊の五大國に加ふるに支那・和蘭・白耳義・葡萄牙などの四國の代表者をワシントンに招き、軍備制限に關する會議を開く事にしたので、海軍大臣加藤友三郎は徳川家達・幣原喜重郎・埴原正直らと共に出席し、十年十一月一日から翌十一年二月六日までの間に、(一)五大國海軍の制限、(二)太平洋防備の協定、(三)支那の主權及び領土の尊重、(四)日英同盟の終了などを議した。

ワシントン會議の結果、英・米・日の三國は、五・五・三の比率として主力艦の制限を議めたが、補助艦の方は不成立に終つた。また太平洋方面に於ける日・英・米三國の海軍根據地及び要塞は、現状維持を取りきめた。また日・英・米・佛・伊・支・蘭・白・葡は支那の獨立及び其の領土の保全を尊重し、支那領土内で各國が商工

業を經營する場合は、各國とも其の機會を平等にし、且つ自由に經營が出来る様にしたが、これを九箇國條約といふ。また太平洋に關係ある國々は、互に相手國の權利と利益とを尊重し、若し爭議が發生した場合には、日・英・米・佛の四國會談に委託することを定め、これがこれを四國條約といひ、其の結果、從來の日英同盟は自然に消滅する事になつた。

大正十二年九月、關東地方に大地震があり、死者が十萬人、財産の損失が十億圓に達し、實に我が國未曾有の大變災であつたので、大正天皇は救済金一千萬圓を下賜され、全國民も競つて同胞の救済に努め、これが復興に當つたので、昭和五年に至つて完成した。「きんじやうてんのう・今上天皇」の項を参照されたい。

平 敦 盛

**名 號** 世に無官大夫といふ。  
**系 統** 參議平經盛の子である。  
**事 蹟** 從五位下に叙せられたけれども、職掌がなかつたから、世に無官大夫と呼んだ。  
 壽永三年、平宗盛が一ノ谷の戰に敗れた時、平家の一族は海に航して逃れたが、敦盛は獨り後れて海に入り、從兄平知盛の船を望んで馳せた。  
 源氏の部將熊谷直實はこれを見て、後方から大呼して名乗り、闘を求めたので、敦盛は馬首を廻して水邊に至り、直實と組んで馬から墜ちた。直實は其の上を降り、膝で鐵の袖を抑へ、刀を抜いて首を刎ねようとしたが、其の妙諦宛容を見て、これを殺すに忍びなかつた。  
 然るに敦盛は、「戦に出づる、固より生還を期せず。汝、速に我れを殺せ」と言ひ、遂に直實に害せられた。時に十六歳である。

たひらのきよもり  
**名 號** 鬍鬚して淨海といひ、或は靜海にも作る。世に平相國と稱する。  
**系 統** 平忠盛の長子である。母は評かでない。平家物語には祇園女御となし、胡宮神社文書には祇園女御の妹となし、源平盛衰記には兵衛佐局となし、共に清盛を以て白河法皇の落胤と爲して居る。蓋し清盛の母が院中に奉公して居たことは信すべきも、落胤説には疑ひがある。  
**事 蹟** 崇徳天皇の大治四年從五位下に叙し、左兵衛佐に任じ、久安二年正四位下に累進して、安藝守に任ぜられた。保元元年、崇徳上皇が藤原頼長・源爲義・平忠正らと兵を擧げ、皇位を争はれた時、清盛は後白河天皇の召に應じ、源義朝と共に白河殿を攻め、大いに上皇軍を破つた。これを保元の

亂といふ。清盛は功を以て攝關守に任じ、ついで太宰大貳に叙した。「ごしらかはてんのう・後白河天皇」の項を参照されたい。  
 既にして源義朝は清盛と隙があり、遂に藤原信賴と謀り、清盛が熊野に詣つた不在に乗じ、兵を發して後白河上皇を一本御書所に幽し、且つ二條天皇を擁して大いに事をなさうとした。清盛は變を聞いて馳せ歸り、天皇を六波羅の自邸に迎へ、子重盛・弟頼盛を派遣して信賴を誅し、義朝を走らせたが、義朝は尾張に到り、舊臣長田忠致に殺された。これを平治の亂といふ。亂後、清盛の勢威は漸く盛んになり、永曆元年には正三位に叙し、ついで參議に任じ、永萬元年には權大納言に累進した。「ごしらかはてんのう・後白河天皇」の項を参照されたい。  
 既にして高倉天皇が即位されたが、未だ幼沖の故を以て、後白河上皇が親しく庶務を決せられた。時に清盛の妻平時子は、皇太后の

越であつたから、勢が益々盛んになつた。上皇は精々これを感ぜられたけれども、制する事が出来ず、積憤の餘り、嘉應元年六月、薨髪して佛乘に歸依されたが、清盛は竊かに喜んだといふ。  
 清盛は六條天皇の仁安二年二月太政大臣に陞り、隨身兵仗を賜ひ、轡車を宮中に出入することを許された。武臣で太政大臣になつたものは、清盛を以て始めとする。間もなく、太政大臣兵仗轡車を辭したが、三年には疾病に罹り、薨髪して清運と稱し、ついで靜海と改めた。世に太政人道と稱する。曾て別館を西八條に營み、多くの蓬を植ゑ、自ら蓬壺と號した。また別莊を攝津の福原に營み、四時の觀を極めた。此の時、天下の政事は一に其の手に出たが、放濫驕溢で、上下は之に苦んだ。承安元年には女の徳子を高倉天皇の中宮に納れたが、同年重盛・宗盛は、相並んで左大将、右大将となつた。一門に公卿十六人、殿上人三十

餘人、受領三十餘國、莊園五百餘箇所に及び、榮華の極を達し、平氏でない者は人でないといふに至つた。  
 清盛の專横が日に甚だしかつたので、後白河法皇はこれを厭はれた。  
 (福原莊附近圖)



を聞いて福原から歸り、西光・成親を斬り、康頼・俊寛を配流した。これを治承の變といふ。また後白河法皇を鳥羽殿に移さうと欲したけれども、重盛に諫められてやめた。  
 治承三年七月、重盛が薨じたので、清盛の專横は益々甚だしくなつた。重盛の薨後、法皇は關白基房と謀り、越前にある重盛の莊園を没收し、また基房の子師家を中納言にされた。時に基房の兄の子基通は、清盛の女婚であつたから、清盛によつて中納言を望んだけれども、許されなかつたので、清盛は大いに怒り、即日奏して關白基房を罷め、基通を内大臣關白と爲し、法皇に親近する三十九人の官職を奪ひ、また法皇を鳥羽殿に幽閉した。四年四月、清盛は高倉天皇に迫つて己の女徳子(建禮門院)の所生なる安德天皇(御年三歳)に讓位させた。また自分の信仰する嚴島神社に高倉上皇の御幸を請

ふなど、專横の限りを盡した。  
 清盛が專横を極めて居る間に、諸國の源氏は再興の機を待つた。源頼光の玄孫源頼政は、かねて平氏を滅ぼさうと考へたが、治承四年、後白河法皇の王子以仁王の令旨を請ひ、諸國の源氏に傳へて兵を募つたが、謀が露はれたので、頼政は急に兵を擧げ、平氏の軍と宇治に戦つて敗れ、七十七歳で自殺し、以仁王は流矢に中つて薨せられた。これが治承四年五月である。  
 これよりさき、清盛は叡山・奈良の僧徒が屢々京都を犯すのを嫉み、京都の外に新都を造り、人心を一新しようとし、頼政の亂が平定してから、己の別莊地福原に新都を營み、治承四年六月、天皇及び諸皇族を奉じて遷都した。此の時、人情崩壊し、物議紛々としたので、清盛は法皇を福原の新京板屋に幽した。人呼んで牢御所といふ。「ごしらかはてんのう・後白河天皇」の項を参照されたい。

源頼政の擧兵後、諸國の源氏は蜂起した。源頼朝は配所に在ること二十年、以仁王の令旨を受け、北條時政と謀つて、治承四年九月伊豆に兵を擧げ、先づ目代平兼隆を殺して直ちに相模に入り、大庭景親と石橋山に戦つて敗れたが、其の後、房・總・武・相を従へ、鎌倉に據つて威を關東に振つた。清盛は大いに驚き、維盛・忠度・知度を追討使として派し、富士川に對陣したが、一夜水鳥の羽音に驚き、戦はずに逃亡した。ついで源義仲も、以仁王の令旨を奉じ、信濃に兵を擧げて頼朝に應じた。

治承四年十一月、公卿・百官は福原の新京を喜ばなかつたので、清盛は俄かに諸卿を率ゐて京都に移つた。此の時、天下諸道には平氏に叛いて源氏に應ずる者が相繼ぎ、土事の逃亡する者が多かつた。清盛は意氣が沮喪し、法皇に請ふて再び政を院中に聽かせ、且つ美濃・讃岐の二國を獻じ、更に天下の事を宗盛に委ね、養和元年、關

東の兵に備へる爲に、諸將を派して沿道の所々を守らせた。また宗盛は院宣を奉じて東下しようとしたが、偶々清盛は熱病に罹り、同年閏二月、六十四歳で薨じた。清盛は身を武門に起し、位人臣を極め、一門も大いに榮え、所領は天下の過半を占め、富は皇室を凌ぎ、被服冠帽は華麗を極めたので、一時、彼を貴んで六波羅標といつた。大納言平時忠は、常に人に語つて、「平族に非ざれば人に非ず」といつた。以て隆盛を想ふべきである。

平 國 香

名 號 名を良望ともいふ。  
系 統 平高望(高望王)の長子である。  
事 蹟 朱雀天皇の承平の頃に、常陸大掾となつて其の國府に在つた。偶々其の甥の平將門は、常陸前孫源護の三子扶・隆・繁と女事

によつて難を構へ、遂に兵を發して扶・隆・繁の三人を攻め殺した。時に國香は護に味方して三子を援けたが、承平五年二月、將門の爲に攻められて自殺した。國香の子貞盛は、左馬允として京師に仕官して居たが、變を聞いて東國に歸り、父の屍を收め、天慶三年二月に至り、藤原秀郷と共に將門を攻め滅ぼした。たひらのまさかど、平將門の項を參照されたい。

平 維 衡

系 統 平國香の孫で、平貞盛の子である。  
事 蹟 貞盛は平將門を誅して父國香の仇を報じ、功によつて鎮守府將軍に任じ、丹波守・陸奥守などを經て、漸く平氏興起の緒を開いたが、維衡は上野介・常陸介に任じ、また伊勢守・陸奥守などに任じた。維衡は伊勢に住んだので、子孫は伊勢平氏を稱した。

即ち維衡から正度・正衡・正盛・忠盛を經て清盛に至り、官は太政大臣に進み、一族は大いに顯盛を極めた。

平 維 將

系 統 平國香の孫で、平貞盛の第二子で、平維衡の弟である。  
事 蹟 貞盛は平將門を誅して父國香の仇を報じ、功によつて鎮守府將軍に任じ、丹波守・陸奥守などを經て、漸く平氏興起の緒を開いた。維將は常陸介・筑前守・肥後守となつたが、これが北條氏の祖である。即ち維將の曾孫維方の孫に時方があり、伊豆介となり、子孫は伊豆の北條に住み、北條を氏としたが、時方の孫は即ち北條時政である。

平 維 盛

名 號 世に櫻梅少將といふ

系 統 平重盛の嫡子である。美濃權守となり、ついで右少將に任じ、高倉天皇の承安二年に中宮權亮を兼ね、從四位下に叙した。維盛は姿儀が美しく、安元中に後白河法皇の五十御賀に際し、青海波を舞つて觀者の歡賞を受け、櫻梅少將と呼ばれる様になつた。

既にして源頼朝が兵を擧げたので、維盛は追討使となり、兵五萬を率ゐて富士川の西岸に陣した。頼朝は兵二十萬を率ゐて駿河の黄瀬川に赴き、部將武田信義に命じて兵二萬を以て間道から夜襲させた。偶々富士沼の水鳥が驚き立つたが、維盛の軍は其の羽音を聞き、敵兵の來襲と考へ、一戦もしない

平 貞 盛

名 號 常平太といふ。平氏で常陸大掾の太郎であつたからである。  
系 統 常陸大掾平國香の子

で右中將に轉じ、藏人頭に補せられ、從三位に進んだ。壽永二年四月、維盛は通盛と共に兵十萬を率ゐ、俱利伽羅峠(礪波山)に源義仲を討つたが、却つて大敗して京都に歸つた。義仲が京都に迫るに及び、平宗盛は安徳天皇及び神器を奉じて西海に奔つた。維盛も之に從つて西走したが、其の末路は詳かでない。維盛の最後に關しては、吾妻鏡には記してない。長門本平家物語・源平盛衰記などには、密に屋島を逃れ、高野山に入つて薙髮し、更に熊野に往つて入水したとあるけれども、何れも確かでない。

事 蹟 朱雀天皇の承平五年二月、平將門が國香を攻め殺した時、貞盛は左馬允となつて京都に在つたが、父の死を聞き、官を棄て、東歸し、常陸大掾になつたけれども、勢力が將門に敵しなかつたので、隱忍して未だ發しなかつた。六年十月、叔父下總介平良兼と協力し、將門と下野の國境に戦つたけれども、勝たなかつた。貞盛は新に朝旨を受けて將門の罪を鳴らし、以て之に當らうとし、天慶元年二月、潜に山道から京都に赴かうとした。將門はこれを知り、輕騎を率ゐて追撃したが、貞盛はこれと信濃の千阿川に戦ひ、苦戦して大敗し、僅に身を以て免れ、單騎京都に入り、事情を太政官に訴へた。

平 重 衡

系 統 平清盛の子で、平知盛の弟である。  
事 蹟 二條天皇の應保二年從五位下に叙し、ついで尾張守に

任じ、左馬頭に進んだ。高倉天皇の嘉應・承安の間に、異進して正四位下に叙せられ、治承三年、左中將に遷り、間もなく之を辭し、四年に藏人頭となつた。此の年の五月、源頼政が以仁王を奉じて兵を擧げたので、兄知盛と協力して頼政を宇治に破つた。また東大寺・興福寺が頼政に通じたのを責め、十二月、奈良に入つて二寺を焼討した。養和元年三月、平維盛らと尾張に入り、源行家を墨股川に破り、ついで左中將に進み、從三位に叙せられた。

壽永二年、平宗盛は安徳天皇を奉じて屋島に據り、頼りに山陽・南海の地を従へた。閏十月、源義仲の部將高梨高信・足利義清・海野幸廣・仁科盛家らが來攻したので、重衡は通盛・敦盛らと舟師二百艘を率ゐて備中の水島に拒ぎ、高信・義清・幸廣を斬り、十一月行家を播磨の室山に破つた。

は生田森を守つて敗走し、須磨浦で莊長家に捕へられた。義經はこれを京都に送り、土肥實平の家に拘留した。時に後白河法皇は重衡に命じ、三種の神器を上るべき事を宗盛に諭させられたが、重衡は其の不可を知りながらも、拒むことが出来ず、書を屋島に送つて其の旨を傳へた。併し宗盛は從はなかつた。

既にして平氏が壇ノ浦に滅ぶに及び、頼朝は重衡を鎌倉に迎へて好遇した。或る日、頼朝は工藤祐經及び侍女千手を遣つて、酒肴を送つて慰撫した。祐經は鼓を鳴らして今様を歌ひ、千手は琵琶を弾いたが、重衡も興に乗じて笛を吹いた。先づ五常樂を奏して後生樂であるといひ、次に皇座章樂を奏して往生樂であるといつた。夜が深くなつて宴が罷み、千手を留めて酒を勧め、一曲を朗詠して、「獨暗數行處氏淚、夜深四面楚歌聲」といつた。文治二年六月、頼朝は重衡を奈良に送り、東大寺・

興福寺の請によつて木津川で斬つた。時に年二十九歳である。僧徒は舊怨に報ずる爲に其の首を奈良坂に擧げた。

平 重 盛

名 號 確鑿して證空と號した。世に小松内大臣といひ、また燈籠大臣ともいふ。

系 統 平清盛の長子である

事 蹟 近衛天皇の久安六年に藏人となり、從五位下に叙し、久壽二年に中務少輔となつた。保元元年、崇徳上皇が御子重仁親王を即位させようとして、左大臣藤原頼長と謀り、源爲義・源爲朝・平忠臣らを召して、兵を白河殿に擧げられた時、後白河天皇は源義朝・平清盛を召して白河殿を攻撃させられたが、重盛は父清盛に從つて軍功があり、二年、正五位下に叙し、左衛門佐に任じ、遠江守を兼ねた。

平治元年十二月九日、藤原信賴・源義朝らが叛し、兵を率ゐて三條殿(院廳)を夜襲し、また藤原通憲の宅を焼き、後白河上皇を一本御書所に幽し、二條天皇を黒戸御所に遷し、多くの白旗を立て、皇居に立籠つた時には、清盛・重盛は熊野に詣でて居たが、變を聞いて途中から馳せ歸り、清盛は密に二條天皇を六波羅の自邸に迎へ、重盛に命じて信賴・義朝を討たせた。重盛は頼盛と共に五百騎を率ゐ、多くの赤旗を翻して待賢門に迫つた。時に重盛は兵を勵して、年號は平治、土地は平安、我等は平氏なり。此の敵必ず平がん」といつた。信賴は紫宸殿を棄て、逃げたので、重盛は紫宸殿の前に進んだが、偶々、義朝の長子義平と戦つて利あらず、左近衛・右近衛をめぐつて退いた。既にして義朝・義平は六波羅を襲つたが、重盛は撃つて之を退けた。此の年の冬、重盛は功によつて伊豫守を兼ね、翌年從三位に叙し、

長寛三年正三位に進み、永高元年參議となつた。

既にして二條天皇が崩せられ、諸寺の僧侶が會葬した。偶々延暦・興福の二寺が次を争うて兵を擧げた。時に「御白河上皇、陰に僧(平重盛)



徒に命じて平氏を討たんとす」といふ訛言が聞えた。清盛は大いに驚き、兵を集めて自ら守つたが、重盛は其の妄説であることを信じて諫めたので、清盛も曉つて兵を解いた。

六條天皇の仁安元年、重盛は權中納言に任じ、春宮大夫を兼ね、二年には從二位に叙し、權大納言に遷つたが、三年には病を以て官を辭した。高倉天皇の承安元年に權大納言に復し、四年には右大將を兼ね、治承元年には左大將に轉じ、ついで内大臣に進んだ。

清盛の專横が甚だしかつたので、後白河法皇は之を厭はれたが、治承元年、法皇の密旨があり、大納言藤原成親・僧西光・源行綱・平康頼・僧俊寛らは、鹿ヶ谷の別荘に會して、平氏を滅ぼさうとしたが、行綱は事の成らないのを見て、福原に行つて清盛に密告した。清盛は六波羅に歸り、先づ西光を捕へ、ついで成親を招いたが、成親は未だ事の露見したの知らずに、盛服して清盛の邸に行つた。乃ち清盛はこれを小室に幽閉して害しようとした。重盛は成親の妹を娶つて居るので、辭を盡して之を救解した。清盛は法皇が成親の黨であ

ることを知り、これを鳥羽殿に幽閉しようとした。重盛はこれを聞いて大いに驚き、急に清盛の邸に赴き、涙を揮つて清盛を諫め、我が一門の榮達は朝廷の殊恩に因る事を述べ、更に語を繼いで、「忠ならんと欲すれば忠ならず。孝ならんと欲すれば孝ならず。重盛の進退は此に谷まる。生きて此の憂を見んよりは、死するに如かず」といつた。列座のものも悉く感動し、清盛もまたこれに従つた。乃ち西光を斬り、成親を備前の兒島に流し、康頼・俊寛を鬼界島に流し、後に人を遣つて成親を殺させた。

平 高 望

名 號 はじめ高望王といひ、後に平姓を賜はり、平高望といふ。

系 統 桓武天皇の皇子葛原親王の御孫で、高見王の御子である。

事 蹟 宇多天皇の寛平元年に、平朝臣の姓を賜はり、從五位上守總介に任ぜられた。伊勢平氏の祖である。



桓武平氏は、桓武天皇の皇子葛原親王・萬多親王・賀陽親王・仲野親王などから出て居る。中にも葛原親王の裔が最も榮えた。葛原親王は高棟王・高見王を生んだが、高棟王には、淳和天皇の天長二年に平朝臣の姓を賜はり、高見王の子高望には、宇多天皇の寛平元年に平朝臣の姓を賜はつた。

高望王は良望(國香)・良將・良兼・良彝・良文・良茂の六子を生んだが、諸子の族は關東の國郡に蕃滋した。國香の子貞盛が平將門を討ち、功を以て鎮守府將軍となつてから、平氏が漸く起り始めた。貞盛から維衡・正度・正衡・正盛を経て忠盛に至り、鳥羽天皇の信任を得て内昇殿を許された。從來、平氏は世々外官に任じ、朝廷に顯はれず、其の族は多く伊勢・伊勢の間に居たので、世に伊勢平氏と稱する。忠盛の子清盛に至り、大いに威權を朝廷に振ふ様になつたが、壽永の亂後に其の族は滅亡した。

たひらのただつね  
平 忠 常

名 號 華髮して常安といふ  
系 統 平高望の後裔で、平忠頼の子である。

事 蹟 下總に居り、上總介に任じ、從五位下に叙し、武藏押領使となつた。世々東國に住み、一族が強盛であつたので、勢を恃んで暴横を極め、兩總の間に盤踞して、貢賦を輸せず、諸役を供せず、後一條天皇の長元元年六月、遂に舉兵して上總の國府を陥れ、安房を侵し、國守の惟忠(姓不詳)を殺した。

朝廷では平直方に命じて、平常を討伐させられたけれども、久しく功績がなく、また安房守藤原光業も、平常の威に懼れて京都に逃れた。長元三年九月、朝廷では直方を召還し、新に甲斐守源頼信に勅して討伐させられた。頼信は坂東諸國の兵を率ゐて常陸に入つた

が、忠常は常・總の間を流るゝ大水を扼して要害を固め、且つ船を收めて渡ることの出来ない様にした。併し頼信は淺瀬を築知し、直ちに徒渉したので、忠常は倉皇として策の出づる所を知らず、確鑿して軍門に降つた。一説に據れば、頼信が河を渡らない前に、忠常は出でて降伏したので、河を徒渉して進撃したといふのは、誤傳であらうといふ。而して頼信は忠常を伴ひ、京都に護送したが、途中、美濃國野上で病死した。時に長永元年五月である。乃ち頼信は、其の首を斬つて京都に護送した。

たひらのただのり  
平 忠 度

名 號 世に薩摩守忠度といふ  
系 統 平忠盛の子で、平清盛の弟である。

事 蹟 正四位下薩摩守に任ぜられた。寛和元年、平重衡と尾

張の墨股川に至り、源行家の軍を破り、行家の子行頼を擒にした。壽永二年、源義仲は延暦寺に至り、足利義清は丹波に至り、將に京都に攻め入らうとしたが、忠度は兵を率ゐて義清を拒いだ。

既にして平宗盛は諸將を召還し、安徳天皇を奉じて西海に走つたが、忠度もこれに従つた。壽永三年二月、源義經が一ノ谷城を襲つた時、忠度は西門を守つて居たが、源氏の部將土肥實平と戦ひ、力戦して勝たず、左右三人と共に水濱に走つた。時に岡部忠澄が追つて来たので、これと戦つて馬から墜ちた。忠度は刀を抜いて刺したけれども、僅かに其の領下を傷けたに過ぎなかつた。偶々忠澄の從卒が來り救ひ、忠度の右臂を斬つた。忠度は免れ難い事を自覺し、忠澄に向つて、「汝、且つ緩うせよ、我、將に佛名を唱へてな死んとす」といひ、忠澄を引いて投ずること丈餘、乃ち帶・甲を脱ぎ、西に向つて端坐したので、忠澄は之を斬つた。

時に忠度は四十一歳であつた。忠澄は其の遺を閲し、自書の歌集一巻を見て、始めて忠度である事を知つたといふ。

忠度は臨野に成長し、膂力が衆に超え、馳名が一時に振つた。兼ねて和歌を藤原俊成に學び、堪能の譽があつた。はじめ西國落の時、五條の俊成の邸を訪問して別を告げ、「承る所によれば、公は勅撰歌集の命を受けて居られるさうな。此の度の職が濟んだら、何れ其の集を撰はれるであらうが、どうか自家の此の百首の中の一首でも、其の中に載せていたゞく事が出来たならば、自分が亡くなつた後々までも、誠に面目を施すことである。其の願が叶つたら、たとへ西海の波に沈むとも、思ひ置くことはない」といつて、自作の歌巻物を俊成の前に差出した。俊成は其の志を憐んで、これを承諾したところが、忠度は涙を流して喜んだといふ。後に俊成は千載集を撰ぶに當つて、讀人知らずとして忠度

の「故郷の花」の一首を採載した。「ささや波や海賀の都はあれにしを、昔ながらの山櫻かな。武人であつた忠度の風流を偲ぶべきである。

たひらのただもり  
平 忠 盛

系 統 平正盛の子である。  
事 蹟 忠盛は白河・堀河・鳥羽・崇徳・近衛の五朝に仕へ、正四位上に叙し、播磨・伊勢・備前などの守に任じ、檢非違使左衛門大尉となつた。崇徳天皇の大治

年間に、山陽・南海の二道に海賊が起つたので、忠盛は勅を奉じて之を捕へた。崇徳天皇の長承元年に、鳥羽上皇は忠盛に得長壽院創建の土木を司らせられたが、忠盛は功によつて但馬守となり、やがて刑部卿に進み、昇殿を許され、上皇の寵遇が日に篤くなつた。よつて群僚の中には忠盛を猜忌し、相讒して陰にこれを圖り、豊明節會の日に事をなさうとした。

忠盛はこれを知りて、「我が門は微なりと雖も世々武臣なり。一旦辱を受けなば、大いに家聲を阻さん。されど避けて朝せざれば恐らく怯懦の譏を免れじ。身を全くして恥を免れんこと、最も良計なり」と言ひ、銀箔を貼つた木刀を佩び、家臣平家貞を從へて昇殿し、刀を暗處で閃かした。群僚は氷の様な光芒を見て大いに恐れ、謀は遂に行はれなかつた。

宴中にかはるゝ歌舞したが、忠盛の舞ふ時には、群僚は調を變じて歌ひ、「伊勢瓶子は醋瓶(素瓶)なり」といつた。忠盛の家を伊勢平氏といつたので、伊勢に産する素焼の瓶に託して、忠盛を嘲笑したのである。忠盛は大いに怒り、未だ宴の終らない中に、木刀を主殿司に授けて退いた。既にして群僚は、「忠盛、勅に由らずして、劍を帯して殿に上り、攫に兵衛を置く。請ふ官籍を削り罪に處せんことを」と奏上した。上皇は大いに驚き、忠盛を召して問はれ

たが、忠盛は陳罪して、「臣が家士、群僚の謀あることを聞き、臣に從ひて至るのみ。臣、實に知らず、其の罪誠に逃るゝ所無し。但し臣が佩刀は、これを主殿司に附したれば、請ふ、これを驗して後に、臣が罪狀を問はれんことを」と答へた。刀を檢せられた所が、果して木刀であつたので、上皇は感嘆して、「忠盛の計、良に善し。士、主の難に赴くは其の常のみ」と、敢て問はれなかつた。

はじめ鳥羽上皇には寵姫があつた。祇園社の東南の別宮に置かれたので、世に祇園女御と稱した。上皇は屢々祇園に行幸された。一夜、上皇落幸の際に忠盛が北面を以て隨行した。偶々雨が降つて闇かつたが、路に夜叉の様なものが居り、頭髮は銀針を束ねた様で、口に火光を吐き、急に明るくなり、急に暗くなるので、上皇は大いに怪まれ、從者は怖れて進み得なかつた。忠盛は命を受けて捕へようとし、進んで之を抱きとめると、

それは朝前に火を點じようとする一老僧で、麥稗を束ねて笠にし、手に火器を握り、火を吹きながら歩いて居るのであつた。衆は始めてそれが鬼でないことを知つた。忠盛は益々上皇の寵遇を得、遂に祇園女御を賜はつたが、近衛天皇の仁平三年、五十八歳で卒した。

平 經 盛

たひらのつねもり  
系統 平忠盛の第四子である。

事蹟 經盛は平清盛の弟で參議に任ぜられた。壽永二年、平宗盛が安徳天皇を奉じて西走するに及び、經盛も三子經正・經俊・經盛らと共に宗盛に従つたが、是等の三子は一ノ谷で戦死した。殊に教盛が源氏の部將熊谷直實に討たれた話は人口に膾炙して居る。直實は平家の公達の風流に感じ、教盛の首級と笛とを父の經盛に送つたといふ。平家は屋島に敗れ、

更に壇ノ浦に走つたが、壽永四年三月二十四日、經盛は大いに源氏と戦つて勝たず、平教經・平資盛・平有盛らと共に海に投じて歿した。

平 知 盛

たひらのとももり  
名號 世に新中納言知盛といふ。  
系統 平清盛の子で、平宗盛の弟である。

事蹟 二條天皇の平治元年從五位に叙し、累進して左中將に任じ、高倉天皇の治承中に從三位に叙せられ、左兵衛督に任じ、院既別當となつた。源頼政が以仁王を奉じて兵を擧ぐるに及び、弟重衡と共に頼政を宇治に破つた。養和元年、平忠度と協力して、源行家を美濃の板倉に襲ひ、火を放つて營を焼き、行家を敗走させた。併し平氏の軍兵は戦に倦み、知盛も病に罹つたので、遂に京都に歸

れを聞いて深く恥ぢ、叔父教盛と共に自刃して盡きた。時に年三十四歳である。

平 教 經

たひらののりつね  
名號 幼名を國盛といひ、後に教經と改めた。世に能登守教經といふ。  
系統 平教盛の子で、平清盛の甥である。

事蹟 正五位下能登守に任ぜられた。安徳天皇の壽永二年、平氏が山陽・南海を復するに及び、源義仲は其の將足利義清・海野幸廣を遣つて攻め、備中の水島に屯し、將に屋島を犯さうとした。よつて教經は、兄通盛・平重衡と舟師を率ゐて水島に赴き、大いに之を破り、敵將高梨高信ら十三人を斬つた。翌三年、父教盛に従つて備中に在つたが、偶々讃岐廳衆が來襲したため、教經は朝刺に乘じ、通盛

と共に之を討つた。廳衆は淡路に走り、源義嗣・源義久に屬したので、教經は淡路に至り、急にこれを攻め、戦ふこと一晝夜の後に義嗣を斬り、義久を擒にし、餘黨を悉く平げ、捷を福原の行宮に報じた。

ついで河野通信を攻めようとして、兄通盛と路を分けて四國に赴き、教經は屋島に至つたが、通信は安藝に走り、沼田次郎と合したので、再び進んで通信を破り、之を伊豫に走らせた。また教經は義嗣の黨安摩宗益の京都に入らうとするを聞き、之を海上に要したので、宗益は進むことが出来ず、和泉の吹井浦に避けた。其の黨國部重茂が來り救ひ、宗盛と合して入京しようとしたので、教經は更にこれを破り、再び捷を福原に報じた。時に緒方惟能・海田宗親・白許維高らが、各々其の衆を率ゐて今木城に據り、また通信も伊豫から來り投じたので、教經は兵を進め、城を攻むること一晝夜で之を

平 教 盛

たひらののりもり  
名號 六波羅總門の側に邸宅を有したので、世に門殿殿といふ。  
系統 平忠盛の子で、平清盛の弟である。

事蹟 近衛天皇の久安四年左近將監となり、ついで藏人となり、仁平中淡路守となり、後白河天皇の保元中左馬頭を兼ね、大和守に遷つた。二條天皇の平治元年藤原信賴・源爲朝らが亂を起した時には、弟頼盛と共に官兵を率ゐて之を攻め、功を以て備中守に任じた。永暦元年、常陸介に遷り、正四位下に陞つたが、應保元年、平時忠と共に、皇弟憲仁親王を立て、儲貳に爲さうと謀るに坐して官を奪はれた。翌二年能登守に任じ、内藏頭を兼ね、六條天皇の仁安元年春宮亮を兼ねたが、高倉天皇(憲仁親王)が即位されるに及んで藏人頭となり、參議に任じ、正三位に叙し、安徳天皇の養和元年、更に權中納言に陞つた。壽永二年、平宗盛以下の一門と

平 將 門

たひらのまさかど  
名號 相馬小次郎と稱する  
系統 鎮守府將軍平良將の第三子である。

事蹟 勇悍を以て聞え、最も腕射に長じた。少壯の頃に攝政藤原忠平に仕へ、其の推薦によつ

て檢非違使にならうとしたが、忠平が省みなかつたので、將門は失望し、且つ憤怒して關東に降り、下總の豐田郡に居り、徒黨を率ゐて常陸・下總の間を往來し、攻剽を以て事とした。

偶々常陸前推源護の三子扶・隆・繁らが、女事によつて將門と離れ、兵を率ゐて豐田郡を襲つたので、將門は迎へ撃つて大いに之を破り、進んで常陸に入り、扶・隆・繁の三人を殺した。時に將門の伯父平國香は、常陸大掾として國府に在つたが、護に與して其の三子を援けたので、また將門の爲に攻め殺された。而して國香の弟平良兼も、護の女を娶つて居たから、國香の子貞盛と共に、兵を起して將門と戦つたが、勝つ事が出来なかつた。よつて護はこれを京都に訴へた。

朝廷は將門が擅に相攻伐し、百姓を侵擾する事を非とし、召して罪に處しようとした。よつて將門は京都に歸せ參じ、密に事柄を陳

述したので、輕に準じて釋放された。承平七年、良兼はまた將門を撃ち、これと常總の間に戦つた。將門は軍中に神異があつたので、兵を收めて歸還した。良兼は兵を縱つて焚掠したので、豐田郡の栗稻院・常羽御厨などは兵燹に罹つた。良兼は將門を得ないのを遺憾とし、十二月に夜襲したが、將門は奮戦して、大いにこれを敗つたので、良兼はこれから力竭きて戦はず、天慶元年に病死した。

貞盛は京都に上り、新に朝旨を受け、罪を鳴らして將門に當らうと考へ、天慶元年二月、潛に山道を取つて上京したが、將門はこれを追撃し、大いに信濃の千阿川に破つたので、貞盛は僅に身を以て免れ、單騎京都に入つて太政官に訴へた。天慶二年、武藏權守與世王・武藏介源經基は、事によつて足立郡司判官代武藏武芝と争つたので、將門はこれを和解させようとし、武芝と共に武藏の國府に赴き、與世王と宴を開いた。然るに

武芝の兵が故なくして經基を圍んだので、經基は敗れて京都に上り、「將門・與世王東國にて謀叛す」と朝廷に讒奏した。時に常陸の藤原玄明は官物を辨納せず、國使に無禮をしたので、國司藤原維幾は之を追捕しようとした。玄明は恐れて將門に投じ、救を求めたので、將門は之を許諾し、天慶二年十一月、維幾を攻めて之を虜にした。時に與世王は、將門に説いて、「一國を討つと雖も罪輕からず、同じくは坂東を虜掠して時機を伺ふに若かず」といつた。將門は此の言を是とし、進んで下野・上野を侵掠し、其の國府を奪つて守・介を奔らせた。偶々或る人が八幡大菩薩の使と稱し、「朕、位を皇子將門に授く」と揚言したので、一軍は大いに歡んだ。よつて將門は自ら新皇と稱し、僞宮を下總猿島郡石井に起し、左右に文武百官を置いた。朝廷は大いに驚き、藤原忠文を征東大將軍に任じ、經基と共に東下させ、將門を討伐させ

られた。然るに未だ到着しない中に、貞盛は下野押領使藤原秀郷と共に將門を下總の幸島に襲ひ、其の營に火を放つて攻めた。將門は貞盛の爲に馬上から射落され、直ちに秀郷から斬られた。時に天慶三年二月で、これを天慶の亂といふ。「みなもとのつねもと・源經基」「たひらのさだもり・平貞盛」の項を参照されたい。

たひらのまさひら 平 將 平

系 統 鎮守府將軍平良將の子である。平將門の弟である。

事 蹟 朱雀天皇の天慶二年十二月、將門が自ら號して新皇といひ、書を藤原忠平に送つて叛した時、將平は密に將門を諷めて、「帝王の業たる、智を以て競ふ可らず、力を以て争ふ可らず、古より今に至るまで、天を經とし地を緯とするの君、業をつぎ基を承くるの王、是れ最も蒼天の與する所

た。これから豊勇を以て聞えた。

たひらのむねもり 平 宗 盛

名 號 屋島大臣といふ。系 統 平清盛の第二子で、平重盛の弟である。

事 蹟 二條天皇の朝に、遠江・淡路・美作の主となり、また左兵衛佐・左馬頭などに歴任し、六條天皇の仁安二年、右中將に遷り、ついで參議に任じ、三年、正三位權甲納言に進み、左衛門督を兼ね、高倉天皇の治承元年右大將を兼ね、二年、正二位に叙し、權大納言に任じ、春宮大夫を兼ねたが、三年には官職を辭した。

此の頃、清盛の勢威は頗る盛んであつたが、重盛が薨じてから、益々専横を極めた。後白河法皇が關白基房と謀り、重盛の山莊を納め、また基房の子藤原師家の中納言に任せられたので、清盛は大いに怒り、治承三年十一月、宗盛に

命じて、法皇を鳥羽殿に幽閉させた。同四年、宗盛は清盛を諷め、法皇を八條鳥丸の第に徙した。此の年の四月二十二日、安徳天皇が即位されたが、宗盛は外戚の故を以て、益々威權を逞しうする様になり、養和元年正月には、畿内及び伊賀・伊勢・近江・丹波などの總管となつた。

治承四年九月、源義仲は以仁王の令旨を奉じ、兵を信濃に起し、源賴朝に應じ、従ふ者が稍々多かつた。養和元年正月、源行家（爲義の第十子）も兵を擧げ、數千騎を率ゐて尾張に入り、二月に美濃の板倉に據つた。飛報が六波羅に傳はり、京都は騒擾し、間に乘じて資財を掠略する兵士があつた。清盛は平知盛を東國に派したけれども、平氏の軍は戦に倦み、知盛は病の爲に尾張の墨股川から歸洛した。

頼朝・義仲の兵威が日に盛んであつたから、宗盛は將に大兵を率ゐる東國に赴かうとしたが、養和

元年閏二月、偶々清盛が薨じたので、平重衡らに七千餘騎を授けて東國に赴かせた。三月、重衡は墨股川で行家の軍を破つた。

偶々頼朝は法皇に密書を呈し、昔日の様に源平兩氏が相並んで奉仕したい旨を奏請した。法皇は書を宗盛に示されたが、宗盛は、「和解の事、實に美事なれども、先人の遺命あるを以て、義として討たざる可らず」と奏して、これを拒絶した。ついで壽永元年權大納言に復し、内大臣に任じた。拜賀の日に至り、儀仗が甚だ盛んで、東北の諸源氏が將に京都に侵入する際であつたに拘らず、宗盛は恰もこれを忘れたものゝ様であつた。同二年、宗盛は從一位に叙し、内大臣を辭した。

宗盛は維盛を北陸に遣り、義仲を討たせたが、俱利伽羅峠（福並山）に大敗したので、義仲は壽永二年七月、大兵を率ゐて京都に迫つた。宗盛はこれを宇治・勢多に防いで敗れ、直ちに安徳天皇・建

たひらのまさもり 平 正 盛

系 統 平正衡の子で、平清盛の祖父である。系譜を示すと、平高望から國香・貞盛・維衡・正度・正衡・正盛・忠盛を経て清盛に至る。

事 蹟 正盛は備前守・因幡守に任じた。鳥羽天皇の嘉承二年、源義親（義家の二子）が出雲に叛いたので、朝廷は正盛に命じて討たせられたが、天仁元年正月、義親を誅して、其の首を右獄に梟し

禮門院及び皇弟守貞親王を奉じ、三種の神器を捧し、一族を率ゐて西海に奔り、太宰府に止まつて四國九州の豪族を従へた。後白河法皇は詔して平氏二百餘人の官爵を(壇浦附近の圖)



削り、更に後鳥羽天皇を擁立された。間もなく九州諸國にも源氏に應ずる者が多く出たので、久しく保つ事が出来ず、遂に讃岐に至り、行宮を屋島に造り、近國を従へて勢が再び振ひ、壽永三年正月、更

に進んで一ノ谷の要害に城き、密に京都に入らうとした。頼朝は範頼・義経をして一ノ谷を襲はせたので、城は忽ち陥り、宗盛は天皇を奉じて屋島に逃げた。義経が急に屋島を襲つたので、再び船に乗じて箱崎に赴いたが、時に範頼が大兵を率ゐて豊後に屯したので、恐れて進む事が出来ず、船を廻して長門の壇ノ浦に漂ふた。義経の軍と戦つて大敗し、天皇は清盛の妻二位尼に抱かれて海に沈まれ、一門悉く戦死した。時に壽永四年三月である。宗盛は子清宗と共に入水し、死する事が出来ずに浮遊し、源軍の爲に捕へられた。義経は之を鎌倉に送つたが、頼朝は宗盛を呼んで讃岐權守と稱し、名を末國と改め、京都に送還する途中、近江の篠原で斬らせ、首を京都に送つて獄門に懸した。時に三十九歳である。「たひらのきよもり・平清盛」、「こしらかはてんのう・後白河天皇」の項を参照されたい。

平良將

事蹟 良將は高望王の二子である。高望王は宇多天皇の寛平元年に平朝臣の姓を授けられ、爾來、平高望と稱したが、高望の六子良望(國香)・良將・良兼・良蘇・良文・良茂も平姓を稱し、其等の族は何れも關東の國郡に繁榮した。良將も鎮守府將軍となつて關東に居したが、其の第三子は即ち平將門である。「たひらのまさかど・平將門」の項を参照されたい。

平良文

鎮守府將軍で、相模の三浦氏は其の裔である。「たひらのたかもち・平高望」の項を参照されたい。

David

事蹟 ジャック・ロドリゲスは、十八・九世紀の交に活動した畫家で、現代佛蘭西美術の先驅者として現はれ、佛蘭西革命後の大嵐の中で、ナポレオンと歩調を合せ、新古典主義によつて美術の基礎を築いた人である。西紀一七四八年(我が桃園天皇の寛延元年)に生れたが、彼は最初から徹底的に墮落した封建時代の繪畫殊にワトローの甘美な陶酔的表現を好まず、希臘・羅馬及び文藝復興期の古典的美術を研究し、二十五歳の時には神話と寓話との天井畫に巨腕を揮つた。始め彼の線者であるブーシエの風を慕つたが、一七七五年に伊太利に遊び、滞在九年の間精勵刻苦し、傑作「ホラテイの誓ひ」をサロンに出品して多大の賞讃を博した。斯くて大革命に前後して、「ブルジョア」の様な激情的題材を捉へて描き、よく時代の心理に投合した。革命の大立物「マラーの死」を描いたのも其の頃である。間もなくナポレオ

に認められ、其の肖像畫を二時間完成した逸話もあるが、遂に此の皇帝と運命を共にし、ナポレオンの失脚後は、白耳義に流調され、一八二五年(我が仁孝天皇の文政八年)に同地で歿した。彼の遺作中ではナポレオンの戴冠式・サビーヌの女の脱出・レカミエ夫人像などが名高い。

高井凡董

事蹟 俳人高井凡董の子で、寛保元年京都に生れ、三十歳の時に谷口蕪村に俳諧を學び、寶井其角に私淑した俳人である。寛政元年十月二十三日、攝津伊丹で客死した。享年四十九歳である。

高倉天皇

名號 御名を憲仁といふ。系統 後白河天皇の第七皇

子で、御母は平時信の女建春門院慈子である。第八十代の天皇である。事蹟 永萬元年十二月に親王となり、仁安元年十月に六條天皇の皇太子となり、三年二月十九日に受禪し、三月二十日に即位された。後白河法皇が院政を執られたが、當時、平清盛の威勢が盛んで、法皇も其の牽制を受けられた位であつたから、天皇は虚しく位に在るのみであつた。

治承三年七月、平重盛が歿したので、後白河法皇は關白藤原基房と謀り、重盛の所領である越前の莊園を沒收されたのみならず、清盛が女婿藤原基通を中納言に推挙したけれども、法皇は之を裁可されなかつたから、清盛は大いに起り、同年十一月、兵を率ゐて参内し、天皇に強請して基房の關白を停め、基通を内大臣關白に任じ、且つ法皇を鳥羽殿に幽閉した。天皇は大いにこれを受へ、且つ朝威の振はないのを愷き、四年二月、

高崎正風

事蹟 薩州藩士で、明治時代の歌人である。幼時から武士氣質の母の教養を受けた。十四歳の時、島津家にお家騒動が起つたが、父は此の事件に關聯して切腹を命ぜられた。父の罪によつて、正風も大島に流される事になり、十五歳の時から三年間流調生活を送つた。將に大島に赴かうとする時、友人の磯永彌九郎は之を視み、「ますらをの胸にたく火の下もえの、いよ／＼きえず時をこそまで」といふ歌を、竹の繪にそへて送つたが、正風は大いに喜び、「なぐさめて君よりおくりくれ竹は、ながき世までの形見とや見ん」と返歌した。正風が自分の歌を人に見せたのは、此の時が始めであつたとい

遂に中宮平徳子(清盛の女)の御覧なる安徳天皇に讓位し、間もなく積憂疾に罹り、養和元年正月十四日、平賴盛の六波羅邸で崩せられた。時に聖壽二十一歳である。京都府下京區清閑寺町の後清閑寺陵に葬る。

ふ。  
大島に赴いてからは、名瀨に小さい家を借りて居たが、若い少年であつたから、島の役人達も親切に取扱つた。併し母に別れ、兄弟に別れ、風波の荒い離島で、薪を拾つて自炊するのは、少年に取つては辛い生活であつたが、其の間、家から持参した書物を讀み、歌の本を讀み、鳥の子供を集めて教へ、時には棒を持つて剣道の稽古をした。友人の折田寧行は、正風を憫んで屢々慰問状を送つたが、其の歌に「あらたまるみよの春風ふきにけり、やがてみやまの花もさくらん」といふのがある。これは新しい御代になつたから、みやまに淋しい生活をして居る正風にも、やがて花が咲いて、世に出られる時が来るであらうといふ意である。正風は寧行の同情に感じ、教されて歸郷するに及び、訪れて深く感謝した。



高くなつた。また勤王の士と交際したが、當時、鹿兒島人は勤王の人々を誠忠派と呼んだ。誠忠派の人々は正風に向ひ「武士の家に生れて、常に勤王の爲に働くべき者が、歌道の如き閑仕事に多くの時間を費やし、武藝の修業を怠るの(高崎正風)

は宜しくない」と忠告したので、正風も覺悟を定め、歌道をやめる事を知紀に相談した。知紀はこれに答へて「貫之・赤人・人鷹などは、今日の歌よみとは違ひ、其の志は全く國家の爲に働く偉い人達であつた。歌は言葉のさきで出来るものではない。其の心、其の魂

から出たものでなければ、眞の歌ではない。故に其の人物が偉いほど、よい歌が出来る事になる。今後は武藝を一心に修練して、王事に盡瘁の出来るやうに努力したがよい」といふ意味を訓へた。

正風は二十四五歳の時に武士に復し、京都に上つて留守役になつた。「雲の上にあがる雲雀をうらやみし、春はわかしににりにけるかな」とは、上京の喜びを歌つたものである。明治維新の始めには再び薩摩に下つて地頭の役を勤めた。明治三年には召されて東京に上つたが、海外の事情を知る必要を感じ、明治五年、政府の許可を得て歐羅巴に渡つた。薩摩の近海を通る時、遠く櫻島を眺めて「春霞たなきかくも故里の、山の高ねを見ればこひしも」と詠んだ。佛蘭西のマルセイユに上陸して巴里に入り、約一年間滞在して税法などを調査し、更に一年間各地を巡視して歸朝した。佛蘭西の

動物園で都鳥を見て「名にはおへどあらぬ都の鳥なれば、わがとふ事も知らずやあるらん」と詠み、伊太利の山水を眺めて、日本の山水に似たのに感興を深くし「山水の似たるをみればふるさとに、立ちかへりたる心地こそすれ」と詠んだ。

正風は歸朝の後に待從番長となつたが、時に明治八年で、明治天皇に拜謁したのも此の時である。天皇は御机の下にある鉢植の牡丹を御指しになり、正風に歌を命ぜられたので、直ちに一首の歌を奉つた。爾來、殆んど毎日の様に御題を賜はつたが、正風はいつも歌を以て答へ奉つた。當時、三條西季知が御歌掛の長をして居たが、明治九年、奥羽地方御巡幸の際には正風が御歌掛となつて供奉し、季知の歿後には、主として正風が御製の拜見を仰せつけられた。

明治十五年、式部次官に任ぜられ、ついで御歌掛長を命ぜられ、二十二年には宮中顧問官となり、

御歌掛長を兼ねたが、二十八年には樞密顧問官となつた。正風は弓術に達し、曾て明治天皇の御前で金的を射て感賞にあづかつた。また馬術にも達し、いつも天皇の御相手をした。正風の愛馬を「御感」といひ、天皇の御料馬を「市成」といひ、競争の時にはいつも御感が勝つた。或る時、市成が珍らしく優勝したので、天皇は手綱を控へさせられ、市成と御感の勝負を題にして歌を命ぜられた。正風は餘りの突進にあわてたが、やがて心を鎮め「ひとたびは御馬に勝をゆづりけり、心ありあけの月毛なるかな」と詠じた。すると天皇は御笑ひになり、「高崎は何處までも負けじ魂の男である」と仰せられた。

は更に此い點を差上げるのであつた。天皇が廣い大御心で、下の者の言葉を御聞き遊ばされた事は、誠に長い事であるが、天皇は正風の正直を特に御氣に召され、年々と御信任になり、「たとへ高崎が所長をやめても、朕の歌は高崎に見せよ、高崎が亡くなつて見る者がなければ、誰にも見せなくてよい」と仰せられたので、正風は感極まり、益々忠誠を馳せんとした。

明治二十三年、教育勅語を拜讀した時、正風は大いに感じ、此の御教を弘めようとして、一徳會を起して東西に奔走し、明治天皇の御高徳を誦話し、勅語の精神の徹底を圖つた。四十四年の秋、郷里鹿兒島に墓参し、途中で度々講演したが、岐阜で病を得て歸京し、病床で呼吸の困難を忍び、「君が代を千代八千代にとくりかへす、いきづかひよくなりけるかな」といふ辭世の歌をのこして歿した。時に四十五年二月である。

### 高島四郎太夫

たかしましらうたい  
ふ  
名 幼名を糾之丞といひ通稱を四郎太夫といひ、後に喜平と改めた。實名を茂教といひ、字を子厚・舜臣といひ、號を秋帆といふ。

系 高島四郎兵衛の嫡子である。

事 高島家は世々長崎の町年寄で、また長崎御藏砲方を兼ね、長崎奉行直轄の砲臺を掌り、且つ唐蘭貿易を管理し、戰國以來土着の舊家であつたから、苗字帯刀を許され、將軍に拜謁を許され、頗る權勢があり、巨萬の富を蔵して居た。

四郎太夫は、寛政十年長崎に生れ、十七歳の時、父の後を繼いで町年寄となり、鐵砲方を兼ね、文化元年、長崎會所副役に昇進した。文政八年二月、幕府が外船打掃令

を布くに及び、四郎太夫は、我が國の現在の軍備では打掃ひの不可能を知り、目下の急務は砲術の改良にありと唱へ、屢々意見を長崎奉行に開陳したけれども、容れられなかつた。

偶々長崎出島に滞在する和蘭甲比丹デヒレニユーへは、砲術に精通して居たので、四郎太夫は之に師事すること約五年、遂に其の秘訣を皆傳し、且つ歩・騎・砲兵の組織・任務・戰術などの大要に通ずる事を得た。よつて兵器改良を建言したけれども、採用されなかつたから、長崎奉行の許可を受け、私費を抛つて和蘭から銃砲などの軍器を購入し、以て砲術を研究し、また和蘭通詞に託して兵書を譯させた。

斯様に熱心であつたから、其の技術も大いに進歩し、門人も多くなり、天保十一年には、子弟・家來・門人を併せて三百餘名に達したので、歩兵四小隊、砲兵一中隊を編成して、専ら洋式の銃陣を訓

練し、春秋二回、實地に大演習を行ひ、また洋式の小船三隻を造り、海上砲を實修させた。我が國で洋式の兵制を採用し、海陸の砲術を改良したのは、蓋しこれが嚆矢である。

ついで天保十一年九月、洋式の砲術を採用し、海防を嚴にせん事を請ふ建議書を作り、長崎奉行に呈したが、奉行はこれを幕府に傳達し、速に採用せられん事を希望した。幕府は先づ四郎太夫の技術を試みようとし、其の出府を命じたので、四郎太夫は所持の軍器を携へ、子弟門人を伴ひ、十二年三月、江戸に到着したが、其の月、諸組員力格を命ぜられ、一代限り七人扶持を賜はつた。

天保十二年五月、幕府の命を受け、武蔵の徳丸原で其の技を試みたが、其の門人の兵士は、悉く黒塗圓錐形の小陣笠を冠り、黒筒袖の半纏・黒股引・紺足袋・草鞋で、帯の上を手調で締め、脇差一本を差し、彈藥入・銃筒袋を代帯で腰に

つけ、四郎太夫は其の子淺五郎と共に司令官となり、大砲發射・銃陣演習を行つた。越えて七月、幕府は四郎太夫に命じて、幕士に砲術を教授させたが、此の時、江川太郎左衛門も門人となつたので、悉く秘傳を授けて長崎に歸つた。當時、幕府は西洋流の砲術を高島流と改稱させた。

四郎太夫は長崎に歸つてから、幕士以外の者にも砲術を傳授してよい許可を得たので、長崎の士人は言ふに及ばず、九州諸藩の士の入門する者が多く、名聲噴々たるものがあつた。時に江戸町奉行鳥居忠輝は、水野忠邦の腹臣で、外國文物を憎んだが、本庄茂平治の讒を聞いて忠邦に説き、四郎太夫を江戸に召して投獄した。有司の中には異論があり、久しく決しない中に、忠邦・忠輝は免職となつたが、四郎太夫は尙ほ俗論の陥る所となり。申追放となり、安部虎之助へ永預けを命ぜられた。これよりさき、江川太郎左衛門

は四郎太夫を教はうとしたけれど、其の功がなかつたが、嘉永六年、米穀が浦賀に入津するに及び、幕府は海防の必要を認むるに至つたので、太郎左衛門は之を機として奔走したが、八月、遂に赦免されて江川預となつたので、太郎左衛門は師禮を以て之を厚遇した。四郎太夫は、幽囚十年間に於ける砲術・練兵の進歩に驚き、太郎左衛門らに學ぶに至つた。此の月、再び召し出されて富士見寶藏番格となり、百俵を賜ひ、鐵砲方江川太郎左衛門に屬して、鐵砲教授方を勤むべき命を受けた。

時に和親の論が天平に喧しく、幕府は方向に迷ふの傾があつた。四郎太夫は大いに憂ひ、老中阿部正弘に意見書を呈して、開港の無謀な事、兵器・戰術改良の急務な事、國利民福上通商貿易の有益な事を説いた。蓋し幕府が米國と和親するに決したのに就いては、四郎太夫の建議が與つて力あつたといふ。安政二年、講武所の設置さ

らるゝに及び、五月、砲術師範役となつて小十人格に昇り、文久三年、具足奉行格となつた。これよりさき、情誼の厚かつた太郎左衛門は破し、ついで知遇を蒙つた阿部正弘も破したので、四郎太夫は漸く世を厭ひ、且つ後進の進路を開かうとして隱退の志があつたけれども、常に門人に諫められて停つたが、慶應二年正月十四日、六十九歳で歿した。江戸駒込東片町大圓寺に葬る。

### 高杉晋作

たかすぎしんさく  
長州藩は夙に攘夷の説を唱へ、遂に朝廷を動かし、文久三年五月十日を期し、攘夷の實行を幕府に

約せしめた。編年、長州藩は下關海峡を通過する外國船艦を砲撃したが、八月五日、英・米・蘭・佛の聯合艦隊十七隻は長州藩を襲ひ、下關海峡で戦端を開いた。六日、四國は陸戦隊二千六百餘人を上陸させ、洲崎・杉谷の諸嶺を陥れ、ついで壇ノ浦砲臺を占領した。七



征伐させた。長州藩士は有能な英・米・蘭・佛の四國艦隊と和し、家老福原元圃(誠後)らを斬つて恭順の意を表したので、慶應は之を許して幕軍を班した。然るに晋作・狂介らは、敬親の處置を喜ばず、先づ恭順黨(俗論黨)を倒し、藩論を統一して再び兵を擧げた。幕府は驚いて再征の軍を起し、將軍徳川家茂は自ら大軍を率ゐて大阪城に入つた。時に土佐藩士阪本龍馬は、薩・長の聯合を成立させたので、薩兵は從軍を辭し、他藩にも幕命を奉じないものがあり、幕軍の士氣は甚だ振はず、陸上に於ても長軍の爲に破られたが、晋作は水軍を率ゐて幕府の軍艦を襲ひ、大いに破つた。時に慶應二年の夏である。翌三年四月、二十九歳で歿した。

日、晋作は山縣狂介(有明)・山田顯義らと奮戦して勝たず、八日、晋作は藩命を受け、井上馨・伊藤博文と共に講和談判をなし、九日に局を結んだ。  
幕府は長州藩を擯む事が甚だしく、元治元年、徳川慶勝を總督とし、二十一藩の兵を率ゐて長州を

たかだぜんゑもん  
高田善右衛門  
事蹟 寛政五年三月、近江

國宮庄村に生れた。父吉兵衛は村の庄屋で、醤油・肥料の高賣を營んで居た。善右衛門は家業を授けて働いたが、十七歳の時に父から金五兩を資本に貰ひ、自立自營の生活に入らうとし、美濃の岐阜に往つて紙製煙草入を仕入れ、これを持つて紀伊に行商し、傍ら紀伊地方には如何なる品物が賣れるかを調査した。紀伊には煙草が多く、昔から蠟燭製造が盛んであつたから、燈心の需要が大である。而も燈心は故國近江の八幡地方に産出されるので、善右衛門は八幡から多くの燈心を仕入れ、再び紀伊に行商して若干の利益を得た。竹皮の笠も近江の日野附近で仕入れて紀伊に行商した。近江屋の燈心や笠は、紀伊には澤山あつたが、一度大阪の間屋の手を經る爲に値段が高かつたが、善右衛門は間屋の手を經ずに自分で仕入れて賣つたから、割合に安くて多く賣れた。併し交通不便な紀伊の民家に賣り卸くことは、一通りの苦心ではなかつた。五兩の資本金で高賣を始め

たかだやかへゑ  
高田屋嘉兵衛  
系統 父を高田屋彌吉といふ。  
事蹟 明和六年、淡路國都志本に生れた。幼時から大志があり、曾て或る廻船商の舟夫となつたが、人に儲はれる事を厭しとせず、諸弟を率ゐて攝津に至り、兵

庫で漕船業を営み、遂に巨船數隻を造つて近海を航行し、殊に北陸航行の利を察し、年々手船を松前函館に廻漕して、遂に巨萬の富を積んだ。

寛政十年、函館に航した時、偶々蝦夷巡察中の幕吏三橋藤右衛門と相知り、十一年三月、出羽酒田港から松前までの産物運送の官用を果し、更に東蝦夷の厚岸に廻航し、幕吏近藤重藏に會した。重藏は嘉兵衛を幕府に推挙して御用船頭となし、擇捉島への航路を開かせた。嘉兵衛は擇捉島に赴き、河岸に十七箇所の漁場を開き、蝦夷に衣服・漁具を給與し、其の使用法を教へ、郷村の制を定めて歸航した。そこで擇捉島は始めて我が國に屬した。享和三年、幕府は其の功を賞し、公廩を賜ひ、且つ官船を領せしめた。

文化元年九月、露西亞の使節レゾノフは、長崎に來て通商を求めたが、幕府が之を拒むに及び、樺太・千島を擧げた。幕府は大いに驚き、警備を嚴にした。八年、露西亞の海軍中佐ゴロヴィンは、千島測量の目的を以て國後灣に寄港したが、守備の幕吏は之を捕へた。關長のリコールツは本國に歸り、寛政八年、再び國後島に來てゴロヴィンらの消息を探つたけれども詳かでないから、日本船を捕獲して事情を糺さうと決した。

偶々嘉兵衛は擇捉島から函館に廻航しようとし、暴風の爲に國後港に寄港したが、リコールツは兵を遣つて嘉兵衛を捕へ、カムチャツカに送つた。時に寛政八年八月である。嘉兵衛は稍々露西亞語に通ずる様になつてから、樺太の掠略を語り、且つ日露兩國間に横はる悪感を除く方法を説いた。リコールツは大いに喜び、且つゴロヴィンの生存して函館に在る事を聞き、文化十年六月、嘉兵衛を具して國後港に着いた。嘉兵衛はリコールツと松前奉行以下幕吏との間に周旋し、兩國の意志が稍々通じた。リコールツは樺太の掠奪につ

いて陳謝したので、幕府は松前奉行に命じ、ゴロヴィン以下の囚虜を赦し、兩國の確執が始めて解け、嘉兵衛もまた自由の身となつた。文化十一年、幕府は嘉兵衛の故職を復し、若干の金幣を賞賜した。ついで阿波藩主の條須賀侯からも恩賜があり、晩年は郷里に老し、弟の金兵衛に商事を監督させ、家業は益々盛大となつた。文政十四年四月、五十九歳で歿した。

嘉兵衛は、貌驪が短小であつたが、眼光が炯々として人を射る様で、且つ言語が明晰であつた。性が剛毅で、高潔で、謙遜で、操守が堅く、書を讀まなかつたけれども、ほど大義に通じ、財を輕んじて人の急難に赴いた。事に當つて露西亞人を畏敬せしめたといふ。

### 尊良親王

たかながしんわう  
後醍醐天皇の第一皇子で、御母は宮人藤原爲子である。

嘉暦元年に元服して中務卿となられた。幼時から聰明で、容姿が立派で、人々は皇太子になられることを希望した。然るに北條高時は、大覺寺統・持明院統迭立の議を取り、後伏見天皇の皇子量仁親王を皇太子に立てたので、後醍醐天皇も、親王も暫々として禁まねなかつた。

元弘元年、後醍醐天皇が北條氏を滅ぼさうと謀り、高時が兵を發して西上した際には、天皇と共に笠置の行宮に行き、ついで楠木正成の赤坂城に入られた。既にして笠置が陥り、二年三月、天皇は隱岐に遷幸されたが、親王は京都に入つて捕へられ、土佐に流された。三年に北條氏が滅び、亂が平定したので京都に歸られた。

建武二年、足利尊氏が鎌倉に據つて叛いた時には、親王は勅を受けて征東將軍となり、新田義貞・脇屋義助と共に東征し、矢野川・鷲坂・手越河などで尊氏の前軍を破つて進み、義貞は箱根(相模)

足利直義の軍を破つたが、親王・義助は、竹下(鴨河)で尊氏に破られ、且つ大友貞載・鹽冶高貞を首め、官軍の將士の尊氏に應ずる者が多かつたので、親王・義貞・義助らは、やむを得ず兵を收めて西に還つた。

延元元年十月、天皇が假に尊氏と和し、比叡山から京都に還幸された際に、義貞は天皇の命により、皇太子恒良親王を奉じ、北國經略に進出したので、親王も皇太子を輔け、共に越前の金崎城を守られた。時に賊將足利高經が大兵を率ゐて來攻し、包圍數箇月に及び、城内は殆んど糧食が盡き、而も敵兵が増加したので、義貞は子新田義顯を留めて城を守らせ、ひそかに脱して、杉山城に入り、城將瓜生保・瓜生義徳に援を求めた。瓜生兄弟は金崎城を救はうとしたが、途中で高師泰の兵と戦つて斃れた。乃ち金崎城は旬日にして陥つたが、時に延元二年三月である。親王は義貞と共に自殺し、恒良親

王は捕虜となられた。「つねながしんわう・恒良親王」の項を参照されたい。

義顯は將に自殺しようとする際に、尊良親王に向つて、「臣は將家の子なれば、義として死せざる可らず。親王は帝王の曹なれば、たとへ城陥るとも、必ず害を加へざる可し。願くば城を出でて遁走し、他日の計を爲し給へ」といつた。親王は莞爾として、「主上、孤を以て首領となし、卿を以て股肱となす。股肱亡びて首領安を得るは、未だこれあらず。當に命を白刃に預し、響を黄泉に報すべし。孤、宮闈に生長して武事を習はず、それ故に自盡の法如何を知らず」と、自盡の法を問はれた。義顯は落涙して刀を取り、「當に此の如し」と、自ら腹を屠つて模範を示し、刀を親王の前に置いて伏した。親王は其の刀を取られたが、流血が楯を潰して、滑かで握ることが出来なかつた。乃ち衣袖を楯に纏ひ、胸を洞つて薙せられた。敵は

親王の首を京都に送つたが、尊氏は僧藏石に命じて、これを禪林寺に葬らせた。

### 高野長英

たかのちやうえい  
名を讀といひ、後に卿齋と改め、更に長英と改めた。瑞阜・曉夢樓主人・驚夢山人などの號がある。

後藤總助の第三子で高野元齋に養はる。文化元年五月、陸奥膽澤郡水澤に生れた。領主伊達將監の臣で、世々典醫であつたから、長英も家學を承け、ほど關書に通じた。十七歳の時に江戸に遊び、吉田長叔の門に學んだが、間もなく養父元齋の病報に接し、俄かに水澤に歸つた。然るに元齋は、修業の途中で歸省したのを怒り、面會を許さなかつた。長英は大いに悟り、再び江戸に出て長叔の門に入り、二年の後に駒留正見の門に

學んだ。長英は長崎に遊び、蘭醫の法を研究しようとして考へて居たが、文政八年二十二歳の時、長崎の醫師今村甫庵と同伴して西遊し、八月、蘭醫シーボルトの設立する長崎鳴瀬の塾舎に入り、刻苦勵志して蘭學を修めたが、時にシーボルトの學徒中には、高良齋・伊藤圭介・伊東玄朴・戸塚靜海・竹内玄同らの秀才があり、相共に切磋琢磨して、長英も學業が大いに進歩した。殊に長英は翻譯の業に従事し、通詞吉田權之助を輔けて、同塾で翻譯の教授を掌つた。以て長英が蘭學に堪能であつた事を知るべきである。

偶々平戸藩主松浦侯の臣松原見朴は、長英の爲に藩主に説き、長崎の藩邸に留めて藏書の檢覽、翻譯に従事させた。長英は大いに喜んで業を進めたが、當代の珍書分庫二十卷は此の時の譯である。時にシーボルトは江戸に遊んだ時、天文司高橋作左衛門から日本實測

地圖を買ったが、それが國禁に觸れて居るので、人の訴ふる所となり、文政十一年、作左衛門は江戸の獄に下り、シーボルトは長崎の出島に幽閉され、其の罪に連坐する者が數十名に及んだ。長英は禍の身に及ぶを慮つて、薩摩に逃れたが、十二年六月、問題の解けたのを聞いて歸途に就き、廣島・京都を経て江戸に歸つた。時に天保元年である。

長英が江戸に歸ると、官醫松本良甫は其の才學を愛し、資を給して醫業を開かせ、傍ら翻譯に従事させた。天保三年、生理書の醫學概要を譯するに及んで、長英の名聲は漸く都下に振つた。

長英は小關三榮・鈴木春山と親交したが、時に三河田原藩主三宅侯の重臣渡邊華山は、長英の才を愛し、藩主の族弟三宅友信(軍醫殿)の資師とした。長英も華山の人物に服し、共に西洋の學問を擴張して實利を興さうと圖り、紀伊藩の儒臣渡邊勝助らと交り、當時の

諸名士を糾合して一交社を結び、専ら經濟の道を説き、凶荒の際には其の救済を策し、諸侯の質問に對しては政治を説いた。長英及び華山は其の領袖であつたが、世人は其の交社を學社と稱した。

天保九年十月、英船モリソン號渡來の風聞があり、幕府がまた打拂の舉に出づるを聞き、華山は憤機論を著して其の非を論じたが、長英も國を思ふの情から、夢物語と呼ぶ小著を出し、海外の形勢を叙述し、攘夷の不可なる所以を論辯した。時に江戸町奉行鳥居忠權は、大學頭林銜の子で、元來蘭學を好まず、機を見て蘭學者一派を驅除しようとして居た。天保十年、蘭學好きの山口屋金次郎は、密に同志と謀つて無人島に航し、これを開拓して物産を興さうとしたが、然るに忠權の屬吏は、此の舉を以て、名を開拓に托して外人と交通しようとするもので、彼の蘭學を修め開港を説く長英・三榮・華山の使も、其の與黨であると疑

した。偶々夢物語の稿が世に流布して居たので、幕府は政治を誹毀し、世人を惑はす言論であると見做し、長英に終身禁獄の宣告を與へ、江戸傳馬町の獄舎に繋いだ。時に天保十年十二月である。

然るに弘化二年三月、獄舎が焼失したが、當時の法では災後三日を期して囚徒を放つ事になつて居たので、長英は友人の忠告を斥けて脱獄し、都下に潛伏したが、後に硝石で顔面を焼いて容貌を變じ、姓名を變へて東西に流浪し、島津齊彬・伊達宗城・江川太郎左衛門らの庇護を受けたが、再び江戸に入り、名を高柳柳之助と稱した。時に水野忠精の臣松下壽解は、大砲鑄造を以て有名であつたが、柳之助の蘭書に精しきを知り、就中鑄砲の事を聞き、其の學識に深服し、子健作に火藥製造法を學ばせた。間もなく柳之助の長英である事を知つたけれども、其の才を惜んで匿匿し、同志と相談し、これを救はうとして果さず、長英も

去つて青山百人町に寓し、名を澤三伯と改めて醫を業とし、傍ら著譯に従つたが、遂に幕吏の探知する所となり、捕吏に包圍されて自殺した。時に嘉永三年十月一日で、年四十七歳であつた。明治三十一年七月に至り、功を賞して正四位を追贈された。

長英は容貌が魁偉で、豪邁不屈で、邊幅を修めず、古英雄の風度があり、人に接して假借せず、其の意に滿たなければ之を面折し、往々屬言を加へたので、其の不遜を咎めて絶交する士もあつた。併し彼は醫術から洋學に入り、蘭學を以て家成し、著述により翻譯によつて洋學を巧に紹介擴張し、これを政治・經濟上に實用するのを主とした。醫術の如きは餘事としたに過ぎなかつたが、併し其の治術は當世無比と稱せられた。著譯書には三兵タクチキ・分難術・醫學概要・夢物語・學社遺厄小記・鳥の鳴音・救考二物考・遊技要誌・瘟疫考などがある。

### 高濱清

たかはまさよし  
 事蹟 號を虚子といふ。明治七年二月、愛媛縣松山市に生れた。思ふところがあつて、第三高等學校を中途で退學した。同郷の先輩正岡子規に兄弟して、雑誌「ホトギス」の編輯に従ひ、俳道革新の爲に盡した。天才的な彼は、子規門下で頭角を現はし、新派の俳人として名を揚げた。また寫生文に巧みである。

### 高見王

たかみわう  
 系統 桓武天皇の皇子葛原親王の第二子である。  
 事蹟 高見王は其の裔に伊勢平氏を出したので聞えて居る。即ち高見王の御子高望王には、宇多天皇の寛平元年に平朝臣の姓を賜はつたが、其の族は關東に繁榮

した。高望の子國春(良望)は、常陸大掾をして居たが、其の子貞盛が、平將門を討伐してから、平氏は漸く起つた。貞盛の裔忠盛に至り、鳥羽天皇の寵遇を得て内昇殿を許され、忠盛の子清盛に至つて俄に名聲が揚つた。忠盛以前に於ては、平氏は世々外官に任じ、其の名は朝廷に現れず、其の族は多く伊賀・伊勢に居たので、世に伊勢平氏と稱する。桓武平氏の中では、伊勢平氏が最も聞えて居る。「たひらのたかもち・平高望」の項を参照されたい。

### 高向玄理

たかむこのげんり  
 名 高向漢人玄理ともいふ。黒麻呂にも作る。  
 系統 應神天皇の朝に歸化した阿知使主の裔であるといふ。  
 事蹟 推古天皇の十六年九月遣隋大使小野妹子・同小使難波雄成・通事鞍作福利などは、

隋使斐世清の歸國するのを送つて入朝したが、此の時、玄理は漢直・漢因・奈羅譯語・漢新・漢人・大國・新漢人・南漢・漢人・志賀漢人・志賀漢人・新漢人廣齋らと共に、隋の長安に留學した。既にして隋は滅んで唐となつたが、玄理は彼の國に在ること三十二年、其の間唐の文物・制度を學び、舒明天皇の十二年十月、南淵請安と共に歸朝した。孝德天皇の大化元年、僧曼と共に國博士(官名であつて、學位ではない)に任せられ、五年二月、詔を奉じて八省百官を設けた。すなはち政治顧問となり、支那留學中の知識を利用して、大化の改新を授けた功績は尠少でない。後に再び入唐し、高宗の永徽五年(孝德天皇の白雉五年二月)唐で歿した。

### 高村光雲

たかむらくわううん  
 事蹟 幼名を幸吉といふ。

嘉永五年二月十八日、江戸淺草北清島町に生れたが、文久三年三月十日、當時の名師高村東雲の門に入つて彫刻を學び、明治七年に修業したが、其の木彫は忽ち斯界に名聲を博し、二十九年には皇居造營事務局の命を受けて、皇居御化粧間の鏡縁に葡萄と栗鼠の彫刻をなした。二十二年七月から東京美術學校に教鞭を執り、二十三年十月には帝室技藝員に擧げられ、また同年十二月には文部省の命により、二重橋廣場に建つる楠公銅像木型製作主任となり、二十五年十一月には上野公園に建つる西郷銅像木型製作主任を命ぜられ、三十年十一月には古社寺保存會委員を命ぜられた。三十三年には巴里萬國博覽會に山雲河護と題する木彫置物を出陳して名聲を博した。四十年に文部省主催美術展覧會が創設せらるゝに及び、第三部彫刻の審査員となり、大正八年帝國美術院が成るに及び、同じく審査員となり、我が彫刻界の權威として



顯著な業績を遺したが、昭和九年十月十日、胃癌の爲に歿した。時に八十三歳である。

たかやまひこくろう

### 高山彦九郎

**名 號** 名を正之といひ、字を仲繼といひ、通稱を彦九郎といふ。

**系 統** 上野國新田郡細谷村の人高山良右衛門の子である。

**事 蹟** 世々農を家業としたが、上野國の舊姓であつたから、苗字帯刀を許された。彦九郎は早く父母を喪ひ、祖母の手に養育されたが、人と爲り精悍で、また奇節があり、孝子・義侠の話を聞けば、遠路を厭はず、必ず往つてこれを訪問するのを常とした。自らも孝心が深かつたが、祖母の死んだ時には、墓側に小舎を營み、裏に服すること三年に及び、骨立枯木の棟になつたといふ。

十三歳の頃に、始めて太平記を

讀み、建武中興の忠臣が、志業の遂げなかつたのを見て、自ら大いに發奮し、十八歳の時に京都に遊び、二年が間に學を修め、益々勤王の志を強め、廣く交を求めた。彦九郎が古今君臣順逆の跡を諷する際には、切齒憤慨、己と時を同じうし、自ら其の事に關する者の様であつた。曾て室直清(鳩巢)

(高山彦九郎の筆蹟)

われらわかととつし  
わが、こころし  
は楠公の事を論じ、天皇の召に應じて直ちに笠置に往つた行爲を評して、「度量足らず、宜しく諸葛亮の三顧して慮を出でしが如くなるべし」と言つたが、彦九郎は此の書を読んで憤慨し、「爾備、何ぞ迂なるや」といひ、其の書を堂下に投じたといふ。

これよりさき、露船は蝦夷に住

來し、屢々邊海を窺つたので、彦九郎は之を憂ひ、寛政二年、南部・津輕を経て蝦夷地に入り、事情の探察に目を累ねた。既にして海路から京都に歸り、三年には西海に遊んだが、五年にはまた京都に歸つた。偶々鴨川邊で縁毛龜を得て祥瑞となし、大いに喜んで伏見宣條に呈したが、宣條はこれを光格天皇の報覽に供した。時に彦九郎は別旨に據り、密に天顏を拜することを得た。「我をわれと思召すかやすめらぎの、玉の御聲のかゝるうれしさ」といふ歌は、此の時に詠じたものであるといふ。併し彦九郎は意を當世に得ず、常に快々として樂まなかつたが、再び西海に遊び、筑後の久留米に赴き、森主福の家に寓し、居ること數日、忽ち病に侵された様であつたが、寛政五年六月二十七日、手記する書類を悉く破棄して自殺した。其の理由は分らないが、而も帝都及び故國に向つて拍手再拜し、嚴然として端坐し、官吏の

檢視を待つて歿したのを見ると、何か深い理由があつたものと思はれる。時に年四十七歳であつた。久留米の遍昭院に葬る。

彦九郎は慷慨悲歌の士であり、彼は王道の衰へたのを嘆き、尊王の精神に燃えて居た。彼は諸國を周遊し、到る處に足跡を印したが、それは學徳の士と交際し、大義名分を説き、人心を激勵し、義氣を鼓舞する爲であつた。曾て京都三條橋の東方に跪いて皇居を拜し、「草莽の臣高山正之」といひ、通行人の指笑するのを顧みず、曾て京都郊外に遊び、足利尊氏の墓を過ぎ、其の罪を數へて鞭つたこともある。世に林子平・蒲生君平と共に寛政の三奇士といふ。明治十一年に正四位を追贈されたが、上野國太田町には祠を立て、祭り、これを高山神社と稱して居る。

### たからみきかく 實井其角

なし。實に至りてもまた然り、野氏が浮屠僧徒を以て、世俗の好に投じ、譽を當時に擅にせしより、聲に吠へ鼻を逐ふの徒、顯然として風に翻ふ」と。以て鶴臺の書畫に於ける見識が知られる。

たきがはいちます

### 瀧川一益

**名 號** 通稱は彦右衛門、後に伊豫と稱し、左近將監といふ。

**系 統** 瀧川資清の子である

**事 蹟** 近江國甲賀郡大原の人である。人となり智勇に優れ、射銃を善くしたが、尾張に往つて織田信長に仕へ、拔擢されて隊長となつた。爾來、戰陣に臨む母に先鋒となつたが、永祿十一年には尾張の蟹江城を賜はつて移り、十二年九月には信長に従つて大河内城を陥れ、功によつて北伊勢五郡を賜はつた。天正二年九月、信長は長島の一向一揆を平げ、一益を長島城主となし、兼ねて蟹江城を

**名 號** 本姓を浪本といひ、後に實井氏を稱した。幼名を源助(源藏)といひ、醫者となつてから順哲と改めた。畫名を壽子といひ、俳名を其角といひ、晋十・雷柱・沙川・蝶舎・善哉庵・狂雷堂・狂而堂・有竹居・六病庵・文合庵・齋實音などの諸號がある。法名を高覺居士といふ。

**系 統** 浪本東順の子である

**事 蹟** 寛文元年七月十七日江戸に生れた。幼時から漢籍を服部寛齋に、醫術を草刈某に、詩を大嶺和尚に學んだ。始め父の業を繼いで醫となつたが、延寶の頃、松尾芭蕉の門に入つて俳諧を學び、出藍の譽があり、門下に遊ぶ者が頗る多く、所謂蕉門十哲の一人である。また其角は入木道を佐文山に學び、中頃米元章により、後に日蓮を慕つて一家を成し、また繪畫を英一蝶に學んだ。

**名 號** 名を長愷といひ、字を鶴八といひ、號を鶴臺といふ。

**系 統** 本姓を引頭といひ、後に瀧の姓を蒙る。

### たきかくだい 瀧 鶴 臺

**名 號** 長州藩士である。幼時から英漢で學問を好み、萩生祖徠の説を慕つたが、江戸に遊んで服部郭の門に入つた。併し南郭は其の異才を見て、弟子扱ひにしなかつた。既にして京都に至り、また長崎に遊び、再び江戸に入つたが、時に名聲が高く、従つて學ぶ者が多かつた。寶曆十三年、韓使が來聘するに及び、藩命を受けて歸郷し、其の接待役となつたが、韓使は其の博學に驚いたといふ。

鶴臺は、儒學の外に佛學にも精通した。無量壽師の雜集には、「瀧生は實に天下の奇才なり。其の深く儒術に達し、言語交輝たるに論なく、傍ら吾が佛學に精し。故を以て余と方外無二の交をなすもの、平生の贈答を見るべし」とある。また醫術を好み、山脇玄飛・香川大伸・吉益周助らとも交つた。鶴臺が南塘先生に與へた書には、「本邦の書、尊圓親王、楳嶺脆翁を以て、一家を成してより、後世の書家、其の毒を蒙らざる者

保たせた。  
 天正三年五月、長篠の役に功があり、七年十月、攝津の伊丹城に荒木村重を攻め、密に策を設けて城兵を誘つたので、内應者が多く、村重は遂に城を致して去つた。十年三月、信長の先驅となり、武田勝頼を天目山麓に敗り、其の首を獲たので、信長は之を賞して、上野國及び信濃の小諸・佐久二郡を與へ、且つ關東・奥羽に於ける征伐談獄の全權を委ねたので、四月、一益は上野に入り、厩橋城を治した。

同十年六月、偶々本能寺の變報があつたので、一益は關東の諸將を會して實情を告げ、自ら西上の意を述べ、諸將の去就は隨意であると言つたが、諸將は皆従はん事を請うた。よつて一益は武蔵に入り、北條氏直と戦つたが、大敗して厩橋に歸り、ついで長島に到り、清洲に赴き、柴田勝家らと會して織田氏の後嗣問題を議し、且つ五萬石を分取した。

既にして織田信孝が豊臣秀吉と隙を生ずるに及び、一益は長島に據り、勝家と共に信孝に與したが、間もなく降伏し、長島及び食邑五郡を致し去つたので、秀吉は近江南郡の田五千石を給した。十二年三月、秀吉は織田信雄・徳川家康と難を構ふるに及び、一益に命じて其の舊封を略取させた。よつて一益は木造城に據り、兵を率ゐて嶺城を攻め、六月、鹽江城の守將を降して同城に入つたが、信雄・家康が來り圍むに及び、一益は屈して木造城に歸つた。然るに守將富田知信が入れなかつたので、一益は遂に亡命し、自ら慚ぢて京都に入り、秀吉に罰せられ、妙心寺で薙髮し、後に越前に寓居し、五箇一邑に漂死したといふ。

たきざはばきん  
 瀧澤興繼

「きよくていばきん・曲亭馬琴」の項を参照されたい。

たけうちのすくね  
 武内宿禰

孝元天皇の曾孫である。父は屋主忍男武雄心命で、母は菟道彦の女影媛である。  
 事蹟 景行天皇の二十五年命を奉じて東北諸國を巡察し、二十七年に歸つて、「東夷に日高見國がある。男女共に文身し、髻を結び、性質が勇悍である。これを蝦夷といふ。土地が肥沃で且つ廣い。討つて取るべきである」といふ旨を奏上した。成務天皇の朝には大臣となつて補佐し、仲哀天皇が熊襲を親征して崩せられた時には、神功皇后と謀つて喪を弔し、皇后を輔けて三韓を征服した。神

功皇后は筑紫で應神天皇を生み、海路京師に凱旋しようとした。時に仲哀天皇の庶王子磯坂皇子、忍熊皇子は、神功皇后の行爲に不平を抱き、兵を擧げて之を道に要撃されたので、武内宿禰は皇后の命を奉じ、精兵を率ゐて二皇子を菟道・逢坂・瀬田に破つた。  
 應神天皇の七年には、韓人を督して大倭に池を掘つたが、これが韓人池である。九年には勅を奉じて筑紫を巡察したが、たま／＼其の弟の甘美内宿禰が、「武内宿禰は筑紫に據り、三韓を招いて天皇に叛かうとして居る」と讒したので、天皇はこれ信じ、使を遣つて武内宿禰を殺さうとされた。時に武内宿禰の家來の直根子が身代りになつて死んだので、武内宿禰は其の間に運れて朝廷に至り、罪のない事を辯明した。天皇は武内兄弟を招して探湯を行はせられたが、甘美内宿禰の姦曲が露見したので、武内宿禰はまた朝政に參與し、五十五年に薨じた。彼は景行、

・成務・仲哀・應神・仁徳の五朝に歴仕し、官に在る事が二百四十四年に及んだ。  
 一説に據れば、武内宿禰の年壽が長いのは、數人の事蹟を混同して一人と爲したものであらうといふ。蓋し其の長壽であつたことは、古事記・日本書紀に載つて居る仁徳天皇の御詠によつても知られるが、併し餘りに長壽である點は疑ふべきである。

たけざきするなが  
 竹崎季長

名 號 竹崎五郎季長・竹崎五郎兵衛尉季長といふ。  
 事蹟 肥後竹崎の豪族である。後宇多天皇の文永十一年の冬、四萬の元軍は對馬・壹岐を侵掠して、筑前に迫つたので、我が軍は之を博多に迎へ撃つた。時に季長は、竹崎一族を率ゐて従軍し、肥後菊池の豪族菊池武房と先陣を争ふて奮戦し、敵の膽を塞からしめ、

頗る殊功を顯した。  
 ついで弘安四年の夏、十四萬の元軍が再び博多に迫つた。時に季長は、河野通有と勢を併せ、手痛い合戦を續けたが、敵の弩の彈丸を同じ、艇を浮べて敵艦に迫り、櫓を仆して敵艦に攀ぢ、無數の敵を斃した。斯くて元軍は竹崎・小貳・菊池・河野らの手痛い攻撃を受け、また暴風の損害を蒙り、肥前の鷹島に引き揚げ、遂に敗走するに至つた。  
 季長は文永・弘安の兩役に殊功を擡てたが、其の後、肥後國東四郡を領した。而して伏見天皇の永仁元年に至り、元寇の戦況を物語つて、當代の貴家姉小路長隆及び其の子姉小路長章に描かせ、詞書は自分で記録して、自家に保蔵することにした。現に帝室御物として傳はつて居る蒙古襲來繪詞と呼ぶ繪巻物はこれであつて、鎌倉時代繪畫の作風を窺ふべき珍品である。季長は大正四年十一月に從三位を追贈された。

たけだいづも  
 竹田出雲

名 號 名を清定といひ、千前軒と號し、父と同じく出雲掾と稱する。  
 系統 出雲掾清一（清直にも作る）の子である。  
 事蹟 寶永二年三月、父に繼いで大阪の劇場竹本座の座主となり、近松門左衛門に師事し、享保年中から淨瑠璃に筆を染め、佳作が頗る多かつた。就中、假名手本忠臣蔵は終生の大傑作であるばかりでなく、淨瑠璃本全體を通じての雄篇といはれて居る。本書は全篇が全く出雲の結構に成り、門人並木千柳・三好松洛の補助によつて、寛延元年八月に脱稿されたものである。此の年、はじめて竹本座で興行し、爾來、各地の劇場で興行され、現今に至つても觀衆の趣好が衰へない。而して忠臣蔵の作が一度世に出ると、出雲の名

聲は俄に高く、近松と相並んで作家中の巨星と稱せられた。寶曆六年十月二十一日、六十六歳で歿したが、辭世の句に、「影すゞし水に彌勒の腹袋」といふがある。作物には假名手本忠臣蔵の外に大塔宮儀堂・男作五雁金・菅原傳授手習鑑・双蝶々曲輪日記・小野道風青柳稗など數十種がある。  
 たけだかつより  
 武田勝頼  
 名 號 幼名を四郎といひ、法名を景徳院頼山勝公といふ。  
 系統 武田信玄（晴信）の三子である。  
 事蹟 永祿八年十一月に織田信長の姪女を娶り、天正元年五月から始めて國事を執つた。時に其の臣菅沼正貞は長篠を守つたが、徳川家康が酒井忠次・菅沼貞盛を遣つて攻めたので、勝頼は出兵して正貞を救つたけれども、敗れて長篠は陥つた。

既にして信玄は歿し、軍氣は沮衰し、將士の中には貳心を抱く者が多かつた。天正二年二月、師を率ゐて美濃を侵掠し、四月、三河に出で、五月、遠江にある徳川氏の屬城高天神城を圍んだ。城主小笠原長忠は、急を家康に告げ、且つ力戦して之を防いだ。が、家康は信長に援を求め、共に來て長忠を救つたが、勝頼は利を以て長忠を誘ひ、遂にこれを降した。

天正三年五月、勝頼は再び三河に出で、兵二萬を以て長篠城を圍んだ。守將奥平信昌は、壁を堅くして守り、急を濱松に告げたので、信長・家康は合計七萬を率ゐて來援した。勝頼は之と戦はうとして軍を進めたが、織田・徳川の聯合軍が鐵砲を以て側面攻撃を始めたので、勝頼は大いに敗れて甲府に歸つた。此の長篠の戦に於て、山縣昌介を首め、信玄の養つた多くの勇將が戦死したので、武田氏の勢は俄に衰へた。

既にして勝頼は國勢の不振を憂

號し、晩年には法性院と稱した。  
系統 武田信虎の長子である。

事蹟 天正五年從五位下に叙し、大膳大夫に任じた。十一月信虎が兵八千を以て海野口城を攻めた時に、晴信は始めて軍に従つたが、城將平賀源心が善く防いだ爲に、信虎の軍は利なく、遂に軍を回すに至つた。時に晴信は殿軍にあつたが、俄に策を設け、兵三百を以て急に城を圍んだ。城兵は不意討にあつて防く事が出来ず、遂に源心は敗れて自殺したので、人々は晴信の智略に服した。

當時、信虎は既に甲斐國民の信用を失して居たので、晴信は姉婿今川義元と相談し、天正十年、信虎を駿河に移して自立した。十一年には信濃を略しようとし、先づ諏訪頼重を殺して諏訪を併せ、ついで信濃の豪族小笠原長時・木曾義昌・村上義清らと頻に交戦した。十七年二月には、更に上田原に出陣して義清と戦つたが、利なくし

先鋒とし、家康と結んで勝頼を夾撃し、兵勢が頗る盛んであつた。時に勝頼の黨小笠原信嶺・穴山梅雪らは相降り、駿遠の諸將も敗れたので、勝頼は退いて甲府に入り、更に勝頼に走つた。信忠は甲府に入り、武田氏の宗族・遺臣を殺し、家康も市川から入つた。勝頼は四十餘人と共に、天目山に入らうとし、山麓の田野に赴いたが、信忠が急に澗川一益・河尻道吉を遣つて攻めさせたので、勝頼は勝つ事の出来ないのを知り、左右に命じて妻妾を殺させ、自ら長子信勝と共に奮戦して自刃した。時に三十七歳である。こゝに武田氏は滅んだ。

### たけだしんげん 武田 信玄

名 幼名は勝千代。天正五年に元服し、將軍足利義晴の一字を得て、晴信と改めた。法名を信玄といひ、徳榮軒・巖山などと

家の合同が成つた。既にして上杉謙信は義清の爲に其の舊領を復しようとし、甲越は始めて川中島で交戦した。甲越の交戦は數回に及んだが、所謂川中島合戦は、弘治元年七月の戦と、永祿四年十月の戦とが名高い。四年十月の戦では、晴信は兵二萬を率ゐ、謙信は一萬三千を率ゐて對陣したが、激戦が相繼ぎ、兩軍の死傷者が多く、晴信は謙信に不意討されて危地に陥り、晴信の弟信繁は戦死し、甲軍は破れようとしたが、小山田彌三郎が越軍を横撃したので漸く支へた。

これよりさき、晴信は飛騨・上野に出兵して侵略を試み、永祿四年十一月には小幡・白根などの諸城を攻め、五年の春には氏康の請に應じて、太田三樂(上杉憲政の臣)所屬の武藏松山城を陥れ、九年には上野の箕輪城を陥れ、上野の西部を領有した。ついで徳川家康と謀を通じ、今川氏眞の地を分割しようとして、



(武田信玄と筆蹟)

元の謀主雪齋和尚の周旋により、晴信・氏康・義元の三者は善徳寺で講和し、晴信の女を氏康の子氏政の妻と爲し、氏康の女を義元の子氏眞に嫁し、義元の女を信玄の子義信に妻はせる事を約して、三

て部將板垣信俊は戦死し、晴信もまた負傷した。長時はこれに乗じて諏訪郡を侵したが、晴信は長時を彌尻峠に敗り、進んで其の居城林城を攻めたので、長時は走つて義清に據つた。よつて筑摩郡の北半は殆んど武田領となつた。

天正二十年の春、義時・長時は兵を率ゐて深志城(林城)を圍まうとしたが、晴信が即夜入城したので、義清・長時は戦はないで歸つた。晴信は進んで長時を攻めたが、長時は二十一年十二月に越後に走り、上杉謙信に據つた。義清も自ら保つことが出来ず、二十二年八月に越後に走り、同じく上杉謙信に據つた。よつて村上氏の舊領は武田領となつた。

天正二十三年には、小笠原信貞を松尾城に攻めて伊那郡を風靡し、弘治元年には、木曾義昌に女を配して木曾地方を定めた。

天正二十三年には、今川義元が三河城にある織田氏の諸城を攻めたので、北條氏康は今川氏の處を

々病に罹つて久しく癒えず、やむを得ず守兵を長巻に留めて歸國した。三月、再び信濃を経て西三河に出で、愈々西上を決行しようとしたが、病が再發して遂に癒えず、五十三歳で歿した。時に天正元年四月十二日である。晴信は戦略に長じ、兵を用ひること神の如く、また詩歌をよくし、文武兼備へた名將として、上杉謙信と並び稱せられて居る。

### 武田 信虎

**系統** 武田氏は源義家の弟新羅三郎義光の後裔である。義光の曾孫信光以来武田を氏とし、相繼いで甲斐を領した。信虎の父を信繼といふ。

**事蹟** 關原時(今の古府)の居城に在つて、甲斐を治め、全州を平定して勢があつた。信虎は長子晴信(信玄)を愛せず、次子信繁を寵し、これを後嗣にしよう

### 武 淳 川 別 命

**系統** 孝元天皇の御孫で、大彦命の子である。

**事蹟** 崇神天皇の十年、四道將軍の一人に選ばれ、父大彦命は北陸を鎮め、武淳川別命は東海を鎮めることになつた。命は十月に京師を發し、東海十二道を平定し、翌年四月、京師に歸還して鎮定の狀を奏したが、其の子孫も東海の開發に盡した。古事記に據れば、大彦命と武淳川別命との父子は、相津(會津)で相會したが、以て當時皇威普及の北限を察すべきである。「しだうしやうぐん・

### 竹 内 式 部

**名統** 名を敬持といひ、式部・正施と稱し、彦施と號した。

**系統** 越後新瀉の竹内宗詮の子である。

**事蹟** 正徳二年、越後の新瀉に生れた。家は代々醫を業としたが、享保十三年の頃、式部は京都に出で、最初、徳大寺家に仕へ、松岡仲良に學び、後に玉木葦齋に師事し、儒學及び乗加神道を學んだ。

式部は博明聰敏で、神典有職に精通し、儒籍から佛經に至るまで博く涉獵し、また武術に練達し、扇子で砲玉を打つたり、射箭を握つたりする術を體得して居た。學成るに及び、門弟を集めて日夜熱心に講説したが、其の要旨は大義名分を明にし、皇室の衰運を挽回

し、幕府の専横を抑壓するにあつた。彼の門人は七八百人もあつたが、徳大寺公城・正親町三條公積・鳥丸光胤・西洞院時名らを首め、數十人の公卿も聽講した。

式部の講ずる乗加流の學は、漸く盛んになつたが、寶曆六年、朝廷の神學者吉田兼雄は、自家の業の振はないのを憂へ、「式部は不正の學を講じ、公卿に武術を教ふる者なり」と言つて、關白一條道香に訴へた。道香はかねて公城・公積の諸卿と仲が悪く、且つ乗加神道を悦ばなかつたので、幕府の所司代松平輝高に告げた。よつて輝高は式部を糾問したが、併し不正の學を講じて居なかつたので、少しも罪に問はれる事なく、公卿の就學も舊の通りに續いた。

時に桃園天皇は英明で、學問を好まれ、日本書紀神代卷の御會を開き、公城・時名の諸卿に進講させられたが、是等の諸卿は先づ式部の講説を聞き、然る後に進講したので、恰も式部が直接に進講す

るのに異ならなかつた。天皇は大いに式部の説を悦ばれたが、道香はこれを患へ、關原青橋門院に内奏し、天皇が竹内流の神書を研究される事を止め、諸卿の進講を停止し、且つ式部の學風を絶たうとし、事を所司代に命じたが、寶曆八年六月、所司代は式部を召喚し、學説の邪正と、堂上に軍書を進講し、武器を献じた事との實否を糺したけれども、式部は悉く之を陳じたので、罪すべき道がなかつた。併し道香らは式部の在京を以て紛争の基とし、所司代に其の追放を求めたので、所司代は式部が吉川・白川兩家を措いて神書を講じた事、當時支障あるに拘らず、靖獻遺言の興復・再復などの文字を講じた事、三本木の町家で公卿と宴會した事などを理由として、遂に京都から追放し、また式部の門に入つた公城・公積・光胤・時名の諸卿を罰し、悉く蟄居・遠慮などに命じた。時に寶曆九年五月である。

### 建 御 雷 命

式部は伊勢の宇治に赴き、正施と稱し、權禰宜蓬萊雅樂に密食し、後に御師鶴岡又太夫の家に寓した。明和三年十二月、山縣大貳・藤井右門らの獄が起つた時、式部も大貳らの與黨と見られ、宇治で捕へられて江戸に押送された。既にして其の嫌疑は晴れたが、併し追放中に拘らず、京都に上つた際で八丈島に流され、流謫の途中船上で病を發し、遂に三宅島で歿した。時に明和四年十二月五日で、年五十六歳であつた。明治二十四年十二月、正四位を追贈された。

たけみかづちのみこと

**名統** 建甕雷神・建甕雷命にも作る。

**系統** 天孫羽張神の子である。

**事蹟** 天祖天照大神は、豊原中國を天孫瓊瓊杵尊に授け、

### 田 崎 草 雲

將に降臨せしめんとするに際し、大國主命が出雲を本據として、威を山陰・山陽に張つて居たので、先づ之を鎮壓する必要を感じ、建御雷命を主將とし、經津主命を副將とし、出雲に遣つて征討させられた。建御雷命は出雲に入り、先づ大國主命並びに其の子事代主命を誅し、更に其の子建御名方命と戦つて、之を信濃の諏訪に追撃して降し、全く出雲民族を平定し、歸つて天照大神に奏上した。よつて天孫降臨の事があるに至つた。

因に建御雷命を祭る鹿島神社・經津主命を祭る香取神社が、古くから常陸地方にある事を思へば、當時二神の經略せる範圍が、常陸地方まで及んだ事が知られる。

たさきさうらん

**系統** 明治前期に於ける南宗文人畫家である。名を之といひ、江戸に生れたが、金井島洲・加藤

梅翁・谷文晁・春木南溟らに畫道を學んだ。夙に動玉の志を抱き、東西に奔走し、具に艱苦を嘗めた。明治元年、官軍が江戸に追つた時、草雲の弟は彰義隊員として上野に戦死したが、草雲は家にあつて之を聞き、賊が倒れたといつて盃を擧げ、痛快を叫んだといふ。斯様に大義を重んじ、私事を顧みなかつたが、人と爲り豪放、慷慨、硬骨の氣があり、長く東京に住んだのに拘らず、一度も侯伯富貴の邸を踏まなかつたといふ。中年以後明人盛茂燦の繪を見て自得し、其の畫風が好況に入り、南北を折衷して一機軸を出し、遒勁逸趣の筆致で好んで山水畫を描き、繪と共に格致が高くなつた。晩年、下野足利附近の蓮岳山に白石山房を結んで閑臥し、高風清節を以て一世に仰がれた。明治三十一年九月一日、八十四歳で歿したが、大正四年御大典の舉行に際し、特に奮功により従五位を贈られた。小室翠雲は其の門人である。

### 手力男命

名 號 天手力男神ともいふ。

事 蹟 神代の神で、力の強い神である。天照大神が天岩窟に籠られた時、多くの神々が相談して、大神迎出の方法を講じ、岩窟の前に集合して、盛んに神樂を行はれた。大神が不思議に思つて、戸を少し開いて外を窺はれると、天兒屋根命が鏡を其の前に差出されたので、大神の御姿が鏡にうつした。愈々不思議に思つて、戸から少しばかり身を出された時に、戸の掖に隠れ立つて居た手力男命は、急に大神の御手を取つて引出し奉つた。天孫瓊瓊杵尊に従つて降臨し、後に佐那郡に居住した。信濃の戸隠神社は命を祀つた社である。天岩窟の變は、「すさのをのみこと・素戔嗚尊」の項に詳記してある。

### 橋 曙 覽

事 蹟 越前福井の人で、徳川末期の國學者である。常に王政復古を力説したが、藩主松平義昭は、曙覽の皇學研究に力めるのを賞して、毎年粟米若干を與へた。明治六年、五十七歳で歿した。

### 立 花 北 枝

事 蹟 蕨門十哲の一人である。「まつをばせう・松尾芭蕉」の項を参照されたい。

### 立 花 宗 茂

名 號 幼名は千鶴丸。初名を統虎といひ、後に宗茂と改め、確鑿して立齋と號した。法名を大圓院松陰宗茂といふ。

### 系 統

高橋紹運入道鎮種の長子で、道雪入道鎮運の養子となつた。高橋直次の兄である。

事 蹟 天正十三年に家を繼ぎ、筑後國立花山城に居し、歌を豊臣秀吉に通じた。翌十四年、實父紹運は、島津義久と戦つて敗死し、隆景は豊後に侵入したが、宗茂はよく戦ひ、遂に高島城を陥れたので、秀吉は其の武勇に感じ、書を與へて褒賞した。

天正十五年五月、秀吉が島津氏を征服するに及び、宗茂は筑後國十三萬二千石を買ひ、柳川城主となり、羽柴の姓を授けられ、七月には從四位下・侍從・左近將監となり、十八年には小田原役に從つて軍功があつた。

文祿征韓の役には、小早川隆景・毛利秀包・高橋直次・筑紫廣門らと第六軍に参加して渡鮮し、諸城を陥れて北進した。二年正月、明將李如松は兵二十萬を率ゐて來攻し、我が軍を平壤に圍んだ。小西行長は防戦して利あらず、狼狽

して京城に奔つた。明軍は勝に乗じて、大いに行長を追撃したが、時に宗茂は五箇所に伏兵を設けて奮戦し、明兵三千餘名を斃した。隆景・宗茂らは、京城に引き揚げる事を好まなかつたが、併し諸將の催促により、兵二萬を併せて京城に還り、更に軍議をこらし、大いに防戦に力めた。李如松は親ら兵十萬を率ゐ、高昇・孫守廉・祖承訓を先鋒とし、進んで碧蹄館に迫つた。我が軍は常に斥候を派したが、宗茂の斥候は、碧蹄館の南なる礪石嶺で明軍と衝突し、暗夜に相撃つて死傷が多かつた。早朝になると、明軍は一里程の近所に押寄せたので、隆景は先鋒となり、宗茂・秀包は其の傍に陣した。隆景が眞先に火蓋を切り、宗茂・秀包らが側面から攻撃したので、明軍は忽ち破れ、死傷者が頗る多く、李如松は僅に脱出した。

「こばやかはたかかけ・小早川隆景」の項を参照されたい。

文祿四年には、秀吉の命によつて、諸將と共に歸國したが、慶長二年、再征の爲にまた渡鮮し、宇喜多秀家と釜山を守り、三年正月には諸將と共に蔚山城の急を救つた。蔚山城は加藤清正・淺野幸長らが守つて居たが、明軍に圍まれ、糧水が盡きて頗る苦戦したのである。清正は宗茂を徳とし、爾來、交情が頗る親密となつた。

慶長五年九月、關ヶ原の役には、秀吉の恩を思ひ、且つ毛利輝元と舊誼があり、二千五百人を率ゐて西軍に加擔し、東軍の京極高次を大津城に攻め、ついで大垣に赴かうとしたが、西軍が關ヶ原に破れた事を知り、本國に歸つて柳川城を守り、鍋島勝茂らと戦つたが、やがて加藤清正・黒田孝高の勸告によつて和を講じ、自ら先鋒となつて薩摩に向つたが、既に島津氏が降つた後であつたから、戦はないで歸國した。時に家康は清正・孝高の請により、特に宗茂の罪を許し、其の所領を收めた。

### 伊 達 政 宗

名 號 幼字を梵天丸といふ。政宗は正宗にも作るが、自筆の書翰にも政・正を併用して居る。蓋し昔が相通するからであらう。

事 蹟 世々陸奥國伊達郡を領有したが、政宗は天正十二年十

後、宗茂は關東に下り、家康父子に對面したが、改めて陸奥國棚倉一萬石に封ぜられ、相伴衆に加へられて厚遇され、慶長十五年には二萬石を加へられた。大阪冬夏兩陣には、秀忠に供奉して功があり、元和六年には再び舊封柳河十萬九千六百石を賜ひ、八年十一月には飛騨守と改めた。寛永十四年の島原の亂には、子忠茂と共に有馬に出陣し、十五年十月には確鑿して立齋と號し、十九年十一月に七十六歳で歿した。

八歳の時に、父の護を承けて家を繼いだ。十三年、輝宗が同國二本松城主二本松義繼に殺害されたので、政宗は直ちに義繼を討つて、父の仇を報じ、十六年、蘆名家を滅ぼして會津七郡を領し、黒川城に移つた。

天正十七年、豊臣秀吉が北條氏政父子を討たうとするを聞き、十八年六月、小田原の陣營に赴いて秀吉に謁した。秀吉は淺野長政に命じ、政宗が私に國郡を饋領し、蘆名盛重を滅ぼし、且つ晉信を通じてない譯を詰問させたが、政宗の答に理があつたので罪を免し、直ちに奥州征伐の先鋒を命じ、歸國して秀吉の出陣を俟たせた。

既にして北條氏が滅び、秀吉が東下するに及び、これを宇都宮に迎へた。秀吉は會津仙道の地を收めて蒲生氏郷・木村吉清に賜ひ、政宗を黒川に住ませた。十九年三月、侍從越前守となり、羽柴の姓を賜はつたが、六月、大崎・葛西の一揆を鎮め、功によつて其の舊領を復し、更に大崎・葛西の地を加へ、凡そ五十八萬餘石を領し、また同年岩手澤城に移つた。

文祿征韓の役が起るに及び、兵を率ゐて名護屋に陣したが、二年朝鮮に渡航して戦功があり、四年二月に歸朝した。偶々豊臣秀次は、罪を秀吉に得て殺されたが、政宗も與黨であるといふ嫌疑を受けたので、大阪に赴いて辯疏した。秀吉はなほ疑を解かなかつたが、徳川家康が政宗の爲に陳謝したので疑を解き、本國に歸ることを許した。政宗は深くこれを徳とし、爾來、心を傾けて徳川氏に盡す様になつた。

慶長二年の冬、從四位下に叙し、少將に任じたが、既にして秀吉が歿し、關ヶ原の役が起るに及んで、政宗は家康に屬して其の先鋒となり、先づ白石城を陥れた。關ヶ原の役後、兼ねての命に違ひ、なほ上杉景勝と地を争つて止まなかつたので、五年十月の行賞には、僅に白石の地を賜はつたに過ぎなかつた。

た。此の年、仙臺城に居住した。十一年二月、常陸龍ヶ崎に於て二萬石を加増され、自分の女を家康の子忠輝に配し、姻戚の義を結び、十三年正月、松平の姓を賜ひ、陸奥守と改めた。

政宗は支倉常長に命じ、西班牙人に西洋の事情を聞かせ、遂に歐洲派遣を命じた。即ち慶長十八年九月、常長は陸奥の月浦を出帆し、太平洋を横断し、ノバイスベニヤを経て西班牙の國都マドリッドに至り、國王に謁して書を渡し、更に羅馬法王ポール五世に見えて書を呈し、八年を経て歸朝した。

慶長十九年、政宗は大坂冬の陣に秀忠の先鋒となつて西上し、翌元和元年の夏の陣に於ては、道明寺表の戦に後藤基次らを斬り、戦後、功によつて正四位參議に陞り、寛永三年八月、從三位權中納言となつた。十一年、近江國で五千石の加増があり、十三年に病に罹り、五月二十一日、家光は其の邸に病を問ふたが、同月二十六日、七十

二歳で歿した。

### たなかぎいち 田中義一

事蹟 長州藩士で、陸軍大將となつた。昭和二年二月には、内閣組織の命を拜し、内閣總理大臣となつたが、此の内閣は同四年六月まで存立した。其の間に今上天皇(裕仁親王)の即位の大禮が京都の皇宮で舉行された。即ち同三年十一月十日、天皇は紫宸殿に出御され、高御座に登御し、皇后は御帳臺に着座された。時に黒色の袍に黄金作りの太刀を佩いた義一は、徐ろに西階を下り、右近の橋の南方を経て、南階段に伺候して北面に侍立した。時に午後二時四十五分である。天皇は立御し給ひ、内大臣の捧ぐる勅語を取つて玉音朗かに勅語を下された。義一は續いて南階を上り、南榮の下に立つて壽詞を奏上し、終つて庭上の兩萬葉集の中央に降り立ち、

高御座に立御あらせられる天皇を拜し、殿前莊重に、天皇陛下萬歳を唱へ奉り、續いて萬歳、萬歳を唱へ、参列の諸員が之に和したのが午後三時であつた。斯くて義一は、日本臣民の代表者として、即位の大禮の諸任務を終つた。

### たなかとつげん 田中訥言

名號 痴翁・得中・過不及子・大孝實などの號がある。事蹟 名古屋の人で、出でて京都に住み、古代の衣冠・嚴關・法隆寺寶物などを描寫して、有職故實研究の資料とし、また延喜式などに見えた染色や襲色を調べ、色の千種を著した。彼は土佐派の繪畫を獨修したが、生氣の無い近代土佐の畫風に嫌らず、更に古土佐畫の研究に邁り、藤原光長・藤原信實の神品に接し、光長の年中行事繪卷に據つて、當代の年中行事繪卷五卷を描いたり、或は

藤原爲信の文永賀茂祭草紙に據つて、妖怪が祭儀を行ふ有様を描いたりした。これが異形賀茂祭圖である。松平定信の依頼を受けて描いた宇治平等院の壁畫は、現に東京帝國博物館所藏となつて居る。彼の繪畫には氣韻生動の趣が溢れて居たが、晩年眼病に悩んで失明(田中訥言)



するに至つた。文政六年三月二十一日に歿した。宇喜多一惠・渡邊清らは其の門人である。

### たにぐちぶそん 谷口蕪村

名號 本姓を谷口といひ、

優に京都修禪の牛耳を執つたのである。天明三年十二月二十五日、六十八歳で歿したが、著書には夜半帖・玉藻集・花櫻帖・十番左右句合・芭蕉翁付合集などがある。

### たにたてき 谷干城

名號 土佐藩士である。明治維新に際して國事に奔走した。後に陸軍少將に進み、熊本鎮臺司令官に任ぜられ、明治七年には西郷從道と共に臺灣生蕃を討伐して功があつた。

偶々西南の役が起り、明治十年二月、西郷隆盛は兵一萬五千を率ゐて、先づ熊本城を包圍した。時に有栖川宮熈仁親王は、征討總督に任じ、陸軍中將山縣有朋・海軍中將河村純義を參軍とし、陸軍少將野津鎮雄・山田顯義・曾我新準・三浦梧樓・大山巖・三好重臣・大警視川路利良・陸軍大佐高島綱之助らに各一旅團を授け、同月二十

母の生家の行後風流の風光を愛して與謝氏を名乗つたといふ。幼名を長庚といひ、後に寅と改めた。字を春星といふ。蕪村・三葉堂・夜半亭・碧雲洞・紫狐庵・浮風庵・東成・四明の諸號があり、蕪村が最も聞えて居る。故に谷口蕪村・與謝蕪村・謝蕪村などといふ。事蹟 有名な俳人であると同時に、名高い文人畫家である。攝津國東成郡毛島村の人で、江戸に出て儒學を修め、傍ら内田沾山・早野巴人らに俳諧を學び、巴人の歿後各地を遊歴し、寶曆元年、京都に居住し、爾來、畫室を構へ、専ら元明諸大家の畫風を慕ひ、古今の畫書を集めて研究三昧に耽り、妻子と雖も室内に入れない程であつた。また洛東六波羅寺にあつた明人董其昌の山水畫を、日參して研究したといふ。

畫界に於ける蕪村の特色は、陳腐な狩野・土佐の風を捨て、新に漢畫を復興した點にある。即ち元明諸大家の遺墨を研究し、新に一

# 蕪村

家を成した點にある。彼は多く漢筆の粗畫を描き、殊に俳畫を起した人で、芭蕉以來の俳人の肖像を描き、それに俳句を添へるのを例とした。運筆が簡略で、兒戲の様であるが、熟視すると、筆致に興味があるが、捨て難い傑作である。彼の畫風は飄逸瀟灑で、他の企及を許さない粗風の趣が高い。田能村(谷口蕪村の筆蹟)

竹田は蕪村の畫を評し、「用筆傳彩共に全然明人なり」といひ、「景は新に、法は古く、意を用ふることに最も深し」といつて居る。蕪村の俳句に「霜百里、舟中にわれ月を領す」とあるが、これは彼が新に興した漢畫の法と相應する。また「不動畫く孫磨が庭の牡丹かな」「南嶺を牡丹の客や、福さい寺」

「雪信が飄うちはらら観かな」、「相阿彌の宵寝起すや、大文字」、「新左衛門、蛇足を誘ふ冬至かな」の句を讀むと、恰も繪畫史の斷片を味解する様である。蕪村の作品には、多くの粗畫の外に、往々精密な山水畫もあるが、何れも彼の歿後益々其の聲價が高まつて居る。京都帝國博物館所藏の野馬圖屏風、京都藤原家所藏の蕭何・韓信・支德・孔明圖屏風、慈照寺の襖に描かれた水村圖及び群仙圖、東京帝國博物館所藏の關亭曲水圖屏風、讚岐丸龜妙法寺(蕪村寺)の襖に描かれた寒山拾得圖などの諸作は、彼が粗密兩方面の作風を窺ふに足る傑作である。俳人としての蕪村は、どうかといふに、俳句界は芭蕉の歿後不統一な混亂時代に入り、形式のみに拘泥して、字句の末に關心して居たが、蕪村は進んで之が革新に任じ、生來の堪能を以て研鑽の功を積んだから、秀吟が頗る多く、

六日、福岡に上陸し、總督府を此の地に置き、南進して熊本城を救はうとし、別に陸軍中將黒田清隆は別働隊を率ゐ、長崎から肥後の八代に航し、敵の背後を突く命令が下つた。

干城は最初から城守の策を講じ薩軍を城下に擁し、其の一兵をも東上させまいと謀つた。熊本城は二月二十二日以来包圍攻撃を受け交戦は一日も絶えず、其の中に食糧・彈薬は漸く缺乏を告げた。官軍は一日も早く熊本城の急を救はうとしたが、薩軍は高瀬・吉次越・植木・田原坂などの要害に據つて防いだので、官軍は容易に南進する事が出来なかつた。陸軍少佐乃木希典は、二十一日、植木の戦に聯隊旗を奪はれ、三月四日、吉次越の戦には敵將藤原國幹が斃れた。谷村計介が傳令に盡したのも此の頃である。殊に田原坂の戦は十七日に亘り、最も激烈を極め、彼我の抜刀隊が入り亂れ、死傷が四千餘人に及び、官軍は三月二十日に

漸く之を抜くことが出来た。既にして清隆の率ゐた八代上陸軍は、漸次北進して熊本に向つた。城内は糧食・彈薬が殆ど盡き、僅かに十三日を支ふるに過ぎなくなつたが、宇土方面に砲聲を聞き、背後の軍の近づいた事を知り、四月八日、陸軍少佐奥保業は突撃隊を率ゐて城を出で、宇土に往つて八代の官軍に合し、具さに城中の消息を報じたので、官軍は直ちに部署を定めて進撃し、十四日、陸軍中佐山川浩の一隊が先づ熊本城に入り、始めて内外の聯絡が通じ、翌十五日に清隆が入城し、ついで高瀬口の官軍も入城し、十七日には總督府を熊本城に移された。熊本城の陥ると否とは、國內の大勢にかゝる所であつたが、干城は籠城すること五十二日、死守して能く其の使命を盡した功は大である。

干城は戦後中將に進み、また子爵を授けられたが、明治十八年十二月、伊豫内閣が組織された時に

は農商務大臣に任じ、殖産の爲に盡力したが、任中に歐米視察の途に就き、二十年六月に歸朝し、當時我が國の極端な歐化主義と風俗の墮敗とを見て憤慨し、非條約改正論と國粹保存の急務とを絶叫し、沈痛悲壯の上奏文を捧げて野に下つた。爾來、政治家として活動したが、明治四十四年五月、七十五歳で歿した。

### 谷文晁

名 號 通稱は文五郎、名を正安といひ、字を文晁といひ、文鳥・師段・一如居士・與二庵・畫學齋・鑿叟などの諸號がある。平生好んで富嶽を寫したので、其の家を寫山樓といひ、薙髮して法眼に叙せられ、文阿彌と稱した。

系 統 田安家の世臣谷麓谷の子である。

事を好み、稍々長じて加藤文麗に學んだが、文麗は其の英才を愛し、己が一字を授けて文朝と號せしめた。また花鳥畫家渡邊玄對に師事し、更に漢畫の名匠鈴木芙蓉に學び、爾來、畫名が漸く現はれた。



中年の頃に、馬孟喬(北山寒巖)に従つて清人の畫風を學び、傍ら古土佐の妙趣を味ひ、また英一蝶の長所を採つたといふ説もある。京都の圓山派の渡邊南岳が江戸に來てからは、養子の谷文一を南岳の門に入れ、自分も南岳の畫風に

倣ひ、更に古書畫典を研究し、宋元の名蹟を寫し、雪舟及び狩野探幽の筆意を折衷し、諸國の山水を描寫研究し、遂に一格を出すに至つた。

文晁は南宗・北宗の兩派合一を企圖したといふが、併し其の畫は南宗よりも北宗に傾き、宋の馬遠・夏珪・牧溪、明の藍田叔・張平山に私淑した佛がある。山水・花鳥・人物の各方面に精妙の筆を揮つた彼の技倆は、蓋し近代に其の比を見ない。彼の山水畫は特に優秀で、雲烟浮動の妙は筆端から溢れて居る。わけて青綠濃厚の山水畫に長じ、構圖は緊密で、彩色は古雅で、優に宋・明の名家を凌いで居る。また彼の人物畫は、柔弱な四條派及び卑俗な岸派の筆格と趣を異にし、所謂俊爽の相貌をなして居る。晩年には筆力が勁健となつたが、併し粗笨に傾き、また新氣が畫幅に溢れ、沈厚濃蔭の質が失せて來た。概して文晁は健腕であつたに拘らず、思想の深奥を缺

き、和漢古今の畫蹟を悉く鑑したに拘らず、其等を綜合して獨創的な一大文晁派を立てるに至らなかつた。

併し文晁の畫名は甚だ高く、勢力は頗る強く、多くの文人墨客と會し、其の潤澤驕傲の性格と相俟つて、隱然江戸畫壇の盟主たるの觀を呈した。松平定信の信任が厚く、定信に同伴して諸國の海岸を巡遊踏査し、多くの山水畫を描いたが、其等の寫生畫を見ると、西洋の遠近法が參酌されて居る。天保十一年十二月十四日、七十八歳で歿したが、遺作としては松平子爵家所藏の公餘撰勝・浦之餘波、徳川伯爵家所藏の青綠山水樓閣圖、秋元子爵家所藏の前後赤壁圖・遊潭男爵家所藏の周勃儂など名作である。著書には寫山樓畫本・畫家大全・本朝畫纂・歷代名畫譜・書畫觀中・日本名山圖會・松島眞圖などがあり、松平定信の編纂した集古十種にも文晁が描いて居る。

### 谷村計介

系 統 宮崎縣諸縣郡會岡の士族坂元利右衛門の第二子で、谷村平兵衛の養子となる。

事 蹟 明治五年、熊本鎮臺の歩卒となつた。七年二月、佐賀の亂が起るに及び、鎮臺兵は海陸兩路から進み、計介は大隊長心得大尉和田勇馬に従ひ、海路から佐賀城に入つた。賊兵が來り圍んだが、城中は糧食・彈薬が缺乏し、支ふる事が出来なくなつたので、城兵は包圍の賊兵を破り、陸から來た鎮臺兵と聯絡を取らうとしたので、計介は門を開いて突出し、激戦して賊を破り、大尉奥保業に屬して龜取村に奮戦し、更に江見村に到り、單身前行して船を續し、諸兵の渡河に便し、府中驛で鎮臺兵と會し、遂に佐賀城内の危急を報告する事が出来た。間もなく大阪の軍が來て、諸道から進んで佐

賀を攻めた。計介は毎戦奮闘したので、人々は膽勇に感じた。

明治七年六月、陸軍伍長に任じ、八月、第十一大隊に屬し、臺灣の役に従つた。九年、神風黨が熊本鎮臺を圍んだ。偶々參謀大尉大迫尙敏は、要務を帯びて小倉に在つたが、神風黨の變を聞いて熊本に還るに及び、聯隊長心得少佐乃木希典は、計介を抜擢して隨行させた。よつて計介は熊本に至り、また小倉に赴き、鎮臺下の形勢を報告しようとしたが、偶々山口・秋月の亂が並び起り、諸縣が甚だ騷擾を極めたので、計介は命を受け、車夫に變裝して柳川附近を探偵し、小倉に至つて事情を報告した。

操六は衆と議し、計介を擧げて密に其の意を諭した。計介は謹んで命を奉じ、「事、必ず成るを保す、但し復命の日、期し難きのみ」といひ、谷少將の教命を受け、燧煤を全身に塗り、鎧衣を身に纏ひ、笑つて曰く、「以て賊軍を欺く可し」と。夜陰に乗じて城を出で、將に南の關に赴かうとして薩兵に捕へられた。百方解謝したけれど許されなかつたので、守卒の眼を窺ひ、爪で繩を断つて逃れるを窺ひ、爪で繩を断つて逃れた。吉次越の山中を潜行して再び捕へられたが、計介は伴つて備夫の狀を爲し、股栗して垂泣したので、薩兵は憐んで縛を解いた。乃ち備夫と爲つて働き、間を得てまた逃走し、遂に第一旅團に達したが、時に二月二十八日であつた。計介は薩兵に捕へられる度に拷掠を受け、飲食を絶つたので、官軍に達した頃には顔色が全く變つて居た。隨つて實を告げても哨兵は之を信ぜず、縛して本營に送致した。第一旅團長兼少將野津謙

雄が召見したが、計介は歎息して言ふことが出来なかつた。蓋し辛苦を嘗めて使命を終へ、感極まつて自ら懸する事が出来なかつたのである。間もなく谷少將の命令を述べ、戰狀を説き、悲壯慷慨、聽く者は皆感動したといふ。野津少將は之を厚遇し、營内で休止させた。三月四日、官軍が田原坂を攻むるに及び、計介は戦に列しようとした。隊長は附屬して許さなかつたが、再三請うに及び、傳令の事を命じた。時に官軍は戦つて利あらず、計介は怒氣勃々として自ら抑ふる事能はず、蹶起して他人の銃を奪ひ、單身叱咤して敵陣に入り、銃弾に中つて斃れた。時に二十五歳である。鎮臺兵は計介を聞いて嘆惜し、能はず、肥後玉名郡木葉町蘇浦に葬る。

たのむらちくでん  
田能村竹田  
名 號 通稱を行蔵といふ。  
名 號 幼字を龍助といひ、叙爵して主殿頭と稱した。  
事 蹟 十五歳の時に徳川家重の小姓となり、西丸に居たが、享保二十年、家を承けて秩六百石を領し、元文二年に叙爵した。廷

享二年、家重が將軍職を襲ぐに及び、本丸に移り、寛延元年、小姓組の番頭に進み、舊の通りに昵近し、千四百石を増された。寶曆元年、側室申次に轉じ、八年、遠江相良の地を賜ひ、明和四年、四品に叙せられ、將軍家治の側用人となり、増給して二萬石となり、新に相良城を築いて城主に列した。安永元年、老中に擧げられ、爾來、屢々加恩があつて、五萬七千石に達した。  
天明三年、子の意知は若年寄となり、父子相並んで顯職にあり、天下の注目する所となつた。これよりさき、意次は弟の意誠を一橋家老に、水野忠友を老中に、太田資愛を若年寄に推舉した。忠友は松本城主水野忠恒の後であり、封地を増加して先祖の舊に復しようとして、力めて意次に媚附し、意次の四千忠徳を養つて嗣としたから、遂に老中となつて三萬石を領した。資愛は其の女を意知に嫁した故を以て、遂に若年寄に進むこ

たが出来た。  
斯くて意知の親類は悉く顯職に登り、天下の機務は大小となく一門に集り、刑賞與奪の權が悉く其の手に歸したので、勢威が頗る強勢となつた。よつて倭幸の徒は競つて媚附し、群僚は悉く其の私黨となり、賄賂は公行し、與馬は其の門に福湊した。  
然るに天明四年、意知が佐野政言に害せられてから、漸く勢を失する端を開き、六年八月、將軍家治の病が重くなるに及び、意次は職を奪はれ、ついで家齊が將軍職を襲ぐに及び、更に封地二萬石を削られ、七年十月、在職中不正の事が多かつた故を以て、更に二萬七千石を削られ、また致仕置居を命ぜられ、特に一萬石を嫡孫意明に賜ひ、且つ相良城を没收された。そこで意次と親婚の交あつた者も、絶交して往來せず、忠友の如きは、養子忠徳を離縁するに至つた。八年七月二十四日、七十歳で歿した。

たのむらちくでん  
田能村竹田  
名 號 通稱を行蔵といふ。  
名 號 幼字を龍助といひ、叙爵して主殿頭と稱した。  
事 蹟 十五歳の時に徳川家重の小姓となり、西丸に居たが、享保二十年、家を承けて秩六百石を領し、元文二年に叙爵した。廷

王叔明に私淑し、外に優秀な筆を取る爲に、廣く元・明・清の諸家の畫蹟を採り、土佐・狩野の畫蹟を深く研究し、單に古代に甘んぜず、近代の畫蹟をも涉獵した。  
併し竹田の畫風は清代の畫風に似て用筆が細勁で、墨が乾き筆が枯れ、神韻を傳へる事を主意として、而も一點一線を等閑にせず、小品と雖も全心を傾けて描成し、頗る格致が高かつた。多くの山水畫を描き、時には人物・花鳥を描いたが、其の人物畫は雅氣を帯び、また情趣の抑すべきものが少くない。  
要するに竹田は文人畫家として種々の資格を備へ、性格は清廉で、趣味は典雅で、學者といつてもよければ、詩人といつてもよい。其の畫は筆墨よりも氣韻を主とし、行筆は頼山陽・江孫圖が評した様に支那風であり、其の品致は俗眼に映じない程高遠である。併し日本特有の技を棄て、専ら支那風に擬へ、氣韻を偏重した點は、彼の

長所であると同時に短所である。天保六年八月二十六日、五十九歳で歿した。  
遺作の中では藤堂伯爵家所藏の華陽圖・桃林放牛圖・鶴津灘加納家所藏頼山陽養辭山水屏風・豐後日出中村家所藏明皇觀女樂圖・豐後戸次帆足家所藏曲溪復嶺圖・漁樵問答圖・梅林放鶴圖・蓮江遊鶴圖・豐後大分長野家所藏梅花書屋圖・桃花流水圖・羽前鶴岡眞鳥家所藏松樹古寺圖などが名高い。駿河島田家所藏の主客相語圖は、竹田が大坂吹田村の病舎で描いた絶筆であるといふ。  
著書には竹田莊詩話・山中人談舌・暫遊日記・黃葉紀行・温仙山圖卷・陶寫小話・泡茶新書以下數種がある。  
たやすむねたけ  
田 安 宗 武  
「とくがはむねたけ、徳川宗武」の項を参照されたい。



### 達磨

**名** 達磨 名を菩提多羅といふ。達磨大師と稱する。

**事** 天竺(印度)の王子で、幼時から佛道を修行すること四十年に及び、教化に力めて名聲を擧げた。六十歳を過ぎてから、船に乗つて東航し、西紀五二〇年(我が國體天皇の十四年)支那に入り、梁の武帝に教を授け、更に嵩山の少林寺に入り、九年の間、黙に向つて禪を修行し、後に禹門で歿したといふ。支那に始めて禪宗を傳へた僧と稱せられて居る。

### 俵屋宗達

**名** 宗達 姓は野々村氏で、或は喜多川氏ともいふ。名を以悦といひ、字を伊年といひ、對青軒・對青軒などの號がある。

十一日大阪で歿した。年七十二歳である。墓は寺町法妙寺と川邊郡久々智村廣濟寺とにあるが、何れが是であるか詳かでない。法名を阿彌釋院矣日一具足居士といふ。

近松の著作にかゝる戯曲は、前後通じて百數十種ある。文章が雄健で、詞藻が富麗であり、人物の上下貴賤によつて威儀・詞遣の區別を詳かにし、描寫が眞に迫り、神に入ると稱賛された。曾て获生徂徠は曾根崎心中を讀み、「七ツの鐘が六ツ鳴りて残る一つが今生の鐘の響の聞きおさまめ」といふに至り、巻を擲ち、「近松が妙文は此の中にあり、他を問ふに及ばず」と嘆賞した。

また曾て豐元法皇は、最明寺殿百人上臈の文中に、「蝶の翼のおしろいをこぼして、梢には鶴の霜毛をぬきかくる、雪は花より花多き」とあるを御覽じ、石曼卿の詩句の「蝶遺粉翼一輕難拾、鶴墜霜毛一散未轉」を巧に譯したのに感ぜられ、「斯かる才智を以て和

歌を詠じなば、秀逸多かるべし」と仰せられたといふ。

### ち

### 近松門左衛門

**名** 近松門左衛門 姓を杉森といひ、名を信盛といひ、通稱を平馬といひ、後に近松門左衛門と稱した。墓林子・平安堂・不移山人などの諸號がある。

**系** 詳かでないが、兄は相國寺の宗長老で、弟は儒醫岡本一抱子で、妹は錦江といひ、俳諧に長じた。

**事** 長州萩の人で、幼時肥前唐津近松禪寺(一説には近江三井寺の門前近松寺)に入つて僧となつた。間もなく京都に出て弟の家に寓し、還俗して一條家に仕へ、ほど有職故實に通じた。ついで一條家を辭し、近松門左衛門と名乗り、歌舞伎狂言及び淨瑠璃の著作に従事した。



延寶五年、はじめて京都の歌舞伎芝居萬大夫座の作者となり、藤壺の怨靈が、藤の花から大蛇に變ずる趣向を構へて、大いに喝采を博し、近松の名聲が世に現れた。ついで淨瑠璃大夫井上橋膳・宇治加賀操らの爲に、淨瑠璃を作つた(近松門左衛門)

たはらやそなたつ

**事** 能登の人で、京都の豐宗寺に住んだ。加州侯に仕へて金澤に住んだ事もある。畫道を以て法橋に叙せられたが、彼は畫道を狩野永徳に學んだといひ、狩野安信に學んだといひ、住吉如慶に學んだといひ、其の説は區々である。併し權大納言鳥丸光廣卿の讚ある畫蹟から推すと、狩野永徳の門人であると見た方が時代は適應する。

併し狩野派を學んだとしても、其の筆致は古土佐から發足し、更に進んで飄逸な一格を出して居る。粗畫にも密畫にも通じ、自家の工夫によつて、時には水墨に金泥を交へて描き、時には沈厚なものを描いたが、其の筆致は頗る本阿彌光悦に似て居り、或は師弟の關係があるのではないかと疑はせる點がある。

### チシヤン

**事** 十六世紀に於ける伊太利ヴェニス畫派の大家である。西紀一四七七年(我が後土御門天皇の文明九年)カドレ城内に生れた。ヴェニスのペリニを師として學んだが、筆技家としては伊太利第一である。また其の人物畫は温和で、而も威嚴があり、意想が高遠で、技巧に於ては先人を凌駕して居る。彼の作は極美の畫的化身といつてよい。チシヤンは幸運の畫家で、頭腦も手腕も熟達し、九

十九歳までも長生し、一五七六年(我が正親町天皇の天正四年)に歿したが、死の數月前に至るまで筆を措かなかつた。

### 智證大師

**名** 智證大師 圓珍といひ、諡號を智證大師といふ。

**系** 俗姓は和氣氏で、父を宅成といひ、母は佐伯氏である。弘法大師の甥に當る。

ちしようだいし

け、或は悉曇文を學び、唐に居ること六年、天安二年に歸朝し、十二月に京都に入り、唐から請來したものを録して表上した。

清和天皇の貞觀五年には、近江の園城寺に灌頂壇を開き、六年七月には仁壽殿に灌頂壇を設け、天皇及び諸大臣に大悲胎藏の灌頂を授け、また大日經を講じ、八年五月には園城寺の別當に任ぜられ、眞言正觀弘傳の公論を賜はつた。十六年六月には延曆寺の天臺座主に補せられたが、十四年九月に暇を請うて山に歸つた。陽成天皇の元慶七年には勅によつて法眼和尚の位を授けられた。光孝天皇の仁和二年、天皇の不豫に際し、命じて祈らしめられたが、忽ち御病氣が癒えたといふ。宇多天皇の寛平二年十二月には、小僧都に任ぜられたが、三年十月二十九日、七十歳で入寂した。比叡山南峯の東隆に葬る。智證大師の諡號を受けたのは、醍醐天皇の延長五年十二月二十七日である。

智證大師は繪畫に秀でて居た。唐から多くの佛敎圖像を請來し、自らも佛畫を描いたが、それは主に素描圖像であつて、中唐の風格を傳へて居る。其の遺作として傳へられて居るものでは、高野明王院所藏の赤不動が最も名高い。これは近江國横川葛河瀧で描いたもので、後醍醐天皇が守本尊として秘藏されたが、元弘の亂の時に高野山に納められ、天下の安穩を祈らせられたものであるといふ。其の圖様は頗る勇猛の威容をなして居る。即ち不動明王の兩眼は爛として輝き、嘴みしめた唇の間からは牙を露出し、左脚は曲げて岩下に垂れ、羯邏羅・制多迦の兩脇士を左脇に描いて、右脚に對して圖の平衡を保つて居る。右手に持つて居る俱利伽羅龍の劍は火炎の中に閃き、前方を凝視して居る降魔の相は、實に物凄程よく出来て居る。而して明王の全身は炎の様な赤色で彩られ、全圖様から觀者を威壓する様な雄偉な力が溢れて

居る。果して智證大師の筆であるか許かでないが、併し凡手の能くする所ではない。何れにしても不動明王畫像中の名作である。

### ちとうてんのう 持統天皇

名 號 御名を菟野といひ、

高天原廣野姫尊といふ。御稱號を

系 統 天智天皇の第二皇女

事 蹟 齊明天皇の三年に、

大海人皇子の妃となり、天智天皇の四年十月に、皇子に從つて吉野に入られたが、ついで皇子が兵を擧げて近江朝廷に迫られた際には、常に謀議に與られた。既にして弘文天皇が崩ぜられ、大海人皇子が即位して天武天皇となられたので、立つて皇后となり、政治に參與して、禮稱される所が頗る多

かつた。

朱鳥元年九月、天武天皇が崩せられ、皇太子草壁皇子は二十五歳に達せられたけれども、尙ほ近江朝廷の餘類が存し、而も天武天皇の諸皇子も和せず、物情が穩かでなかつたから、皇后が朝に立つて制を稱せられた。これが持統天皇で、此の年を持統天皇の元年とする。朱鳥三年四月に草壁皇子が崩ぜられたので、四年四月、藤原宮で即位式を擧げ、十一年二月に皇孫河内皇子(草壁皇子の御子)を立て、皇太子とし、八月に讓位して太上天皇と稱せられた。これが太上天皇の號の始めである。

持統天皇は深沈で大度があり、節儉で禮儀を好み、母德に富ませられた。また天皇は和歌に秀で、「春すきて夏來にけらし白妙の、衣はすてふあまのかくやま」といふ御製がある。大寶二年十二月二十二日、聖壽五十八歳で崩せられた。大和國高市郡高市村大字野口の繪殿大内院に葬る。

### ちぬわう 茅渟王

系 統 敏達天皇の御孫であ

る。御父を押坂真人大兄といふ。舒明天皇の御弟である。

事 蹟 吉備姫を妃とし、

皇女及び輕皇子を産まれたが、寶皇女は即ち皇極天皇(重祚して齊明天皇といふ)で、輕皇子は即ち孝德天皇である。

### ちやちやまる 茶々丸

名 號 堀越公方足利政知の

子である。

事 蹟 足利政知は、將軍足利義政の弟であるが、關東管領となつて伊豆に來り、堀越に居ること三十餘年に及んだけれども、なほ未だ東國を平定することが出来ず、後土御門天皇の延徳三年四月に病歿したので、其の子茶々丸が

嗣いだ。然るに茶々丸は、

大いに伊豆が亂れた。北條早雲はこれを聞き、機逸すべからずと爲し、兵を率ゐて伊豆に入り、堀越を襲つたが、茶々丸は之を拒いで利あらず、大森山に走り、山下の成就院で自刃した。

今川記には、「政知、後妻の子義選を寵し、茶々丸を黜くるを以て、茶々丸怒りて父政知を弑す」とある。つまり政知は義選を嗣にしようとして、茶々丸を黜削したが、或る人が其の幽閉を憫んで匕首を授けたので、茶々丸は先づ繼母を殺し、ついで政知を殺したのであるといひ、また北條早雲が茶々丸を討つたのは、弑逆を問ふたのであるといふ。併し三條西實隆記・京葉集・藤涼軒日録には、政知の病死を載せてあるから、茶々丸は繼母を殺したのみで、決して政知を殺したのではない。また早雲が茶々丸を攻めたのも、全く其

### ちゆうあいてんのう 仲哀天皇

名 號 御名を足仲彦尊

といふ。

系 統 日本武尊の第二子で

事 蹟 即位の二年正月息長

の孫に毒されたのである。ち神功皇后である。二月、天皇は皇后と共に越前角鹿(敦賀)に行幸し、箭筒宮を營んで、此の地に居られたが、三月には皇后を角鹿に留め、自ら南國を巡狩し、紀伊の徳勒津宮に駐られた。時に九州の熊襲が叛いたので、舟師を率ゐて親征の途に上り、使を皇后に遣はして、穴門(長門)の豊浦宮に會合し、八年正月、共に筑紫に行幸し、筑前の櫛日宮で熊襲征伐の事を議せられた。時に皇后は、「熊襲が叛くのは、新羅の後援が

### ちゆうきようてんのう 仲恭天皇

名 號 御名を懐成といふ。

世に九條廢帝といひ、また半帝とも稱する。

系 統 順德天皇の第四皇子

事 蹟 建保六年、順德天皇

の太子となり、承久三年四月、御年四歳で即位されたが、これが仲恭天皇である。蓋し御父順德天皇

は後鳥羽上皇と共に對蹊の節を起さうと思つて居られたが、在位の儘では事を行ふに不便であつたから、便宜上、位を懐成親王に讓られたのである。

既にして官軍は連戦連敗し、北條泰時・北條時房が大軍を督して上京したので、承久三年七月九日、仲恭天皇は神器を閑院内裏に棄てて、九條院に入つて遜位された。

在位僅に七十餘日である。四條天皇の文曆元年五月、九條院で崩せられた。聖壽十七である。山城國紀伊郡深草村大字福稻の九條院に葬る。明治三年七月、仲恭天皇と諡した。

### Durer

事 蹟 十五・六世紀の交に出た獨逸の大畫家である。西紀一四七一年(我が後土御門天皇の文明三年)南獨逸のニルンベルヒに生れた。父は金工業者であつた

が、デューラーは十八人兄弟の第二子である。幼時から藝術的天分が豊かで、當時の知名の畫家ゲオルグ・ムートルの畫室に通つた。二十歳頃に伊太利に遊んで得る所が多かつた。歸つてから妻を娶つて數年間在郷したが、再び漫遊を志し、一五〇六年にヴェニス及び羅馬に旅した。當時評判の高いジョヴァンニ・ベリニから歓迎と賞讃とを受けたのは此の時であつた。四年の後にニルンベルヒに落着いて住宅を購ひ、専心研究に没頭した。一五二〇年には和蘭に遊んで歓迎された。青年皇帝カロロ五世から技藝員に任せられたのも此の頃である。一五二八年（我が後奈良天皇の享祿元年）五十八歳の時に故郷で平和に歿した。

彫鐫にすぐれ、所謂エッチングの極く優秀な作品を遺すと共に、他の道徳を許さない精確練達なデザインの傑作を遺して居る。

ちやうけいてんのう  
長慶天皇

名 號 御名を寛成といひ、法隆寺金剛心院といふ。

系 統 後村上天皇の第一皇子である。第九十八代の天皇である。

事 蹟 正平二十三年三月、後村上天皇の後を承けて踐祚し、弘和三年に至る十六年間在位された。此の間、天皇は吉野に在つて京都恢復に努力されたが、御不幸にも御即位の確證が擧げなかつたので、種々の議論が擧げられ、御歴代に加へられて居なかつた。併し最近御即位が確證されたので、大正十五年に至り、歴代の大統中に列し奉る事になつた。其の根本史料の一として、後醍醐天皇の皇子宗

良親王の編纂にかゝる南朝方の和歌を集めた新葉和歌集のあることは注目すべきである。

ちやうこそかべもとち  
張 弘 範

「ぶんでんしやう・文天祥」の項を参照されたい。

長曾我部元親

名 號 幼字を彌三郎といひ宮内少輔と稱する。法名を雪隠三といふ。

系 統 長曾我部國親の子である。

事 蹟 世々土佐國長岡郡岡豊の城主である。永祿三年に家を繼ぎ、ついで國內の豪族である本山・吉良・中山・安藝の諸氏と戦ひ、或は之を降し、或は之を滅ぼし、元龜元年、土佐の六郡を領した。

時に津野・太平・佐竹らの諸豪族は、土佐國司家たる一條兼定を奉じ、幡多郡に據つて土佐の西半に雄視した。元親は事に托して兼定を送ひ、其の子内政を擁立し、配するに女を以てし、全く其の權力を奪つて、土佐全國の實權を握つた。

天正二年八月、はじめて阿波に出兵して海部を侵し、四年、更に三好氏の内亂に乗じて南二郡を略し、六年、また勝瑞城を攻めて十河存保を降した。この年の夏、讃岐を掠略したが、偶々讃岐六郡の領主香川信景は款を元親に通じ、元親の二子親和を養つて子としたので、讃岐の地は悉く元親に屬した。七年には伊豫に出兵して諸郡を略し、八年には一條氏政を伊豫に放つたので、一條氏は遂に滅んだ。六月、使を京都に遣つて、織田信長に方物を獻じたが、信長は大いに喜んだ。十年、信長は三好美濃に命じ、阿波を従へしめたが、六月、本能寺の變があつたので、笑

謙は兵を収めて歸つた。乃ち元親は大兵を率ゐて阿波に入り、十河存保を撃つて之を破り、悉く阿波を平定した。十一年には東讃岐を従へて十河城を陥れ、十二年には久武親直に命じて伊豫を略せしめたが、西園寺・宇津宮・白木・板島などの諸豪族が降つたので、伊豫もまた平定し、悉く四國を併呑することが出来た。時に天正十三年の春である。

然るに豊臣秀吉は、紀伊根來を平げた餘勢に乘じ、同年四月、弟秀長に兵を授けて元親を討たせたが、元親は敗れて降りを請うた。秀吉は阿波・讃岐・伊豫の三國を削り、更に土佐に封じた。

天正十四年、秀吉は元親の子信親及び仙石秀久に命じ、九州の大友宗麟を降し、島津義久に當らしむるに及び、元親も監軍として出征したが、敗れて信親も戦死したので、やむなく兵を収め、十五年、秀吉が親征するに及び、再び元親も軍に従つた。

ついで秀吉の献奏によつて伴從に任せられ、土佐守となり、羽柴の姓を賜はつた。文祿征韓の役に際しては、兵三千を率ゐて第五軍に参加し、鎮守して頗る功があり、間もなく從四位下少將に叙任された。慶長二年には再び征韓の軍に従つたが、四年五月、六十一歳で伏見に歿した。京都の天龍寺で火葬し、遺骨を土佐國長濱村雪隠寺に葬つた。

ちやうせいけつ  
張 世 傑

「ぶんでんしやう・文天祥」の項を参照されたい。

ジ ヨ ッ ト  
Giotto

名 號 ゴッチョヨロジヨットといふ。

事 蹟 十三・四世紀の交に出た伊太利フロレンス派の天才的

畫家である。西紀一二六六年（我が龜山天皇の文永三年）に生れ、チマブエを師として繪畫を學び、主として高尚な宗教話を描いたが、想像力と意匠とに於て、非凡の天才を發揮した。正直、快活、勤勉な人で、詩人ダンテの肖像や、アッシジの聖フランチェスコの事を描いた畫家として、世人に知られて居る。一三三七年（我が後醍醐天皇の延元二年）に歿した。

ちんぜいはちらう  
鎮 西 八 郎

「みなもとのためとも・源為朝」の項を参照されたい。

チントレット  
Tintoretto

事 蹟 十六世紀に於ける伊太利ヴェニス畫派の大家である。西紀一五一八年（我が後柏原天皇の永正十五年）に生れたが、ミケ

ランジェロの繪畫を學び、チンヤンの色彩を學び、此の兩者を調和しようとしたが、非常な精力家で、仕上の迅速な點に於ては、文藝復興期の畫家中彼の右に出る者はない。粗雑な製作も尠くないが、大作が甚だ多く、其の最大傑作と云つたはれる「奴隷の奇蹟」は、驚く可き健筆を以て描成されて居る。一五八二年（我が正親町天皇の天正十年）切支丹大名である大友宗麟・有馬晴信・大村純忠らの使節伊藤祐益・千々石清左衛門・中浦某・原某らがヴェニス市を巡遊した時には、チントレットは同市の依託によつて、使節の肖像畫を描いた。一五九二年（我が後陽成天皇の文祿元年）に歿した。

つきをかよしとし  
月 岡 芳 年

名 號

通稱を吉岡米次郎といひ、一魁齋・芳年・大蘇などの號がある。法號を大蘇院釋芳年居士といふ。

系 統

徳川幕府の家人吉岡爲三郎の次男で、畫家月岡雪齋の後を嗣いだ。蓋し雪齋は彼の祖父である。

事 蹟

柴田是眞・河鍋嶺齋らと共に、明治時代初期に於ける屈指の畫家で、天才的な浮世繪師である。天保十年三月、武蔵國南豊島郡大久保に生れた。嘉永三年の秋から歌川國芳に就いて浮世繪を學び、寫生を宗として、出藍の譽があつた。後に菊池容齋の前賢故實を喜び、これに葛飾北齋の繪風を折衷し、更に西洋畫を見て之を應用し、遂に芳年風と稱する獨得の一格を出した。彼が寫生を重視し、特に人物描寫に活人モデルを使つたのは、當時に於ては破天荒の事である。其の畫風は是眞・嶺齋と同様に雅俗折衷の立場で、殊に浮世繪を基礎として、それに

上流の繪畫を添加折衷したものである。其の筆致を見るに、概して信屈粗豪で、活氣はあるけれども、優麗の情に乏しく、人物の衣紋の描寫など、恰も紙を折つた様で、其の線に柔和の趣がなく、甚だ奇怪なものである。併し溢れる様な天稟の妙趣は、よく人を惹きつけ、一世の人氣に投じて盛んに歡迎され、其の門人も頗る多く、錦繪及び新聞・雜誌の挿繪は一時殆んど芳年風に化せられ、其の影響は廣く京阪地方にも及んだ。

調 伊 企 儼

つきのいきな

名 號

號して調吉士といふ

系 統

應神天皇の朝、百濟から努理が歸化した

事 蹟

新羅は任那を攻め滅したの正月、新羅の地は悉く新羅の有となり、我が日本府も滅んだ。六月、天皇は詔して、新羅が舊恩を忘れて我が官家を滅し、我が民を殺したのを憤り給ひ、任那復興の計を定め、七月、紀男麻呂を大將軍とし、河邊瓊弁を副將軍とし、新羅を征せしめられた。男麻呂らは任

那に至り、新羅の軍兵の來襲を受けたが、我が軍は之を迎へて撃破した。男麻呂は令を下し、自重して次の變に備へ、百濟の營に退いて警戒したが、瓊弁は命令を守らず、進み襲つて新羅兵に捕へられた。時に瓊弁の部下であつた伊企儼も、瓊弁と共に捕へられたが、彼は人と爲り勇烈で、容易に屈しなかつたので、新羅の將は大いに怒り、刀を抜いて斬らうと欲し、伊企儼に逼つて禰を脱がせ、命じて髻部を日本に向け、「日本の將、我が髻肉を食へ」と叫ばせようとした。時に伊企儼は叫んで、「新羅王、我が髻肉を食へ」といつた。新羅の將は意に従はせようとしたけれども、なほ前の様に叫んだので、遂に之を斬殺した。伊企儼の子房子は、父の屍を抱いて死し、伊企儼の妻大葉子は捕虜となり、これを悲んで、「韓國の城の邊に立ちて、大葉子は、領布振らすも、日本へ向きて」と歌つた。將士は

之を聞いて惜んだ。

つぐのみやあきひと しんわう

繼宮明仁親王

御名を明仁といひ、御稱號を繼宮といふ。

系 統

今上天皇の第一皇子で、皇后久邇宮良子の御所生である。

事 蹟

昭和八年十二月二十三日に御降誕あり、爾來、御成育が頗る御順調に亘らせられ、全國民の慶賀する所である。

つちみかどてんのう

土御門天皇

御名を爲仁といひ、世に土佐院・阿波院と稱する。

系 統

御鳥羽天皇の第一皇子で、御母は承明門院源在子第八十三代の天皇である。

事 蹟

建久九年正月十一日、後鳥羽天皇の太子となり、三月三

日に即位された。御年僅に四歳であつたが、これは後鳥羽上皇が北條氏討伐の志を抱かれたので、便宜上讓位されたのである。

天皇は性質温雅で、在位十二年に及んだが、後鳥羽上皇と相容れない所があつたから、承元四年十一月、上皇は強ひて位を皇弟順徳天皇に譲らしめられた。天皇は内心歡ばれなかつたけれども、少しも色に現されず、これから閉居して、和歌を詠んで自ら娛まれた。

承久三年四月、後鳥羽上皇は順徳天皇と謀り、北條氏討征の軍を起さうとされた時、土御門上皇は「關東を討つには、未だ時至らず」と言つて、深く諫められたけれども用ひられず、遂に職に敗れ、後鳥羽上皇は隱岐に、順徳上皇は佐渡に遷幸された。

時に北條義時は、天皇が其の議に參與されなかつたので、措いて問はなかつたが、天皇は後鳥羽・順徳の兩上皇が遠島に遷幸されるのに、獨り都に留まるのは、朕が

つねながしんわう

恒良親王

後醍醐天皇の第六皇子で、御母は新待賢門院藤原康子である。

事 蹟

元弘元年、北條高時が後醍醐天皇を六波羅に幽閉した時、親王は八歳であつたが、「つくつくと眺めくらしして入相の鐘の音にも君を戀しき」と詠まれた。此の時、高時は親王を但馬に遷し、守護太田守延の家に拘留したが、元弘三年、守延は親王を奉じて義兵を擧げ、丹波の篠村で六條忠顯に會した。忠顯は親王を上將軍と

して兵を擧り、進んで六波羅を攻めたが、敗れて男山に退いた。建武元年、皇太子となられたが、延元元年十月、天皇が假に尊氏と和し、比叡山から京都に遷幸された際に、親王は勅を奉じ、尊良親王及び新田義貞と共に越前に赴き、金崎城に據り、北國を經略された。義貞が軍事を總べたが、賊將足利高經が來攻し、金崎城が陥るに及び、親王は捕へられ、尊良親王及び新田義貞は自殺した。但し義貞は陥落以前に城を脱し、脇屋義助と袖山城を經營して居たのである。

高經は官軍將士の首級を檢したが、義貞・義助の首がなかつたので、親王を捕へて詰問した。親王は事實を告げると袖山城を攻めるに相違ないと思はれたので、欺いて、「昨日、薄暮、義貞兄弟自殺し、従者、屍を營中に焼けりと聞く」と答へられた。よつて高經は袖山城に強敵なしと信じ、親王を京師に護送し、御弟成良親王と共に

に一室に幽閉した。

延元三年三月、義貞・義助が山城を出て数城を抜き、兵勢が大いに振つたので、尊氏は直義と共に大いに怒り、「これ、重宮の言を信じて、山を緩ゆるすの故なり」といひ、乃ち栗飯原光氏を遣つて親王を害させようとした。

光氏は薬を齎らして親王に見え「幽居齋陶、恐らくは病を生ぜん。直義、臣をして薬を献せしむ」といつて、一包を置いて歸つた。成良親王は薬を取り、「これ必ず死を速くの毒にして、病を療するの薬に非ざるなり」といつて、庭に投げようとされた。恒良親王はこれを取り、「尊氏・直義、慘虐を性とす。たとひ此の薬を飲まざるも、死を免かるゝの理なし。一室に鎮されて天目を見ざらんよりは、寧ろ早く死を取らんのみ」と、これから毎日置経して佛を念じ、恒良親王と共に服薬された。時に延元三年四月で、御年十五歳である。

項を参照されたい。

### つぼうちせうえう 坪内逍遙

事蹟 名を雄蔵といひ、安政六年五月、岐阜縣加茂郡太田村の尾張代官所で生れ、明治六年、十歳の時に、父と共に名古屋に歸農したが、九年、東京に出て開成學校に入り、政治經濟學を専攻し、更に東京大學文科に進み、十三年に卒業した。英文學を研究し、文學博士となり、早稻田大學に教鞭を執り、評論家・劇作家として現はれ、晩年には同大學の名譽教授に擧げられ、昭和九年、七十七歳で歿した。

逍遙は森鷗外と相並んで、西洋文學を紹介し、また文藝協會を起して、演劇の革新に盡力した。其の著小説眞隨・當世書生氣質は、明治の小説界に新機運を促し、また脚本の桐一葉・牧の方及び新曲浦島・新曲かくや姫なども人口に膾炙した。

贈承して居る。英文學史・劇と文學以下の著述が多く、また沙翁のハムレットを始め、翻譯の脚本十數巻がある。

### つるみいうすけ 鶴見祐輔

事蹟 明治十八年一月群馬縣に生れ、明治四十三年東京帝國大學(法科大學)の政治科を卒業した。鐵道省書記官・鐵道省參事などに歴任したが、其の間に屢々歐米支那に出張し、鐵道事業を觀察したが、鐵道運輸局總務課長となつた事もある。思想家であり、雄辯家であるが、文事にも長じて居る。曾て岡山縣から選出されて衆議院議員となつたが、二度目には落選し、昭和十一年には岩手縣から選出された。著書には小説に母・子があり、また北歐遊記・思想人物山水・中道を歩む者・英雄待望論・ナポレオン・ブルターグ英雄傳、其の他數種がある。

て

### ていじよしやう 丁汝昌

事蹟 清の德宗の世の軍人である。英吉利に留學して海軍を研究し、歸朝の後に清國北洋艦隊水師提督に任ぜられた。明治十九年(西紀一八八六年)八月、丁汝昌は鎮遠・定遠・濟遠・威遠の四隻を率ゐて浦鹽斯德に航し、歸途我が長崎に寄港したが、同月十三日、清國の水兵五名が上陸し、飲酒泥酔の餘り、暴行を逞しうしたので、我が警官は之を捕へて清國領事に引渡した。然るに同月十五日に至り、清國水兵約四百名が上陸し、市中を横行し狼藉を極め、其の勢が甚だ猖獗で、我が警官隊を破つて警察署を擡撃した。長崎市民は警察を授けて清國水兵と戦ひ、互に死傷者を出した。よつて我が

政府は、外務省取調局長鳩山和夫・内務省警保局長清浦奎吾・司法省刑事局長河津祐之を遣つて處置させた。時に世論は囂々と起り、清國水兵の暴行を憤り、嚴に談判せんことを政府に要求した。我が政府は長崎縣知事日下義雄・鳩山和夫・司法省派ヤクド(後にデンソンと交代す)を談判委員とし、丁汝昌は長崎領事蔡軒・英國代官人ドラモンドを委員とし、事實を調査して談判させたけれども、遂に纏まらなかつた。時に世人は、「曲彼に在ること日月の如く明らかなり。而も實跡調査に托して其の曲直を不明に歸す。清國の驕傲無禮常に斯の如し」と評した。蓋し當時の我が外交の軟弱を表明するものである。

丁汝昌は明治二十四年(西紀一八九一年)六月にも我が國に來航したが、二十七年(西紀一八九四年)日清戦役が開かれるに及び、北洋艦隊十二隻を率ゐ、九月十七日、我が司令長官伊東祐亨の事

た聯合艦隊十二隻と、大いに海洋島附近に戦ひ、致遠・經遠・超勇・揚威・廣甲の五艦を失ひ、其の他の諸艦にも大損害を蒙り、敗れて旅順に走り、旅順陥落後は威海衛に據り、警備を嚴にして我が軍を防がうとした。

時に陸軍大將大山巖の率ゐる第二軍の一部は、祐亨の艦隊と協力し、旅順から榮城灣に渡り、摩天嶺を陥れ、二十八年二月、海軍の正攻と俟つて威海衛を包圍した。時に丁汝昌の北洋艦隊は、威海衛の入口の劉公島附近に在り、死力を盡して守つたが、我が水雷艇隊は屢々危険を冒して之を夜襲し、定遠・威遠などの諸艦を撃沈したので、威海衛は全く防力を失ひ、其の危機は目前に迫つた。

は如何、貴官を憐んで、特に此の儀をお勧めする」と傳へたが、併し丁汝昌は國家の爲に戦ふべき自己の職責を重んじ、祐亨の好意を斷乎として拒絶した。而して最後の覺悟を決し、祐亨の許に使者を遣つて降伏の意を表し、殘存せる將士の救命を請ひ、二月十二日の夜半、鎮遠の甲板上に將士一同を會し、別離の酒盃を取交した後で悲壯な訓辭をなし、十三日の早曉に毒を仰ぎ、武人としての最後の幕を閉じた。祐亨は深く其の志を憐み、特に汽船を遣つて丁汝昌の柩を送らせた。

### ていせいこう 鄭成功

名號 鄭森といひ、朱成功ともいふ。明の唐王(紹宗)に重んぜられ、名を國姓と賜はり、國姓爺といふ。

事蹟 鄭芝龍は閩海海賊の頭であつたが、明朝に歸順して屢々戰功を樹て、唐王を奉じて福州に在り、西紀一六四六年(我が正保三年・徳川家光の時)、清兵の爲に唐王を執へられ、我が國に救援を求めて成らず、遂に清朝に降伏した。

和蘭人は遂に臺灣を棄て、バダビヤに退いた。鄭成功は此の後も明の年號(永曆)を奉じ、長子の鄭經(朱經)を厦門に據らせ、また教授を我が國に請うたが、要領を得ず、西紀一六六二年(我が寛文二年)に病歿した。

### てつげん 鐵眼

**事蹟** 肥後の人である。陸元の弟子となり、山城國宇治の黄栗山萬福寺の僧となつた。其の妻は遙々肥後から上洛して、鐵眼に還俗歸郷を請うて聽かなかつたので、遂に情愛に引かされて歸途に就いたが、これでは素志を貫徹する事が出来ないと思つたので、國境で竊に逃れて宇治に引還した。妻に同情はしたけれども、道に邁進する爲には、女縁を絶たねばならなかつた。



實典の翻刻がないのは、一大恥辱であるから、自分が誓つて翻刻する」といひ、有志者に詢り、苦心して資金を募集した所が、數年の後に大金が集つた。鐵眼は大いに喜び、將に翻刻事業に着手しようとしたが、偶々大洪水の爲に死

傷者が頗る多く、殊に大阪では家産を失つて路頭に迷ふ者が多かつた。鐵眼は此の慘狀を坐視するに忍びず、第一回目に集めた資金を罹災民救済に支出した。よつて再び資金募集に従つたが、多年苦心の効果空しからず、將に翻刻事業に着手しようとしたが、偶々近畿

地方に大飢饉が起り、其の慘狀は前の洪水の比でなく、幕府の救済も效を奏しない有様であつた。鐵眼はこれを見て再び意を決し、翻刻事業を中止し、第二回に集めた資金を窮民救済に使ひ果し、折角の努力を空にした。鐵眼は更に苦心して、第三回目の資金募集に着手したが、世人は其の慈悲心に感じ、其の熱心に動かされて、喜んで寄附するに至つたので、此の度は翻刻・印刷の業が着々として進み、思ひ立つてから十七年の歳月を重ね、豐元天皇の天和元年(將軍徳川綱吉の世)に至り、一切經六千九百五十六卷の大出版を完成した。世にこれを鐵眼版といふ。

鐵眼は天和二年二月、五十三歳で歿したが、一切經が廣く我が國に行はれたのは、實に此の時からであつて、鐵眼版の版木は、今に萬福寺に保存され、三棟百五十坪の倉庫に滿ちて居る。江戸芝増上寺の高僧福田行誠は、雲葉菊池客

齋の「前賢故實」の出版に際し、寄附金を募つて援助した人であるが、曾て鐵眼の事業を感稱し、「鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり」といつた。

### てらうちまさき 寺内正毅

**事蹟** 長州藩士である。明治十年西南の役及び明治二十七八年戰役に出征して功があつた。三十四年六月に組織された桂内閣の時には陸軍大臣となり、明治三十七八年險役にも功があり、三十九年一月に組織された西園寺内閣及び四十一年七月に組織された桂内閣の時には、何れも陸軍大臣となつた。四十三年七月には、陸軍大臣のまゝ、韓國統監を兼ねて京城に赴任した。八月、韓國總理大臣李完用は、正毅を訪うて日韓合邦の事を計り、爾來、屢々會見して彼我の意志が全く一致し、八月二十二日、兩國の併合條約が結ばれた。日

### てらだとらひこ 寺田寅彦

**事蹟** 文名を吉村多彦といふ。明治十一年高知縣に生れ、熊本の高専學校を経て、東京帝國大學に入り、三十六年に大學の理學部の實驗物理科を卒業した。大正六年ラウエ映畫の實驗方法及び其の説明に關する研究に對しては、帝國學士院から恩賜賞を授與された程で、物理學者として世界的に知られて居る。理學博士で、東京帝國大學教授であつたが、昭和十一年に歿した。夏目金之助の小説「吾輩は猫である」の中に出て居るレンズ磨きの學者と首ぐり力學の説明者たる雲月は、寅彦をモデル

### てんかい 天海

**名號** 俗姓を三浦といひ、蘆名氏の支族である。初名を隨風といひ、後に天海と改め、南光坊と稱した。慶安元年四月、勅諭して慈眼大師といふ。

**事蹟** 會津の人である。十一歳の時に出家し、十四歳の時に比叡山に登り、神藏寺實全の室に入り、檀那一流の秘奥を極め、更に三井寺及び南都の諸寺に遊び、永祿元年に故郷に歸つた。

文龜二年九月、織田信長が比叡山を焼いた時、山上の名僧は多く甲斐に逃れ、武田信玄に據つたが、信玄は大いに喜び、關東の學徒を招いて論席を開いた。時に天海は推されて講師となり、辭氣が勇壯



で、義旨が深玄で、其の名が一時に高くなつた。天正五年、甲斐を辭して再び會津に歸り、途中、上野の長樂寺で葉上一流の灌頂を受け、また曾て臨濟禪を傳へたといふ。

天正十八年、豐臣秀吉は小田原城を圍んだ。當時、會津の主蘆名

味流の灌頂を受けた。

慶長十四年、徳川家康は其の盛名を開き、召して山門の擧題奉行にしたので、東塔南光坊に住んだ。十一月、羽本最胤法親王によつて法曼流の傳法灌頂を受け、十三年、家康の命を受けて駿府に赴き、十四年、京都に入つたが、後陽成上皇は宮中に召して法を問はれ、且つ權僧正を授けられた。十五年、再び駿府に赴き、十六年、血脈を家康に傳へ、功によつて僧正となつた。十七年、家康の命によつて仙波の喜多院を修し、十八年、日光山を領したが、之は家康の終焉の地となす爲である。

元和元年、血脈を後陽成上皇に傳へたが、此の年、中和門院附璽殿一字を寄せられたので、これを比叡山の東麓に建てたが、これは後に親王門室となり、滋賀院と稱せられた。二年四月、家康は歿するに臨み、遺命して久能山に葬り、天海を導師とした。七月、神號を請ふ爲に上洛し、大僧正に任ぜら

れ、三年四月、家康を日光山に移葬するに及び、天海は其の法事を總べた。四年、徳川秀忠と議して紅葉山の廟を造営したが、寛永二年、江戸上野東叡山寛永寺の創建するに及び、命を受けて之を領し、爾來、日光・東叡の兩山を山門に准擬した。三年十二月、東叡山本院で穴太流の灌頂を受けたが、これから東叡山は密法諸流兼學の地となり、家光の時になつて益々崇敬された。二十年十月二日、百八歳(百三十餘歳説あり)で入寂した。日光山に葬る。

**傳教大師**

でんげうだいし  
「さいちよう・最澄」の項を参照されたい。

**天智天皇**

てんちてんのう  
御名を葛城といひ、

後に中大兄と改められた。  
**系統** 舒明天皇の嫡子で、御母は皇極天皇である。第三十八代の天皇である。

**事蹟** 未だ皇子であられた時、蘇我入鹿の專横を憎み、潛に藤原鎌足と謀つて之を除かうとす、蘇我石川麻呂の女を納れて妃とし、以て後援とされた。たま／＼皇極天皇の四年六月、三韓から貢物を獻じた事がある。當日、天皇は大極殿に出御し、入鹿もまた朝服して入つた。即ちこれを機として、鎌足と協力して正殿で入鹿を誅せられた。ついで入鹿の父蝦夷も誅に伏した。

既にして皇極天皇は、位を皇子に傳へようとしたが、皇子は固辭して從はず、密奏して孝徳天皇に傳へられる様に請はれた。皇極天皇はこれを嘉納され、即ち讓位された。皇子は皇太子となり、孝徳天皇を輔佐して改革の政を布かれた。所謂大化の改新は、太子と鎌足との畫策する所である。

**てんむてんのう 天武天皇**

**名號** 御諱を大海人といふ  
**系統** 舒明天皇の第二皇子で、御母は皇極天皇である。天智天皇の御弟で、第四十代の天皇である。

**事蹟** 天智天皇の時に、立つて皇太子となられた。四年、天皇は不豫に際し、大海人皇子を召して後事を托せられたが、皇子は天皇が大友皇子(弘文天皇)に讓位しようと思つて居られる御心中を察し、病と稱して固辭して受けず、俄に宮中で刺殺し、皇位繼承の希望のない事を示し、十月、意を決して吉野に入られたので、天皇は大友皇子を皇太子に立てられた。

既にして天智天皇は崩せられ、大友皇子が即位されたが、これが弘文天皇である。而して大海人皇子は、先に吉野に入られたけれど

も、實は皇位を希望するの念が燃んで、密に畫策する所があり、天下の諸臣も近江・吉野の二派に分れて騒擾した。時人が大海人皇子の吉野入を評して、「虎に翼して野に放つが如し」と言つたのも偶然でない。弘文天皇は山陵を起すに托して、濃尾の兵を集められたが、大海人皇子は之を聞き、元年六月、遂に兵を率ゐて不破に入り、進んで瀬田に迫り、大いに近江朝廷の軍を破られたので、弘文天皇は山崎(關城寺附近)に逃れ、七月二十三日に自盡された。これを壬申の亂といふ。

よつて大海人皇子は、翌元年二月、飛鳥淨御原宮で即位し、功を論じ賞を行はれたが、四年三月以來大いに軍備を整へ、十二年閏四月には、特に詔して軍事を獎勵されたが、これは雄拔神武天皇の御性格の然らしめる所であるといふ。また十二年十月には、諸氏の族姓を改めて八色の姓を定め、十三年正月には、位階を改定して六

十階とし、七月には各位階に對する服色を定められた。此の外に朝議・官制・民政・刑制などを定められたものが尠少でない。十四年七月には、元を建て、朱鳥と稱せられたが、朱鳥元年九月に崩せられた。聖壽は詳かでないが、一説には六十五歳であるといふ。大和國高市郡高市村大字野口の楡隈大内陵に葬る。

**と・たう**

**どるとしかつ 土井利勝**

**名號** 幼名を松千代といひ、通稱を甚三郎といふ。

**系統** 土井利昌の嫡子である。實は水野信元の庶子で、徳川家康の従弟である。

**事蹟** 幼時から家康に近侍し、天正七年から徳川秀忠に仕へ、厚米二百俵を給せられ、十九年に

米島千石を賜はつた。文祿四年、豊臣秀吉が養子秀次を罪した時、秀次は秀忠を擁して賀とし、其の禍を免れようと謀つたが、利勝は大久保忠隣の議に従ひ、急に秀忠を奉じて伏見に運れた。

慶長五年、石田三成らが事を構ふるに際し、利勝は秀忠に従つて東山道から西上し、信濃の上田城を攻むるに及び、自ら諸軍を指揮した。七年十二月、下總の小見川で一萬石を賜ひ、十年には叙爵して大炊頭と稱し、秀忠の家老となつた。十五年には佐倉に轉じ、三萬二千四百石を領し、老中に補せられた。

大阪冬、夏の陣には、帷帳の中に在つて密議に參與し、爾來、領りに所領を加へ、寛永二年には上總・下總・常陸・近江などの地で十四萬二千石を食み、また始めて佐倉城を築いた。三年八月には從四位に叙せられ、九月には侍從に任ぜられた。

家光が將軍となるに及び、密に謀る所があり、「家光の弟忠長を奉じて主とし、家光を斃すべし」といふ書狀を諸大名に回送した。時に多くの大名は、其の事を幕府に告げたけれども、忠長と加藤忠廣(清正の子)だけは秘したので、二人共に罪を得たといふ。蓋しこれは諸大名の意中を試みたので、利勝の畫策に出たのであるといふ。秘事に屬して傳はらないから詳かでない。

**だうきやう 道鏡**

**事蹟** 道鏡は河内の人で、少にして僧となり、禪行を以て聞えた。孝謙天皇の召に應じ、内道場に入つて禪師となつた。道鏡は義淵僧正に師事し、如來輪法宿曜法を修めて餘があり、これによつて

寵遇を受けた。孝謙天皇が讓位されて後にも、其の優遇を蒙り、天平寶字中に孝謙上皇が保良宮に幸され、其の不豫の際にも、道鏡は常に側侍した。淳仁天皇はこれを憂へ、屢々諫められたけれども用ひられなかつた。これよりさき、藤原仲麻呂(惠美押勝)は上皇の寵を受けて居たが、道鏡が出てから其の寵が衰へたので、不平の情を抱いて叛したが、間もなく誅せられた。上皇は直ちに道鏡を大臣禪師と爲し、職分も封戸も大臣に準じた。

既にして淳仁天皇は廢せられ、孝謙上皇が重祚して第四十八代稱徳天皇となられた。道鏡の寵遇は日に厚く、天平神護元年、太政大臣禪師となし、文武百官を拜賀させられた。明年、詔して法王の位を授けられたので、道鏡は鑿鑿に乗り、衣服も食物も供御に擬し、自ら大小の施政を決した。而して其の弟の淨人は、布衣から起つて從二位大納言になり、一歳男女五位

に叙する者が十人に及んだ。

神護景雲元年、更に法王職を置かれたが、三年正月、道鏡は西宮前殿で大臣以下の賀を受ける様になつた。たま／＼太宰主神習宜阿曾麻呂は、宇佐八幡の神教を矯めて、「道鏡をして皇位に即けたまはゞ天平太平ならん」と奏上した。道鏡はこれを聞いて大いに喜んだが、稱徳天皇はこれに迷はれた。よつて和氣清麻呂に詔し、宇佐に赴いて更に神教を受けしめられた。清麻呂は還つて奏上し、我が國は、開闢以來君臣の分定まされ、臣を以て君とせしこと、未だこれあらず。天日嗣は必ず皇緒を立てよ。無道の者は速に除くべし」と言つた。道鏡は大いに怒つて、清麻呂を大隅に流した。既にして寶龜元年に天皇が崩ぜられ、光仁天皇が即位されてから、道鏡を下野の藥師寺別當に貶せられたが、既所に在ること三年にして歿した。「わけのきよまる・和氣清麻呂」の項を参照されたい。

### だうげん

**名號** 號を希文といふ。佛性傳東國師・承陽大師などの諡號がある。

**系統** 姓は源氏である。父は内大臣久我通親で、母は藤原基房の女である。

**事蹟** 曹洞宗の開祖である。土御門天皇の正治二年正月、京都堀川の邸に生れたが、十三歳で比叡山に登つて禪髪し、ついで園城寺に入り、後に建仁寺の榮西禪師に師事して禪僧となつた。後堀河天皇の貞應二年四月、二十四歳の時、明全と同伴して宋に渡り、育王・徑山などの諸名刹に歴遊したが、偶々天童山の如淨禪師の法名を聞き、如淨に就いて參禪する事三年、遂に其の正統を嗣ぎ、安貞二年十二月に歸朝した。

天福元年興聖寺に轉じた。併し京都に近かつたので意に達せず、常に隱遁の志を抱いた。後醍醐天皇の寛元二年、波多野義重は、大佛寺を越前の志比に創立し、道元を請うたが、これが永平寺である。後醍醐天皇は深く道元の操行を嘉し、紫方袍を賜はつたけれども、終身これを著けなかつた。後深草天皇の建長五年八月、永平寺を嫡嗣孤雲懷辨に譲り、病を京都の西洞院に養つたが、此の年五十四歳で入寂した。東山で茶毘に附し、遺骨を永平寺側に葬つた。著書に正法眼藏・普勸坐禪儀・永平廣錄・學道用心集・大清規などがある。

### とうがうへいはらう

### 東郷平八郎

**事蹟** 薩州藩士である。弘化四年に鹿兒島で生れたが、十七歳の時に藩から拔擢されて海軍練習所に學び、明治四年には海軍研

究の爲に英吉利に留學し、同十一年には海軍中尉に進んだ。

日清戦役の起つた頃には、平八郎は浪速艦長であつた。明治二十七年七月二十五日、我が海軍少將坪井航三は、吉野・浪速・秋津洲を率ゐ、朝鮮慶島沖を通つて居ると、偶々通りかゝつた清國の濟遠・廣乙の二艦が發砲したので、我が艦隊はこれに應戦し、濟遠を迫ひ、廣乙を破壊し、續いて来た揚江號を捕獲したが、時に平八郎は、多くの陸兵を載せて揚江號に保護されて来た汽船高陞號——英國々旗を掲揚す——を撃沈し、我が艦隊を驚かした。

日露戦争の時には、第一艦隊司令長官兼聯合艦隊司令長官に任せられ、明治三十七年二月、海軍少將瓜生外吉に命じて、仁川の露艦ワリヤード・コレーツを撃沈させ、聯合艦隊は直ちに露國の太平洋艦隊に當り、これを旅順港内に追ひ込み、露艦を遣つて水雷を發射させ、以て其の全滅を圖り、且つ

艦々危殆を冒して港内の閉塞を企てたが、五月、敵艦隊司令長官マカロフは戦死し、敵艦の完全なものは殆ど稀となつた。一方では海軍中將上村彦之丞に命じて、敵の浦鹽艦隊を抑壓させた。

露國は、旅順・浦鹽に居た太平洋艦隊が敗れ、亞細亞沿海の制海權が日本の手に落ちたのを見て、今迄の敗勢を一舉に恢復しようとしてバルチック艦隊を極東に派遣したが、三十八隻から成る此の大艦隊は、堂々隊伍を整へ、對馬海峡を経て浦鹽斯德に入らうとした。平八郎は鎮海灣に在り、豫め敵艦隊の行動を探つて、其の對馬海峡を通る事を知り、明治三十八年五月二十七日の早曉、哨艦信濃丸の警報に接して、直ちに出勤し、ここに前古未曾有の大海戦を演出した。將に開戦せんとした時、平八郎の名信號「皇國の興廢此の一戦にあり、各員一層奮勵努力せよ」は、旗艦三笠の橋頭に懸り、各員は之に勵まされて奮戦したので、

敵の大艦隊は、其の日の中に、或は沈み、或は傷つて、勝敗は早くも決せられ、更に我が驅逐隊・水雷艇隊の夜襲を受けて致命傷を負ひ、翌二十八日には完全に撃破されて、三十八隻の大艦隊は殆ど全滅し、敵の司令長官ロジェストウエンスキーは捕虜となり、我が軍の輝かしい大勝利となり、平八郎の名は廣く世界に布かれた。

平八郎は戦功により、功一級金鷄勳章を受け、大勳位に叙せられ、伯爵を授かつたが、大正元年には英國皇帝の戴冠式に列してネルソンの偉跡を訪れ、翌二年に歸朝して元帥府に列せられ、同年から同十一年に至るまで、東京御學問所總裁として、當時未だ皇太子であられた今上天皇の御教育を掌つた。平八郎は平常極めて質素で、謙遜、寡言、沈着の偉傑で、大事に臨んで少しも心を動かさなかつた。晩年、東京麹町區番町自邸で老を養つたが、昭和九年五月、八十八歳で歿した。其の前日、特

に侯爵を授けられ、勳により國葬の儀を以て葬られた。

### とうふくもんりん

### 東福門院

**名號** 名を和子といふ。  
**系統** 徳川秀忠の女で、母は贈従一位徳子である。徳子は淺井長政の三女で、淀君の妹であるが、秀忠に嫁して家光・和子を生んだ。

**事蹟** 徳川家康は、先に後水尾天皇を擁立したが、源頼朝が其の女を後鳥羽天皇の宮に納れようとした前例により、孫女和子を後水尾天皇の女御に納れ、皇室の外戚となつて權威を増さうとした。時に公卿間には異論があり、後陽成上皇も許されなかつたが、藤堂高虎は、近衛信尹に盡力を請ひ、慶長十九年四月、遂に朝許を得るに至つた。よつて元和六年六月に、和子は入内して女御となり、寛永元年十一月に中宮となり、六



年十一月に院號を賜はつた。乃ち東福門院といふ。明正天皇の御母で、また後光明・後西・靈元三天皇の御養母である。延寶六年六月十五日、七十二歳で崩せられた。京都市今熊野町月輪陵に葬る。

### 徳川家定

幼字は政之助、初名を家祥といひ、後に家定と改めた。諡號を懷徳院といふ。

徳川家慶の第三子で母は跡部正賢の女である。徳川十三代の將軍である。

文政七年四月に生れ十一月に元服を加へ、從二位大納言に叙任し、即日正二位に進んだ。天保八年右大將を兼ね、十二年五月西丸に移り、嘉永六年六月に家を襲ぎ、十一月に征夷大將軍となり、内大臣に任せられた。

嘉永六年七月、露西亞の水師提督ブーシャテンは、軍艦四隻を率

る、長崎に来て通商を請うたので、幕府は川路聖謨・筒井正憲を長崎に遣つて應對させ、「通商の事は周より國禁たり、且つ將軍新に立ち、内政未だ整はず、祖法を變ぜんと欲せば、天子に奏し、諸侯に諮はざる可からず、これまた三五年の時日を要す、姑らく其の期を待つべし」と諭告させた。

聖謨・正憲の兩使が未だ歸らないのに、安政元年正月、米國の水師提督ペリーは、船艦七隻を率ゐて江戸灣に入り、神奈川の海上に投錨し、前年の回答を幕府に迫り、其の勢が強烈であつた。幕府は仕方がないので、林・井戸覺弘を派遣し、ペリーと神奈川で會見させ、始めて米國と和親條約を結び、下田・函館の二港を開き、其の船に薪水・糧食などの必要品を給し、漂着船を救護することなどの十二條を約した。時に安政元年三月三日で、これを神奈川條約といふ。

安政四年十月、米國の總領事ハリスは江戸に入り、始めて登城し

て家定に謁見の禮を取り、大統領ファイルモアの書を呈し、快辭を振つて世界の大勢を説き、我が鎖國政策の時代錯誤を指摘し、彼我の通商を求めた。老中堀田正睦はハリスと議し、通商條約の草案を作り、上京して勅許を請うたが、朝議が紛然として決せず、正睦は空しく江戸に引き揚げた。五年四月、彦根侯井伊直弼を擯用して大老に任じたが、直弼は深く時勢を察し、勅許を俟たないで米國と通商條約を結び、下田・函館の外に新に長崎・神奈川・兵庫・新潟の四港を開き、居留民の治外法權を承認し、輸出入の税率などを規定した。時に安政五年六月で、これを安政の假條約といふ。是に朝野の議論が沸騰し、志士の擧論が日々盛んになった。

時に家定には世子が無く、其の繼承に就いては、識者の間に議論があつた。徳川齊昭の子一橋慶喜は賢明で、越前侯・尾張侯・薩州侯及び諸司から囑望されて居た

### 徳川家重

幼字を長福といひ、諡號を尊信院といふ。

徳川吉宗の長子で、母は大久保忠直の女深徳院である。徳川九代の將軍である。

正徳元年十二月、江戸赤坂の紀州藩邸に生れた。享保元年五月、吉宗が宗家を繼ぐに及び、家重は江戸城二の丸に移り、十年四月、元服して從二位權大納言に叙任し、六月、更に西丸に徙つた。享保元年八月、右大將を兼ね、延享二年、吉宗の讓を受けて宗家を繼ぎ、十一月に征夷大將軍

に拜せられ、また内大臣に任せられた。併し不肖であつた爲に、寛延四年、吉宗の歿するまでは、大小の政務は吉宗が決した。吉宗の歿後は紀綱が弛み、賄賂が公に行はれ、世俗は奢侈に流れた。家重は寶曆十年二月右大臣に轉じ、西丸に老を養ひ、十一年六月十二日、五十一歳で歿した、江戸の増上寺に葬る。

### 徳川家繼

幼字を綱松といひ、諡號を有章院といふ。

徳川家宣の第四子である。母は勝田玄哲の女で月光院といふ。徳川七代の將軍である。

正徳二年、家を襲ぎ、同年十二月、從二位權大納言に任じ、三年正月、征夷大將軍に拜せられ、内大臣に進んだが、時に四歳である。家宣の遺命により、間部詮房が輔佐し、新井白石が參與

した。此の時、世の家平と共に、長崎では奢侈弊澤品が盛んに輸入され、我が國の金銀の流出が甚だしかつたので、白石の建議に基づき、正徳五年正月、外國貿易を制限し、長崎貿易の新例を定めた。また西海の諸藩に命じて、密貿易を取締らせたが、正徳六年四月、年僅かに八歳で歿した。江戸の増上寺に葬る。「あらむはくせき・新井白石」の項を参照されたい。

### 徳川家綱

幼字を竹千代といひ、諡號を嚴有院といふ。

徳川家光の長子で、母は青木利長の女寶樹院である。徳川四代の將軍である。

寛永十八年の八月に江戸城の本丸で生れた。正保二年の四月に元服を加へ、從三位權大納言に進み、慶安四年の正月に家を襲ぎ、八月に征夷大將軍に拜せ

られ、また内大臣に任せられ、松平信綱・阿部忠秋らが輔佐した。偶々山井正雪が駿府に據つて亂を圖つたが、間もなく誅に伏した。明暦三年の正月には、江戸に大火があり、災死者が十萬八千餘人に及び、木城もまた災に罹つた。延寶八年の五月四十歳で歿した。江戸上野の東叡山に葬る。

### 徳川家齊

幼字を豐千代といひ、諡號を文恭院といふ。

一橋家徳川治済の子で、母は岩本正利の女である。徳川十代將軍家治に養はれ、十一代の將軍となる。

安永二年十月、一橋邸に生れ、天明五年、將軍家治の養嗣となつて西丸に移つた。二年正月に元服し、從二位權大納言に任じ、六年九月に家を襲ぎ、七年四月、征夷大將軍に拜せられ、正二

位内大臣に遷んだが、時に僅か十四歳であつたから、一族相讓して後見を定め、田安宗武の子白河城主松平定信を之に任じた。家齊は職に就き、先づ前代の權臣田沼意次を黜け、天明七年六月、松平定信を老中の主座に任じ、翌年輔佐となし、銳意治を圖り、徳川吉宗の治に則り、文武を奨勵し、奢侈を禁じ、町法を改正して七分積金を始め、儲蓄米の制を建て、饑饉などに備へ、また風俗を矯正するなど、所謂寛政の改革を行ひ、政綱が頗る張つた。

### 徳川家重

幼字を長福といひ、諡號を尊信院といふ。

徳川吉宗の長子で、母は大久保忠直の女深徳院である。徳川九代の將軍である。

正徳元年十二月、江戸赤坂の紀州藩邸に生れた。享保元年五月、吉宗が宗家を繼ぐに及び、家重は江戸城二の丸に移り、十年四月、元服して從二位權大納言に叙任し、六月、更に西丸に徙つた。享保元年八月、右大將を兼ね、延享二年、吉宗の讓を受けて宗家を繼ぎ、十一月に征夷大將軍

寛政四年九月、露船カタリナ號は根室から函館に航し、漂流民二名を送還し、始めて通商を求めた。幕府は石川忠房・村上義禮を派し、露使アダムス・ラックスマンと應

(徳川家齊)



接させ、(函館は外人渡來の地に非ざれば、長時に赴くべし)と諭し、信牌を興へて去らせた。これから北海警備の急を知り、享和二年、蝦夷地開拓の議を決し、始めて函館奉行を置いた。文化元年九

月、露使レザノフは長崎に來り、往年ラックスマンに賜ふ信牌を示し、國書方物を呈し、通商を請ひ、我が漂流民四名を送還した。幕府は遠山景晋を長崎に派遣して、通商の議を拒絶した。四年三月、松前氏の所領を収めて公領とし、

兩館奉行の所管に屬し、各所に警備を置いたが、レザノフは通商を拒絶されたのを憤り、我が樺太・擇捉などの各地に寇した。五年八月、水師提督ドルリーの率いた英船は、長崎に來て薪水糧食を強奪し去つたので、奉行松平康英は責に任じて自害した。斯くて海防は日に月に多端となつて來た。

家齊は文化十三年従一位太政大臣に進んだが、生前に太政大臣になつた者には、外に足利義滿・豊臣秀吉・徳川家康・徳川秀忠らがある。ついで天保八年、大阪で大鹽平八郎が亂を起したが、間もなく鎮定した。此の年の四月、家齊は職を家慶に譲つて西丸に老

し、十二年正月晦日、六十九歳で歿した。江戸上野の東叡山に葬る。家齊は定信を擧げて革新の政を布き、治績の見るべきものがあつたが、中道で漸く政に倦み、晩年に至り豪者に耽り、水野忠成らを任用し、弊政も尠少でなかつた。而も世は泰平であり、幕府の盛運も其の極に達したので、世に大御所様時代と稱する。「まつだひらさだのぶ・松平定信」の項を参照されたい。

### 徳川家宣

幼名を虎吉といひ、長じて左近と稱した。初名を綱豐といひ、將軍となるに及んで家宣と改めた。諡號を文明院といふ。

甲府の徳川綱重の子で、徳川綱吉に養はれた。母は田中治兵衛の女で、長昌院といふ。徳川六代の將軍である。事蹟 延寶四年、従三位左

中將に任じ、六年に封二十五萬石を襲ぎ、八年八月に正三位參議に進み、九月には封地十萬石を加へて三十五萬石を領した。元禄三年十二月、權中納言となり、寶永元年十二月、將軍綱吉に養はれて西丸に移り、二年三月、従三位權中納言に陞り、六年正月に家を襲ぎ、五月に征夷大將軍に拜せられた。時に間部詮房が老中となつて吏務を總べ、新井白石が大體を率ひ、改革する所頗る多かつた。先づ生類憐みの禁を解き、前代の權臣柳澤吉保を黜け、寶永七年には、白石の建議に基づき、新に閑院宮家を立て、また金銀貨を改鑄し、品質のよい新貨幣を出し、正徳元年には朝鮮使節引見の禮を改め、二年には勘定吟味役を創置し、漸次に刷新の政を布かうとしたが、不幸にして在職が短く、正徳二年十月十四日、五十一歳で歿した。江戸の増上寺に葬る。「あらゐはくせき・新井白石」の項を参照されたい。

### 徳川家治

幼名を竹千代といひ、諡號を凌明院といふ。

徳川家重の長子で、母は梅溪英通の女至心院である。徳川十代の將軍である。事蹟 元文二年五月、江戸の西丸に生れた。寛保元年八月に元服し、従二位權大納言に叙任し、寶曆十年右大將を兼ね、四月に家重の讓を受けて宗家を繼ぎ、九月に征夷大將軍に拜せられ、正二位内大臣に進んだ。家治は穎悟で、文學を習ひ、武技を講じ、屢々令を下して有司の怠慢を戒め、祖父吉宗の遺制を勵行しようとした。併し家治は宿癖を有し、昵近の士に非ざれば對坐する事を好まず、老中に事を命ずるにも、其の復命は必ず近侍にさせたといふ。故に側用人の勢が日に盛んになり、殊に田沼父子が勢力を得た。即ち安永

元年には田沼意次が老中に擧げられ、天明三年には其の子意知が若年寄に擧げられ、其の一族は樞要の地を占め、勢力は朝野を壓し、家治はたゞ垂拱するのみとなつたので、弊政が百出し、賄賂が公に行はれ、而も凶災が相踵ぎ、人心は日に安からず、吉宗中興の綱紀は遂に衰へた。家治は六年九月九日、五十歳で歿した。江戸上野の東叡山に葬る。

### 徳川家光

幼名を竹千代といひ、諡號を大猷院といふ。

徳川秀忠の長子である。母は淺井長政の三女で、淀君の妹で、世に崇源院と稱する。徳川三代の將軍である。事蹟 慶長九年七月、西丸で生れた。乳母は春日局といふ。十九年六月、元服を加へ、従二位權大納言に叙し、元和九年三月、

右大將を兼ね、七月に讓を受けて家を繼ぎ、正二位内大臣に進み、征夷大將軍に拜せられた。寛永三年八月、諸將を率ゐて京都の二條城に至り、九月に後水尾天皇及び中宮女院の行幸啓を仰いだ。蓋し近代の盛事であつたといふ。寛永九年正月、父秀忠が歿した時、老臣の中には、喪を祝したがいと諷する者もあつたが、豪氣な家光は、此の議を退け、且つ諸大名を殿中に召し、酒井忠勝・松平信綱らに命を傳へさせ、「祖宗二公は、櫛風沐雨の勞を重ね、四海統一の業を成したるものなれども、我が身は若年にして未だ戰場に臨まず、若し大御所薨去の機に乗じ、觀戦の念を抱くものあらば、任意に歸國して兵備を整へ、我が出馬を俟つべし」といつた。時に伊達政宗は進み出て、「普天の下、誰か當家の高恩に浴せざるものあらんや。萬一非望を抱くものあらば、政宗仰せを蒙り、一手を以て踏み潰さんのみ」と答へ、諸將は

皆恐れて退出したといふ。此の年肥後縣本城主加藤廣忠の封地を奪ひ、翌十年、弟駿河忠長に自盡を命じ、十三年、日光東照宮の廟を改造し、建築が壯麗を極めた。家光は基督教の事から、外國との交通を禁ずるに至つた。歐羅巴人が始めて我が國に來航したのは後奈良天皇の天文十一年(西紀一五四二年)で、即ち葡萄牙人が種子島に漂着し、鐵砲を傳へたのを最初とする。爾來、葡萄牙人は九州の島津・大友・松浦・大村・有馬らの諸大名と貿易を始めたが、當時はこれを南蠻人と呼んだ。ついで天正八年の夏には英吉利人が肥前平戸に來り、九年二月には西班牙人が來朝して、織田信長に黒奴を獻じたが、慶長二年には和蘭船が平戸に來り、五年三月には和蘭船がまた豊後に漂着したので、家康は乗組員蘭人ヤン・ヨーステ及び英人ウィリアム・アダムス(三浦安計)を江戸に招いて優遇し、海外の事情を聴取した。同十

四年には和蘭船が平戸に來たので、これに朱印狀を與へて通商を許し、十八年には英吉利船にも許した。爾來、蘭・英の兩國人は平戸に商館を置いて貿易したが、和蘭人は遂に葡・英・西諸國の通商に勝ち、商益を獨占するに至つた。

我が長崎・堺・京都の商人中には、既に秀吉の頃に朱印の免許狀を得て、阿媽港(天川)・高砂(臺灣)・呂宋・安南・東埔寨・交址・暹羅・麻六甲・瓜哇・天竺(印度)などに航して貿易を營む者があつた。家康の世には渡航が益々盛んで、角倉了以(京都)・納屋助左衛門(堺)・茶屋四郎次郎・末吉孫左衛門(大阪)・末次平藏(長崎)らの外、加藤・島津・鍋島・細川・有馬などの諸大名も、朱印狀を拂へて海外貿易に従事した。所謂御朱印船はこれである。豊臣氏滅亡後は海内無事で、功名富貴も求め難くなつたので、有爲の士は奮つて海外に移住するに至り、呂宋・暹羅などには日本町を開く

に至つた。(一)元和の頃、靜岡の人山田長政は暹羅に渡り、在住の邦人を率ゐて國亂を誼め、高官に隨つて國政に參與し、威名を海外にあげた。(二)寛永の頃、長崎の商人濱田彌兵衛は、臺灣(高砂)に渡つて暴慢な和蘭人を懲し、大いに我が國人の意氣を示した。

葡萄牙人の來航後、間もなく基督教が傳播した。基督教は古くから歐羅巴に行はれて居たが、後柏原天皇の頃には、舊教・新教の二派に分れて争つた。舊教の一派たるジェズイット派は、東洋航路が開けたので、東洋傳道に努め、後奈良天皇の天文十八年、其の宣教師西班牙人(實はバスク人)ザビエルは、始めて鹿兒島・平戸・山口・府内(豊後)などで傳道した。爾來、宣教師が相繼いで來朝し、基督教は九州・中國・四國から近畿・奥羽までも弘まり、世に之を天主教・切支丹宗などと稱へた。織田信長は佛僧の積弊を憎んで居たので、之に對抗する政略上から、

其の公布を許し、京都に南無寺を建てた。また宣教師アレックスandro・ロウワーニヤニは、天正七・八年に有馬(肥前)・府内(豊後)・安土に神學校を建設して、生徒を募集して宗教教育をなし、また傳道師を養成したので、基督教は益々弘まるに至つた。最も熱心な信者である大友宗麟・有馬晴信・大村純忠の三大名は、天正十年に伊藤祐益・千々石清左衛門・中浦(名不明)・原(名不明)の四少年を羅馬に派遣して、法王グレゴリー十三世に敬意を表せしめ、前後九年間を費して歸朝したが、これが邦人渡歐の始めである。斯くて基督教は益々盛んになり、同時に西洋の哲學・天文学・地理學・數學・醫術・音樂・美術及び言語・風俗などが漸く行はれて來た。

基督教の禁制は、豊臣秀吉に始まり、家光に至つて成功したものと見られる。秀吉は、最初は宣教師を優遇したが、然るに基督教徒中には我が國風に背く者があり、ま

た傳道に領土的野心のある事を悟つたので、天正十五年に禁教令を發し、宣教師の國外退去を命じ、先づ京阪地方二十餘箇所の教會堂・禮拜堂・神學校を破壊し、京阪で傳道して居た七十餘名の宣教師を放逐した。併し海外貿易は舊の通りに許したので、商人に扮して來る宣教師が多く、隨つて禁教が行はれなかつた。家康の時には、和蘭人(新教徒)が葡萄牙人(舊教徒)と商權を争ひ、舊教宣教師の領土的野心を密告したので、益々其の傳道を禁じた。然るに外國との通商交通が盛んで、海外渡航者が益々増加するにつれ、信徒は漸く多く、禁令は容易に行はれなかつた。秀忠は慶長十七年に京都及び諸國の教會堂を悉く破壊し、十九年には高山友祥・小西如安・加賀山隼人らの名士を首め、信徒百餘人を阿媽港に放ち、ついで信徒を各地で流刑・斬刑・火刑に處したが、當時は全國の信徒が六十萬を超えて居たから、中々これを

禁ずることが出来なかつた。家光は寛永十年頃から悉く鎖國政策の實行を始め、益々其の禁令を嚴にし、十三年には斷然海外渡航・大船建造を禁じ、信徒を檢擧して嚴刑に處し、南蠻人の血統を引いた者は悉く海外に放逐した。

然るに九州は基督教初傳の地で信徒の數も頗る多く、殊に西肥の島原半島・天草諸島は其の巢窟であつたが、幕府の禁令は嚴重で、藩主松倉重政及び重次は幕府の意を迎へ、信徒に對して頗る残酷で、轉宗しない者は磔刑・斬刑・火刑・鋸引に處し、背を刺して温泉地獄の熱湯を注ぐなど、枚舉に遑かなく、西肥の恐怖時代を演出したので、數萬の信徒は身を指く地なく、窮迫の餘り、天草の信徒と相應し、益田時貞(天草四郎)を首領に戴き、小西行長の遺臣大矢野松右衛門・千束善右衛門・大江源右衛門・森宗意・山善左衛門らが主謀者となり、亂を天草に起し、ついで島原半島の原城(有馬晴信の舊址)

に據り、男女三萬七千人が一敵愾同して、信教の自由と生存の權利とを主張し、勢が頗る盛んであつた。時に寛永十四年十月である。よつて家光は板倉重昌を派遣し、寺澤堅高・有馬直純・細川忠利・鍋島勝茂らの諸侯を督して攻めさせたが、頑強で容易に抜けなかつたので、家光は更に松平信綱・戸田氏鐵を派遣することにした。時に重昌はこれを聞き、自ら功なきを恥ぢ、信綱の到着以前に原城を陥れようとして戦死した。信綱は更に兵力を増加し、總軍十二萬四千人を督し、長圍の陣を張つたが、城中は漸く食糧が盡きたので、十五年二月二十一日、時貞らは策を講じ、兵を城外に出し、寺澤・鍋島・黒田(忠少)・立花(宗茂)らの陣を襲つた。幕軍の諸將は奮戦して之を退け、二十七日に總攻撃を開始し、翌二十八日にこれを陥れ、三萬餘人を屠つた。これを島原の亂といふ。

これよりさき、英吉利人は貿易

の權利を見て辭去し、ついで西班牙人も去り、葡萄牙・和蘭兩國人が殘つて居たが、家光は島原の亂後益々基督教を嫌ひ、國民を悉く佛教の一宗に歸依させ、其の宗門寺を定めさせ、生死・結婚などに至るまで、悉く寺僧に届けさせ、時々宗門改めを行ひ、其の疑はしいものは、踏繪を行つて信否をたゞし、信徒を酷刑に處した。また國人の海外渡航を禁じた許りでなく、嚴に外國人の渡來を拒絶した。たゞ和蘭人は基督教を傳へず、また島原の亂に際し、海上から原城を砲撃して幕軍に加勢した理由を以て、支那人と同様に長崎で通商する事を許し、ついで長崎の出島から世は鎖國の有様となり、一時隆盛を極めた海外貿易は全く廢絶し、海外發展の好機を逸し、洋書

を讀む事さへ禁じたので、國民は世界の進歩に遅れる様になつた。家光は剛毅果斷で、よく諸大名を感服し、また土井利勝・酒井忠

徳川家茂

とくがはいへもち  
名號 幼名を慶福といひ、後に家茂と改めた。諡號を昭徳院といふ。

系統 紀伊侯徳川齊朝(十一代目の藩主)の子で、母を實相院といふ。兄齊靈の養子となつて紀伊家を繼ぎ、更に將軍家定に養はれ、徳川十四代將軍となる。

事蹟 弘化三年に生れ、嘉永二年、齊靈に次いで紀伊家を繼ぎ、安政二年、從三位宰相に叙任し、同年家定の嗣となり、本宗を

襲いで江戸城に移り、五年十二月  
征夷大將軍に拜せられた。

時に大老井伊直弼が幕政を参決  
したが、安政五年六月、勅許を俟  
たないで米國と通商條約を結び、  
日つ衆議を排して家茂を迎立した  
ので、水戸・尾張・越前・薩摩な  
どの藩主及び攘夷論者は、直弼の  
専斷を惡み、朝廷に入説する者が  
多く、志士の横議が頗る盛んであ  
つたから、間部詮勝を京都に派遣  
し、幕府の政策に反對する者を捕  
へ、所謂安政の大獄を起した。即  
ち直弼は、(一)幕府に反對した近  
衛忠房、三條實萬らの公卿を幽し、  
(二)徳川齊昭・慶喜父子を首め、  
尾張・越前・土佐・宇和島などの諸  
藩主に蟄居、謹慎を命じ、(三)吉  
田松陰・橋本左内・頼三樹三郎・  
梅田雲濱・安島帯刀ら五十餘人の  
志士を捕へて投獄し、幕臣の中  
にも連坐する者が多かつた。よつて  
議論が沸騰し、萬延元年三月三日、  
直弼は遂に櫻田門外で水戸藩・薩  
州藩の浪士十八人の爲に殺され、

幕府は天下の輿望を失つた。  
これよりさき、安政五年六月、  
幕府は米國と通商條約を結んでか  
ら、和蘭・露西亞・英吉利・佛蘭西  
ともほゞ同様の條約を結んだが、  
萬延元年正月、外國奉行新見豊前  
(徳川家茂)



守を使節として米國に派遣し、本  
條約を交換させた。軍艦奉行木村  
毅及び勝安房は、軍艦成陽丸(八  
百噸)に乗つて之に隨つた。我が  
軍艦が太平洋を横断したのは、こ  
れが最初である。

文久元年二月、露國艦長ピリ  
フは軍艦ボサジニカに乗り、對馬  
國淺海灣尾崎浦に碇泊し、船艦修  
理を名として永久占領策を講じ、  
且つ大船越海峡で争鬪を演じたの  
で、對馬の士民は激昂し、藩主宗  
氏も留辱を忍ぶ能はず、幕府の指  
令を俟つて戦はうとした。四月、  
幕府は驚いて小栗忠順を急派し  
てピリフと應接させ、且つ對  
馬の人心を鎮壓し、更に米國公  
使ハリスの周旋で露國外務大臣  
に交渉し、また兩館奉行村垣範  
正に命じ、同地駐在露國領事コ  
シケヴィチを介してピリフを  
詰めたので、七月二十九日に對  
馬を退帆した。

幕府は夙に長州藩を惡み、これ  
を征しようと考えたが、諸藩を憚  
つて斷行せず居る處へ、偶々元  
治の變が起り、長州兵が素りに宮  
門に迫り、兵火を開いた罪を責め、  
元治元年八月、朝廷に請うて長州  
追討の許可を受け、前尾張藩主徳  
川慶勝を總督とし、越前藩主松平  
茂昭を副總督とし、島津・細川・  
鍋島・淺野・蜂須賀を始め、二十一  
藩の兵を派して長州に向はせた。  
當時、長州藩は英・米・佛・蘭の  
四國艦隊から襲撃を受け、非常に  
困難して居たので、藩主敬親は先  
づ四國と媾和し、ついで家老元備  
・親相・親施らの首を斬り、恭順  
の意を表したので、慶勝は之を許  
して軍を班した。  
然るに長州藩士高杉晋作・山縣

倉具親・千種有文らの周旋により、  
攘夷を行ふ事を幕府に約せしめて  
降参を許されたので、和宮は文久  
元年十一月十五日、江戸に到着さ  
れた。然るに和宮の降参は却つて  
尊王攘夷論者の憤りを深め、幕府  
朝廷を脅かし、皇女を奪ふと爲  
し、二年正月十五日、刺客河本壯  
太郎・黒澤五郎・高島房次郎・小  
田彦三郎・平山兵藏・川邊佐次衛  
門らは、坂下門外に信正を襲撃し、  
其の腰を傷けた。

文久二年五月、朝廷は大原重徳  
・島津久光を江戸に下し、幕政の改  
革と將軍の上洛とを命じたので、  
家茂は勅を奉じ、一橋慶喜を後見  
人とし、松平慶永(春嶽)を政事  
總裁職にあげ、また参議交代の制  
を弛め、諸侯の妻子の歸藩を許す  
など、大いに改革を圖つたが、時  
既に遅く、遂に幕府の衰勢を挽回  
することが出来なかつた。  
京都では尊王攘夷論が益々高く  
殊に孝明天皇は廟號で、常に朝廷  
の長はないのを慨かれ、外交問題

に就いても親書を請はされた。偶  
々長州藩主毛利親親(慶親)一派  
は、「速に幕府をして攘夷の議を  
決せしめられよ」と奏請したので、  
文久二年十月、朝廷は三條實美・  
姉小路公知を勅使として江戸に下  
し、家茂の上洛と攘夷の決行とを  
促されたが、家茂は勅使を厚く遇  
し、謹んで其の命を奉じた。つい  
で文久三年三月入京したので、四  
月、天皇は賀茂神社に行幸し、攘  
夷の節刀を家茂に授けようと思は  
れた。偶々家茂は病と稱して供奉を  
辭したが、攘夷の氣勢は益々あが  
り、家茂も遂に勅を奉じ、五月十  
日を攘夷期日と定めて諸藩に布告  
した。攘夷論の張本である長州藩  
は、期日に至つて米國船を下關海  
峽で砲撃したが、家茂は六月に江  
戸に歸つた。

京都では長州藩を主とする攘夷  
論者が相謀り、大和の神武天皇陵  
に孝明天皇の行幸を仰いで、攘夷  
親征の大詔を拜受しようとした。  
然るに京都主謀職松平容保(會津

藩主)は薩藩と結び、入道尊徳法  
親王(後の久邇宮朝彦親王)を介  
して、攘夷親征の不可を奏したの  
で、朝議は一變し、先づ大和行幸  
を中止し、長州藩の宮門守衛を免  
じ、攘夷派公卿の朝参を禁じた。  
そこで長州藩士は京都を去り、ま  
た攘夷派の三條實美・三條西季知  
・四條隆謨・東久世通禧・壬生基  
脩・錦小路頼徳・澤宣嘉らも長門  
に奔つた。時に文久三年八月で、  
これを七卿落といふ。

長州藩士などが迫はれてから、  
京都は公武合體黨の占むる所とな  
つたが、家茂は元治元年正月再び  
入京し、從一位右大臣に叙任し、  
五月に歸東した。然るに六月に至  
り、長州藩の家老福原元備(越後)  
・國司親相(信濃)・益田親施(右衛  
門介)らは、兵を率ゐて入洛し、  
嵯峨・山崎・男山などに屯し、藩  
主毛利敬親(慶親)及び七卿の冤  
罪を訴へた。時に松平容保・一橋  
慶喜は、薩摩・桑名の藩兵を率ゐ  
て之を防ぎ、戦が各所に起つたが、

親相の兵は會津・桑名・薩摩の兵  
と蛤御門に戦ひ、最も激烈を極め、  
彈丸が屢々宮中に飛込んだので、  
長州兵は朝敵の汚名を蒙り、破れ  
て退くに至つた。時に元治元年で、  
世に之を元治の變といふ。  
幕府は夙に長州藩を惡み、これ  
を征しようと考えたが、諸藩を憚  
つて斷行せず居る處へ、偶々元  
治の變が起り、長州兵が素りに宮  
門に迫り、兵火を開いた罪を責め、  
元治元年八月、朝廷に請うて長州  
追討の許可を受け、前尾張藩主徳  
川慶勝を總督とし、越前藩主松平  
茂昭を副總督とし、島津・細川・  
鍋島・淺野・蜂須賀を始め、二十一  
藩の兵を派して長州に向はせた。  
當時、長州藩は英・米・佛・蘭の  
四國艦隊から襲撃を受け、非常に  
困難して居たので、藩主敬親は先  
づ四國と媾和し、ついで家老元備  
・親相・親施らの首を斬り、恭順  
の意を表したので、慶勝は之を許  
して軍を班した。  
然るに長州藩士高杉晋作・山縣

狂介(有朋)らは、藩主の處置を  
喜ばず、先づ悲願派(俗論黨)を  
倒し、藩論を統一して再び兵を舉  
げた。幕府は大いに驚いて再征の  
軍を起し、慶應元年五月、家茂は  
親征の爲に上洛し、自ら大軍を率  
ゐて大阪城に入つた。時に天下は  
麻の如く亂れ、大勢は既に幕府を  
去つたが、偶々土佐藩士坂本龍馬  
は、長州・薩摩の聯合を成立させ  
たので、薩兵は從軍を辭し、他藩  
にも幕命を奉ぜざるものがあり、  
幕軍の士氣は甚だ振はず、慶應二  
年六月、愈々長州藩を攻めたが、高  
杉晋作らの精銳に破られ、進んで  
職ふ勇氣がなく、敗れて兵を收め  
る能力さへなかつた。この混亂の  
中に、家茂は大阪城で歿した。時  
に慶應二年八月二十日、年二十  
一歳であつた。九月、江戸の増上  
寺に移葬した。

徳川家康

名 號 幼名を竹千代と呼び、通稱を三郎三郎・藏人といふ。今川義元の偏諱を受けて元信といひ、更に元康と改め、後に家康といつた。諡號を東照大權現・東照宮といふ。

系統 新田義季の後裔であるといふ。「まつだいらひろただ、松平廣忠」の項を参照されたい。松平廣忠の長子である。母は水野忠政の女で、傳通院といふ。徳川初代の將軍である。

事 蹟 天文十一年十二月、三河の岡崎城に生れた。三河は今川・織田兩氏の間に在り、兩雄爭奪の地であつたから、父廣忠の時代には殆んど獨立が保たれず、或る時には、駿河の今川氏に欺を通じ、或る時には尾張の織田氏に欺を通じた。竹千代は天文十六年六歳の時に人質となり、今川義元の許に送られようとしたが、途中で戸田康光の爲に奪はれて、織田信秀の許に送られ、こゝに二年餘り拘留されて歸つた。

尾張から歸ると、再び人質となつて義元膝下の駿河に赴き、天文十八年三月に廣忠が歿し、三河の地に主なく、概ね織田氏の屬領となつてからも、長く本國に歸る事(徳川家康)



が出来なかつた。弘治二年五月に元服して元信といつたが、永祿二年、義元の爲に重圍を犯して大高城に兵糧を入れ、三年五月、義元の囑によつて、大高城を守るに及

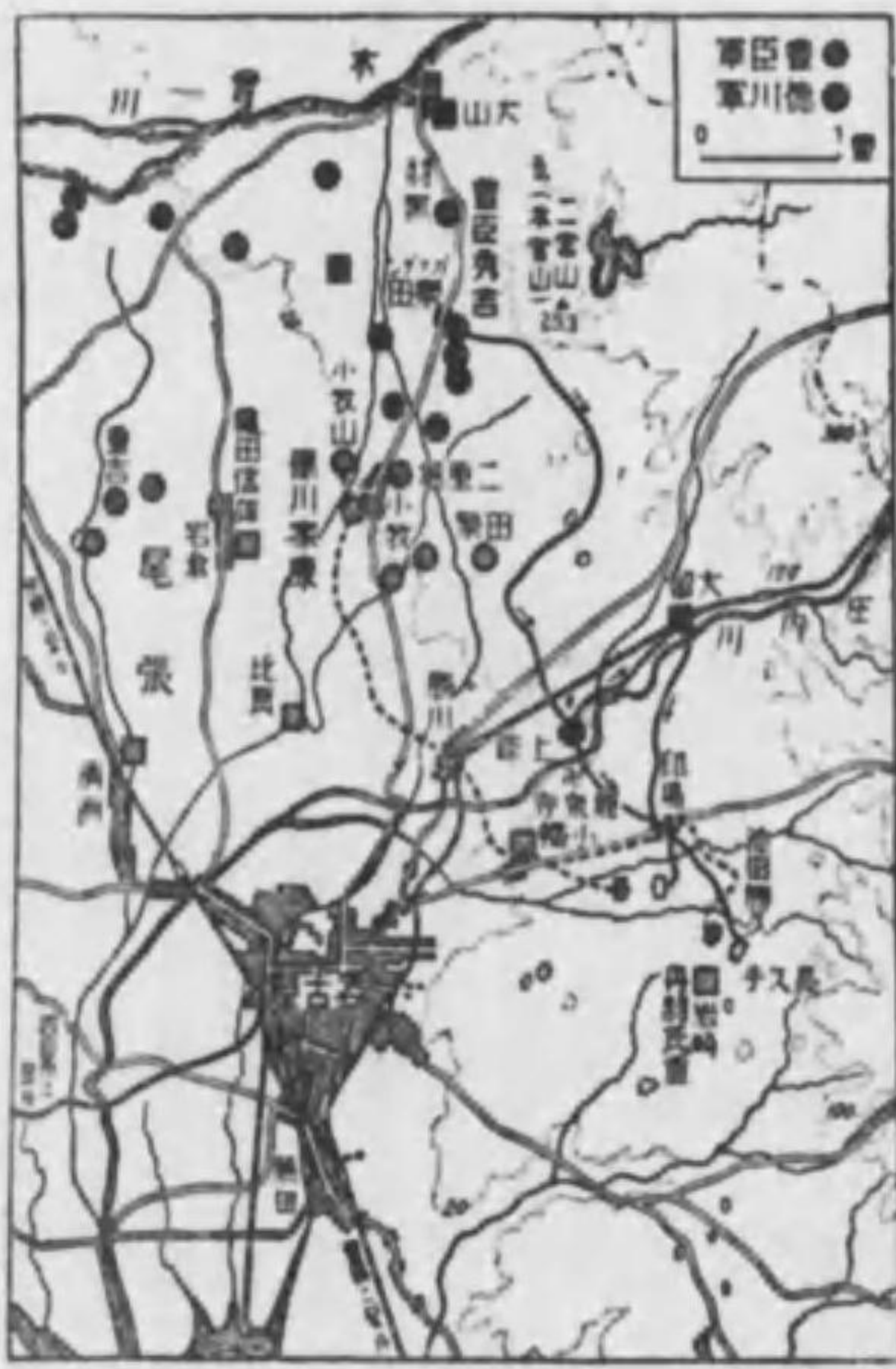
び、始めて岡崎に歸り、名を元康と改め、義元に従つて屢々戦功があつた。時に三河は全く義元の配下に歸し、貢税を今川氏に收めて居た。永祿三年十九歳の時には、義元に従つて尾張に攻入つたが、五月、義元が桶狭間に敗死したので、兵を收めて岡崎に歸つた。義元の子氏眞が暗愚で、父の仇を討つ氣概がなかつたので、漸く今川氏から離れて獨立し、四年には却つて織田信長と深く結び、改名して家康といひ、悉く三河を平定し、六年には叙爵して三河守と稱し、七年には左京大夫に任じた。此の年、武田信玄は氏眞を倒さうと謀り、家康を通じ、大井川を限つて駿・遠兩國の分割を約した。十一年に至り、信玄は駿河を侵し、家康は遠江を略したが、十二年五月、家康は再び遠江を攻め、氏眞を走らし、翌元龜元年には濱松城に移り、また信長を援けて近江の姉川に戦つた。

元龜二年五月には従五位上に陞り、十一月には侍從に任じた。偶々信玄は西上の策を講じ、密に家康を襲はうとし、三年十二月、三方ヶ原に陣したので、家康は信長の援兵を得て進撃したが、却つて信玄の爲に打ち破られ、更に濱松城を包圍され、一時危急に陥つたが、間もなく信玄は破れて圍みを解き、病を得て退軍した。天正三年正月、家康は正五位下に陞つたが、五月には信長を援け、長篠に戦つて武田勝頼を破り、五年十二月には従四位下右少將に任じ、八年正月には従四位上に陞り、十年二月には信長と共に武田氏を討ち、三月、勝頼を天目山に破つた。武田氏の滅亡後、信長から駿河を賣ひ、駿河・遠江・三河を領し、東海道第一の強者となり、勢が甚だ盛んになつた。

天正十年六月、信長が本能寺で斃れた時には、偶々家康は和泉の堺に在つたが、光秀を討つには兵

が奮かつたから、大和・伊賀を経て伊勢に至り、白子濱から三河に航し、兵を率ゐて上洛しようとしたが、熱田で光秀の誅伏の報を聞いて歸還した。ついで北條氏直と和し、女をこれに妻せた。十一年十月には正四位下右中將に任じ、十二年二月には従三位参議に陞つた。

既にして秀吉の勢が獨り盛んで織田氏の如きは甚だ振はず、殊に秀吉は天下平定の志があり、織田氏をも傾けようとして謀り、利を以て信雄の老臣津川玄蕃・岡田長門守・淺井田宮丸を誘ひ、君臣の間を離間したので、信雄は怒つて援を家康に求めた。家康は信雄を援け、天正十二年四月、秀吉と尾張の小牧山に對陣したが、秀吉の部將池田輝政は、家康の虚に乗じて三河を衝かうとしたので、家康は部將大須賀康高・榊原康政を長久手に派し、輝政の軍を撃破させ、大いに威名をあげた。併し長く秀吉と戦ふことの不利を知り、秀吉



(關地要の戦手久長・牧小)

の請に任せて和を講じた。天正十四年、秀吉は生母大政所を出して賀とし、且つ妹朝日姫を家康に嫁して其の甘心を求め、切に入洛を勧めたので、家康も子秀康を出して秀吉の養子とし、暗に

監に任ぜられた。當時、家康は駿河・遠江・三河・信濃・甲斐の五國を領し、駿府城に居り、威望が漸く高くなつた。天正十六年四月、秀吉が後陽成天皇を聚樂第に迎へた時には、家

州に封じたので、八月に江戸城を修めて移つた。十九年には秀吉に従つて奥羽を平定し、文祿征韓の役には、前田利家と共に肥前古屋の本營に侍して、艦機に參與し、慶長元年には従二位内大臣に進み、間もなく五大老の一人に擧げられた。慶長三年八月、秀吉が歿してからは、遺命によつて、利家と共に豊臣秀頼を輔佐した。即ち利家は大阪に居て秀頼を輔佐し、家康は伏見に居て大政を總覽したが、時に天下の諸侯は、或は利家に屬し、或は家康に屬し、遂に二派に分れて軋した。四年三月、利家が大阪に歿してからは、家康の威名は頗る高く、また密に新権を握るの意があり、屢々專横な振舞があつたので、石田三成らはこれを憤り、豊臣氏に不利であると觀じ、毛利輝元を盟主とし、上杉景勝と謀り、東西呼應して兵を擧げ、家康を除かうと欲した。先づ景勝は領國會津で兵を擧げ、家康の命に

従はなかつたので、五年六月、家康は鳥居元忠・松平家忠・内藤家長・松平近正らを伏見城に留め、自ら諸將を率ゐて東下し、江戸を経て會津に向つた。

乃ち三成は家康の虚に乗じ、秀頼の名義で諸將を招いて擧兵したが、輝元を首め、宇喜多秀家・小西行長・長曾我部盛親・長東正家・島津義弘・立花宗茂・小早川秀秋らがこれに應じたので、慶長五年七月、三成は先づ伏見城を圍んだ。守將元忠を首め、家忠・家長・近正らが善く防戦したけれども、衆寡敵せず、遂に八月に城が陥り、元忠以下家康に忠死した。よつて三成らの西軍は、東進して美濃の大垣城に據らうとした。

時に家康は景勝を征しようとして下野の小山に在り、伏見城の變報を聞き、諸將を會して部署を定め、結城秀康を下野に留めて景勝に當らせ、直ちに軍を班し、九月、諸將を率ゐて江戸を發し、自ら東海道から西上し、秀忠は東山道から

西上した。然るに秀忠の軍は、信濃の小諸に至り、西軍の眞田昌幸と戦つて破れた。殊に昌幸の二子信之・幸村は、上田城を守つて善戦したので、秀忠は西上を妨げられ、遂に關ヶ原の戦に會する事が出来なかつた。

慶長五年九月十五日、三成の主宰する西軍約八萬人は、家康の率ゐる東軍七萬五千人と、愈々美濃の關ヶ原に衝突した。此の役に於て、秀吉の舊臣の加藤清正・福島正則・淺野幸長・黒田長政・池田輝政・加藤嘉明・細川忠興・山内一豊らの諸將は、三成を憎んで家康に與した。

(一)西軍の秀家・行長は天満山を背に東面し、義弘・三成は其の左方に、大谷吉隆らの諸將は其の右に、秀秋は松尾山に、脇坂安治らの諸將は其の麓に、毛利秀元は南宮山に、盛親・正家らは其の麓に陣した。(二)東軍は正則を先鋒とし、徳川忠吉・井伊直政らがこれに次ぎ、長政・忠興らは右軍と

なり、一豊・藤堂高虎らは左軍となり、幸長・輝政らは南宮山に對し、永野勝成らは大垣に備へ、家康は其の中軍となつた。

此の日、家康は早朝から諸軍を督して桃配山に往き、更に半里程進んだが、西軍の諸將はこれを迎へ、誘致して夾撃しようとし、未だ火蓋を切らなかつた。偶々忠吉・直政・本多忠勝らが突進したので、義弘・行長はこれに應戦した。時に秀家は正則を撃つて稍々これを退けたが、長政は正則を援けて奮戦し、三成の部將島勝茂を斃した。一豊・高虎は吉隆を衝いたが、吉隆は健闘して屈せず、勝敗の決せない中に、松尾山の秀秋は兵八千を以て家康に應じ、急に吉隆の右へ迫つた。よつて家康は諸軍に令して一齊進撃を始め、天地を動かすやうな威勢をあげて進んだので、西軍は大いに動搖した。家康はこれに乗じ、秀家を走らせ、吉隆を斬り、更に諸軍を合せ、三成を夾撃して破つた。義弘・正家・

盛親らも潰えた。斯くて西軍は大敗したが、東軍は勝に乗じて追撃し、首を斬ること四萬餘級に及んだ。此の戦に際して、天下の諸大名は大抵東西に分れ、豊臣・徳川兩氏の興廢は全く此の一戦で決したから、世にこれを天下分目の戦といふ。

關ヶ原役後、家康は大いに賞罰を嚴にし、(一)景勝・輝元らを首め、西軍の諸將の領地を削つて有功の將士に分與し、(二)秀頼には攝津・河内・和泉の六十五萬石を與へた。乃ち天下の政權は全く家康に歸し、豊臣氏はたゞ一大名たるに過ぎない形となつた。斯くて家康は、慶長八年二月、征夷大將軍に拜せられ、幕府を江戸に開いたが、在職僅か二年餘りで、十年四月、將軍職を秀忠に譲り、自ら駿府城に退隱したが、併し大事は悉く裁決した。

時に秀頼は大阪城に在り、片桐且元がよく之を輔佐した。然るに生母淀君は、家康を憎んで豊臣氏

の舊業を恢復しようと思ひ、諸侯中にも秀頼に心を寄せる者があつたので、家康は大いに之を恐れ、秀忠の女を秀頼に妻せて之をなづけ、且つ其の財力を弱めて後患を絶たうと思ひ、京都方廣寺の大佛殿を復興させた。蓋し方廣寺は天正十四年秀吉の創建にかゝり、慶長元年七月の地震に崩れたので、七年に秀頼が再興に着手したが、工事中に失火して、堂宇が灰燼となつて居たものである。秀頼は家康の勧めにより、十五年に起工し、十七年に完成した。大佛は最初木像であつたが、此の時に改めて銅像にし、高さが六丈三尺もあつて、奈良の大佛よりも大きかつた。また秀頼は高さ一丈四尺、徑九尺の大鐘をも鑄たが、其の鐘銘の一節に「所庶幾者、國家安康。四海施化、萬歲傳芳。君臣豐業、子孫殷富」とあつた。家康は此の句を指摘し、「國家安康」は家康の二字の間に安の字を挿入して兩字を切り離すもので、正しく家康の

身首を兩斷する。「君臣豐業」は豊臣を君とし、子孫殷富を樂むの義で、これは亦を呪詛するものだといひ、慶長十九年八月、大佛殿の開眼供養式を停止し、嚴しく秀頼を詰責した。

一部を埋めるだけの約束であつたのに、徳川方の諸將は外壕を埋め、外城を毀ち、遂に内壕に及んだので、大阪方の將士は家康の違約を見て大いに憤慨し、元和元年三月に再び兵を擧げた。家康父子は再び來攻したが、幸村・重成らは戦死し、城は遂に陥り、秀頼母子は自殺し、豊臣氏は遂に滅亡した。時に元和元年五月八日、これを大阪夏の陣といふ。

も整ふべければ、必ず勝たん」と言ひ、果して其の通りになつたといふが、是等は家康の少年時代の逸話である。家康は長ずるに及んで深沈で、大度があり、事に處するに周密で、強い忍耐力を以て成就し、海内を統一して善政を布き、大いに文教を復興して、江戸時代二百六十年間の泰平の基礎を築いた。元和二年三月、太政大臣に任ぜられたが、四月十七日、七十五歳で歿した。其の夜、久能山に葬る。三年二月には東照大廟現の勅號を賜ひ、三月には正一位を贈られたが、此の月、遺命によつて日光山に改葬し、正保二年には更に東照宮の神號を賜はつた。

### 國家安康

て兵を擧げさせた。家康は秀忠と共に、大軍を率ゐて大阪城を圍んだ。城將眞田幸村・後藤基次・木村重成らが善く防戦したので、家康は陥れ難いのを察し、和約を締結したが、時に慶長十九年十二月で、これを大阪冬の陣といふ。然るに和約條件の埋壕を實行するに當つて紛議が起つた。即ち外壕の

### 徳川家慶

とくがはいへよし  
名 號 幼名を敏二郎といひ、諡號を愷德院といふ。  
系 統 徳川家齊の第四子で、母は押田敏勝の女である。徳

川十二代の將軍である。寛政五年五月十四日に生れた。九年に元服を加へ、從二位權大納言に叙任し、文化十三年四月、右大將を兼ね、文政五年三月、正二位となり、十年三月從一位に進み、天保八年四月、家齊の讓を受けて家を繼ぎ、同年九月二日、征夷大將軍に拜せられ、内大臣に任せられた。

天保十二年、前代の權臣であつた若年寄林忠英・側室申次水野忠篤らを黜け、老中水野越前守忠邦を任用し、享保・寛政の治に則り、奢侈を抑へ、文武を奨励し、富興行を停め、府内の私娼を禁じて之を新吉原に販り、中村・市村・森田の三芝居を淺草猿蓑町に移すなど、銳意革新に力めたが、世にこれを天保の改革、または水越の改革といふ。併し其の爲す所が往々酷烈に亘つたので、民意を失つたが、更に江戸・大阪の近傍十里四方を悉く幕領にしようと企つるに及び、露に土人の怨みを買ひ、改

革は失敗に終り、忠邦は職を退くに至つた。

嘉永六年六月、米國水師提督ペリーが、軍艦を率ゐて浦賀に來訪し、幕府に通商を求むるに及び、命じて邊海の警備を嚴にし、久里濱で米國の國書を受け、來春返答する旨を約して歸國させた。偶々家慶は病に罹り、同年六月二十二日、六十一歳で歿した。江戸増上寺に葬る。

### 徳川綱條

とくがはつなえだ  
「とくがはつなくに・徳川光圀」の項を参照されたい。

### 徳川綱重

とくがはつなしげ  
名 號 幼名を長松齋といひ、法名を圓覺天安永知といふ。清徳院と稱する。  
系 統 徳川家光の第三子で

母は順性院藤枝氏である。甲府侯の祖である。

慶安四年四月、美濃・近江・信濃・駿河・甲斐・上野などの田十五萬石を以て封せられ、承應二年八月に元服し、將軍家綱より諱字を賜ひ、從四位下に叙し、左馬頭に任せられ、十月、正三位に陞り、左近衛權中將となつた。寛文元年閏八月、甲斐に於て田十萬石を加増され、舊封を通じて二十五萬石となり、甲府に居し、十二月、參議に進んだ。

### 徳川綱吉

とくがはつなしし  
名 號 幼名を徳松といひ、諡號を常徳院といふ。  
系 統 徳川家光の第四子で

兄家綱に養はれた。母は本庄宗正の女で、桂昌院といふ。徳川五代の將軍である。  
事 蹟 正保三年正月江戸城の本丸に生れ、慶安元年三の丸に新館を造つて移り、四年には厨料十五萬石を賜ひ、承應二年八月に

は從三位右中將に任じ、寛文元年閏八月には上野館林城を賜ひ、前封と合せて二十五萬石を領し、十二月には參議を兼ねた。延寶八年五月六日には家綱の嗣となり、江戸城二の丸に移り、權中納言に叙し、八日に家を繼ぎ、同年八月征夷大將軍に拜せられ、内大臣となつた。

徳川綱吉の繪と筆蹟



欽に歸依し、護持院・護國寺などを建てた。綱吉は先に世子徳松が

みー(びん)き  
こころをいそしめ、  
ひも糸の  
とくがはつなしし  
あといまきり

綱吉(通稱)

空合し、嗣の無いのは前世多殺の報であるから、天下に令して殺生を禁じ、且つ將軍の生年が戌に當るから、犬を愛用すべき事をすゝめた。綱吉はこれを信じ、貞享四年、生類憐みの令を出して殺生を禁じ、殊に犬を保護して數萬頭を飼つたので、世に綱吉を犬公方といつた。一般に犬を虐待する者は罰せられたが、犬を傷けて死刑に處せられた者があり、病馬を捨て、洗刑に處せられた者があり、其の爲に犬馬が市中に横行し、天下は大いに苦んだ。

綱吉は夙に儒學を尊崇し、自ら經書を講じ、林信篤(鳳岡)に命じて四書・五經・小學などの訓點を正させ、これを刊行させたので、寒村僻邑にも普及した。また先に道春が忍ヶ岡(今の上野公園)に創めた孔子の廟の規模を大にした志があつたが、元祿三年七月に至り、これを湯島寮に移さうとし、御側松平輝貞を普請奉行とし、蜂須賀隆重に手傳ひを命じて新築させた。十月、尾張侯徳川光友・紀州侯徳川光貞・徳川光圀・松平頼純らは典籍を寄進し、伊達綱村・細川綱利らは祭器及び物品を寄進し、十一月、綱吉は自ら大成殿の三字を書し、林信篤に與へて新築堂宇の一層額に刻する様を命じた。十二月に大成殿の上棟式を行ひ、超えて四年七月に聖徳及び四配(顔子・曾子・子思・孟子)の像を遷し、狩野洞雲に命じて七十二賢及び先儒の像を描かせ、十一月には綱吉が親臨して聖像を拜し、祀田千石を寄進した。これが湯島の聖堂である。此の年、信篤は從五位下大學頭に叙せられたが、世々林家の子孫が聖廟を祀り、且つ生徒に教授した。

綱吉は時俗の奢侈に赴くを患ひ屢々令して儉約を奨めたが、併し自身は奢侈を事とし、宴遊に耽つた。學を好み、儒を尙ふと同時に、能樂を嗜み、能役者を養ひ、親しく經書を讀すると同時に、自ら能樂を演じ、屢々諸侯の邸にも出入

し、多くの人々にも舞はせて、厚くこれを賞賜し、歌樂が盡きて歸城するのを常とした。斯様に奢侈・遊宴に耽り、僧侶を恩遇し、寺院を創建し、而も大火・地震があり、歳出が年に多く、幕府の財政が困難になつたので、勘定奉行萩原重秀の議を用ひ、雑金を混じて慶長時代の良貨幣を改鑄し、一時の急を凌いだので、物價が騰貴して、下民の苦痛は増したが、旗本の士は米價の騰貴により、反つて裕福となつて奢侈に流れた。

江戸時代初期に盛んであつた勤儉尚武の風は、泰平の續くと共に漸く頹廢し、綱吉の世には上下共に奢侈遊惰に流れ、能樂・芝居・淨瑠璃などを悦び、衣服・調度も華美となり、所謂元祿風を生じた。隨つて民衆本位の文學・美術・工藝などが發達し、戯曲家の近松門左衛門・小説家の井原西鶴・俳諧師の松尾芭蕉・浮世繪師の菱川師宣・英一蝶らを出した。

石良輝以下四十七人の義士は、元祿十五年十二月十四日、江戸本所吉良義央邸を襲ひ、亡君淺野長矩の讐を復し、大いに情風を振起させた。綱吉は義士の忠節に感じ、幕臣の中にも之を救さうとする人々があつたが、併し國法を曲げる譯には行かず、翌年二月、遂に死を賜はつた。時に林大學頭信篤は、詩を賦して良輝らの死を悼み、室鳩巢は赤穂義人録を撰して其の事蹟を叙した。

綱吉は寶永五年十二月に麻疹に罹り、六年正月十日、六十四歳で歿した。江戸上野の東叡山(寛永寺)に葬る。俗書に、綱吉の死を以て夫人慶司氏の手双する所となすのは誤りである。

### 徳川 齊 昭

とくがはなりあき  
名 號 幼名は敬三郎、初名を紀教といひ、後に齊昭と改めた。字を子信といひ、景山・潛龍閣と



號し、私諡して烈公といふ。  
系 統 水戸藩主徳川治紀の第三子で、兄齊脩の嗣となる。  
事 蹟 寛政十二年三月、江戸の小石川藩邸に生れた。四五歳の時、既に漢書を讀み、和歌を作り、九歳頃から鐵砲及び武術を修め、稍々長じて身體を鍛練した。(徳川 齊 昭)

文政十二年、兄齊脩の遺命によつて家を襲ぎ、從三位左中將に叙任し、明年參議に進んだ。襲封の際に宿弊を察し、戸田忠敬・藤田東湖を擯用して、大いに藩政を改革し、有司を交迭し、境界を正し、税敷を軽減し、奢侈を抑へ、言路を開き、文武を獎勵した。殊に東

湖は文武の才を兼ね、經綸を以て自ら任じたので、一藩は翕然として之に嚮つた。

天保十一年、藩に就くに際し、浪鳥狩と稱し、仙波ヶ原で大いに兵を練つた。十二年八月、廣く儒臣と議し、古今の制度の得失を考へ、藩士に文武の道を授ける爲に、水戸城第三廓内に弘道館を創建した。館は方四町で、教場・操練場・編修局・茶寮局・講習別局・直所・厨屋など種々の設備があり、教場は文武二館に分れ、文館には居學・講習・句讀・寄宿の四寮を置き、武館には兵學・軍用・劍術・槍術・居合・薙刀・柄太刀・柔術・砲術の諸場を置いた。その他、歌學・醫學・天文・數學・音樂・諸禮・軍事の諸局を設けたが、火術・水術は館外で練習させた。

齊昭は光圀の志を紹ぎ、尊王の志があり、外船の來航を見て、海防の急を説き、天保十四年、領内諸寺の佛像・梵鐘を銷解し、大砲

を購置し、また西洋の兵器に關り、弓槍隊を設けて銃砲隊を編成し、名づけて大砲隊と稱した。此の年の八月、幕府は水戸藩政のあがつた功を賞し、齊昭に鞍・鎧・太刀を賜はつた。

これよりさき、齊昭は結城寅壽を用ひたが、後稍々これを悔いて、其の體を奪はうとしたので、寅壽は齊昭を退けようと考えた。また水戸の老臣中には、因循姑息の舊政を便とし、忠敬・東湖の新政を喜ばない者があり、藩士は二派に分れて相軋り、僧侶も佛像・梵鐘を銷解されて齊昭を怨んだ。幕府も水野忠邦の辭職後施政方針が守舊に傾き、隨つて齊昭に對する態度が變つたが、且つ齊昭の行爲が忌諱に觸れる上に、寅壽が讒奏したので、弘化元年五月、遂に齊昭を江戸駒込の別邸に幽閉し、子慶篤に封を襲がせ、支族松平頼胤に藩政を攝せしめ、更に忠敬・東湖をも幽閉し、寅壽一派が藩政を専らにした。

併し水戸藩士は幕府を訪問して屢々齊昭の冤を訴へ、天下の識者も暗に幕政の反覆常なきを諷つたので、十一月、齊昭の屏居を許し、嘉永二年に藩政に參與することを(徳川 齊 昭の筆蹟)

梅山先生の筆蹟  
此の筆蹟は、齊昭の自筆の書札で、内容は幕府の政治に対する批判と、藩政の改善を望むものである。

嘉永六年六月、米使ペリーは浦賀に來て、通商を求め、物情騒然たるものがあつたが、時に老中阿部正弘は、齊昭を起用して幕議に參與させた。齊昭は上書して十條

五事を論じ、自ら請進した大砲七十五門を幕府に獻じ、日々登營して幕議に參與したが、其の主唱は攘夷論にあつたから、多く用ひられなかつた。

安政元年三月、幕府が神奈川條約を結んで下田・兩館を開港してから、遂に幕議に參與する事を辭したけれども、正弘は衆望ある齊昭を野に下すの不利を悟り、七月、更に軍政改革案などを委任し、再び朝に立たせたが、安政四年六月正弘が歿し、老中細田正隆(正篤)が事を用ふるに及んで、齊昭を免ずることにした。

安政五年六月、大老井伊直弼が勅許を俟たずに米國と通商條約を締結した時には、齊昭は大いに其の不可を論じ、尾張侯徳川慶恕・越前侯松平慶永と連袂登城し、直弼の專斷を責めたけれども、要領を得ることが出来なかつた。七月、幕府は齊昭が禁を犯して

京都に入京したのを罪とし、再び駒込の別邸に幽閉し、八月、更に水戸城に屏居を命じた。萬延元年八月十五日、六十一歳で歿したが、幕府は喪を發する前に其の幽禁を解いた。水戸の瑞龍山に葬る。朝廷は文久二年に從二位大納言を追贈し、明治元年に從一位を追贈された。

齊昭は光圀の志を繼ぎ、敬神・尊王の志に厚く、常に家臣を戒めて皇室を敬敬させた。攘夷論が起るに及び、國威を損じない様に、率先して其の實現者となり、大いに天下の人心を引立てた。併し早く信敬・東湖の良弼を失ひ、攘夷論に殉死した心事は寧ろ哀むべきである。著書に告志論・明君一斑抄などがある。

### 徳川 齊 順

とくがはいへもち・徳川家茂の項を参照されたい。



とくがははるなり

### 徳川 治 済

**名 號** 世に一橋治済と稱する。

**系 統** 徳川吉宗の孫で、徳川宗尹の子である。徳川家齊の父である。

**事 蹟** 父宗尹に繼いで一橋家の主となつた。天明元年閏五月、其の子家齊は十代將軍家治の世子となり、同七年、十一代將軍となつた。既にして家齊は父治済を尊び、大御所に爲さうとしたが、老中松平定信は之を聽かなかつた。偶々光格天皇は生父典仁親王を臣視するに忍びず、夙に太上天皇の尊號を上つらうとし、これを幕府に圖られたが、寛政元年八月、定信はこれを拒んで勅命を奉じなかつた。一説に據れば、「家齊は一橋家から入つて將軍となつたので、父治済を西丸に移して、大御所と稱しよう」とし、治済もまた之を希

望したが、定信が聽かなかつたので、遂に事が成らなかつた。よつて密に京師に結び、先づ尊號を閑院宮典仁親王に上らせ、其の後に治済に及ぼさうとした。故に定信が尊號を上つるのを拒んだのは、典仁親王の太上天皇になられるのを厭つたのではなく、治済が西丸に入つたならば、自ら幕政に干渉するに相違なく、随つて己の權力を抑損されるのを懼れたのである」と。これを尊號事件といふ。

とくがはひでただ

### 徳川 秀 忠

**名 號** 幼名を長丸といひ、世に江戸中納言と稱し、諡號を豪徳院といふ。

**系 統** 徳川家康の第三子である。母は西郷清貞の女で、寶徳院といふ。徳川二代の將軍である。

**事 蹟** 天正七年四月に遠州濱松城で生れたが、十五年八月に從五位下藏人頭に任じ、爾東、異進

とくがはみつくに

### 徳川 光 圀

**系 統** 幼名を長丸・千代松丸といふ。字を徳亮・觀之といひ、後に子龍と改めた。日新齋・常山人・華然子・梅里などの號がある。後後に諡して義公といふ。世に水

五山の僧徒に講寫させた。また慶長十九年に、僧崇傳が大藏一覽を獻じたので、家康は銅材の活字で之を印刷させ、朱印を捺して諸寺に獻じた。此の活字は文祿征韓の(徳川光圀)



役の分捕品で、本邦活版印刷の一起源をなすものである。家康はまた吾妻鏡・武經七書・群書要など印刷させたが、爾來、向學の徒が漸く多くなつて來た。家光の時には、忍ヶ岡(上野)

の地を道春に賜はつたので、道春はこゝに學舎を設け、後に尾張侯徳川義直から經費及び祭器の援助を受けて聖廟を建てた。時に寛永九年七月である。家光は翌年の七月に至り、始めて道春の學舎を參觀し、また孔子の像を拜した。併し家光・家綱の學問に關する貢獻は、主として編輯事業にあつたといふべきである。

家光は桂昌院に命じ、綱吉に學問を勵ませたので、綱吉は長じて儒學を好み、將軍となるに及んで、信篤らに經書を進講させ、自分も諸侯・幕臣に經書を講じ、また信篤に命じて、四書・五經・小學などの訓點を正させ、これを刊行させたので、能く寒村僻地にも普及した。また林氏の忍ヶ岡の聖廟が狹隘であつたから、元祿三年、綱吉はこれを湯島臺に改築させ、翌四年に成就した。よつて孔子及び四配(顔子・曾子・子思・孟子)の像を忍ヶ岡から遷し、晝家狩野洞雲に命じ

て、七十二賢及び先儒の畫像を描かせ、綱吉自ら大成殿の扁額を書き、其の地を昌平坂と改名し、諸侯に典籍・祭器を獻せしめ、祭田千石を置き、林家の子孫に聖廟を祭らせ、信篤を大學頭に任じ、大成殿の傍に聖堂學問所を新建して多くの諸士を就學させた。

幕府の文教獎勵が斯の通りであつたから、諸大名も林氏の門弟を招聘して、大いに學問を獎勵したが、其の中で最も有名なのは、水戸の光圀であつた。光圀は兄頼重を超えて世嗣に定められた事を悔いて居たが、正保二年、始めて史記の伯夷傳を讀み、「伯夷といふ人あり、其の父が弟叔齊に家を傳へんとせしを知り、父死するに及びて叔齊に譲りしに、叔齊もまた兄に譲れり」とあるのを見て、大いに其の義に感じ、兄の子に家を譲らうと決心した。また我が國に史書が少く、國體の尊嚴を知らない國民の多いのを歎き、「戲籍あらざんば、虞夏の文得て見る可からず、

戸黃門・西山公と稱する。

**系 統** 徳川頼房の第三子で徳川家康の孫である。

**事 蹟** 水戸の藩主で、寛永五年水戸城下三木之次の宅で生れた。生れつき賢明であつたが、六歳の時、將軍家光の命により、兄頼重を超えて世嗣に定められた。十三年七月に元服し、從四位下に叙せられ、十七年三月には右中將に任じ、七月には從三位に陞つた。光圀の出た時代には、漸く文教が起つて來たので、これに就いて一言しよう。

島原の亂後は、西洋の學問は全く傳はらなかつたけれども、我が國の學問が益々發達した。其の始源は徳川家康の文教復興にある。家康は、「武力を以て定めたる天下は、學問を以て治めざる可らず」と考へ、慶長十一年、藤原惺高の高弟林道春(信勝・羅山)を招いて顧問とし、文教を復興して人倫の道を明にし、以て泰平を致さうとした。家康は古書を採索させて

史筆に由らずんば、何を以て後人をして感服する所あらしめんや」と言ひ、慨然として修史の志を起し、大日本史の編纂に着手した。大日本史の編纂は、明暦三年二月に始められた。(一)編纂所——明暦三年二月、光圀は史局を江戸本郷駒込の下屋敷に設け、ついで寛文十二年の春に小石川藩邸に移し、名を彰考館と稱した。更に水戸に移し、前後二百餘年を経て、明治三十九年、大日本史の完成と共に閉された。(二)編纂者——光圀の主裁の下に、多くの史臣が執筆したが、其の中心となつた學者は佐々宗淳・安積覺・大串元善・栗山暉・酒泉弘・三宅謙明・大井貞廣・打越直正・増子淑時・立原萬・高橋廣備・藤田一正・青山延光・會澤安・杉山忠亮・豊田亮らで、維新後には栗田寛が其の局に當つた。(三)編纂経過——明暦三年二月に着手され、元禄十二年に本紀及び皇妃・皇子・皇女の三傳が成り、寛永六年に紀傳が備はり、志

表の編纂に着手し、正徳五年に大日本史と命名し、十二月に光圀の廟に献じ、享保五年に幕府に献じたが、これを享保本といふ。ついで紀傳を檢閲し、文化七年に之を淨寫して朝廷に献じ、嘉永年間には之を刊行した。而して維新以後に栗田寛が志類を編し、明治三十九年に全く完成した。(四)卷數——三百九十七卷・二百二十六冊で、別に目錄が五冊ある。(五)内容——神武天皇から後小松天皇に至る史實を紀傳體に編述したもので本紀・列傳・志類・表類の四部から成つて居る。神功皇后を后妃傳に下し、天皇大友(弘文天皇)を本紀に列し、南北朝の正閏を明にしたのは、特に光圀の意に出て居る。本書編纂の目的は、皇統を正し、尊王の意を寓するにあつたから、筆鋒が頗る謹嚴である。維新以前に於ける勤王思想の發達に多大なる影響を與へた。

光圀の修史事業は前記の通りであるが、寛文元年七月、父頼房の歿した時、家臣中に殉死者あるを聞き、光圀は天人人道を撰論して之を停めた。八月に封を襲ぎ、二年十二月には参議となり、三年十二月には頼重の子頼方を世嗣に立てたが、これは兄を超えて家を襲いだのに報ずる爲である。五年には、明の遺臣朱舜水を聘して師事し、道を問ふて怠らなかつた。此の年の秋、請うて藩に就き、十二月に封内の淫祠三千八十八を毀つた。十月に頼方が歿したので、其の弟の綱條を世嗣にした。延寶五年には扶桑拾遺集が成つたが、書名は後西天皇の下賜で、準勅撰であつて、六年にこれを天覽に供した。

元禄三年十月十四日に致仕し、翌日、權中納言に任ぜられた。時に光圀は、致仕後の任官は贈位に同じものと見做し、之を受ける事を喜ばなかつたが、侍臣の諫言によつて罷んだといふ。蓋し將軍綱吉に忌まれたからである。十二月に水戸に歸り、四年五月、久慈郡太田郷西山に閉居した。五年八月、湊川に楠木正成の碑を建て、題して「嗚呼忠臣楠子之墓」といふ。十三年十二月六日、七十三歳で歿した。久慈郡瑞龍山に葬る。天保三年五月、從二位大納言を追贈され、明治二年に從一位を追贈された。

### 徳川 光 貞

とくがはみつさだ  
**名 號** 幼名を長光丸・長福丸といひ、號を對山といひ、法號を清溪院といひ、世に紀伊光貞ともいふ。

**系 統** 紀伊侯徳川頼宣の長子である。

**事 蹟** 寛永八年五月、從五位上となり、十九年九月、將軍家(徳川光貞の筆蹟)

光の偏諱を賜ひ、光貞と改め、叙爵して從四位下常陸介となつた。元禄十一年五月、家督を嗣教に讓つて對山と號したが、賈永二年八月八十歳で歿した。光貞は畫技に秀でたが、畫風は狩野探幽に似て、墨色筆勢が超凡であつた。木原白敏記には、「駿河國大野木遠寺は

南庵院大納言家(紀伊家)開基なり、對山並相か、せ給ひし三幅對、中觀昔左右竹の繪を床に懸けたり光貞と御名をしるされたり、墨繪なるが、濃淡ぬるゝがごとく活動して、美醜俗塵を脱して餘韻あり」とある。

### 徳川 宗 武

とくがはむねたけ  
**名 號** 幼名を小次郎といひ世に田安宗武と稱する。私諱して悠然といふ。

**系 統** 徳川吉宗の二男で徳川家重の弟である。田安家の始祖で、松平定信の實父である。

**事 蹟** 正徳五年十二月、江戸赤坂の紀州藩邸に生れた。享保元年五月、父吉宗が徳川の宗家を繼ぐに及び、父に從つて江戸城に入り、十年二の丸に移り、十四年に元服を加へ、從三位左近衛權中將に任叙せられ、右衛門督と稱し、吉宗の偏諱を賜ひ、宗武と改め、

歿した時、家臣中に殉死者あるを聞き、光圀は天人人道を撰論して之を停めた。八月に封を襲ぎ、二年十二月には参議となり、三年十二月には頼重の子頼方を世嗣に立てたが、これは兄を超えて家を襲いだのに報ずる爲である。五年には、明の遺臣朱舜水を聘して師事し、道を問ふて怠らなかつた。此の年の秋、請うて藩に就き、十二月に封内の淫祠三千八十八を毀つた。十月に頼方が歿したので、其の弟の綱條を世嗣にした。延寶五年には扶桑拾遺集が成つたが、書名は後西天皇の下賜で、準勅撰であつて、六年にこれを天覽に供した。

光の偏諱を賜ひ、光貞と改め、叙爵して從四位下常陸介となつた。元禄十一年五月、家督を嗣教に讓つて對山と號したが、賈永二年八月八十歳で歿した。光貞は畫技に秀でたが、畫風は狩野探幽に似て、墨色筆勢が超凡であつた。木原白敏記には、「駿河國大野木遠寺は

南庵院大納言家(紀伊家)開基なり、對山並相か、せ給ひし三幅對、中觀昔左右竹の繪を床に懸けたり光貞と御名をしるされたり、墨繪なるが、濃淡ぬるゝがごとく活動して、美醜俗塵を脱して餘韻あり」とある。

宗武は好んで國典を研究し、和歌を好み、兼ねて雅樂・管律に通じ、賀茂眞淵を侍臣とし、また荷田在満を聘して共に有職故實を研究した。著書に國歌八論餘言・樂曲考・服飾管見・冠服類聚愚抄・服飾漫語・玉函秘抄・玉函叢説・探雅などがある。

### 徳川 宗 尹

とくがはむねただ  
**名 號** 世に一橋宗尹と稱する。

**系 統** 徳川吉宗の四男で、

徳川家重の弟である。一橋家の始祖である。

**事 蹟** 享保二十年九月、從三位左近衛權中將に叙せられ、刑部卿と稱し、父吉宗の偏諱を賜はつて宗尹と改め、元文二年閏十一月、慶米二萬石を賜はつた。五年十一月、江戸城一橋門外に邸を賜はり、同十二月、慶米一萬石を加賜されたので、世にこれを一橋家と稱する。寛延元年十一月、和泉・播磨・甲斐・武蔵・下總・下野の六國內で、采邑十萬石を賜はつた。宗尹の孫家齊に至り、宗家を繼いで十一代の將軍となる。

### 徳川 義 直

とくがはよしなほ  
**名 號** 幼名を五郎太丸といふ。初名を義利といひ、後に義直と改めた。

**系 統** 徳川家康の第九子で母は相應院(志水氏)である。

**事 蹟** 尾張家の始祖であ

る。慶長八年正月、四歳の時に甲斐國二十四萬石を賜ひ、十一年八月、元服して従四位下右兵衛督に叙任し、十二年閏四月、尾張國に轉封して清洲城に居り、美濃・信濃の地を併せて六十一萬九千五百石餘を食み、十五年、名古屋城を築いて移つた。十六年三月、從三位參議に陞り、右中將を兼ねたが、大阪冬の陣に従軍し、元和元年、美濃の地三萬石を加へ、三年七月、正三位權中納言となり、寛永三年八月、從三位權大納言に進み、慶安三年六月二十日、五十一歳で歿した。

とくがはよしのぶ

### 徳川慶喜

系統 水戸侯徳川齊昭の第七子で、老中阿部正弘の盡力により、一橋昌丸の養子となり、後に徳川十五代の將軍となる。  
事蹟 はじめ十三代將軍家定に世子がなかつたので、越前・

尾張・薩摩の諸藩主及び老中正弘は、慶喜が賢明で、年も長じて居たから、これを繼嗣に推薦したが、然るに大老井伊直弼は、家定の命を受けて慶喜を排し、徳川慶福を紀伊家から迎立した。慶福は即ち十四代將軍家茂である。  
(徳川慶喜)



文久二年十月、家茂の後見人となつたが、元治元年三月にこれを辭した。同年六月、長州藩の家老頼原元圓(越後)・國司親相(信濃)・益田親施(右衛門介)らが、兵を率ゐて入京し、嵯峨・山崎・男山などに陣し、藩主毛利敬親及び三條實美以下七卿の寛罪を訴へ

た時には、慶喜は京都守護職松平容保と共に、會津・桑名・薩摩の藩兵を督し、蛤御門其の他各所で防ぎ戦つて之を破つた。慶應二年八月、家茂は長州再征中大阪で歿したので、慶喜は征長の師を停め、勝安房を長州に遣つて兵を解かせ、十二月、入つて十五代の將軍となつた。

慶應三年、岩倉具視・小松帶刀・西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允らが討幕を議し、同年十月十四日、薩・長二藩は討幕の密勅を拜するに至つた。時に前土佐藩主山内豊信(客堂)は、討幕の計畫を聞いて驚き、其の臣後藤象二郎・頼岡孝弟を大阪に遣り、慶喜に謁して政權奉還の急務を説かせ、帯刀も熱心に之に賛成したので、慶喜は遂に意を決し、大政を奉還せんことを請うたが、明治天皇は直ちに之を許されたので、徳川幕府は十五代、二百六十五年で亡び、大權は再び朝廷に還つた。時に慶應三年十月十四

日である。

慶應三年十二月九日、王政復古の大令が出で、薩・長二藩を中心とする新政府が成立した。此の時、慶喜は二條城に在つたが、この新政に與らず、且つ内大臣を辭し、領土を返納せよとの内命さへあつたので、舊幕臣及び會津・桑名の藩士は、これを薩・長二藩の所爲と解し、新政府の行爲に不平を抱き、形勢不穩を加へたので、慶喜は閣下に事變の起るのを憂へ、急に大阪城に退いたが、偶々江戸でも薩州浪士の暴行があつたので、慶喜は遂に意を決し、明治元年正月、會津・桑名の兵を先鋒とし、討幕の表を上つて入京しようとした。時に薩・長の藩兵は朝命を受け、慶喜の軍を鳥羽・伏見に迎へ撃つたが、朝廷では更に仁和寺宮嘉彰親王(後の小松宮彰仁親王)を征討大將軍に任じ、錦旗節刀を賜はつて追討させられたので、慶喜は事の成らないのを知り、令を諸軍に傳へて大阪に退かせ、自ら松

平容保・松平定頼らと共に、夜に乗じて海路江戸に逃れた。

よつて朝廷では慶喜・容保以下の官爵を削り、明治元年二月、有栖川宮煇仁親王を征東大總督に任じ、西郷隆盛を參謀とし、橋本實梁は東海道から、岩倉具定は東山道から、高倉永祐は北陸道から、薩・長以下二十餘藩の兵を進め、日を期して江戸を攻撃させようと言はれた。煇仁親王は海路駿河に進み、總督府を駿府に置いて諸軍を督せられた。時に慶喜は深く前非を悔ひ、上野の寛永寺に退いて恭順の意を表し、「幕府の君臣、皆恭順、以て朝命を待つ」の旨を書し、山岡鐵太郎に托して駿府に遣り、隆盛に會せしめて書を煇仁親王に上り、寛典に浴せんことを請うた。官軍が江戸に迫らうとする時に當り、更に勝安房を徳川氏の代表者として遣使したが、安房は隆盛と會し、慶喜の罪を謝し、衷情を陳じ、寛典を請ひ、懇々と内議する所があつたので、煇仁親王は

進撃を認め、隆盛を朝廷に遣つて江戸の處分問題を議せしめ、江戸城及び軍艦・兵器を収め、慶喜の死一等を滅じ、水戸に幽閉せしめられた。

其の後、朝廷では家齊の曾孫田安家達を慶喜の後嗣となし、徳川の家名を繼がせ、駿河・遠江・陸奥の内七十萬石を賜ふことになつた。慶喜は静岡に隱居し、後に公爵を授けられて一家をなし、大正二年、七十七歳で歿した。

### 徳川吉宗

とくがはよしむね  
名號 幼名を源六・新之丞といふ。初名を頼方といひ、後に吉宗と改めた。諡號を有徳院といふ。

系統 紀伊侯徳川光貞の三子である。母は互勢利清の女で、淨圓院といふ。徳川八代の將軍である。  
事蹟 貞享元年十月、和歌

山城に生れた。幼少から賢明、大膽であつたが、元祿八年、元服して従四位下左少將に任ぜられた。十年四月、越前國鯖江城三萬石に(徳川吉宗)



封せられ、下民の生活を察し、儉素を旨として治めたが、寶永二年九月、兄頼職が病んで世嗣がなかつたので、其の養子となつて和歌山に歸り、頼職が歿してから紀伊

家を襲ぎ、從三位左中將に進み、三年十二月、參議に任ぜられ、四年十二月、權中納言に叙せられた。當時、大岡忠相といふ者があり、正徳二年、伊勢の山田奉行に任ぜられたが、就任以來公正を以て聞えた。これよりさき、山田の農民は屢々松阪の農民と田地の境界を争ひ、これを山田奉行に訴へた。松阪の農民が不正であつたけれども、紀伊藩の封地であつた爲に、従來の奉行は紀伊侯を憚つて決せなかつた。然るに忠相が奉行になるに及び、斷ずるに公平を以てし、山田の農民を勝訴にしたので、吉宗は藩に居て、常に忠相の公正に感じて居た。

正徳六年四月、將軍家繼が早死したので、五月、吉宗は大統を繼いで二丸に移り、享保元年八月、征夷大將軍に任じ、正三位權大納言となり、右大將を兼ね、また内大臣に進んだ。二年二月、忠相を江戸町奉行に榮轉させたが、これが名高い大岡越前守で、裁判の巧

を以て聞え、世に「大國さばき」の名を得た人である。

吉宗は勤儉尙武を奨励した。吉宗が將軍職に就いた頃には、未だ元祿華奢の風が残り、諸大名は華美を極め、武士の生活は奢侈に流れ、人民の風紀は紊れ、武藝などは殆んど顧みられなかつた。よつて吉宗は、自ら儉素を以て率ゐ、縮服を纏ひ、金銀造の城門を毀たせ、諸大名の華美を戒め、藩治を勵ませ、武士の奢侈を嚴禁し、鷹狩・水泳・劍術・弓術・馬術・水馬などを盛んにし、大いに武藝を奨励したので、士風が次第に立直つた。また吉宗は和蘭人ケイヅルが馬術に巧みなのを聞き、馬役高橋又右衛門を長時に派遣して、ケイヅルに就いて學ばせ、ついでケイヅルを江戸に召し、齊藤三右衛門盛安に傳習させた。西洋の馬術が我が國に傳はつたのは、これを以て權輿とする。

吉宗はまた官政を刷新した。(一)足高の制——藩高の少い人が

高官に就く時には、特に在職中だけ藩高を増す制を定め、人材登用の途を開いた。(二)財政整理——元祿時代に亂れた貨幣を改鑄し、品質のよい享保金を作り、また參觀交代の年限を短くして、諸侯の負擔を軽減したが、他面に於ては、上ヶ米の制を定めて、府庫の窮乏を補つた。(三)刑律の改善——從來判決は慣例によつて行はれて居たが、これを成文として、公事方定書(御定書百箇條)を制定し、以て裁判の公平を圖り、また目安箱を設けて、人民の投書を受けた。

吉宗はまた實學を奨励した。

(一)教育の普及——大いに實學を重んじ、自らも天文・曆學を修めた。室直清(鳩巢)に命じて、六諭衍義の大意を平易に書かせて、寺小屋の讀物として頒布し、一般士民に昌平(せいやう)の學問を許し、また卑近な醫書の出版を圖つて、教育の普及に努めた。(二)洋書輸入解禁——蘭書の學理の精微に感じ、享

保五年、基督教に關係のない洋書輸入の禁を弛め、青木文藏(昆陽)を長崎に遣つて、蘭學の研究に當らせたと、茲に洋學發達の端を開いた。

吉宗はまた産業を奨励した。

(一)將軍の奨励——殖産興業に意を用ひ、荒地を開き、水利を起し、農法の改良に力めた。また甘藷が飢饉に効あることを知り、文藏(昆陽)に命じて甘藷栽培法を記述させ、種苗を薩摩から取り寄せ、其の説明書と共に、これを全國に配布し、凶荒に備へさせた。また甘藷の苗を取り寄せ、城中に植ゑて砂糖を製造させ、更に西南諸國に植ゑさせて、砂糖の製造を盛んにし、其の輸入を防止するやうにした。(二)諸藩の奨励——諸藩も將軍の意をうけて國産を奨励し、蠶絲・織物・陶器・煙草・藍・蠟・薬種・製鹽などの地方的産物が大いに増加した。

吉宗はまた仁慈で、國民の健康に注意し、奥醫師に命じて民間の

治療をなさしめ、享保七年十二月、江戸小石川に養生所を開いて貧民を救済した。また吹上苑内の櫻を飛鳥山・隅田堤・小金井に移植して、一般士民の遊覽に供した。斯様に吉宗は善政を布き、在職三十年に及び、天下は善く治まり、人民は泰平を謳つたので、世にこれを享保の治といひ、吉宗を江戸幕府中興の英主と仰いだ。延享二年職を家重に譲つて西丸に老を養ひ、寶曆元年六月二十日、六十八歳で歿した。上野の東叡山に葬る。

### 徳川頼重

とくがはよりしげ  
「とくがはみつくに・徳川光圀」の項を参照されたい。

### 徳川頼宣

とくがはよりのぶ  
名號 幼名を長福といふ。初名を頼時といひ、また頼信とい

ひ、後に頼宣と改めた。私諱して南雄公といふ。

系統 徳川家康の第十子で母は正木頼忠の女である。紀州家の始祖である。

事蹟 慶長八年十一月、二歳の時に常陸國水戸二十萬石を賜ひ、九年十二月に五萬石を加増され、十一年に元服を加へ、從四位に叙せられ、左少將に任ぜられた。十五年には駿河・遠江及び參河の中で五十萬石を賜はり、駿府城に居し、十六年には右中將に進み、即日また從三位參議に陞つた。大坂冬の陣には軍に従ひ、元和元年七月には權中納言に任ぜられ、五年には和歌山城に移り、紀伊及び伊勢の一部を合せて五十五萬石を食み、寛永三年八月には從二位權大納言に轉じ、寛文十一年正月十日、七十歳で歿した。

### 徳川頼房

とくがはよりふさ

名號 幼名を千代丸といひ、私諱して威公といふ。

系統 徳川家康の第十一子で、水戸家の始祖である。

事蹟 慶長十一年九月、四歳の時に常陸下妻の地十萬石を賜ひ、十四年正月、正五位下に叙し、左衛門督に任じ、十二月、水戸城に移つて二十八萬石を領した。十六年三月、元服して從四位下少將に進み、元和六年、參議を経て正四位下左中將に陞り、寛永三年八月、從三位權中納言となり、四年正月、正三位に移り、寛文元年七月二十九日、五十九歳で歿した。

### 徳富猪一郎

とくとみひいらう  
事蹟 號を蘇峰といふ。文久三年、肥後豊北郡水俣村に生れた。京都同志社に學び、弟の徳富健次郎(蘆花)と共に、民友社で文筆を執り、雑誌國民之友及び國民新聞に筆を揮つた。現に貴族院議

員で、東京日日新聞社に關係して筆を揮つて居る。多くの著述の中で、日本國民史が最も名高い。

### 徳富健次郎

とくとみけんじらう  
事蹟 號を蘆花といふ。明治元年、肥後豊北郡水俣村に生れた。京都同志社を中途で退學したのみで、別に學歴はない。二十二年、東京民友社に入り、兄の徳富猪一郎(蘇峰)と共に文筆を執つた。雑誌國民之友及び國民新聞社に關係して翻譯・隨筆などを發表し、また國民新聞に小説「不如歸」を連載して天下の賞讃を集め、更に散文集「自然と人生」によつて自然詩人の名を擧げられた。「自然と人生」は、小冊子ではあるが、併し明治時代の青年・學生に多く讀まれたものである。三十五年、國民新聞社を辭して作家生活に入り、三十九年、露西亞に遊んでトルストイ翁に親しく接して歸り、爾

### 土佐光起

とさみつおき  
名號 幼名を藤滿丸といひ、春可軒と號した。法名を常昭といふ。  
系統 土佐光則の子である。

事蹟 元和三年十月二十三日に生れたが、天性繪畫を好み、父光則に就いて畫道を學び、父の歿後は祖父光吉の門人戸田光純に就いて畫技を練つた。然るに彼の住地の堺は、大阪の發達に伴れて商權を奪はれ、年々衰運に傾いたので、光起は京都に轉住することになつた。其の後、彼の畫名は天朝に達し、承應三年三月十日には從五位下左近衛將監に補せられ、延寶九年五月二十九日には雅襲し

て名を常昭と改め、春可軒と號し、法橋に叙せられ、貞享二年四月には更に法眼に進んだ。光起は禁裏の御覺えが厚く、靈元天皇の勅許により、改めて自邸に繪所の稱號

(土佐 光起)



を用ひてよい事になつたので、土佐光元以來中絶して居た土佐の繪所が茲に再興されたのである。故に光起は、心を込めて描いた晴の繪には、常に勅賜「畫院」といふ印章を用ひた。土佐の古風では、其

の作品に署名したり、捺印したりしなかつたが、光吉が畫裏に捺印を始めてから、此の風が行はれる様になつたといふ。光起に至つては、落款も捺印も北宗畫の風と變りはなかつた。

光起が京都に住んで居る頃は、我が畫界は狩野派全盛の時代であり、江戸畫壇には狩野探幽があり、養村常信があり、京都畫壇には狩野永納があり、鶴澤探山があり、四面楚歌の觀があつた。光起は此の間に處して、狩野の諸大家と共に名聲が高く、且つ沈淪した土佐家を再興し、篤厚温雅で、品致の高い作品を出し、土佐光長・土佐光信と相並んで、土佐三筆の一人となつたのは、土佐派の歴史に光を添へたのである。併し彼の畫風は、純粹な古土佐の筆致とは稍々趣を異にし、狩野派全盛時代だけに、幾分其の影響を受けて、漢畫の風を交へて居る。即ち支那北宗の畫風を加味して一家をなしたが、併し土佐派の特長は、

依然として彼の藝術家的手腕の中に維持され、其の爲に毫も品格を墜して居ない。

光起は元祿四年九月二十五日、七十五歳で歿したが、遺作には屏風・掛軸の類が多いが、京都北野神社所藏天満宮縁起・近江石山寺所藏源氏物語末摘花・日光東照宮所藏三十六歌仙繪額・徳川侯爵家所藏松島圖屏風・黒田侯爵家所藏千鳥圖屏風などが名高い。

とさみつのぶ

土佐 光信

系 統 土佐光弘(光廣)の子で、光弘の弟土佐廣周の養子となる。

事 蹟 光信は異代丹青の家に生れ、殊に畫道を好み、父祖の畫法を學び、少壯から技群の光があり、中年に及んで頗る妙境に達し、繪所預となり、右近衛將監から刑部大輔に進み、從四位下に叙せられた。後土御門天皇の御信任

が厚かつたと見えて、延徳元年御齡四十八歳の時に、自ら龍顏を鏡に對して映され、其の尊容を光信に描かしめられ、御製の和歌一首を題せられた。

曾て修畫の爲に明國に遊ばうとしたが、或る事情の爲に果さなかつたので、専ら古來の大和繪、例へば藤原信實・鳥羽僧正・巨勢・宅磨・住吉などの筆意を研究し、遂に是等を綜合して、別に一格を出した點に特色がある。畫工便覽には光信の畫を評して、「圖繪光細にして、彩畫益々潤色、人物に長じ、佛像に精し」といひ、本朝畫史には、「其の彩墨質は共に皆細筆を用ひ、彩畫は金碧を施し、墨畫は輕暈の如し、内に筆力ありて、外は惟々逸遊す、芳艷の情、織麗にして雅、以て其の巧妙を極む」とあり、更に畫工便覽には、「光信、常に鹿谷に遊戯し、地を鑿ち、其の中より自然彩色具を得たり、是を以て設色奇と謂ふべし、吾國他畫に類ゆ」といつて居る。

光信は後醍醐天皇の大永五年五月二十日、九十二歳で歿したが、在世中は能畫の故を以て、義政以下足利將軍家に寵せられた。晩年まで畫事に力め、土佐光長・土佐光起と共に土佐の三筆といふ。蓋し土佐派の末路を物語る一點の光である。遺作の中では、清水寺縁起・石山寺縁起・福富草紙などが聞えて居る。

とねりしんわう

舍人親王

名 號 追尊して崇道畫敬皇帝といふ。

系 統 天武天皇の第三子で御母は新田部皇女である。

事 蹟 持統天皇の九年に淨廣貳に叙し、文武天皇の朝に親王となり、二品に叙せられ、慶雲元年に封二百戸を加へ、元明天皇の和銅七年に二百戸を加賜された。元正天皇の養老二年に一品に進み、三年十月、優詔によつて更に封

八百戸を増し、前封と通じて二千戸を賜はつた。これよりさき、元正天皇は舍人親王及び太安麻呂らに勅して、國史を撰ばせられたが、養老四年五月に修撰が終つた。これが日本書紀である。同年八月、知太政官事(太政大臣心得の如きもの)となり、聖武天皇の朝には更に封五百戸を増加せられ、天平七(舍人親王)



年の十一月に薨せられた。御子淳仁天皇は父親王を尊んで崇道畫敬皇帝の號を追贈された。

因に日本書紀は、神代から持統天皇までの史實を漢文で編年體に記述した正史で、本紀三十卷並に帝王系圖一卷(この系圖一卷は佚して傳はらない)からなつて居る。第一・二卷は神代紀で、本文の外、

とばそうじやう

鳥羽僧正

名 號 覺猷といひ、晩正といふ。

系 統 宇治大納言源隆國の子である。

事 蹟 僧侶であつて漫畫の大家である。後冷泉天皇の天喜元年京都に生れたが、覺圓僧正に師事して天臺宗の解行を學び、崇徳天皇の長承三年閏十二月には



大僧正となり、保延四年十月には天臺座主に補せられたけれども、就かず、同六年九月十五日、栗田青(傳鳥羽僧正筆 志貴山縁起繪卷の國司の出版)

運院で入寂した。時に八十八歳である。鳥羽僧正は、僧位に於ては隨分

高位に昇つたが、併し宗教上の功績は顯著でなく、寧ろ餘技の繪畫で認められて居る。彼は性格が洒落であり、甥の陸奥守國俊と戯れて氣絶した位であつたが、特に戲畫に長じ、其の筆法が飄逸であつて、寫意の法に得意であつた。後世漫畫の總稱の様になつた鳥羽繪といふ名稱が、鳥羽僧正の繪に始源して居るのを見ても、日本漫畫の鼻祖として、如何に重きをなしたか分る。

鳥羽僧正の作品には眞面目な傑出した戲畫が多いが、其の遺作は高山寺に藏せられて居る。其の中の人物戲畫には、當代僧侶の生活を諷刺的に描いてあるが、動物戲畫の中には秀逸なものがあり、赤裸々な人間生活を蛙・猿・兎・狐などの動物に演ぜさせて居る。何れも動的で、飄逸な筆法である。鳥羽僧正筆と稱するものには、外に志貴山猿起及び勝畫がある。勝畫は放屁合戦・陽物くらべの様な戯戲を描いたものである。

### とばてんのう 鳥羽天皇

**名號** 御名を宗仁といひ、法諱を空覺といふ。

**系統** 堀河天皇の第一皇子である。御母は贈大政大臣藤原實季の女で、贈皇太后藤原美子である。第七十四代の天皇である。

**事蹟** 康和五年正月に降誕され、八月に堀河天皇の皇太子となり、嘉承二年十二月朔日に即位されたが、時に御年五歳である。白河法皇が院中で政を執られた。天皇は長じて帝範を菅原在長に受け、また天文に通じ、善く催馬樂を歌ひ、音律に精通し、最も吹笛に長じ、且つ古記を涉覽し、博く典故に通ぜられた。而して平生佛法を信じ、寺院に供し、僧侶に施された費用が高額に達したが、成勝寺・延勝寺なども、其の創建する所である。在位十七年、保安四年正月、皇子崇徳天皇に讓位された。

れた。

大治四年七月、白河法皇が崩せられたので、これに倣つて親ら院政を執られたが、其の年代は崇徳・近衛・後白河の三朝、二十八年間に亘つて居る。永治元年三月に落飾して法皇となられたが、法皇は華美な容儀を好まれ、左大臣源有仁と謀つて、朝臣の服装を立派にし、冠・烏帽子を膝で固め、衣を綱で強く張つて、衣文を正されたが、これを強裝束といふ。従つて風俗も益々奢侈柔弱に赴き、朝臣は花の朝、月の夕に詩歌・管絃・雙六・圍碁の樂に耽り、田樂は上下に流行し、白拍子といつて女子が男装佩刀して歌舞する事が起り、朝臣は儀を描き、白粉をつけ、齒を染めるに至つた。また法皇には内嬖が多く、殊に美福門院得子を寵せられ、其の御腹なる體仁親王(近衛天皇)を以て崇徳天皇の皇太子となし、更に天皇に迫つて讓位させられた。近衛天皇の崩後、崇徳天皇は皇子重仁親王を

立てようと思はれたけれども、法皇はこれを退けて用ひられず、美福門院及び藤原忠通と謀り、後白河天皇を立てられたので、崇徳上皇は失望して兵を擧げ、遂に保元の亂が起るに至つた。法皇は保元元年七月二日、聖壽五十四歳で崩せられた。山城國紀伊郡竹田村安樂壽院に葬る。

### ともひらしんわう 具平親王

**名號** 世に六條宮・千種殿と稱し、また後中書王ともいふ。

**系統** 村上天皇の皇子で、圓融天皇の御弟である。御母は女御莊子女王(代明親王の女)である。

**事蹟** 村上天皇の康保二年に親王となり、三品に叙し、一條天皇の寛弘四年に二品に進み、ついで中務卿となり、六年七月、四十六歳で薨せられた。薨するに及び、朝廷は特に釋奠の宴を停めらる。

れた。蓋し一代の文筆であつたからである。

具平親王は資性英敏で、曾て業を慶源保胤に受け、紀齊名・大江以言を友とし、頗る文藻があり、和歌を善くし、兼ねて音律に巧で、陰陽・醫術・諸藝に精通された。曾て世を避けたい志を起されたが果されなかつた。一條天皇は其の多藝を愛し、宴會及び節會には必ず出席を促されたが、固辭される事が多かつた。曾て藤原公任と入唐・貫之の和歌の優秀を論じ、具平親王は人麿を優秀と爲し、公任は貫之を優秀とした。他日各々十首を撰んで之を闘はせられたが、人麿の歌の優れたものが八百であつたといふ。著書に六帖・眞字伊勢物語・弘決外典鈔などがある。

### とようけのおほかみ 豊受大神

**系統** 伊弉諾・伊弉冉二神の御子であるといふ傳説と、御孫

と・たう

であるといふ傳説とがある。官制大社伊勢外宮の祭神である。

#### 沿革

天孫瓊瓊杵尊が降臨された時、天神の詔を以て此の神の御靈を調降し、丹波國與謝郡比沼の眞名井原に禰座したが、雄略天皇の二十二年七月、皇大神の託宣により、伊勢國度會郡の山田原の新宮に遷された。これが伊勢外宮の起源であつて、雄略天皇が此の神を重んぜられたのは、靈桑・五穀を司る神だからである。爾來、朝廷の尊敬は殆ど内宮に均しく、奉幣祭祀の方法に少異があるだけである。上代は二宮一致の有様であつたが、天武天皇の朝に兩宮に禰宜を分置し、且つ式年造替の制を定められたから、殿舎の配置構造も自ら變化し、延喜四年に遠近四至を定め、天慶五年に始めて外宮の號が起り、内宮と併稱する事になつた。神宮の祭事は古から外宮を先にする故實で、天皇・皇后の御參拜も、悉く此の故實に據られる。

### とよとみひでつぐ 豊臣秀次

**名號** 幼名を次兵衛といひ、通稱を孫七郎といふ。世に殺生關白と稱する。

**系統** 三好一路の子で、豊臣秀吉の甥である。はじめ三好康長に養はれたが、後に秀吉に養はれた。

#### 事蹟

天正十二年四月、秀吉が徳川家康と難を構へた時には、秀次は池田信輝と共に尾張の長久手に戦ひ、家康の部將榊原康政・大須賀康高の爲に破られ、僅に身を以て免れた。十三年三月には、兵十萬を率ゐて紀伊根來寺の僧兵を破り、五月には阿波に入つて諸城を降し、四國を平けて歸り、七月には從四位下右中將に任じ、三好を改めて羽柴氏を稱した。天正十四年十一月には、參議に進み、十五年二月には、秀吉に從つて島津氏を征し、十一月には正

三位權中納言に陞り、十六年四月には、詔によつて清華の上に班し、從二位に叙せられ、十八年七月には尾張及び北伊勢五郡を賜はつた。十一月には陸奥に入つて九戸政實を征し、十九年正月に京都に歸り、二月に正二位權中納言に遷つた。五月には政實が再び叛したので、元帥となつて奥羽に赴き、政實及び其の餘黨を平げた。十一月には秀吉の義子となり、十二月には内大臣に任じ、また關白職を繼いで庶政を決した。

文祿元年には左大臣に進んだ。此の年、秀吉は征韓出陣を命じたが、秀次は遠征を好まず、推托して旨を奉じなかつた。且つ品行が修まらず、常に美女を好み、淫慾に流れ、多くは狩獵に日を送つた。殊に殺生禁斷の比叡山で狩をしたので、世人は「殺生關白」といつた。偶々二年七月に淀君が秀頼を生んだので、秀吉はこれを殊寵して、家を譲らうと考へて居たが、石田三成が秀次の品行を秀吉に訴

へたので、漸く秀次は疎んぜられ  
た。時に秀次が叛を謀るの風聞が  
起つたので、秀吉は之を拘留して  
官爵を削り、高野山に逐放し、つ  
いで文祿四年七月十四日に自盡さ  
せた。時に年二十八歳である。

とよとみひでよし

### 豊臣秀吉

**名** 幼名を日吉丸といひ、通稱を藤吉郎といふ。氏を木下といひ、ついで羽柴と稱し、更に豊臣と改めた。勲諡して豊國大明神といふ。

**系** 統 詳かでないが、木下彌右衛門の子であつて、父の政後母の再嫁に従ひ、織田氏の同朋筑阿彌に子養されたといふのが稍々信に近い。

**事** 蹟 後奈良天皇の天文六年、尾張國愛知郡中村の農家に生れた。八歳の時に父を喪ひ、十六歳の時に遠江國に赴き、同國周智郡久野西村大字久能なる久能城主



松下加兵衛之綱の僕となつたが、二十三歳の時に尾張清洲の織田信長に仕へ、木下藤吉郎秀吉と名乗つた。信長は其の才幹を愛し、頻りに登用したが、屢々戦功を樹て、(豊臣秀吉)

永祿十一年十月、拔擢されて京都守護職となり、十二年、近江長濱の地一萬石を食むに至つた。元龜元年四月には、信長に従つて越前の朝倉氏を討つたが、偶々

淺井長政が其の歸路を絶たうとしたので、秀吉は信長に請うて其の殿軍となつた。六月には姉川の戦に出で、先鋒として功績があり、横山城を賜はつた。天正元年八月には、また信長に従つて小谷城に長政を圍み、長政父子の首級を得、功によつて長政の舊封二十二萬石を食み、二年に長濱の故址に移り、同年七月、從五位下に叙し、筑前守に任じた。當時秀吉は信長の勇將丹羽長秀・柴田勝家の勇武を慕ひ、其の姓を一字づつ取つて、自ら羽柴と改めたが、これから羽柴筑前守秀吉と稱した。

既にして信長は、中國經略の志を發した。乃ち秀吉は命を受けて中國に入り、天正五年十月、姫路城を根據地として、但馬・播磨を定め、七年十月に先づ宇喜多直家を降し、頻りに毛利氏の屬城を陥れ、播磨・備前・美作・但馬・因幡の五國を平定し、九年十二月、一旦安土に歸つて信長に謁した。

天正十年、秀吉は命を受けて再び中國に入り、播磨・因幡・但馬の兵を率ゐて毛利氏を討たうとし、備中の宮地・冠山の二城を陥れ、五月、遂に高松城(備中賀陽郡高松村・岡山市の西三里餘)を圍んだ。時に城將清水宗治は、兵五千餘を率ゐて籠城し、且つ救を毛利氏に請ひ、殊死して防戦したので、容易に陥らなかつた。よつて秀吉は長圍の策を決し、附近の地形を觀察し、河流と季節とを利用して、水攻を爲す事の有利を覺り、先づ附近の村落を燒き、五月五日に本陣を蛙ヶ鼻に移し、城の附近一帯に巨堤を築き、足守川の水を引き入れたが、偶々梅雨の爲に水量が増し、新堤から山麓に至る面積約百八十八町歩の地は、一面渺茫たる大湖沼に變じ、斯くて六月二日になると、城の水に浸されぬ處は僅か數尺に過ぎなくなつた。併し宗治は、城が水に没する様になつても尚ほ能く力戦した。秀吉は長堤の上に橋を構へ、堤外に駈告

を遣り、數町を距る毎に哨所を置き、晝は旗を連ね、夜は篝火を焚き、巡視を嚴にして城兵の脱出と夜襲とを防いだ。

既にして宗治の急報が毛利氏に達すると、吉川元春・小早川隆景は兵三萬餘を率ゐて來り、五月二十一日に岩崎山・目蓋山に到着したが、稍々遅れて毛利輝元も本軍を督して猿掛山に到着し、各々部署に就いたので、秀吉は兵一萬を分遣して毛利軍に當らせた。時に兩軍の先頭は數町の近距離に迫つたが、其の間に水勢の強い長良川(足守川支流)があつたので、兩軍は對陣したまゝ戦ふことが出来ず、隨つて城兵は非常に失望した。

斯様に毛利氏は、兵力の殆んど全部を擧げて來援したけれども、地形と天候とに制せられ、高松城の急を救ふ事が出来ず、且つ信長父子が大兵を率ゐて遠征する事を探知し、(一)備中・備後・美作・因幡・伯耆の五箇國を織田氏に割讓すること、(二)高松城主清水宗

治以下の生命を保全すること——の二條件を提出し、安國寺惠瓊を黒田孝高の陣に遣使して、秀吉に講和を申込んだ。

秀吉は、宗治を殺さなければ講和しないと言つたので、惠瓊は之を憂ひ、私に兩軍の間を奔走調停し、また自ら城中に宗治を訪ひ、説くに義を以てしたので、宗治は六月二日書を秀吉に送り、自ら割腹して城内將卒の命に代りたうと願つた。秀吉は義として之を許し、四日を宗治自盡の期と定めた。時に本能寺の變報が三日の夜半に到達したので、秀吉は大いに驚き、四日の朝惠瓊を招き、前日提議の講和を承諾し、割讓地の幾分を讓歩して宗治の死に代へる事にし、毛利氏に説かせた。此の日、宗治は月清入道・末近信實・難波傳兵衛らと共に、小舟で城を出て秀吉の本陣に往つた。秀吉は堀尾吉晴を檢使として遣り、且つ酒肴を贈つて勞つた。宗治は好意を謝し、侍臣と共に數杯を傾け、欣然とし

て舟中で自刃し、月清・信實らが殉つた。毛利氏は未だ本能寺の變を知らなかつたので、遂に和議書を交換した。

秀吉は明智光秀を討つ爲に、急いで攝津の尼ヶ崎に至り、ついで六月十二日天神馬場に到着した。時に光秀は兵一萬五千を率ゐて山城の山崎に陣したので、秀吉は自ら諸將を督して山崎に進んだ。秀吉の部將加藤光泰は、手兵を率ゐて山崎の南から川添ひに久我暇を上り、後方から襲はうとしたが、光秀の兵は之を望見して隊伍が稍々亂れた。これに乗じて中川清秀・高山長房らが進撃したので、光秀は敗走して青龍寺城に入つた。秀吉の追撃が急であつたので、光秀は近江の坂本に連れて後圖をなさうとし、伏見を過ぎて小栗栖に赴き、土寇の爲に殺された。時に天正十年六月十四日、信長が六月二日に殺されてから僅か十有餘日に過ぎない。以て秀吉の機敏を知るべきである。

山崎の合戦後、秀吉は織田氏の一族及び丹羽長秀・池田信輝・瀧川一益・森長可・柴田勝家らと尾張の清洲に會し、織田氏の後嗣を相讓し、信忠の子三法師(秀信)を後嗣とし、また信長の遺領を一族諸將に分與したが、秀吉は山城を得た。既にして諸將は各々邑に就いたが、秀吉は京都に上り、十月十一日から十七日迄紫野の大徳寺で信長の法會を営み、厚く葬送の儀を行ひ、また信長の爲に惣見院を建て、從一位太政大臣の贈位を請ひ、法會が済んでから、山崎の寶寺城に入つて京畿を鎮めたので、上下の信用を得て、勢が俄に盛んになつた。此の月、秀吉は從四位下左少將に任ぜられた。秀吉は光秀誅伐の功と、其の天稟の英才とにより、威望が頗る高かつたが、然るに柴田勝家は、織田氏の宿將たる事を自負し、其の下風に立つのを潔しとせず、遂に秀吉を忌み、織田信孝・瀧川一益・佐々成政を餘黨として兵を擧げ、織田

信雄及び秀吉を除かうとした。天正十年十一月、秀吉は勝家らの謀を知り、兵を率ゐて先づ岐阜に迫つたが、信孝は恐れて降伏した。勝家は積雪の故を以て來援が出来ず、忍んで明春をまつた。秀吉は兵を率ゐて近江に入り、柴田勝賢を降し、勝家南出の路を塞いだ。天正十一年三月、勝家は加賀・能登・越中の兵を率ゐ、佐久間盛政と共に近江に出で、木本に陣して諸將を守つた。偶々秀吉は瀧川一益を征して伊勢に在つたが、これを圍いて長濱に赴き、二十餘里を賤ヶ嶽に集めて之に備へ、更に栗濃の大垣に轉じて信孝を討たうとした。時に勝家は秀吉の不在に乗じ、盛政を遣つて賤ヶ嶽を襲はせ、四月二十日、大岩寨の守將中川清秀を攻め殺した。よつて秀吉は賤ヶ嶽に急行し、盛政及び柴田勝政の軍と清水坂に戦つた。時に加藤清正・福島正則・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・片桐且元・柳屋武則など、槍を掲げて突進し

たので、世に賤ヶ嶽の七本槍といふ。また石川貞友・櫻井左吉・伊木遠雄など、刀を振つて躍進したので、世に賤ヶ嶽の三振太刀といふ。斯くて盛政は大敗し、勝政は捕虜となつた。勝家は柳瀬の本營にあつて敗報を聞き、自ら秀吉に當らうとしたが、旗下に留る兵は三千に過ぎなかつたので、毛受家照を遣つて秀吉に當らせ、間に乘じて越前の北ノ庄に歸つた。二十三日、秀吉は諸將と共に北ノ庄の城を包圍したが、勝家は敵す可からざるを知り、二十四日、城樓に火を放つて自盡した。前田利家も勝家を援けたが、賤ヶ嶽に敗れて越前の府中城(南條郡武生町)に歸つた。よつて秀吉は府中城を圍み、間もなく利家を降し、これに命じて先づ加賀を従へさせ、ついで北國を鎮めさせた。

大名小名に命じて大修築を加へ、天下第一の堅城となし、十三年に竣工したが、これが大阪城である。城の外廓は北淀川の左岸に沿ひ、西は東横堀を以て外濠にあて、高麗橋を正門とし、南は道頓堀以東玉造の北に及び、乾濠を控へ、周圍約三里、規模が宏大で、廊壁が堅牢で、實に本邦無雙の名城である。秀吉はこゝに移り住み、堺・伏見の商家を移して一大都會を建設した。

田輝政は、家康の慮に乗じて三河を衝かうとしたが、長久手に於て家康の部將大須賀康高・榊原康政の爲に破られた。其の間に、紀伊根來寺の僧徒及び四國の長曾我部元親が大阪を襲はうとしたので、秀吉は家康と争ふの不利なるを覺り、急いで信雄と和し、十一月に大阪に歸つた。此の月に従三位大納言となつた。

臣に任せられ、關白は舊の如く、且つ豐臣の姓を賜はり、位人臣の榮を極めるに至つた。

秀吉は天正十五年に大舉して征西の師を起し、兵二十萬を水陸兩道から進め、五月、薩摩に入つて島津義久を降し、九州を平定して歸つた。これよりさき、天正十二年に、秀吉は自分の邸宅として京都の内野に聚樂第を營み、十五年九月十三日に大阪から移つたが、十六年四月五日には、奏請して後賜成天皇の行幸を仰いだ。此の時、秀吉は參内して天機をうかゞひ、文武百官・諸將群臣を従へて供奉したが、儀衛兩薄の盛んなことは古今稀に見る所であつた。天皇は此の第に滞留されること五日に及んだが、其の間、饗宴歡樂は盛美を盡した。十五日、秀吉は京中の地子銀五千五百三十餘兩、並に米地子八百石を御料として獻じ、また五百石を關白料として六ノ宮に獻じ、近江國高島郡八千石を諸公卿に給與し、且つ諸大名を畿下に

朝延に納れさせた。天皇は十八日に還幸されたが、世にこれを聚樂第行幸といふ。尙ほ秀吉は仙洞御所を修理し、皇大神宮の遷宮を行ひ、舊儀を再興するなど、直接間接に皇室の爲に盡した功績が尠くない。

斯かる間に、國內は漸く秀吉の威勢に従つたが、獨り關東の北條氏政及び子氏直は命を奉じなかつた。よつて秀吉は屢々上洛を促したけれども、其の要害と將士の勇武とをたのんで従はず、頻りに戰備を整へたので、天正十八年三月一日、十七萬の大軍を率ゐて京都を發し、家康を先鋒として、東海・東山の兩道から進み、沿道の諸壘を陥れて相模の平地に入り、小田原の四周を包圍し、且つ石垣山に陣營を築いて小田原城を見下した。秀吉は長圍の策を施し、諸將の妻妾を陣營に招く事を許し、専ら遊戯・茶道を事とし、敢へて戰はなかつた。北條氏も酒宴・詩歌を

樂み、之に對したが、併し人心は日に離反し、内通する者が多くなつた。六月二十四日、秀吉は遣使して降伏を勧めたが、北條氏現も蕪山から來て和議を勧めたので、七月五日、氏直は城を出でて降り、氏政は十一日に自殺した。乃ち天下は全く統一し、戰國時代は終りを告げた。

秀吉は海外征服の志があつたが、國內が統一して内顧の憂がなくなつたので、(一)印度・臥亞の葡葡牙印度總督と好を通じ、(二)天正十九年には原田孫七郎を遣つて比律賓諸島の太守に入貢を促し、(三)文祿二年には高山國(高砂即ち臺灣)へも書を送つて來貢を促した。(四)秀吉は海外貿易を奨励したので、長崎・京都・堺などの商人で南洋・安南・暹羅などに貿易に出掛ける者が多かつた。秀吉は是等の船に朱印の渡航免狀を與へて海賊船と區別した。これを御朱印船といふ。

朝鮮王李熙に書翰を命じた。李熙は明を恐れて従はなかつたので、先づ朝鮮を討ち、而して後に明に入らうと思ひ、天正十九年十二月、關白職を養子秀次に讓つて自ら大關と稱し、肥前の名古屋に本營を設け、外征の準備をなした。文祿元年正月、秀吉は宇喜多秀家を總大將とし、總軍十三萬餘を授け、加藤清正・小西行長を先鋒とし、九鬼嘉隆・藤堂高虎を水軍の將に命じた。水軍は屢々敵將李舜臣に惱まされたが、陸軍は釜山上陸後向ふ處敵なく、僅に二十日で京城を陥れたので、國王は出奔して教を明に求めた。行長は國王を追つて平壤を取り、清正は咸鏡道に入つて二王子を虜にした。明主(神宗)は祖承訓を遣つて朝鮮を授けさせたが、行長に擊破されて大いに恐れ、沈惟敬を遣つて和を乞はせながらも、また密に李如松に大軍を授けて來攻させた。李如松が平壤を恢復し、將に京城に入らうとした時、小早川隆景・立花宗茂





を擁立して天皇と稱した。これを光明院といふ。尊氏は後醍醐天皇に迫つて、神器を光明院に傳へられんことを要請した。天皇は光明院に神器を傳へ、十二月、吉野の行宮へ遷幸されたので、これから吉野の朝廷を南朝といひ、光明院の方を北朝といひ、武家の擁護するところである。

光明院は正平三年十月、薨髪して僧となり、天授六年六月二十四日、勝尾寺で崩せられた。御年六十歳である。山城國紀伊郡堀内村大光明寺に葬る。

### ドラク ロア Delacroix

事蹟 ヌウゼエヌロドラク  
ロアは、西紀一七九九年（我が光格天皇の寛政十一年）に生れ、佛蘭西浪漫主義の先頭に立つて活動した畫家である。其の代表作としてはシオの忠殺・ダンテの小舟などがある。シオの忠殺は、一八二

四年の作で、土耳其人の騎兵が、半裸體にした若い希臘女を鞍に跨りつけて、狂つた様な馬を走らせ居る。犠牲は後ろ様に引きづられ乍ら、弱い腕に喰入る繩を解かうと躊躇して居る。絶望と悲痛とに吾を忘れた捕虜の親が鞍に取つて、憎い騎兵と争はうとして居る。惨憺な情熱的な瞬間を描いたものである。ダンテの小舟は、神曲に取材したもので、ダンテが詩人ヴァジールに導かれて、地獄・煉獄・天國を廻る途中で、川を渡る光景を描いたものである。是等の外にアルプ山脈・北アフリカなどを旅行して、珍らしい題材を求めて描いたものもある。概して文學的作風に題材を求め、男性的な力強い、熱烈な場面を描いた。致したのは一八六三年（我が孝明天皇の文久三年）である。

### とりのも とただ 鳥居元忠

系統 姓は藤原で、右中將實方の二男に僧泰教があり、長保元年正月、熊野三山の別當となつたが、泰教の裔の行全が大鳥居を建てたので、鳥居家と號した。行全の曾孫忠兼は流浪して三河に入り、熊野神領竹谷蒲形庄に住んだが、其の裔の忠吉は、松平清康・廣忠に歷仕し、三河渡里を領し、後に岡崎總奉行となつた。忠吉の子は即ち元忠である。

事蹟 天文二十年に徳川家康の近侍となり、天正十年には軍功により、郡内の地を賞賜された。十八年八月には下總の矢作城主となり、四萬石を領した。慶長五年六月、關ヶ原の役前、家康が上杉景勝を討たうとして東下した時は、松平家忠・内藤家長・松平近正らと共に、家康の命を受けて伏見城を守つたが、七月、石田三成らが来攻したので、能く防戦したけれども、衆寡敵せず、遂に八月に城が陥り、元忠は將卒と共に忠死した。

### とりぶつし 鳥佛師

名號 鞍作鳥といふ。鳥は止利にも作る。世に鳥佛師といふ。

系統 繼體天皇の十六年に南梁から來歸した司馬達等の孫であり、鞍作多須奈の子である。

事蹟 推古時代の彫刻家である。鞍作派の巨匠で、最も佛像製作に優れ、同時に繪畫にも秀でた。推古天皇の十三年四月、天皇は詔して丈六の銅佛・鑄佛各一軀を作らせられ、鳥を以て佛工とされた。高麗王は之を聞いて黄金三百兩を其の資に献じた。翌十四年四月八日、銅・鑄の佛像が成就したので、大和高市郡の飛鳥寺（後に元興寺といふ）に安置しようとした。時に銅佛の像が金堂の戸よりも高く、納れる事が出来なかつたので、諸工匠は相議して堂の戸を破つて納れようとした。

然るに鳥は、戸を壊さないで堂内に入れたので、時人は鳥を賞讃した。

天皇は特に御感が深く、十四年五月、鳥に詔して、「朕、内典を興隆せんと欲し、佛刹を建てんとするに方り、汝が祖父達等、舍利を獲て以て献ず。また汝が父多須奈、先帝の爲に出家し、汝が姉鳥女、始めて尼となり、釋教を修業す。今また汝、朕が命を奉じて丈六の佛像を造る。朕これを嘉す」と仰せられ、鳥に大仁位を授けられ、近江坂田郡の水田三十町を賜はつた。よつて鳥は大和高市郡坂田村に金剛寺（一名坂田寺）を建て、近江の田を之に施入した。

鳥は當代第一の名工であつたから、特に聖德太子の寵を受け、數多の佛像を製作したが、現存して居るものの中で、其の名を著して居るものには、有名な金銅釋迦三尊の坐像がある。この釋迦三尊の坐像は、法隆寺の金堂に安置されて居るが、銅の飾物で、本尊釋迦

佛には鍍金を施し、高さが四尺五寸ある。光背に銘があり、「推古天皇の三十一年、聖德太子御生前の誓願により、御母及び妃の冥福を禱る爲に、司馬鞍作止利佛師に造らせる」といふ意を刻記してある。

### どんちやう 曇徴

事蹟 高麗の僧侶である。推古天皇の十八年三月、僧法定と共に來朝し、始めて我國に碾磑の工法を傳へた。これを美豆字須といふ。即ち後世の碾磑（粉挽臼）で、上下二箇の圓盤狀の石を重ねて造り、上の石を回轉しながら米・麥・豆などを磨碎するに用ひる。今日では全國の農家に用ひられてゐる。曇徴は五經に精通して居たが、繪畫・彩色にも秀で、また紙・墨・顔料の製法を傳へたので、これが爲に我が繪畫藝術の發達に貢献する所があつた。

### な

### ナイチンゲール Nightingale

名號 フローレンス・ナイチンゲールといふ。

系統 英國人ウァリアム・ナイチンゲールの女である。

事蹟 西紀一八二〇年（我が仁孝天皇の文政三年）、父母の伊太利旅行中フロレンスで生れ、翌年英國に歸つた。父母は資産家で、情深い紳士で、貧民に物品を施したり、貧兒に學費を給したりしたが、彼女も其の感化を受け、怪我した犬に繙帯したり、貧兒に物を與へて喜んだりしたが、十八歳の時に、世の中の可哀な人々の爲に盡すことを以て、自己の使命と觀する様になつた。

西紀一八四四年、彼女が二十五歳の時に、米國の有名な慈善家ハ

ウ博士に面會し、「看護婦になつて、可哀な人々の爲に盡すこと」との決意を述べ、大いに賞讃を受け、看護婦に志願しようとしたが、父母の反對があつて出来なかつた。何故なれば、立派な家柄の者は、當時、看護婦などを志願しなかつたからである。父母は彼女の看護婦志願を忘れさせる爲に埃及・希臘・獨逸・白耳義などの諸國を見物させて歩いたけれども、其の決心を離へさせる事は出来なかつた。彼女はロンドンの病院で看護の手傳をしたり、貧民學校の子供と話したりするのを無上の樂みとした。三十一歳の時に、結婚問題が起つたが、斷然拒絶して仕舞つた。其の中に父が病に罹り、獨逸のカイゼルゲルトに温泉療養に出掛けたので、ナイチンゲールも同伴して看護法を學び、且つ看護婦の試験に合格したが、父母は此の事を喜ばなかつた。其の後、巴里で病人の看護中に感染した事もあり、ロンドンでコレラ

病者者の看護を志願したこともあ  
る。

西紀一八五三年（我が孝明天皇  
の嘉永六年）秋から、露西亞は土  
耳其・佛蘭西・伊太利・奧地利・  
英吉利の聯合軍とクリミヤ半島で  
戦端を開いたが、悪病が流行した  
爲に、聯合軍は非常に苦戦した。  
（ナイチンゲール）



時にナイチンゲールは、傷病者を  
救済してやらうと決心し、寄附金  
を募集したが、忽ち多くの金が集  
つた。且つ軍務大臣ハーバートは  
ナイチンゲールに書を送り、「君  
を伴ひ、クリミヤの戦地に赴  
き、傷病者を救済して貰ひたい」と  
請うたので、彼女は多くの看護

婦中から三十八名を抜擢して、多  
くの人々に見送られ、慈々戦地に  
向つて出發した。戦地に於ける活  
動は見事なもので、多くの看護婦  
を指揮し、敵味方の區別なく傷病  
兵を看護したので、兵士からは「ク  
リミヤの天使」といはれ、慈母の  
襟に慕はれた。

ナイチンゲールの命がけの活動  
が、ピクトリア女王に聴えると、  
女王は大いに喜び、書翰及び物品  
を贈つて其の勞を慰めた。彼女は  
其の中に熱病に感染し、病勢が  
非常に昂進したが、病院の患者  
達は一切に彼女の全快を祈り、  
またロンドン市民も全快の祈禱  
をやつた。其の中に次第に快方  
に赴き、もとの元氣を恢復して、  
可哀想な人々の爲に働く事が出来  
た。西紀一八五六年（我が孝明天  
皇の安政三年）の春、クリミヤ戦  
争も終りを告げ、講和條約が結ば  
れ、ナイチンゲールも英國に歸つ  
た。女王は拜謁の榮を賜ひ、土耳  
其皇帝は賞を贈つた。

### なほひとしんわう

### 直仁親王

名 號 秀ノ宮直仁といふ。

系 統 東山天皇の第三皇子

事 蹟 當時、世襲親王家は

で、中御門天皇の御弟である。  
伏見・有栖川・京極の三家に限り、  
其の嫡流の外は、皇子は悉く出家  
入道する制であつた（備君皇太子  
を除く）。新井白石は之を歎き、  
新宮家の創立、皇子・皇女の出家  
入道を止められん事を徳川家宣に  
建議した。中御門天皇は家宣の建  
議を嘉納され、寶永七年八月、秀  
ノ宮直仁を親王とし、直仁親王と  
稱し、新に親王家を立てさせられ、  
料田千石を賜はつた。これを閑院  
宮といひ、世々相繼いで現今に至  
る。いま閑院宮家の系譜を示すと、  
直仁親王から典仁親王・孝仁親王  
・愛仁親王・載仁親王に及ぶ。  
「あらひはくせき・新井白石」の  
項を参照されたい。

### なかえとうじゆ 中江藤樹

名 號 名を原といひ、字を  
惟命といひ、通稱を與右衛門とい  
ひ、西江・壘軒・願軒・藤樹など  
の諸號がある。世に近江聖人とい  
ふ。

系 統 中江吉次の子である

事 蹟 近江國高島郡小川村

の人である。父吉次は農に隠れた  
ので、藤樹は祖父吉長に養はれた。  
吉長は伯耆米子の城主加藤貞泰の  
臣であつたが、元和三年、貞泰が  
伊豫大洲に轉封されたので、藤樹  
は吉長と共に大洲に移つた。十一  
歳の時に大學を讀み、「自天子  
以至於庶人、一是以修身爲本」  
の章に感じ、始めて聖賢の學に志  
した。十五歳の時に祖父を喪ひ、  
其の家を承けた。十六歳の時に十  
三經を通習し、十七歳の時に京都  
から来た禪僧に就いて論語を學ん  
だ。禪僧は月餘で去つたが、藤樹



は禪僧から與へられた四書大全を  
獨學し、能く其の義に通じた。  
既にして貞泰の弟直泰に仕へ  
た。寛永二年、父吉次が歿した後、  
母北川氏は獨り近江に住んだ。藤  
樹は夢寐にも忘れる事が出来ず、  
（中江藤樹）

近江に歸省して大洲に誘はうとし  
たが、母は海を踰えて他郷に移る  
事を好まなかつたので、如何とも  
する事が出来ず、大洲侯に請うて  
職を辭し、近江に歸つて母に孝養  
を盡して怠らず、また藤樹書院を  
興し、子弟を集めて書を講じ、程

### ないとうちやうさう 内藤丈草

俳人であつて、蕉門十哲の一人  
である。「まつをばせう・松尾芭  
蕉」の項を参照されたい。

先學を修めたが、間もなく王陽明  
の説を悦び、「存心養性」を務  
めとした。また孝經を以て標旨と  
し、愛敬の二字を掲出した。我が  
國の學者で陽明學を唱へた者は、  
實に藤樹を以て嚆矢とする。

藤樹は人と爲り濃厚で、日常未  
だ曾て疾言厲色がなかつた。また  
篤く王文成の致知の學を信じ、  
躬行を先にし、文辭を後にし、  
常に里民を訓諭したので、徳化  
がよく行はれ、州人の惡を去り  
善に就く者が頗る多く、名聲が  
甚だ高かつた。大洲侯は言ふに  
及ばず、池田光政も藤樹を招聘  
したけれども、老の故を以て辭  
して從はず、後光明天皇の慶安  
元年八月二十五日、四十一歳で  
歿した。近江小川村の王琳寺に葬  
る。郷人は祠廟を建て、四時、祭  
祀を怠らなかつたといふ。著書に  
孝經啓蒙・大學啓蒙・大學解・大  
學考・中庸解・論語解・翁問答・  
郷黨篇翼傳・小醫南針・神方奇術  
・心學文集・江西文集・藤樹先生

遺稿などがある。

藤樹の徳化に關する實例は少  
くない。或る夜、藤樹が郊外を通  
つて居ると、數人の賊が林中から  
出て路を遮り、「客囊を解きて以  
て我が飲酒に供せよ」といつた。  
藤樹はこれを執視し、錢二百文を  
與へたが、賊は刀を抜いて藤樹を  
叱り、「客に求むる所以のもの、  
豈にたゞ是れのみならんや、速に  
衣裳及び佩刀を卸せよ、然らざれ  
ば多言を須ひず」といつた。藤樹  
は神色自若として、「姑く之を緩く  
せよ、吾、其の授くると否と孰れ  
が是なるかを慮らん」といひ、手  
を組んで暫く睨目し、やがて口を  
開いて、「吾之を慮るに、聞ひて利  
あらざるも、軽く卸して以て汝に  
與ふるの理なし」といひ、刀を撫  
して起ち、「聞ふ者は必ず先づ姓  
名を以て告ぐ、吾は近江の人、中  
江與右衛門なり」といつた。賊は  
之を聞いて驚き、刀を投じて羅拜  
し、「弊郷五尺の童子と雖も、藤  
樹先生の聖人なるを知らざる者な

し、吾黨權活をなすと雖も、豈に之を聖人に施す事を得んや、願はくは先生其の不知を憫んで之を宥せよ」といつた。よつて藤樹は、「人誰か過なからん、過ちて能く改むる、孰れか過より大ならん」といひ、知行合一の理を説いたので、賊は皆感泣し、遂に其の黨を率ゐて良民となつた。

また曾て藤樹が江戸の街を通つて居ると、偶々酒樓に居た神祇組(豪俠を好み黨を結んで跋扈する者)の一人は、藤樹を望見し、「彼れ聖人を以て稱を得たる者なり、聖人其れ吾黨を如何にせん、試みに其の面に唾して之を辱めん」と、直ちに藤樹の傍に來り、靡色を厲して、「鈍賊(間拔野郎)、世の所謂聖人にあらざるなきを得んや、而して何ぞ虚名を賣り、以て人を欺くや」と、手を戟にして向つた。藤樹は徐ろに姓名を陳じ、「近江の農家に生長し、少しく字を知るを以て、推されて里中童蒙(兒童)の師となるのみ、安んぞ君の言の

如くなるを得んや」といつたが、其の容貌言語は能く人を感動させるものがあつた。神祇組の者は覺えず節を折り、「吾黨過てり、吾黨過てり、願くは先生、無禮の罪を宥せよ、今よりつゝしんで教を門下に受けん」といつた。

某州の一士人が藤樹の故里を通過し、其の墳墓を弔はうとし、路を農夫に問うた。農夫は耕具を置いて直ちに走つて家に入り、更に潔服を着て道案内した。既にして墓所に到着すると、農夫は甚だ悲しく拜掃したので、士は不思議に思ひ、「汝の藤樹に於ける、何の親故ありて、而して敬禮乃ち然るや」と問うた。農夫は答へて、「藤樹先生を欽仰するは、豈にたゞ余のみならんや、村中皆然り、父老常に其の子弟に語りて曰く、吾里、父子禮あり、兄弟恩あり、家に忿疾の聲なく、面に和煦の色あるもの、職として藤樹先生の遺教に由る、これ一人も其の恩を戴かざるはなき所以なり」といつた。乃

ち士は容を變じて、「世に稱して近江聖人となす、吾乃ち今にして其の虚語にあらざるを知る」と、其の墓を敬拜し、厚く農夫に謝して去つた。享保六年、伊藤東涯は藤樹書院を過ぎ、詩を賦して、「江西書院聞名久、五十年前訓三義方、今日始來結誦地、古藤影庵舊茅堂」といつた。

ながをかげとら  
長尾景虎  
「うえずぎけんしん・上杉謙信」の項を参照されたい。

五十子に襲つた。これから武蔵・相模の間が亂れたが、十月、景春は重ねて顯定を武蔵の荒巻に襲つた。時に爲景は兵を出して景春を授けたので、顯定は戦はないで退いた。

上杉房能(顯定の弟)が越後の守護となり、府内城(春日山城)に居した時には、爲景は其の宰相となつて居た。然るに永正六年二月に兵を起して叛し、房能を兩溝に攻め殺し、越後を奪つたが、國人の従ふ者が多かつた。顯定は房能の計を聞き、兵を率ゐて越後に入り、七月、爲景の軍を破つたので、爲景は越中の西濱に走つた。顯定は留まつて越後を定めたが國人は顯定に服せず、永正七年六月、信濃の高梨政盛を擁立し、爲景に従ひ、亂を起して顯定を攻めた。顯定は爲景を長發原に破つたが、既にして爲景は政盛の援を得て、顯定の軍を破つて之を斃し、遂に春日城に據つて越後を領した。嗣孫、爲景の名聲が揚り、將

軍足利義晴は賞状を送り、後奈良天皇は賞言及び旗を賜はつた。天文十一年には越中を征したが、土臺の推名・神保らは、加賀の一向一揆の後援を得て來攻し、遂に爲景を誘殺した。

### 中川清秀

なががはきよひで  
系統 姓は清和源氏であつて、源頼光の曾孫多田明國から出て居る。明國の後裔の清村は、平良文の二男を養子としたが、これを中川重清といふ。重清の子は清秀である。

事蹟 清秀は初め池田勝正に屬し、後に織田信長に仕へて、荒木村重に屬した。村重が攝津の茨木城に據つて信長に叛した時、清秀は信長に與して功があり、よつて茨木城六萬石を賜はつた。後に豊臣秀吉に従ひ、賤ヶ嶽の役に際し、大岩寨を守つて居たが、佐久間盛政と戦つて陣歿した。

### 中島信行

なかじまのぶゆき  
系統 明治時代の政治家である。明治元年、元老院に憲法取調局が置かるゝに及び、信行は其の取調委員の一人に擧げられた。帝國議會開設の機運が進むに及び明治十四年十月、板垣退助は自由黨を結成したが、信行は其の副總理に擧げられ、更に自由黨内の同志が、大阪で別に立憲政黨を結成するに及び、信行は其の總理に擧げられた。斯くて政治思想の普及發達に盡瘁したが、二十三年十一月、第一回の帝國議會が東京に召集せらるゝに及び、伊藤博文は貴族院議長に、信行は衆議院議長になつた。

ながすねひこ  
長 隨 彦  
事蹟 上代、大和の鳥見に

### 長尾爲景

系統 山内上杉家の宰相長尾景春の同族である。上杉謙信の父である。  
事蹟 文明九年正月、長尾景春は、事によつて其の主關東管領上杉顯定を怨み、これを武蔵の

### 中御門天皇

なかみかどてんのう  
名 號 御名を慶仁といふ。  
系統 東山天皇の第五皇子で、御母は内大臣藤原隆實の女で、新崇賢門院實子である。第百十四代の天皇である。

事蹟 寶永五年東山天皇の皇太子となり、六年六月に受禪、七年十一月に即位されたが、時に御年十歳である。南北朝以來、皇室の衰頹が甚だしく、東宮を除く外は、皇子も皇女も佛門に入つて、其の胤を絶つのを慣例とした。時に新井白石は封事を奉り「賤しい匹夫匹婦でさへ、子を生めば必ず其の皇家のある事を希ふ。天子の尊きを以て、皇子を佛門に捨てるのは、何うした事であらうか。宜しく皇子を册立して親王と爲し、皇女は皆下嫁すべきである」と主張したが、將軍家宣はこれを上奏する所があり、中御門天皇はこれ